

宮本武蔵

火の巻

吉川英治

青空文庫

西瓜

一

伏見桃山の城地を繞めぐっている淀川の水は、そのまま長流数里、浪な華江にわえの大坂城の石垣へも寄せていた。——で、ここら京都あたりの政治的なうごきは、微妙に大坂のほうへすぐ響き、また大坂方の一将一卒の言論も、おそろしく敏感に伏見の城へ聞えて来るらしい。

今——

摂津、山城の二カ国を貫くこの大河を中心にして、日本の文化は大きな激変に遭つてあいる。太閤たいこうの亡き後を、さながら落日の美しさのように、よけいに権威を誇示して見せている秀頼や淀君の大坂城と、関ヶ原の役から後、拍車をかけて、この伏見の城にあり、自ら戦後の経綸けいりんと大策に当たり、豊臣文化の旧態を、根本から革あらためにかかつている徳川家康の勢威と——その二つの文化の潮流が、たとえば、河の中を往来している船にも、陸おかをゆく男女の風俗にも、流行歌はやりうたにも、職をさがしている牢人の顔つきにも、混色こんしよくしているのだった。

「どうなるんだ？」

と、人々はすぐそういう話題に興味を持つ。

「どうって、何が？」

「世の中がよ」

「変るだろう。こいつあ、はつきりしたことだ。変らない世の中なんて、そもそも、藤原道長以来、一日だってあつた例はねえ。

——源家平家の弓取が、政権を執るようになってからは猶さらそいつが早くなつた」

「つまり、また戦か」

「こうなつちまつたものを、今さら、戦のない方へ、世の中を向け直そうとしても、力に及ぶまい」

「大坂でも、諸国の牢人衆へ、手をまわしているらしいな」

「……だろうな、大きな声ではいえねえが、徳川様だって、南蛮

船から銃や弾たまぐすり薬をしこたま買いこんでいるというし」

「それでいて——大御所様のお孫の千姫を、秀頼公の嫁君にやっているのはどういうものだろ？」

「天下様のなさることは、みな聖賢の道だろうから、下人げにんにはわからねえさ」

石は焼けていた。河の水は沸いている。もう秋は立っているのだが、暑さはこの夏の土用にも勝まさつて酷きびしい。

淀の京橋口の柳はだらりと白っぽく萎なえている。気の狂ったよ
うな油あぶら蟬ぜみが一匹、川を横ぎって町屋の中へ突き当ってゆく。

その町も晩の灯の色はどこへか失って、灰を浴びたような板屋根が乾き上がっているのだった。橋の上かみしも下には、無数の石船がつ

ながれていて、河の中も石、陸おかも石、どこを見まわしても石だらけなのである。

その石も皆、畳二枚以上の巨おおきなものが多かった。焼けきつた石の上に、石曳いしひきの労働者たちは、無感覚に寝そべったり腰かけたり仰向けに転がったりしている。ちようど今が、昼飯どつき刻でその後の半刻休みを楽しんでいるのであろう。そこらに材木をおろしている牛車の牛も涎よだれをたらして、満身に蠅はえを集めてじっとしている。

伏見城の修築だった。

いつのまにか、世の人々に「大御所」と呼ばしめている家康がここに滞在しているからではない。城しろ普請ぶしんは、徳川の戦後政策

の一つだった。

譜代大名の心を弛緩しかんさせないために。——また、外様大名の蓄力を経済的にそれへ消耗させてしまうために。

もう一つの理由は、一般民に、とにかく徳川政策を謳歌おうかさせるためには、土木の工を各地に起して、下層民へ金をこぼしてやるに限る。

今、城普請は全国的に着手されていた。その大規模なものだけでも、江戸城、名古屋城、駿府城、越後高田城、彦根城、龜山城、大津城——等々々。

この伏見城の土木へ日稼ひかせぎに来る労働者の数だけでも、千人に近かった。その多くは、新曲輪しんぐるわの石垣工事にかかっているのである。伏見町はそのせいで、急に、売女ばいたと馬うま蠅ばえと物売りが殖ふえ、「大御所様景気や」

と、徳川政策を謳歌した。

その上、

「もし戦争になれば」

と、町人たちは、機と利を察して、思惑に熱していた。社会事象のことごとくを、そろばん珠にのせて、

「儲もうけるのはここだ」

無言のうちに、商品は活潑にうごいた。その大部分が、軍需品であることはいうまでもない。

もう庶民の頭には、太閤時代の文化をなつかしむよりも、大御所政策の目さきのいい方へ心酔しかけていた。司権者は誰でもいいのである。自分たちの小さな慾望のうちで、生活の満足ができればそれで苦情がないのだ。

家康は、そういう愚民心理を、裏切らなかつた。子どもへ菓子まを撒まいてやるより易い々いたる問題であつたらう。それも徳川家の金でするのではない。栄養過多な外様大名に課役させて、程よく、彼らの力をも減殺させながら効果を挙げてゆく。

そうした都市政策の一方、大御所政治は、農村に対しても、従

来の放漫な切り取り徴発や、国持くにもちまかせを許さなかつた。徳川式の封建政策をぽつぽつ布しきはじめていた。

それには、

(民をして政治を知らしむなかれ、政治にたよらせよ)

という主義から、

(百姓は、飢えぬほどにして、気ままもさせぬが、百姓への慈悲なり)

と、施政の方策をさずけて、徳川中心の永遠の計にかかつていた。

それはやがて、大名にも、町人にも、同じようにかかつて来て、孫子の代まで、身うごきのならない手かせ足かせとなる封建統制

の前提であったが、そういう百年先のことまでは、誰も考えなかつた。いや、城しろ普請ぶしんの石揚げや石曳いきに稼いぎきに來ている労働者などは、明日あしたのことさえ、思っていないのである。

昼飯をたべれば、

「はやく晩になれ」

と祈るのが、いっばいな慾念だった。

それでも時節がら、

「戦争になるか」

「なれば何日頃いつ？」

などと、時局談は、いっばし熾さかんだったが、その心理には、

「戦争になつたつて、こちららは、これ以上、悪くなりようがね

え」

という気持があるからで、ほんとにこの時局を憂うれいたり、平和の岐点をじつと案じて、どの方へ曲がるのが国と民のためだろうなどと考えているのでは決してないのである。

「——西瓜すいかいらんか」

いつも昼休みに来る百姓娘が、西瓜の籠を抱えて触れて来た。

石の蔭で、銭ぜにの裏表を伏せて、博ぼくち戯ちをしていた人足の群れで、二つ売れた。

「こちらの衆は、西瓜どうや。西瓜買うてくれなはらんか」

と、群れから群れへ唄うたつてくると、

「べら棒め、銭がねえや」

「ただなら食つてやる」

そんな声ばかりだった。

すると、たった一人ぼち、青白い顔をして、石と石のあいだに
倚よりかかつて膝を抱えていた石曳きの若い労働者が、

「西瓜か」

と、力のない眼をあげた。

痩せて——眼がくぼんで——日に焦やけて、すっかり変つてしま
つたが、その石曳いしひきは、本位ほんいでんまたはち田又八だつただった。

又八は、土のついた青銭を、掌のうえでかぞえた。西瓜売りにわたして一個の西瓜と交換した。それを抱え込むと、またしばらく、石に倚りかかったまま、ぐんなり俯向うつむいているのである。

「げ…………げ…………」

突然、片手をつくくと、草の中へ牛みたいに唾液だえきを吐いた。西瓜は膝から転がり出している。それを取ろうとする気力もないし、食べようという気で買ったわけでもないらしいのだ。

「……………」

にぶい眼で、西瓜をながめていた。眼は虚無の玉みたいに何の意力も希望もたたえていない。呼吸いきをすると肩ばかりうごいた。

「…………畜生」

呪う者ばかりが頭脳あたまへ映つてくる。お甲こうの白い顔であり、武たけぞ

蔵うのすがたであつた。今の逆境へ落ちて来た過去を振ふり顧かえると、

武蔵がなかつたらと思ひ、お甲に会わなかつたらと彼はつい思う。

過あやまちの一步は、関ヶ原の戦いくさの時だ。次に、お甲の誘惑だ。あの

二つのことさえなかつたら、自分は今も、故郷ふるさとにいたろう。そ

して本位田家の当主になつて、美しい嫁をもち、村の人々から、

羨望せんぼうされる身でいられたに違ひない。

「お通つうは、怨んでいられるだろうなあ……。どうしているか」

彼の今の生活は、彼女を空想することだけが慰めだった。お甲
という女の性質がよくわかつてからは、お甲と同棲しているうち
から、心はお通へもどつていたのだった。やがてあの「よもぎの

寮」と呼ぶお甲の家を、ていよく突き出されたような形で出てしまつてからは、よけいにお通を思うことが多かつた。

その後また、よく洛内らくないの侍たちの間で噂にのぼる宮本武蔵なる新進の剣士が、むかし友達の「武蔵」たけぞうであることを知ると、又八はじつとしていられなかつた。

(よしつ、俺だつて)

彼は酒をやめた。遊惰な悪習を蹴とばした。そして次の生活へかかりかけた。

(お甲のやつにも、見返してやるぞ。——見ていやがれ)

だが、さしずめ適当な職業は見つからなかつた。五年も世間を見ずに、年上の女に養われて来た不覚のほどが、はつきり身に沁

みて分つたが、遅かった。

（いや、遅かあない。まだ二十二だ。どんなことをしたって……）
と、これは誰にでも起せる程度の興奮だったが、又八としては、眼をつぶつて運命の断層をとび越えるような悲壮をもつて、この伏見城の土木へ働きに出たのだつた。そしてこの夏から秋までの炎天下で、自分でもよく続いたと思うほど労働をつづけていた。

（おれも、一かどの男になつてみせる。武蔵のやる芸ぐらい、俺に出来ない法はない。いや、今にあいつを尻目にかけて、出世してみせてやる。その時には、お甲にも黙つて復讐できるのだ。見ているここ十年ばかりに）

だが——と彼はふと思うのだつた——十年経つたら、お通は幾い

歳くわになるだろうと。

武蔵や自分よりも、彼女は一ツ年下だ。すると今から十年経つうちには、もう三十を一つこえてしまう。

(それまで、お通が、独り身で待っているかしら?)

故郷のその後の消息は何も知らない又八だった。そう考えると、十年では遠すぎる、少なくともここ五、六年のうちだ。なんとしてみ身を立てて、故郷へ行き、お通に詫びて、お通を迎え取らなければならぬ。

「そうだ……五年か、六年のうちだ」

西瓜を見ている眼に、やや光が出てきた。すると、巨おおきな石の向う側から、仲間の一人が、肱ひじを乗せていった。

「おい又八、何をひとりでぶつぶついつてるんだ。……オヤ、ばかに青い面つらして、げんなりしているじやねえか。どうしたんだ、腐った西瓜でも喰らって、腹でも下痢くだしたのか」

四

つけ元気に、又八はうすく笑った。だがすぐ、不快な眼まいがこみあげて来るらしく、生なまつば唾を吐いて顔を振った。

「な、なあに、大したことはないが、少し暑さ中あたりしたらしいんだ。……すまないが、午ひるから一刻ときほど、休ましてくれ」

「意気地のねえ野郎だな」

逞しい石曳き仲間は、慥あわれむように嘲あざけった。

「なんだい、その西瓜は。喰えもしねえのに買ったのか」

「仲間にすまないから、みんなに喰べてもらおうと思つて」

「そいつあ如才のねえこつた。おい、又八の奢おごりだよ、食つてやれ」

西瓜を持つて、その男は、石の角へたたきつけた。忽ち、そこらの仲間が蟻ありのように寄つて来て、赤いしずくの滴したたる甘肉の破片を貪むさぼり合つた。

「やあい、仕事だぞうつ」

石曳きの小頭こがしらが、石のうえに上がつて呶鳴ななめつた。監督の侍が、鞭むちを持つて陽除ひよけ小屋から出て来る。遽にわかに汗のにおいが大地に

うごき、馬蠅うまばえまでわんわん立つ。

「テコ」や「コロ」に乗せられた巨大な石が、一握りもある太い綱に曳かれて徐々に前へ出てゆくのだった、雲の峰がうごくように。

築城時代の現出は、それにつれて全国に、石曳き歌というものの流行を興おこした。今、ここの人足たちが唄い出したのもそれである。阿波の城主蜂須賀至鎮よししげが城ぶしんの課役に出て、そこから国表へつかわしたその頃の書信の一節にも、

(——ゆうべさる方にて習い申しそろ儘まま、名古屋の石曳きうた書きつけて参らせそろ)

とあって、その歌詞に

われが殿衆は

藤五郎さまじやに

あわたぐち
栗田口より

石また曳きやる

エイサ、エイサ

コロサと曳きやる

お声きくさえ

よあし
四肢がなゆる

まして添うたら

死のずよの

（おい）——老も若きもうたいはや離しそろ。これにてなくば、うき世なる

まじく見え候（そろ）

労働歌が絃歌になり、蜂須賀侯のような大名までが、夜興（やきよう）の
口誦（くちずさ）みに戯（たわむ）れたものとみえる。

街に歌がさかんになりだしたのは、何といても太閤の世盛り
からだつた。室町將軍の頃には、歌があつても廃頹（はいたい）的な室内の
ものだけだつた。その頃は、児童がうたう歌まで、ひがみツぽい
暗い歌が多かつたが、太閤の世になつてからは、歌も明るくなり
大きくなり希望的になつて、民衆はそれを汗をかきながら太陽の
下でうたうことを甚だ好んだ。

関ヶ原の役の後、社会文化に家康色がだんだん濃くなつてくる
と、歌もすこし變つて来て、豪放さはうすくなった。太閤様のこ

ろには、民衆からひとりでに歌が湧いてきたが、大御所の世間になつてからは、徳川家付いえつきの作者が作ったような歌が民衆へ提供されて来た。

「……ああ、苦しい」

又八は、頭をかかえた。頭は火みたいに熱かった。仲間の間でいっている石曳き歌が、虻あぶに取り巻かれているように耳にうるさかった。

「……五年、五年。アア五年働いていたらどうなるんだ。一日稼いでは、一日分食つてしまい、一日休めば、一日食わずにいなけれやならない」

なまつば生睡も出しきつて、青ざめた顔を俯向うつむけていた。

——すると、いつのまに來ていたのか、そこから少し離れた所に、藁わら編みの目の粗あらい笠を眉深まぶかにかぶつて、袴はかま腰こしへ武者修行風呂敷をしばりつけた背の高い若者が、半開きにした鉄扇てっせんを、笠のひさしにかざして、熱心に伏見城の地勢や工事のさまを眺めていた。

佐々木小次郎

一

何思ったか、武者修行はそこへ坐りこんだ。面積一坪ほどな平ひ

石らの前にである。坐つてみるとちようど机の高さぐらゐにひじが
つけるのだ。

「ふツ……ふツ……」

焦やけていた石の砂を息で吹く、砂とともにあり蟻の列もふき飛んで
ゆく。

ふたつの肱をつくと、編笠はしばらく頬杖に乗っている。陽ざ
かりで、石はみな照り返すし、草いきれは逆さに顔を撫でるし、
さぞ暑いだろうに、身うごきもしない。城の工事に眺め入つてい
るのである。

少し離れた所に、又八がいることなどは、意に介さない様子で
あつた。又八もそこへ来てそういう態ていをしている武者修行がある

うとあるまいと、もとより自分に何の交渉があるわけではないし、頭や胸も依然として不快なので、時折、胃から生唾なまつばを吐きながら、背を向けて休んでいた。

——と。その苦しいな息を耳にとめたのだろう。編笠がうごいて、

「石曳き」

と、声をかけ、

「どういたした？」

「へい……暑さあた中りで」

「苦しいのか」

「少し落ちつきましたが……まだこう吐きそうなんで」

「薬をやろう」

印籠を割って、黒い粒を掌てのひらへうつし、起つて来て又八の口へ入
れてくれた。

「すぐ癒なおる」

「ありがとうございます」

「にがいか」

「そんなでもございません」

「まだ、貴様はそこで、仕事を休んでおるのか」

「へ……」

「誰か参つたら、ちよつとおれの方へ声をかけてくれ、小石で合
図をしてくれてもいい、頼むぞ」

武者修行は、そういつて、前の位置に坐りこむと、今度はすぐ矢立から筆を取り出し、半紙綴とじの懷ふところ中手帖を石の上にひろげて、ものを書くことに没頭しはじめた。

笠のつば越しに、彼の眼のやりばが、間断なく城へ向つたり、城の外のほうへ行つたり、また城のうしろの山の線や、河川の位置や、天守などへ、転々とうごいてゆくところを見ると、その筆の先は、伏見城の地理と廓外廓内の眼づもりを、絵図に写とつているにちがいがなかった。

関ヶ原の戦いくさの直前まさだぐるわに、この城は西軍の浮田勢と島津勢に攻められて、その増田廓おおくらぐるわや大蔵廓るいごうや、また諸所の壘うり濠こうなどもかなり破壊されたものだったが、今では、太閤時代の旧観にさらに

鉄壁の威厳を加えて、一衣帯水の大坂城を睥睨へいげいしていた。

今——武者修行が熱心に写している見取図みとりずをのぞくと、彼は、いつの折かに、その城のうしろをおおっている大亀谷や伏見山からもこの城地を俯瞰ふかんして、べつに一面の搦手図からめてずを写しているらしく、いかにも精密なものが出来かかっている。

「……あつ」

又八が、そういつた時には、写図に一心になつている編笠のうしろへ、工事課役の大名の臣か、伏見の直臣じきしんかわからないが、草鞋わらじばきで、太刀を革紐かわひもで背なかに負うた半具足の侍が、武者修行の気をつくまで、黙つて立っていたのだつた。

——すまないことをした。又八は正直にすまないと思つた。け

れどもう遅い。石を投げてやつても声をかけてやつても、もう遅い。

そのうちに、武者修行は、汗の襟元へ食いついた馬蠅うまばえを手で
払う拍子に、

「——あ？」

振り仰いで、驚きの眼をみはった。

工事目付の侍は、その眼をじつと睨ねめ返して、石の上の見取図
へだまつて具足の手を伸ばした。

この炎天下の我慢と、粒々りゅうりゅうの辛苦をして、やっと写した城の見取図が、ものもいわず、いきなり肩越しに出て来た手のために、皺しわくちやに掴つかみ奪とられようとするのを見ると、武者修行は、火薬の塊りが火を呼んだように、

「何するかッ」

満身で呶鳴った。

手頸てくびをつかまえて立つと、工事目付は奪とり上げた彼の写図帖を、奪り返されまいとして、宙へその手をさしあげつつ、

「見せろ」

「無礼なッ」

「役目だ」

「なんであろうが」

「見ては悪いものか」

「悪いっ。貴様などが見たってわかるもんじやない」

「とにかく預る」

「いかん！」

帖の写図は、双方の手に裂かれて、半図ずつ握りしめた。

「曳ツ立てるぞ、素直にせぬと」

「どこへ」

「奉行所へ」

「貴様、役人か」

「然り」

「何番の。誰の」

「左様なこと、汝らが、訊かんでもいい。此方このほうは、工事場見廻りの役、怪しいと認めたによつて、取調べるのじゃ——誰様のおゆるしをうけて、お城の地勢や、御普請などを写し取つたか」

「おれは武者修行だ、後学のため諸国の地理や築城を見学しておる、なんでわるいか」

「さような口実でうろついておる敵の間者かんじゃは、蠅や蟻ありほど多いのじゃ。……とにかくこれは返せん、其方も一応取りただすによつて、あつちまで来い」

「あつちとは」

「工事奉行のお白洲しらす」

「おれを罪人扱いするのか」

「だまつて参るのだ」

「役人、こらつ。——貴様あ、そんなけんぺいがお権柄顔さえすれば愚民が驚くと思つておる癖がついてるな」

「歩かんか」

「歩かせてみる」

てこでも動かない姿勢を示すのである。見廻りは、青すじを立てた。掴んでいた写図の破れを、地へすてて踏みにじり、二尺余りの長い十手を腰から抜いた。

武者修行の手が刀へかかったら、すかさず、そのひじ肱へ十手の打撃を入れてやろうとするもののように、腰を退ひいて身構えたが、

その様子もないので、もう一度、

「歩かんと、縄を打つぞ」

ことばの終らないうちに、武者修行のほうから一步出て来た。

何か大きな声を発したと思うと、見廻りは首の根をつかみ寄せられていた。武者修行の片手はまた、彼のよろいおび鎧帯の腰をつかんで、

「この、虫けら」

おおいし巨石の角へ向つてほう抛り投げた。

見廻りのさむらいがしら侍頭は、先刻そこで石曳きの男がたたき割つた

西瓜のようになって、形を失ってしまった。

「……アツ」

又八は、顔を抑えた。

真つ赤な味噌みたいなのが彼のいる辺りまで^は匆ねて来たからである。平然たるものは、^{あなた}彼方の武者修行であつた。よほどこな殺人に馴れているのか、また一氣に憤りを爆発させて後の涼しさに落着いているのか、とにかく、あわてて逃げ出す様子もなく、見廻りの足で踏みにじられた写図の断片と、そこらに散らばつてゐる^{ほご}反古をひろい集め、次に、相手を投げる途端に^{ひも}紐が切れて飛んで行つた編笠を、静かな目で捜している。

「……………」

又八は、凄惨な氣に打たれていた。恐ろしい力量を見て自分の毛穴までよだつている。——見るところ武者修行はまだ三十に届くまい。陽^{ひや}焦けのした骨太の顔に薄あばたがあり、耳の下から顎

にかけて四半分ほど顔がない。ないというのはおかしいが、太刀で斬られた痕きずあとの肉が変に縮んでしまったのかも知れない。その耳の裏にも黒い刀痕とうこんがあり、左の手の甲にも刀傷がある。なお肌着を脱いだら幾つでも同様な刀傷が出て来そうな——見るからに近寄りがたい猛気をその顔はそなえていた。

三

笠を拾って、怪異なその顔へかむると、武者修行はさつと足を速めた。風のように彼方へ向って逃げ出したのである。勿論、そこまでの行動は極めて短い間だった。蟻のように労働している何

百という石曳きも、鞭や十手を持って、そのあぶら汗を叱咤している監督も、誰も気づく^{いとま}違がなかったほどに――

だが、その広い工事場を、絶えず高い所から見渡している独特な眼があつた。それは丸太組の櫓^{やぐら}のうえにいる棟^{とうり}梁^{りやう}衆^{しゆう}や作事与力の上役だつた。そこから突然、大きな声が放たれたと思ふと、櫓の下の湯呑み所の板がこいの中で、大釜の火にいぶされながら働いていた足軽たちが、

「なんだ？」

「何だ」

「また、喧嘩か」

と、外へ飛び出した。

もうその時は、作業場と町屋の境に出来ている竹矢来たけやらいの木戸で、真つ黒にかたまつた人間の怒号が黄いろい埃ほこりにつつまれていった。

「間者かんじゃだな！ 大坂の」

「性懲りしょうこもなく」

「ぶつ殺せ」

口々にいって、石工いしくや土工や工事奉行の配下は、みな自分の敵でもいるように駈け集まつて行く。

半分顎あごのない武者修行が捕まつたのだ。竹矢来の外へ出て行く牛車の蔭にかくれて、すばやく木戸の口をすり抜けようとしたが、そこの番衆たちに挙動を怪しまれて、釘の植わっている刺さすまた 叉と

いう柄えの長い道具で、いきなり足を搦からみ取られたのであった。

そこへ、櫓やぐらの上からも、

「その編笠を引ッ捕えろっ」

と、呼ばれる声が同時にあったので、理由などは問わず、遮二無二、組み伏せにかかる、武者修行は形相をあらためて、野獣のように死にも狂いとなった。

刺叉を引ッ奪たくられた男が、真ッ先にその得物の先で髪を引ッかけられた。四、五人叩き伏せておいて、虚空へさつと閃ひらめかしたのは彼の腰に横たえていた胴田貫どうたぬきらしい大太刀である。平常ふだんの差さ刀には頑丈すぎるが、陣太刀にすれば手ごろである。——それを抜いて額ひたいの真ッ向に揮ふりかぶると、

「こいつらッ」

睨んだだけで、その重囲が凹くぼんだので、武者修行は血路をひらくつもりで駈けこんで行った。

すると、危険を避けて人間はわつと散らかったが、途端に八方から小石が降って来たのである。

「殺やつちまえ」

「たたつ殺してしまえっ」

肝腎かんじんな侍たちが臆して近よらないので、平常、武者修行とい

うものに対して、彼らは少しばかりの知識や学問を鼻にかけ、世の中をただ威張って横に歩くのを見栄ひがにしている無産の僻ひがみ者か、一種の逸民と認めて、それに反感を抱いている石工いしこうだの土工どこうだの

という労働者たちが、

「殺やつちまえ」

「のしちまえ」

と叫んで、四方から抛ほうりつける、それは無数の石つぶてであつた。

「この凡下ほんげどもめ！」

駈け入れば、わつと散るのだ。武者修行の眼はもう自分の生きる路を見つけるよりも、その石の来るほうの人間へ向つて、理智や利害を越えている。

四

怪我けがにん人も多く出たし、死者も幾人かあつたのに、それから一瞬の後は、めいめい職場にかえつて、けろりとした工事場の広さであつた。

何事もなかつたように、石曳きは石を曳き、土工は土をかつぎ、石工いしくは鑿のみで石を割っている。

鑿のみが火花を出す暑い音、霍乱かくらんをおこして暴れくるう馬のいななき、残暑の空は、午後に入つて、じいんと鼓膜こまくが馬鹿になるような熱さだった。伏見城から淀のほうへ背のびをしている雲の峰は、しばらくうごきもしなかつた。

「もう九分九厘まで、くたばっているが、御奉行が来るまでこう

して置くから、汝てめえそこにいて、こいつの番をしておれ。——死んだら死んだままでのことでもいい」

人足がしら頭や目付の侍に、こう命じられたことを又八は覚えている。——だが頭がどうかなくなってしまったのか、先刻さっきから目撃したきりそう吩咐いいつけられたことも、なんだか悪夢をみているようで、眼や耳には意識しても、頭のしんまで届いていない。

「……人間なんて、つまんねえものだな。たった今そこで、城の見取図を写していた男が」

又八のにぶい眸ひとみは自分から十歩ほど先の地上にある一個の物体を見つめたまま、最前からぼんやりと虚無的な考えに囚われている。

「……もう死んでるらしい。まだ三十前だろうに」

と彼は思い遣った。

顎の半分ない武者修行は、太い麻縄で縛られて、血に土のまぶされた黒い顔を、無念そうにしかめたまま、その顔を横伏せにして倒れている。

縄尻はそばの巨きな石おおに巻きつけてあるのだった。もう「ウ」

も「ス」もいい得ない死人の体をそう大おおぎ仰ように縛くくっておかない

でもよさそうなものと又八はながめていたことだった。何で撲られたのか、破れた袴はかまから変な恰好して露出している脚の脛すねは、肉が弾はじけて折れた白骨の先が飛び出していた。髪は粘ねばって血を噴あいているし、その血へは虻あぶがたかり、手や脚にはもう蟻ありの群れが這

っている。

「武者修行に出たからには、のぞみを抱いていたろうに。——故く郷には何処か。親はあるのかないのか」

そんなことを思い遣おもると、又八はいやな気持ちに襲われて、武者修行の一生を考えているのか、自分の身の果てを考えているのか、分らなくなってきた。

「望みをもつにも、もつと伶俐に出世する道がありそうなものだ」と、つぶやいた。

時代は若い者の野望を煽あおつて、「若者よ夢を持って」「若者よ起て」と未完成から完成への過渡期にあつた。又八ですらその社会の空気を感じるほど、今は、裸から一国一城あるじの主を望める時であ

る。

そのために、青年は続々離郷する——また家を離れ骨肉も省みかえりない。その多くが武者修行の道をとるのだ。武者修行をして歩けば今の社会では到るところで衣食に事を欠くことはない。田夫野人でも武術には関心をもっているからだ。寺院へ頼つても渡れるし、あわよくば地方の豪族の客となり、なお、幸運にぶつかれば、一朝事のある場合のために、大名の経済から「捨て扶持」ぶち「蔭扶持」などというものを貢みつがれることもある。

だが数多い武者修行の中で、そういう幸運にあう者がどれほどあろうかといえば、これは極めて少数にちがいない。功成り名を遂げ、一人前の祿取りろくになるほどの者は一万人中で二人か三人を

出ないであろう。——それでいて修行の苦しさと、達成の至難なことは、これでいいという、卒業の行き止まりがないのである。

(馬鹿馬鹿しい……)

又八は、同郷の友の宮本武蔵が行った道をあわれ憐んだ。おれは将来、奴を見返してやるにしても、そんな愚かな道はとらないぞと思う。ここに死んでゐる顎のない武者修行のすがたを見てもそう思う。

「……おやつ？」

又八は飛び退いて大きな眼をすえた。なぜならば、死んだものときめていた蟻だらけの武者修行の手がびくつと動き出して、縄目の間からすっぱん鼈のような手首だけを出して大地へつき、やがてむくりと、腹を上げ、顔を上げ、次に前のほうへ一尺ばかり、ずるり

と這い出して来たからであつた。

五

ぐ……と生なまつば唾をのんで又八はなおも後へ摺ずり退さがった。腹の底から驚きを感じると声も出ないものだ。ただ眼のみ大きくみひらいて、目の前の事実には茫失した。

「……ひゅつ……ひゅつ……」

彼は、何かいおうとするらしい。彼とは顎の半分ない武者修行である。完全に死んでいると思つていたこの男は、まだ生きていたのだ。

……ヒユツ、ヒユツと断れ断れに彼の呼吸が喉で鳴るのである。唇は黒く渴かわいてしまつて、そこから言葉を吐くのはもう不可能な業わざであつた。それを必死に一言でもいおうとするので、呼吸が割れた笛の鳴るような音を出すのだった。

又八が驚いたのは、この男が生きていたからではない。胸の下に縛りつけられている両手で這つて来たからだ。それだけでも、驚くに足る人間の死力であるのに、その縄尻の巻きつけてある何十貫もあろう巨石おおいしが、この瀕死の傷負ておいが引つ張る力で、ズル、ズル……と一、二尺ずつ前へ動いて来たからである。

まるで、化け物のような怪力だ。この工事場の労働者のうちにも、ずいぶん力自慢があつて、十人力とか二十人力とか自称して

いる天狗もあるが、こんな化け物は一人もいない。

しかも、この武者修行は、今や死なんとしてしている体なのだ。——死なんとする境にあるために、そんな人間業にんげんわざでない力が出るのかも知れないが、とにかく、その飛び出しそうな武者修行の眼が自分の方を見つめて這い進んで来たので、又八は腰が竦すくんでしまった。

「……しよっ……しよっ……お、お、おねがい」

また何か、変った語音ごいんを出している。意味はまったく分らない。ただ判じのつくのは武者修行の眼だ——死なんとするのを知っているその眼である——血ばしっている中に涙腺はかすかに涙みたいなものを湛たたえている。

「……たつ……た……たのむ……」

がくつと首を前へ折つた。こんどはほんとに息が絶えたのだらう、見ているうちに襟首えりの皮膚の色が青黒く沈んで行つた。草むらの蟻がもう白つぽい髪の毛にたかっている。血のかたまつた鼻の穴を一匹はのぞきこんでいた。

「？ ……」

何を頼まれたのか、又八は茫ぼうとしていただけだつた。けれどこの怪力の武者修行が臨終いまわの一念は、自分へ憑つき物のようについていて違たがえることのできない約束の負担を負わされたような気持がしてならない。——自分の病苦を見て、薬を服のませてくれたり、誰か来たら合図してくれと頼まれたのに、うっかりしていて、そ

れを告げてやらなかつたことなども、妙に深刻な宿縁みたいに思
い出されてくる。

——石曳き唄は、遠くなっていた。お城は暮靄ぼあいにかすんで来た。
いつのまにかもう黄昏たそがれかけて、伏見の町には早い灯あかりがポツポ
ツ戦そよぎだしている。

「そうだ……何かこの中に」

又八は、死者の腰に結びつけている武者修行風呂敷をそつと触
つてみた。——生国、骨肉などの身許も、この中を見ればわかる
にちがいない。

(故郷の土へ、遺物かたみを届けてくれというのだらう)

そう彼は判断した。

包みと印籠を、死者の体から取つて、自分の懐ふところ中へ入れた。

——そして髪の毛でもと思つて、一握り切ろうとしたが、死者の顔をのぞいて、ぞつととしてしまった。

——登音が聞えた。

石の蔭から見ると、奉行配下の侍たちだ。又八は、死骸から無断で取つた品物が自分の懐ふところ中にあると思つと、自分の危険を感じて、そこにいたたまらなくなつた。——背を屈かがめて、石の蔭から蔭へと、野鼠のように逃げて行つた。

六

夕ぐれの風はもう秋だった。糸瓜へちまは大きくなっている。その下で、盥たらいの湯に浴つかっている駄菓子屋の女房が、家の中の物音に、戸板の蔭から白い肌を出していった。

「誰だえ。又八さんかい？」

又八はこの家の同居人だった。

今、あたふたと帰って来ると、戸棚を搔廻ひとこしして、一枚の单衣ひとえと一腰ひとこしの刀を出し、姿をかえると、手拭で頬ほ冠おかむりして、またすぐ草履はを穿はこうとしていた。

「暗かろ、又八さん」

「なに、べつに」

「今あかすぐ灯あかりをつけるで」

「それには及ばないよ、出かけるから」

「行水は」

「いらん」

「体でも拭いて行ったら」

「いらん」

急いで裏口から飛び出して行った。といつても、垣も戸もない草原つづきである。彼が長屋から出て来ると入れちがいに、数名の人影が、萱かやの彼方かなたを通つて、駄菓子屋の裏表へ入つてゆくのが見えた。工事場の侍が交まじつていた。又八は、

「あぶない所だった」

と眩っぶやいた。

顎の半分ない武者修行の死体から、包みや印籠いんろうを取った者のあることは、その後ですぐ発見された筈である。当然、その側にいた自分に盗人の嫌疑がかかったに相違ない。

「だが……俺は盗みをしたのじゃない。死んだ武者修行の頼みにやむなく持物を預かって来たのだ」

又八は疚やましくなかつた。その品は懐ふところ中に持っている。これは預かつた物だと意識しながら持つている。

「もう石曳きに行かれない」

彼は、明日あしたからの放浪に、なんのあてもなかつた。しかし、こういう転機でもなければ、何年でも石を曳いているかも知れないと思うと、かえって先が明るく考えられる。

萱^{かや}の葉が肩までかかる。夕露がいつぱいだ。遠くから姿を発見される懼^{おそ}れがなくて逃げるには気楽だ。さてこれからどっちへゆくか？ どっちへ行こうと体一つである。何かいい運だの悪い運だのがいろいろな方角で自分を待っているらしく思う。今の足の向き方ひとつで生涯に大きな違いが生じるのだ。必然、こうなるものだど決定された人生などがあるとは考えられない。偶然にまかせて歩くよりほか仕方がない。

大坂、京都、名古屋、江戸——流浪の先を考えてみるが、何処に知己があるわけではなし、賽^{さい}ころの目をたのむように頼りがない。賽ころに必然がないように、又八にも必然がないのだった。何かここに起ってくる偶然があれば、それに引かれて行こうと思

う。

だが、伏見の里の萱原には、歩けど歩けど何の偶然もなかった。虫の音と露とが深くなるばかりだった。単衣ひとえのすそはびっしより濡れて足に巻きつき、草の実がたかつて、脛すねがむず痒かゆい。

又八は、昼の病苦をわすれた代りに、すっかり飢ひもじくなくなっていた。胃液まで空っぽなのだ。追手の心配がなくなつてからは、急に歩くことが苦痛になつていた。

「……何処かで寝たいものだ」

その慾望が彼を無意識にここへ運んで来たのである。それは野末に見えた一軒の屋やの棟むねだった。近づいてみると垣も門も暴風の時に傾いたまま誰も起してやり手がない。おそらく屋根も満足な

ものではあるまい。しかし一度は貴人の別荘とされて、都あたりから、糸毛の輦くるまに藹ろうたけた麗人が、萩を分けて通つたこともあり、そんな家造りやづくなのである。又八はその無門の門を通つて中へ入り、秋草の中に埋まっている離亭はなれや母屋おもやをながめて、ふと玉葉集の中にある西行の、

会はひしりて侍りける人の伏見はべにすむと聞きて尋ねまかりけるに、庭の草、道も見えずしげりて虫の啼なきければ——「わけて入る袖にあはれをかけよとて露けき庭に虫さへぞ啼く」

——そんな文句を思いだして、肌寒げに立ちすくんでいると、当然人は住んでいないものとはかり思つていた家の奥に、風で燃え出した炉ろの火がぱつと赤く見え、しばらくすると尺八の音がそ

こから聞えだした。

七

ちようどよい壻ねぐらとここに一夜を明かしている虚無僧らしいのである。炬ろうの火が赤く立つと、大きな人影が婆娑ばさとして壁に映る。独り尺八を吹いているのだ。それはまた他人ひとに聞かそうためでもなく自ら誇って陶醉ねしている音でもない。秋の夜の孤寂の遣やる瀬なさを、無我と三昧さんまいに過ごしているだけのことなのだ。

一曲終ると、

「ああ」

虚無僧は、ここは野中の一軒家と、安心しきっているらしく独り言に――

「四十不惑ふわくというが、おれは四十を七つも越えてからあんな失策をやつて、禄ろくを離れ家名をつぶし、剩あまつさえ独りの子まで他国へ流浪させてしまった。……考えれば慚愧ざんきにたえない。死んだ妻にも生きてゐる子にも会わせる顔がない。……このおれなどの例を見ると、四十不惑などというのは聖人のことで、凡夫の四十だいほど危あぶらないものはない。油断のならない山坂だ。まして女たてに關しては、胡坐あぐらの前に、尺八を縦たてに突き、その歌口へ両手をかさねて、

「二十だい、三十だいの年でも、由来おれは、やたらに女のこと
で失敗をやつて来たが、そのころにはどんな醜聞をさらしても、

人も許してくれたし、生涯の怪我けがにもならなかった。……ところが、四十だいとなると、女に対してすることが厚顔あつかましくもなるし、それがお通つうの場合のような事件になると、今度は世間がゆるさない。そして、致命的な外聞になってしまった。禄も家もわが子にも離れるような失敗になってしまった。……そして、この失敗も、二十だい三十だいなら取り返せるが、四十だいの失敗は二度と芽を出すことがむずかしい」

盲人のように俯向うつむいたまま、声を出してそういつているのである。

——又八は、彼のいる近くの部屋までそつと上がって行つたが、炉の火にぽつと浮いている虚無僧の瘦せおとろえた頬の影や、野

犬のように尖とがっている肩や、脂あぶらけないほつれ毛などを見つつ、その告ひとりごと白を聞いていると、夜鬼のすがたを思い出して、ぞつと背がすくんでしまい、近寄つて話しかける気持になどはとてもなれなかつた。

「アア……それを……おれは……」

虚無僧は、天井を仰向いた。骸がいこつ骨のように鼻の穴が大きく又八のほうから見える。凡ただの浪人の垢あかじみた着物を着て、その胸に普ふ化け禅ぜん師しの末弟しるしという証しるしばかりに黒い袈け裟さをつけているに過ぎないのである。敷むいている一枚むしろの筵しんは、常に巻いて手に持つて歩く彼の唯一ふすまの衾ふすまであり雨露の家だつた。

「——いっても、返らないことだが、四十だいほど、油断のなら

ない年頃はない。自分だけが、いっばし世の中も観^み、人生もわかつたつもりで、少しばかりかち得た地位に思い上がって、ともすると、女に対しても、臆面のない振舞に出るものだから、おのれのような失敗を——運命の神から背負い投げを喰わされるのだ。
……慚愧^{ざんき}のいたりだ」

誰かに向つて謝っているように、虚無僧は頭を下げ、さらにまた下げて、

「おれはいい、おれは、それでも、いいとしよう。——こうして懺悔^{ざんげ}の中に、なお許してくれる自然のふところに生きて行かれるから」

と、ふと涙をこぼし、

「——だが、濟まないのは、わが子に対してだ。おれのした結果は、おれにむく酬うより、あの城太郎のほうへより多くたた崇つている。とにかく、姫路の池田侯に藩臣としてこのおれがれつき歴乎としていれば、あの子だって、千石侍の一人息子だ。それが今では、故郷くにを離れ、父を離れ……。イヤそれよりも、あの城太郎が成人して、この父が、四十だいになってから、女のことで藩地から放逐されたなどと知る日が来たら、おれはどうしよう。おれは子に会わず顔がない」

——しばらくは、両手で顔をおおっていたが、やがて何思ったか、炉のそばを立つと、

「やめよう、また愚痴が出て来おった。……おお月が出たな、野

へ出て、思うさま流して来ようか。そうだ、愚痴と煩惱を野へ捨てて来よう」

尺八を持って、彼は外へ出て行った。

八

妙な虚無僧である。よろよろ立ってゆく時、物蔭から又八が見ていると、その瘦せこけた鼻下びかにはうすいどじよう髭ひげが生えていたように思う。そう年を老とっているほどでもないのに、ひどくよぼよぼした足元だった。

ぷいと出て行ったきり、なかなか戻って来ないのだ。少し精神

に異常があるのだろうか、又八は不気味に思う半面にあわれな気もした。それはいいが、物騒なのは、炉に残っている火であつた。ぱちぱちと夜風がそれを煽あおっている。燃え折れた柴の火は、床を焦こがしているではないか。

「あぶねえ、あぶねえ」

又八はそこへ行つて、土瓶どびんの水をじゅつとかけた。これが野中の破れ邸やしきだからいいよなもの、飛鳥朝あすかちようや鎌倉時代の二度と地上に建てることのできない寺院などであつたらどうだろうと考へて、

「あんなのがいるから、奈良や高野にも火事があるんだ」

と彼は、虚無僧の去つたあとに自分が坐つて、がらにもない公

徳心を呼び起していた。

家産や妻子もない代りに、社会への公徳心も絶無な浮浪者には、火が怖いものという觀念も全くないらしい。だから彼らは、金こんど堂うの壁画の中ですら平然と火を燃やす。世の中に無用に生きているに過ぎない一個の空骸むくろを暖めるために火を燃やす。

「だが……浮浪人だけが悪いともいえねえな」

又八は自分も浮浪人であることを思つて考えた。今の世の中ほど浮浪人が多い社会はない。それは何が生んだかといえ、戦いくさだつた。戦によつてぐんぐん地位を占めてゆく者も多い代りに、芥あくたのように捨てられてゆく人間の数も実に夥おびただしい。これが次の文化の手枷てかせ、足枷となるのもやむを得ない自然の因果といえよう。そ

ういう浮浪の徒が、国宝の塔を焚火たきびで焼く数よりは、戦が、意識しつつ、高野や叡山えいざんや皇都の物を焼いたほうが、遥かに大きな地域であった。

「……ほ。洒落しやれたものがあるぞ」

又八はふと横を見てつぶやいた。ここの炉も床の間も、改めて見直せば、元は茶屋にでも使っていたらしい閑雅かんがな造りなのである。その小床ことこの棚に、彼の眼をひいた物がある。

高価な花瓶はないけや香炉などではない。口の欠けた徳利と、黒い鍋なべだった。鍋には食べ残した雑炊ぞうすいがまだ半分残っているし、徳利は振ってみると、ごぼつと音がして、欠けた口から酒がおおう。

「ありがたい」

こういう場合、人間の胃は、他の所有権を考えている違はない。いとま
徳利の濁り酒をのみ、鍋を空からにして、又八は、

「ああ、腹が満はつた」

ごろんと手枕になる。

トロトロと炉の火もとに眠りかける。雨のように野は虫の音に更ふけてゆく。戸外ばかりでなく、壁も啼く、天井も啼く、破れ畳も啼きすだく。

「そうだ」

何か思い出したとみえる。むくりと彼は起き直つた。懐ふところ中にある一個の包み——かの顎の半分ない武者修行から、死に際に頼まれて持って来た包みの中を——こうしている間に一度見ておこ

う。そう急に思いついたらしい。

解いてみた。——それは蘇芳染すおうぞめの汚れきつた風呂敷だった。

中から出て来たのは、洗いざらした襦袢じゆばんだの普通の旅行者の持つ用具などであったが、その着がえきをひろげてみると、いかにも大事そうに、油紙でくるんである巻紙大の物と路銀の金入れであろう、どきつと重い音が膝の前に落ちた。

九

むらさき革がわの巾着きんちやくであった。その金入れの中には、金銀取とりま交りせてだいの額が入っていた、又八は数えるだけでも自分の心

が怖くなって、思わず、

「これは他人ひとの金かねだ」

と、殊さらにつぶやいた。

もう一つの油紙に包んであるものを開いてみると、これは一軸の巻物である。軸には花梨かりんの木が用いてあり、表装には金欄きんらんのふるぎ古裂れが使ってあつて、何となく秘品の紐を解く気持をいだ抱かせられる。

「何だろ？」

全く見当のつかない品物だった。巻を下へ置いて、端の方から徐々に繰り展ひろげて見てゆくと――

印可

一 中条流太刀之法

一 表

電光、車、円流、浮きふね

一 裏

金剛、高上、無極

一 右七劍

神文之上

口伝授受之事

月 日

越前宇坂之庄浄教寺村

富田入道勢源門流

後学 鐘巻自斎

佐々木小次郎殿

とあつて、その後には別な紙片を貼り足したと思われるところに「奥書」と題して、左の一首の極意の歌が書いてあるのであつた。

掘らぬ井みに

たまらぬ水に

月映さして

影もかたちもなき

人ぞ汲む

「……ははあ、これは剣術の皆伝の目録だな」

そこまでは又八にもすぐ分つたが、鐘巻かねまき自齋じさいという人物について、何の知識もなかつた。

もつとも、その又八にでも、伊藤弥五郎景久といえはすぐ、

(アアあの一刀流を創始して、一刀齋と号している達人か)

と合点がゆくであろうが、その伊藤一刀齋の師が、鐘巻自齋という人で、またの名を外他とだみちい通家えいといい、まったく社会からは忘れられている、富田入道へんぴ勢源せいげんの正しい道統をうけついで、その晩節をどこか辺鄙な田舎に送っている高純な士であるなどということはなおさら知らない。

そういう詮せん索さくよりも、

「——佐々木小次郎殿？ ……ははアすると、この小次郎という

のが、きよう伏見のお城工事で、無残な死に方をしたあの武者修
行の名だな」

と、そこに頷うなずいて、

「強いはずだ。この目録をみても分るが、中条流の印可をうけて
いるのだもの。惜しい死に方をしたものだな。……さだめしこの
世に心残りなことだったろう。あの最期の顔は、いかにも死ぬの
が残念だという顔つきだった。——そしておれに頼むといったの
は、やはりこの品だろう。これを郷里の知る辺べへでも届けてくれ
といいたかったに違いない」

又八は、死んだ佐々木小次郎のために、口のうちに、念仏をと
なえた。そしてこの二品は、きっと死者の望むところへ届けてや

ろうと思つた。

——また、ごろりと彼は横になっていた。肌寒いので寝ながら
炬の中へ柴を投げこんで、その炎にあやされながらウトウト眠り
かけた。

ここを出て行つた奇異な虚無僧が吹いているのであろう、遠い
野面のづらから尺八の音が聞えて来る。

何を求め、何を呼ぶのか。彼が出て行く折につぶやいたように、
愚痴と煩惱を捨て切ろうとする必死がこもっているせいかも知れ
ない。——とにかくそれは物狂わしいまで夜もすがら吹いて野を
さまよっていたが、又八はもう疲れきつて、熟睡してしまつたの
で、尺八の音も虫の音も、すべて昏こんこん々々の中であつた。

狐雨

一

野は灰色に曇っている。今朝けさの涼しさは「立つ秋」を思わせ、眼に見るものすべてに露がある。

戸の吹き仆くりやされている厨くりやに、狐の足痕がまざまざ残っていた。夜が明けても、栗鼠りすはそこらにうろついている。

「アア、寒い」

虚無僧は、眼をさまして、広い台所の板敷へかしこまった。

夜明け頃、ヘトヘトになつて戻つて来ると、尺八を持ったまま、ここへ横になつて眠つてしまつた彼である。

うす汚い^{あわせ}衾^{けさ}も、夜もすがら野を歩いていたために、狐に魅^まかされた男のように草の実や露でよごれていた。きのうの残暑とは比較にならない陽気なので、風邪^{かぜ}をひき込んだのであろう、鼻のうえに皺^{しわ}をよせ、鼻腔と眉を一緒にして、大きな嚏^{くさめ}を一つ放つ。

ありやなしやの薄いどじょう髭^{ひげ}の先に、鼻汁がかかった。恬^{てん}として、虚無僧はそれを拭こうともしないのである。

「……そうじや、ゆうべの濁り酒がまだあつたはず」

つぶやいて起^たち上がり、そこも狐狸妖怪の足^{あし}痕^{あと}だらけな廊下

をとおつて、奥の炉のある部屋をさがしてゆく。

捜さなければ分らないほど、この空屋敷は昼になってみるとよけいに広いのである。もちろん、見つからないほどでもないが――

（おや？）

うろたえた眼まなこをして見廻している。あるべきところに酒の壺がないのだ。しかしそれはすぐ炉のそばに横たわっているのを発見したが、同時に、その空からの容いれもの器とともに、肱ひじまぐら枕まくらをして、涎よだれ

「誰だろ？」

及び腰に覗き込んだ。

よく眠っている男だった。撲りつけても眼を醒ましさそうもない
大おおい鼾びき声をかいているのである。酒はこいつが飲んだのだな——
と思うとその鼾声に腹が立つ。

まだ事件があつた。今朝の朝飯として食べのこしておいた鍋なべの
飯が、見れば底をあらわして一粒だにないではないか。

虚無僧は顔いろを変えた。死活の問題であつた。

「やいつ」

蹴とばすと、

「ウ……ウむ……」

又八は、ひじ肱はずを外してむつくと首をあげかけた。

「やいつ」

つづいて、もう一ツ、眼ざましに足蹴あしげを食らわすと、

「何しやがる」

寝起きの顔に、青すじを立てて、又八はぬつくと起ち上がった。
「おれを、足蹴にしたな、おれを」

「したくらいでは、腹が癒えんわい。おのれ、誰に断つて、ここにある雑炊飯ぞうすいめしのあまりと酒を食らったか」

「おぬしのか」

「わしのじゃ！」

「それやあ済まなかつた」

「済まなかつたで済もうか」

あやま
「謝る」

「謝るとだけでことは納まらん」

「じゃあ、どうしたらいいんだ」

「かやせ」

「返せ^{かえ}たって、もう腹の中に入って、おれの今日の生命^{いのち}のつなぎになつてゐるものをどうしようもねえ」

「わしとて、生きて行かねばならん者だ。一日尺八をふいて、人の門^{かど}辺に立つても、ようよう貰うところは、一^{ひと}炊^{かし}ぎの米と濁^{どぶろ}酒^くの一合^{しう}の代^{しろ}が関の山じゃ。……そ、それを無断であかの他人のおのれらに食われて堪^{たま}ろうか。かやせ！ かやせ！」

餓鬼の声である。どじよう髭^{ひげ}の虚無僧は、飢えてゐる顔に青すじを立て威^{いた}猛^{けだ}高^かに喚^{わめ}いた。

二

「さもしいことをいうな」と又八は蔑さげすんで――

「多寡たかが鍋底の雑炊飯や、一合に足らぬ濁り酒のことで、青筋を立てるほどのことはあるまいが」

虚無僧は執しつこく憤いきどおつて、

「ばかをいえ、残り飯でも、この身にとれば一日の糧かてだ、一日の生命だ。かやせつ、かやさなければ――」

「どうするって」

「うぬっ」

又八の腕くびを掴つかまえ、

「ただはおかぬっ」

「ふぎけるなっ」

振り離して、又八は、虚無僧の襟えりがみを掴み寄せた。

飢えた野良猫にひとしい虚無僧の細っこい骨ぐみだった。叩きつけて、一振りに、ぎゅうといわせてやろうとしたが、襟がみをつかまれながら、又八の喉輪ねぼへつかみかかって来た虚無僧の力には、案外な粘りがある。

「こいつ」

と、力りきみ直したが、相手の足もとは、どうして、確しつかりとしたものだ。

かえつて又八が顎をあげて、

「うツ……」

妙な声をしぼりながら、どたどたと次の部屋まで押し出され、それを食い止めようとする力を利用して、手際よく、壁へ向つて投げ捨てられた。

根太も柱も腐蝕くさっている屋敷である。一堪りもなく壁土が崩れて、又八は全身に泥をかぶつた。

「ペツ……ペツ……」

猛然と唾つばして立つと、ものをいわない代りに、凄い血相が刃物を抜いて、跳びかかってきた。虚無僧も心得たりという応対で、尺八をもって渡りあう。しかし情けないことにはすぐ息喘いきぎれが出

て来て、尖った肩でせいせいいうのだ。それに反して又八の肉体はなんといつても若かった。

「ざまを見ろツ」

圧倒的に又八は、斬りかけ斬りかけして、彼に息をつく間を与えない。虚無僧は化けて出そうな顔つきになった。体の飛躍を欠いてともすると蹴つまずきそうになる。そのたびに何ともいえないうちに死に際のさけびを放った。そのくせ八方に逃げ廻って、容易には太刀を浴びないのである。

しかし結果は、その誇りが又八の敗因となった。虚無僧が猫のように庭へ跳んだので、それを追うつもりで廊下を踏んだ途端に、雨に朽ちていた縁板がみりつと割れた。片足を床下へ突っこんで、

又八が尻もちをついたのを見ると、得たりと刎ね返して来た虚無僧が、

「うぬ、うぬ、うぬっ」

胸ぐらを取つて、顔といわず鬢びんたといわず、撲なぐりつけた。

脚がきかないので又八はどうにもならなかつた。自分の顔が見るまに四斗樽のように腫はれたかと思う。——すると、もがき争つている懐ふところ中から、金銀の小粒がこぼれた。撲られるたびに美いい音がして、貨幣はそこらに散らかつた。

「——やつ？」

虚無僧は、手を放した。

又八もやつと彼の手をのがれて跳とび退のいた。

自分の拳こぶしが痛くなるほど、憤怒を出しきった虚無僧は、肩で息をしながら、あたりにこぼれた金銀に眼を奪われていた。

「やいつ、畜生め」

腫はれ上がった横顔を抑えながら又八は、声をふるわせてこういつた。

「な、なんだつ、鍋底のあまり飯くらいが！ 一合ばかりの濁どぶろ酒くが！ こう見えても、金などは腐るほど持っているんだ。餓鬼め、ガツガツするな。それほどほしけれやあ、くれてやるから持つてゆけつ。その代り、今てめえが俺を撲つただけ、こんどは俺が撲るからそう思えつ。——さつ、冷飯ひやめしと濁酒代どぶろくだいに利子をつけて返すから、頭を出せつ、頭をここへ持つて来いつ」

三

又八はなんと罵ののしつても、相手の虚無僧がそれきりぐうの音も出さないので、彼もようよう気を鎮しずめて見直すとどうしたことか、虚無僧は縁板に顔を沈めて泣いている――

「こん畜生、金を見たら急に哀れっばいふうを見せやがって」と、又八は毒づいたが、そうまで、恥かしめられても、虚無僧はもう先の勢いはどこへやら、

「あさましい。アア、あさましい。どうしておれはこう馬鹿なのか」

もう又八へ対していつているのではない、ひとりで悶え悲しんでいるのだ。その自省心の烈しいことも、常人とは変つていて、「この馬鹿、貴さまは一体、幾歳になるのか。こんなにまで、世の中から落伍して、落魄れ果てた目をみながら、まだ醒めないのか、性なしめ」

そばの黒い柱へ向つて、自分の頭をごつんごつん打つては泣き、打つけては泣き、

「何のために、おのれ汝は尺八をふいているか。愚痴、邪慾、迷妄、我執、煩惱のすべてを六孔から吐き捨てるためではないか。——それを何事だ、冷飯と酒のあまりで、生命がけの喧嘩をするとは。しかも息子のような年下の若者と」

ふしぎな男だ。そういつて口惜しげにベソを搔くかと思うと、また、自分の頭を、柱に向つて叩きつけ、その頭が二つに割れてしまわないうちは止めやそうもないのである。

その自責からする折せつ檻かんは、又八を撲つた数よりも遙かに多い。又八は呆あつけにとられていたが、青ぶくれになつた虚無僧の額から血がにじみ出て来たので、止よめずにいられなくなつた。

「ま、ま、止よしたらどうだ、そんな無茶な真似」

「措おいて下され」

「どうしたんだい」

「どうもせぬ」

「病気か」

「病氣じゃござらぬ」

「じゃあなんだ」

「この身が忌々しいだけじゃ。かような肉体は、自分で打ち殺して、鴉に喰わせてやったほうがましじゃが、この愚鈍のままからすで殺すのも忌々しい。せめて人なみに性しょうを得てから、野末に捨ててやろうと思うが、自分で自分がどうにもならぬので焦じれるのじゃ。……病氣といわれれば病氣かのう」

又八は、何か急に氣の毒になって来て、そこらに落ちている金を拾いあつめて、幾らかを彼の手に握らせながら、

「おれも悪かった、これをやろう。これで勘弁してくれ」

「いらん」手を引っこめて、

「金など、いらん、いらん」

鍋の残り飯でさえ、あんなに怒った虚無僧が、けがらわしい物でも見るように、強く首を振って、膝まで後へ退^さがってゆく。

「変な人だな、おめえは」

「さほどもござらぬ」

「いや、どうしても、少しおかしいところがあるぜ」

「どうなとしておかれい」

「虚無僧、おぬしには、時々、中国訛^{なま}りが交^まじるな」

「姫路じゃもの」

「ほ……。おれは美^{みまさか}作^かだが」

「作州？ ——」と、眼をすえて、

「してまた、作州はどこか」

「吉野郷」
よしのごう

「えっ。……吉野郷とはなつかしいぞ。わしは、日名倉の番所に、目付役をして詰めていたことがあるで、あの辺のことは相当に知つておるが」

「じゃあ、おぬしは、元姫路藩のお侍か」

「そうじゃ、これでも以前は、武家の端はしくれ、青木……」

名乗りかけたが、今の自分を省かえりみて、人前に身を置いているに耐えなくなつたか、

「嘘だ、今のは、嘘じゃよ。どれ……町へながしに行こうか」
ぷいと立って、野へ歩み去つた。

幻術めくらまし

一

——金が気になる。費つかつてならない金だと思うにつけて気になるのだ。たんとは悪いが、少しぐらいは、この中から借りて費つかつたところで罪悪にはなるまいと遂には思う。

「死者の頼みで、その遺物かたみを、郷里へ届けてやるにしても、路銀というものが要いる。当然、その費用は、この内から費つかつたとて関かまうまい」

又八はそう考えてから、幾分気が軽くなった。——気が軽くなつた時には、もう幾分ずつ、小出しにそれを費い始めていた時なのである。

だが、金のほかに死者から預かっている「中条流印可目録」の巻物のうちにある佐々木小次郎とは、一体どこがしようごく生国だろうか。

多分——あの死んだ武者修行がその佐々木小次郎にちがいないとは思ふが、牢人か、しゅもち主持か、またどういふ経歴の者であるかは、さっぱり分らないし、分ろうとする手がかりもない。

唯一の頼りは、佐々木小次郎に対して、印可目録を授けているかねまきじさい鐘巻自齋という剣術の師匠だ。その自齋がわかれば、小次郎の

素姓もすぐ知れよう。それについて、又八も伏見から大坂へ下つて来る道々、茶店、飯屋、旅籠はたごと折のあるごとに、

「鐘巻自斎という剣術のすぐれた人がいるかね」
訊たずねてみたが、

「聞いたこともないお人ですなあ」

と、誰もいう。

「富田勢源せいげんの流儀をひいている中条流の大家だが」

と、いつてみても、

「はてね？」

まったく知る者がないのである。

——すると、路傍で会った或る侍が、多少、兵法にも心得があ

る様子で、

「その鐘巻自斎とかいう仁じんは、生きていても、もう非常な老齡のはずだ。たしか、関東に出て、晩年は上州のどこか山里にかくれたきり、世間へ出なかつたように聞いておる。——その人の消息を知りたければ、大坂城へ参つて、富田主水もんどのしよう正しょうという人物をたずねてみるとよい」

と、教えてくれた。

富田主水正とは何かと訊くと、秀頼公の兵法師範役のうちの一人で、たしか、越前宇坂うさかのしょう之庄のしょうの浄教寺村から出た富田入道勢源の一族の者だつたと思うがという話。

すこし、あいまいな気もしたが、とにかく大坂へ出るつもりだ

し、又八は、市街へ入るとすぐ、目抜き町の旅籠はたごへ泊つて、そんな侍が御城内にいるか否かを訊いてみると、

「はい、富田勢源様のお孫とかで、秀頼公のお師範ではありませんが、御城内の衆に兵法を教えていたお方はございましたが、それはもう古い話で、数年前に越前の国へお帰りになつております」
これは、宿の者のいうところだった。町人とはいえ、城内の用勤めもしている家の者のいうことであるから、前の侍のことばかりはよほど真実味のある話だった。

宿の者の意見ではまた、

「——越前の国まで、尋ねておいで遊ばしても、主水もんだのしょう正様が、今も果たしてそこにいるかどうかも分りませんから、そんな頼り

のない方を遠国までたずねてゆくよりは、近頃、有名でいらつしやる、伊藤弥五郎先生をおさがしになるのが近道でございませう。あの方もたしか、中条流の鐘巻自齋という人のところで修行なされて、後に、一刀流という独自の流儀をお創めはじになつたのですから」

それも一理ある忠告であつた。

だが、その弥五郎一刀齋の居所をさがしてみると、これも近年まで洛外の白河に、一庵をむすんでいたが、近頃はまた、修行に出たのか、杳ようとしてその影を京大坂の附近では見かけたことがないと誰もいう。

「ええ、面倒くせえ」

又八は、匙さじを投げた。——そう急ぐにも当たらないことをと、独り語ごにつぶやいて。

二

眠っていた野心的な若さを、又八は、大坂へ来てからたたき起された。

ここではさかんに、人物を需要しているのだった。

伏見城では、新政策や武家制度を組んでいるが、この大坂城では、人材を糾きゆうごう合して、牢人軍を組織しているらしかった。もとよりそれは、公然ではないが。

「後藤又兵衛様や、真田幸村様や、明石掃部様や——また長曾我部盛親様などへも、秀頼公から、そつと、生活のお手当というものが、届いているのだそうな」

町人たちの間でも、もつぱらそういう噂をしている。——で、どこの城下よりも牢人が尊ばれ、牢人の住みよいのが、今では大坂の城下だった。

長曾我部盛親などは、町端れをつまらない小路に借家して、若いのに頭をまるめ、一夢斎と名をかえて、

(浮世のことなど、わしや知らんよ)

といった顔つきして、風雅と遊里の両方に身をやつして暮しているが、その手から、いざという場合には、猛然と起つて、

(太閤御恩顧のため)

という旗じるしの下もとに集まろうという牢人が、七百や八百は飼つてあつて、その生活費も、秀頼のお手元金から出ているのだということも聞いた。

又八は、ふたつき二月ほど、大坂を見聞しているうちに、

(ここだ。出世のつるをつかむ土地は)

と、まず興奮を抱いた。

空脛からすねに、槍一本かつぎ出して、宮本村の武蔵たけぞうと、関ヶ原の

空をのぞんで飛び出した時のような壮志が、久しぶりに、近頃、健康になつた彼の体にも、甦よみがえつて来たらしいのである。

ふところの金は、ぼつぼつ減つてゆくが、何かしら、

(おれにも運が向いてきた)

という自覚がして来て、毎日が明るくて、愉快だった。石に蹴つまずいても、そんな足あしもと下から、不意にいい運の芽が見つかり、
そうなる気がするのである。

(まず、身装みなりだ)

彼はいい大小を買って差した。もう寒さにかかる晩秋なので、
それにうつりのよい小袖と羽織も買った。

旅籠はたごは、不経済と考えて、順慶堀に近い馬具師の家の離れを借り、
食事は外でし、見たいものを見、家へは帰ったり帰らなかつたり、
好みどおりな生活をしている間に、よい知己を得、手づるを見つけ、
扶持ふちの口にありつこうと心がけていた。

この程度に、生活を持^じしていることは、彼としては、かなり自戒を保つて、生れ変つたほど、身を修めているつもりなのである。(あれへ大槍を立たせ、乗換え馬を牽^ひかせ、供の侍を、二十人も連れて通りなさる。——今では大坂城の京橋口に御番頭^{ごばんがしら}として詰めてござるが、順慶堀の川ざらいには、土をかついでござつた牢人衆であつたに)

そんなうらやましい噂を、町ではよく聞くが、さて、又八がだんだんに見るところでは、

(世の中というやつは、まるで石垣だ、きつちりと、使われる石は組んであつて、後から入る隙^{すき}はねえものだ)

すこし疲れて来たが、また、

(なあに、蔓^{つる}の見つからねえうちが、そう見えるんだ、うまく、割り込むまでが、むずかしいが、何かへ取ツついてしまえば)

と思ひ直して、間借している馬具師のおやじへも、就職^{くち}をたのんでおいた。

「旦那がたあ、お若いし、腕もおできなさるじやろうし、御城内の衆へ頼んでおけば、すぐお抱えの口はありましようで」

ありそうな口^{くちぶり}吻^{ぶり}で、その馬具師も安うけあいしたが、就職^{くち}はなかなかかかって来ない。——そのうちに冬も十二月、ふところの金も半分になつていた。

繁華な町なかの空地の草にも、朝々霜が真つ白におりる。その霜が消えて、道のぬかるむ頃から、銅鑼どらだの、太鼓だのが、そこでは鳴り出す。

師走しわすの忙せわしない人々が、案外のん気な顔して、冬日の下にいっぱいぱいに群れていた。いとも粗雑な矢来を囲つて、外からは見えなようにそれへ筵むしろを張り廻してある人寄せの見世物が、六、七カ所に紙旗や毛槍を立て、その閑人ひまじんの群れへ呼びかけて、客を奪い合う様はなかなか真剣な生活戦だった。

安醬油のにおいが人混みのあいだを這う。串くしにさした煮物をくわえて、馬みたいになんないている毛脛けずねの男たちがあるし、夜は、

白粉を塗りこくって袖をひく女たちが、解放された牝羊みたいに、ぼりぼり豆を食べながら繋がって歩いてゆく。野天へ腰かけを出して、酒を汲んで売っている所では、今、一組の撲りあいがあった、どっちが勝ったのか負けたのか、後へ血をこぼしたまま、その喧嘩のつむじ風は、わらわらと町の方へ駈け去ってしまった。

「ありがとうございます。どんな様が、ここにござったで、器物は壊されずにすみませうだ」

酒売りは、何度も、又八の前へきて、礼をくり返した。

その礼どころが、

「こんどのお爛は、あんばいよくついたつもりで」

頼まない肴物まで添えてくる。

又八は悪い気持でなかった。町人どうしの喧嘩なので、もしこの貧しい露店の物売りに損害をかけたら取ツちめてやろうと睨みつけていたが、何の事もなくすんで、露店のおやじのためにも、自分のためにも、同慶であつたと思う。

「おやじ、よく人が出るな」

「師走なので、人は出ても、人足は止まりませぬでなあ」

「天気がつづくからいい」

鳶とびが一羽、人混みの中から、何か啜くわえて高く上がってゆく。――又八は赤くなっていた、そしてふと、（そうだ、おれは石曳きする時に酒は禁やめると誓ったのだが、いつから飲み始めてしまつたろう）

他人事ひとごとのように考えた。

そして自ら、

(まあいい、人間、酒ぐらい飲まねえでは)

と、慰めたり、理由づけたりして、

「おやじ、もう一杯」

と、うしろへいった。

それと一緒に、ずっとそばの床しょうぎ几へ来て、腰かけた男がある。

牢人だなどすぐ見てとれる恰好だった。大小だけは人をして避け

しめるほど威嚇的な長ながもの刀であるが、襟えりあか垢のついた袷あわせに上へ一

重とえの胴無しも羽織っていない。

「オイオイ亭主、おれにも早いところ一合、熱くだぞ」

腰かけへ、片あぐらを乗せて、じろりと又八のほうを見た。足もとから見上げて、顔のところまで眼がくると、

「やあ」

と、何の事もなく笑う。

又八も、

「やあ」

と、同じことをいって、

「爛かんのつく間、どうですか一献こん。飲みかけで失礼だが」

「これは——」

すぐ手を出して、

「酒のみという奴、いやしいもので、実は、尊台が、ここで一杯

やっているのを見かけると、どうにも、こう……ぷウんと鼻を襲
つてくる香においが堪たもとらん、袂たもとをひいてな」
いかにも美味うまそうに飲む男だ。磊らい落らくで、豪傑肌らしいと、又
八はその飲み振りを見ていた。

四

よく飲む。

又八がそれから一合もやるうちに、この男はもう五合を越えて、
まだ慥しつかりしたものだつた。

「どのくらい？」

と訊くと、

「ちよつと一升、落ちついてなら、まあ、量がいえぬ」と、いう。

時局を談じると、この男は、肩の肉をもりあげた。

「家康がなんだ。秀頼公をさしおいて、大御所などと、ばからしい。あのおやじから本多正純まさずみや、帷幕いばくの旧臣をひいたら、何が残る。狡こうかい獯かいと、冷血と、それと多少の政治的な——武人が持たぬ才を少し持っているというに過ぎない。石田三成には勝たせたかったが、惜しいかな、あの男、諸侯を操縦すべく、あまりに潔癖で、また身分が足らなかつた」

そんなことをいうかと思うと、

「貴公、たとえば、今にも関東、上方の手切れとなつた場合は、
どの手につく」

と、訊く。

又八が、ためらいなく、

「大坂方へ」

と答えると、

「ようつ」とばかり、杯を持って床しょうぎ几こから立ち上がり、

「わが党の士か、あらためて一盞さんげん献じ申そう。して、貴君はいず
れの藩士」

といつて、

「いや、ゆるされい。まず自身から名乗る。それがしは、蒲生浪がもう

人の赤壁八十馬、あかかべやそま という者。ごぞんじないか、塙団右衛門、ぼんだんえもん あれとは、ふんけい 刎頸の友で、共に他日を期している仲。また今、大坂城での鏝そうそう々たる一方の将、薄田隼人兼相すすきはやくかねすけとは、あの男が、漂泊時代に、共に、諸国をあるいたこともある。大野修理亮しゆりのすけとも、三、四度会つたことがあるが、あれはすこし陰性でいかん。兼相よりは、ずっと勢力はあるが」

喋りすぎたのを気がついたように、後へもどつて、

「ところで、貴公は」

と、訊き直す。

又八は、この男の話を、全部がほんとは信じなかつたが、それでも、何か圧倒されたような怯ひけ目めを感じ、自分も、法螺ほらをふ

き返してやろうと思った。

「越前宇坂之庄浄教寺村の、富田流の開祖、富田入道勢源先生せいげんをござんじか」

「名だけは聞いておる」

「その道統をうけ、中条流の一流をひらかれた無慾無私の大隠、鐘巻自斎といわるる人は、私の恩師でござる」

男は、そう聞いても、かくべつ驚きもしないのだ。杯を向けて、
「じゃあ、貴公は、劍術を」

「左様」

又八は、嘘がすらすら出るのが愉快だった。

大胆に嘘をいうと、よけいに酔いが顔に咲いて、酒のさかなに

なる気がするのである。

「——多分、実はさつきから、そうじゃないかと、拙者も見ておつたので。やはり鍛えた体はちがうとみえ、どこか出来ているな、……して、鐘巻自齋の御門下で、何と仰せられるか。さしつかえなくば、ご姓名を」

「佐々木小次郎という者で、伊藤弥五郎一刀齋は、私の兄弟子です」

「えっ」

と、相手の男が驚いたらしい声を発したので、又八のほうこそびつくりしてしまった。あわてて、

(それは冗じょうだん戯)

と、取消そうと思つたが、赤壁八十馬やそまは、とたんに地へ膝をついて頭を下げているので、今さらもう冗戯ともいえなかつた。

五

「お見それ申して」

と、八十馬は何度もあやまる。

「佐々木小次郎殿といえは、とくより耳にしておるその道の達人、知らないというものは、他愛のないもので、先刻からの失礼は、
平ひらに」

又八は、ほつとした。佐々木小次郎をよく知っている者か、面

識でもある間からでもあれば、たちまち嘘がばれて、脂あぶらをしばらく
れるところであつたがと——

「いや、お手を上げて下さい。そう改まられては、私こそ、ご挨拶のしようがない」

「いや、先ほどから、広言のみ吐いてさぞお聞き苦しかったこと
で」

「なに、私こそ、まだ仕官もせず、世間も知らぬ若輩者で」

「でも、剣においては。——いやよくお名まえは彼方あちら此方こちらで聞き
ますぞ。……そうだ、やはり佐々木小次郎」

つぶやいて、八十馬は、酔うと目やにの出る性しょうらしい眼を、ど
ろんと据え、

「その上で、まだご仕官もなさらぬのか、惜しいものだ」

「ただ劍一方に、すべてを打ち込んで来たので、世間にはほとんど何の知己もないために」

「や、なるほど。——ではまんざら仕官のお望みがないわけでもないのです」

「もとより。いずれは、主人を持たねばならぬと考えていますが」
「ならば、造作もないこと。——実力があるのだからたしかなものだ。もつとも実力があつても、黙つていては容易に見出されるはずはない。こうお目にかかつて、それがしですら、尊名を聞いて初めて驚いたようなもので」

と、さかんに焚たきつけて、

「お世話しよう」

と、いい出した。

「実はそれがしも、友人の薄田すすきだかねすけ兼相に身の振り方を依頼してあるところ。大坂城では、禄を問わず、抱え入れようとしている折だし、貴公のような人物を推挙すれば、薄田うづじ氏も、すぐ買おう。おまかせ下さるまいか」

どうやら赤壁やそま八十馬は乗り気になつていらしい。又八は、その就職くちへありつきたいことは山々だが、佐々木小次郎であると他人の名を借用してしまったことが、どうもまずい。引っこみにつかない不出来だ。

かりに美みまさか作の郷土本位田又八と名乗つて実際の履歴を話した

ら、この男も乗り気にはなるまい。鼻さきで軽蔑を与えられるぐ
らいなところが落ちである。やはり佐々木小次郎の名がものをい
つたのだ。

——待てよ、と又八は胸のうちで考える。何もそう心配したほ
どのものじゃないと思う。なぜならば、佐々木小次郎なる者も
う死んでいる人間だ。伏見城の工事場で打ち殺されてしまった人
物ではないか。——しかもそれが佐々木小次郎なりとは、おそら
く、おれ以外の何者も知っていない。

死者の所持していた唯一の戸籍証明である「印可目録」は自分
が彼の臨終いまわの一言によつて預かつて来ているので、後で、調べの
つこうわけではない。また一箇の乱暴人として、打殺した死者に対

して、そんな面倒な調べをいつまでもやっているはずもない。

(分りっこはない！)

又八の頭に大胆な、狡い考えがそう閃めいた。勃然として、彼は、死んだ佐々木小次郎になり切つてやろうと臍を決めた。

「おやじ、勘定」

金入れから金を出して、そこを起ちかけると、赤壁八十馬はあわてて、

「今の話は？」

と、一緒に立った。

「ぜひ、ご尽力をねがいたいが、この路傍では、十分な話もできぬ。どこか座敷のあるところへでも行つて」

「ああそうか」

と、八十馬は満足そうにうなずいて、自分の飲んだ代まで、又八が払っているのを、当り前のような顔して眺めていた。

六

怪しげな白粉おしろいの裏町である。又八としては、もつと高等な酒樓へ案内するつもりだったが、赤壁八十馬が、
「そんなところへ揚がつて、つまらぬ金を費つかうよりは、もつとおもしろい土地がある」

といって、頻りに裏町遊びを謳歌するので、ともかく引つ張ら

れて来てみると、まんざら又八の肌に合わない情調ではない。

びくによこちよう
比丘尼横丁 というのだそうである。大袈裟おおげさにいえば長屋千軒

がみな売笑婦の家で、一夜に百石の油を燈心にともすともいえるほどな繁昌さである。

すぐ近くに、汐しおのさす黒い堀が通っているので、出格子だの、

紅燈の下だのには、よく見ると、船虫や河蟹かわがにがぞろぞろ這つて

いて、それが生命いのち取りのさそりという妖虫のようにうすきみ悪い

が、無数の白粉の女の中には眉目みめ美しいのも稀にあつて、中には、

もう四十にちかい容貌かたちに、鉄漿かねを黒々つけ、比丘尼頭巾びくにずきんにくるま

つて、夜寒を啣かこち顔でいるなど、なかなかものあわれも蕩児とうじの

心をそそのるのであつた。

「いるな」

又八が、ため息つくと、

「いるだろう、へたな茶屋女や歌妓などより、遙かにました。——売女というと、いやな気がするが、冬の一夜をここに明かして、その前身なり、氏素姓なりを、寝ものがたりに聞いてみると、みな、生れた時からの売女ではないて」

肩と肩のすれ合つてゆく往来中を、八十馬は、得意になつて、弁じていた。

「室町將軍の奥につかえていたという比丘尼びくにがあるし、父は武田の臣だったの、松永久秀の縁類の者だのという女が、この中にはずいぶんある。——平家の没落した後もそうだったが、天文、永

禄からこつちは、あの時代などから見るともつと激しい盛衰がくり返されたのだから、浮世の下水には、こんなふうあくたに落花の芥が溜るのだらうな」

それから一軒の家へ上がって、八十馬に遊びの仕方をまかせると、これはこの道での豪の者とみえ、酒のあつらえ方、女たちのあつかいよう、そつがなくて、なるほど、この裏町はおもしろい。泊ったことはもちろんである。昼間になつても、飽いたといわない八十馬だった、お甲の「よもぎの寮」では、いつも日蔭者でいた又八も、多年の鬱憤をここに晴らしたか、

「もう、もう。酒はいやだ」

と遂にかぶとを脱いで、

「帰ろう」

いい出すと、

「晩までつきあい給え」

と、八十馬はうごかない。

「晩までつきあつたらどうするんだ」

「今夜、薄田兼相すすきだかねすけのやしきへ行つて兼相と会う約束がしてあ

るんだ。今から出ても時刻ときが半端だし……。それに、そうだ、貴

公の望みももつとよく聞いて置かなければ、先へ行つて話もでき

ない」

「禄ろくなど、初めからそう望んでも無理だろう」

「いかん、自分からそんな安目を売つてはいかん。とにかく中条

流の印可を持って、佐々木小次郎ともいわれる侍が、禄はいくらでもいいから、ただ仕官がしたいなどといったら、かえって先から蔑さげすまれるぞ。——五百石もくれとっておこうか、自信のある侍ほど手当や待遇なども大きく出るのが通例だからな、やせ我慢などせぬがいいのだ」

七

谷間の壁を見上げるように、この辺はもう早い日蔭になっている。大坂城の巨大な影が夕空をおおっているからである。

「あれが、薄すすきだ田の邸だぞ」

濠ほりの水に背を向けて、二人は寒そうに佇たたずんだ。昼間から注つぎこんでいた酒も、この濠端に立つとひとたまりもなく吹き飛んで、鼻の先に水みず洩ばなが凍りつく。

「あの腕木門か」

「いや、その隣の角屋敷」

「ふム……宏壮なものだな」

「出世したもののさ。三十歳前後の頃には、まだ、薄田兼相かねすけなどといつても、世間で知っている奴はなかった、それがいつのまにか……」

赤壁八十馬のことばを、又八はそら耳で聞いていた。疑っているのではない、もう彼のことばの端など注意してみらるる必要を感じ

ないほど信頼し切っていたのだった。——そしてこの巨城を取巻いている大小名の門をながめて、

「おれも」

と、鬱勃^{うつぼつ}としてくるものを彼も抑えきれない青年だつた。

「じゃあ、今夜ひとつ、兼相に会つて、うまく貴公の体を売りこんでみせるからな」

八十馬は、そういつて、

「——ところで、例の金だが」

と、催促した。

「そう、そう」

又八は懐中^{ふところ}から、革巾着^{かわぎんちやく}を取り出した。少しくらいは、

と思ひながらいつのまにかこの革巾着の金も三分の一になつて
た。その残りの底をはたいて、

「ぎつと、これだけあるが、これくらいなおくりものでいいのか」
「いいとも、十分だ」

「何かに包んでゆかなければいけないが」

「なあに、仕官の取^{とり}做^なしを頼む時の、御^ご推^す拳^き料^{りょう}だの、御献金
だのというやつは、薄田ばかりじゃない、公然と誰でも取つてい
ることだから、何も憚^{はば}つて差し出す必要はすこしもないのだ。――
――じゃあ預かつておくれ」

持ち金のほとんどあらましを、彼に手渡してしまふと、又八は
やや不安をよび起して、歩み出した八十馬に追いつき、

「うまく頼むぞ」

「大丈夫だ。先で、渋った顔をしていたら、金をやらずに持つて帰るだけのことじゃないか。何も、兼かねすけ相だけが、大坂方の勢力家じゃなし、大野でも後藤でも、頼みこむ思案はいくらもある」

「返辞は、いつ分るか」

「そうだな、ここで、待っていてくれてもいいが、濠ばたの吹きさらしに、立っているわけにもゆくまいし、また、怪しまれるから、明日あす会おう」

「明日——どこで」

「人寄せの懸っているれいの空地へ行ってくれ」

「承知した」

「貴公と初めて会った、あの酒売りのおやじの床しょうぎ几で、待つていてくれれば間違いない」

時刻も打合せて、赤壁八十馬は、その門内へ、大手を振って入って行つた。肩を振って、堂々と通つてゆく態度を見とどけて、（あれなら、なるほど、薄田兼相とは、貧困時代からの旧友だろ
う）

又八は、安心に似た気もちを抱いて、その晩は、さまざまな夢に耽ふけり、あくる日を待ちかねて、定め of 時刻に、人寄せ場の空地へ、霜解けをふんで行つた。

きょうも師走の風が寒かったが、冬日の下にはたくさん集まつていた。

八

どうしたのか、赤壁八十馬は、その日、姿を見せなかつた。

次の日。

「何かの都合だろう」

又八は、こう善意に解釈して、れいの野天の酒売りの床しょうぎ几で、
「きょうは」

と、正直に空地の人混みを見廻していたが、その日も遂に八十馬の姿を見ずに暮れてしまった。

少し、てれて、

「おやじ、また来たぞ」

三日目である。こういつて、床几に腰をすえると、酒売りのおやじが、毎日の彼の挙動をひそかに怪しんでいたとみえ、一、誰を待つのかと訊ねるので、実は云々しかじかな仔細で、いつぞやここで知己になった赤壁という牢人と落合う約束になっているのだが——と語ると、

「え？ あの男に」

おやじは呆れたような口吻くちぶりで、

「では、仕官の口を周旋してやるからといって、あいつ奴めに、金を取られたので」

「取られたわけではない。わしから依頼して、薄田殿へわたす口

入れ金を預けておいたのだが、その返辞がはやく知りたいので、毎日待っているわけだが」

「おやおや、おまえ様は」

おやじは、気の毒そうに、又八の顔をながめて、

「百年待っていても、あの男が来るはずはありません」

「げっ。——ど、どうして」

「彼奴あいつは、名うてな悪で、この空地には、ああいうガチャばえ蠅ばえがたくさんおりましたな、少し甘い顔と見れば、すぐたかつて来るのでございます。よほど、気をつけてあげようかと思つたが、あとの崇たりが恐いし、おまえ様も、あの風態を見れば、気がつくだろうと思つていたのに、金を抜かれてしまうなんて……。これやお

話にならんわい」

気の毒を通り越して、又八の無智をむしろ慙れむような口吻くちぶりなのである。だが又八は、恥を搔いたとは思わない。突然の損失と希望から抛り出された傷手いたでに、身がふるえ、血が憤いきどおつて、茫然と、空地の人群れを見つめていた。

「むだとは思うが、念のため幻術めくらましの囲いへ行つて訊いてみなさるがよい。あそこではよく、ガチャ蠅が集まって、銭の賭事かけごとをしておりますで、そういう金をつかめば、ことによると、賭あそび場ばへ顔を出しているかもわかりませぬ」

「そ、そうか」

又八は、あわてて床几を起ち、

「その幻術めくらましの人寄せというのは、どこの囲いか」

老爺おやしの指さすほうを見ると、この空地のうちでは最も大きな矢

来が一つ見える。幻術者げんじゅつしやの群れが興行しているのだという。

見物は、木戸口に蝟集いしゆうしていた。又八が近づいて行ってみると、

「ちよちよんがちよつ平ぺい」

だとか、

「変兵童子へんびやうどうじ」

とか、

「果心居士かしんこじの一弟子でし」

とかいう有名な幻術師の名が、木戸口の旗に記してあつて、幕まと筵むしろでかこんであるその広い矢来のうちでは、怪しげな音楽に交

じつて、術者の掛声と、見物の拍手が湧いていた。

九

裏へ廻ると見物の出入りしないべつな口があつた。又八が、そこを覗くと、

「賭場とばへゆくのか」

と、立番の男がいう。

うなずくと、よしというような顔をしたので、彼は入つて行つた。幕の中では、青天井をいただいて、二十人ばかりの浮浪人が、車座になつて、博ばくち戯ちをしている。

又八が立つと、じろつと、すべての白い眼が彼を見上げた。一人がだまって、彼の前に席を開けたので、あわてて、

「この中に、赤壁八十馬つて男はいないか」

訊くと、

「赤馬か。そういえば赤馬の奴、ちつとも出て来ねえが、どうしたんだろう」

「ここへ来ましようか」

「そんなこと、わかるもんか。まあ、入りねえ」

「いや、おれは博あそびごと戯事ごとに来たんじやない。その男を捜しに来た

のだ」

「おい、ふざけるなよ、博ばくち戯ちもせず、賭場へ何しに来やがった

んだ」

「すみません」

「向う脛すねを搔かつ払はらうぞ」

「すみません」

ほうほうのていで出て来ると、追いかけて来たガチャ蠅ばえの一人が、

「野郎待て。ここは、すみませんで済む場所たあ違う。ふてえ奴だ。博ぼくち戯ちをしなけれやあ、場代をおいてゆけ」

「金などない」

「金もねえくせに、賭場のぞきをしやがって、さては、隙があつたら、銭を攫さらつて行こうという量見だったにちげえねえ、この盗ぬす

つ人め」

「なんだと」

又八が、くわつとして刀の柄つかを示すと、これは面白いと、相手は敢て喧嘩を買つてくる腰だった。

「べら棒め、そんな脅おどしに、いちいちびくついていちや、この大坂表で、生きちやあいられねえんだ。さ、斬るなら斬ってみろ」

「き！ 斬るぞ」

「斬れつ、何も、断るにや及ばねえや」

「おれを知らんか」

「知ってるもんか」

「越前宇坂之庄、浄教寺村の流祖、富田五郎左衛門が歿後の門人

佐々木小次郎とはわしのことだ」

そういつたら逃げるだろうと思いのほか、相手は、ふき出して、又八のほうへ尻を向け、矢来のうちのガチャ蠅ばえを呼び立てた。

「やい、みんな来い、こいつ何とか今、オツな名乗りをあげやがったぜ。おれたちを相手に抜く気らしい。ひとつお腕てのうちを見物しようじゃねえか」

いい終ると、きやツと、その男は尻を斬られて跳び上がった。又八が、不意に抜き打ちをくれたのである。

「畜生っ」

という声。それから、わつと大勢の声がうしろに聞えた。又八は血刀をさげて人混みの中へまぎれ込んだ。

なるべく人間の多いところへと又八は姿をかくして歩いてしたが、危険を感じるほど、どの人間の顔もガチャ蠅に見え、とてもうろついておられなくなつた。

ふと見ると、眼のまへの矢来に、大きな虎の絵を描いた幕が垂れていて、木戸には、鎌槍と、蛇の目の紋と旗じるしが立ててあり、空箱に乗っている町人が、しゃがれ声をふりしぼつて、

「虎だ、虎だつ、千里行つて、千里帰る、これは朝鮮渡りの大虎、加藤清正公が手捕りの虎——」

というような人寄せ文句を、ふしづけて呶鳴っていた。

銭を抛^{ほう}つて、又八は中へとびこんだ。そして、いささかほつとしながらどこに虎がいるのかと見廻してみると、正面に戸板を二、

三枚並べ、それへ洗濯物でも貼りつけてあるように、一枚の虎の皮が貼りつけてあつた。

十

死んだ虎を見せられても、見物は、神妙に眺め入つて、これは生きていないじゃないかと、腹を立てる者はなかつた。

「これが虎かいな」

「大きなものやなあ」

感心して、入口から出口の木戸へ入れ代つてゆく。

又八は、なるべく刻ときを過すごそうと考かんがえていつまでも虎の皮の前

に立っていた。——すると、ふと自分の顔の前に、たびよそお旅装いの

老夫婦が立つて、

「権ごん叔父よ。この虎は、死んでいるのじやろうが」

と、婆のほうがいう。

じじやむらい

爺じじやむらい侍は、竹の仕切り越しに手をのばして、虎の毛に触れながら、

「元より、皮じやもの、死んでおるわさ」

「木戸で呼ばわっている男は、さも生きていようようにいうたがの」

「これも、幻めくらまし術の一つじやろて」

爺侍は苦笑していたが、婆のほうは、忌いまいま々しげに、萎しぼんでい

る唇を振り向けて、

「やくたいもない、幻術なら幻術と看板にあげておいたがよい。死んだ虎を見るくらいなら絵を見るわさ。木戸へ去いんで、銭をかやせというて来う」

「婆、婆。人が笑うぞよ、そんなこと、喚わめかんでもええ」

「なんの、見栄みえがいろう、おぬしいうが嫌ならわしがいう」

見物の者を押し分けて、戻りかかると、あつ——とその人混みの中に肩を沈めた者がある。

権叔父と呼ばれた爺侍が、

「やつ、又八つ」

と、呶鳴った。

お杉隠居は、眼がわるいので、

「な、なんじや、権叔父」

「見えなんだかよ、婆のすぐうしろに、又八めが立っておったぞ」
「げっ、ほんまか」

「逃げたっ」

「どつちやへ？」

二人は、木戸の外へ転び出した。

もう空地の雑沓ざつとうは暮色につつまれていた。又八は、幾たびも人にぶつかった。そのたびに、くるくる舞まいして、後も見ずに、町中のほうへ逃げてゆく。

「待て、待て、せがれ倅っ」

振りかえってみると、母親のお杉は、まるで狂気のようになっ

て追つて来るのだった。

権叔父も、手をふりあげ、

「馬鹿ようつ、なんで逃げるぞい。——又八つ、又八つ」

それでもなお、又八が足を止めないので、お杉隠居は、
しわくび皺首
 を前に伸ばし、

「泥棒、泥棒、泥棒つ——」

夢中でさげんだ。

のれんぼう暖簾棒だの竹竿を持って、町の者は、先へゆく又八をこうもり蝙蝠

を打つようにたたき伏せた。

往来の者も、わいわいと取りかこんで、

「捕まえた」

「ふてえ奴だ」

「どやせ」

「たたつ殺してやれ」

足が出る、手が出る、唾つばを吐きかける。

後から息を喘きつて、権叔父とともに追いついて来たお杉隠居はそのていを見ると、群衆を突きとばし、小脇差のつかに手をかけて歯を剥むいた。

「ええ、むごいことを、おぬしら何しやるのじゃ、この者へ」

弥次馬は、理わきまを弁えずに、

「婆どの。こいつは、泥棒だよ」

「泥棒ではない、わしが子じやわ」

「え、おまえの子か」

「おおさ、ようも足蹴にしやつたな。町人の分際で、侍の子を足蹴にしやつたな。婆が相手にしてくりよう、もいちど、今の無礼をしてみやい」

「冗じようだん 戯 じゃない。じゃあ先刻泥棒泥棒と呶鳴つたのは誰だ」

「呶鳴つたのは、この婆じゃが、おぬしら風情に足蹴にしてくれと頼みはせぬ。泥棒とよんだら俵めが、足を止めようかと思つていうた親心じゃわ。それも知らいで、撲つたり蹴つたりは何事じや、このあわて者めが！」

おんてき
怨敵

町中の森である。おぼろに常夜燈がまたたいていた。

「こう来やい」

お杉隠居は、又八の襟えりがみをつまんで、往来からその境内まで引きずって来た。

婆の権けんまくに驚いたとみえ、弥次馬はもう尾ついて来ない。しんがり殿として、鳥居の下で見張っていた権叔父も、やがて後から来て、「婆、もう折せつかん檻かんはせぬものだぞ。又八とて、もう子どもではなし」

母子おやこの手と襟がみを、もぎ離そうとすると、

「何をいうぞい」

隠居は、権叔父を、肱ひじで突き退けて、

「わしが子を、わしが折檻するに差し出口など、要らぬお世話、おぬしは黙よるこつていやい。——こ、これっ、又八っ」

泣いて欣よるこんでもいい場合を、この婆は憤怒して、わが子の襟がみを、大地へ小突き廻している。

老人になれば誰も単純で気短かになるといふ。今の場合の複雑な感情は余りにも枯渴こかつした血には強烈すぎたのであろう。泣いているのか、怒っているのか、狂喜の変態なあらわれか。

「親のすがたを見て、逃げ出すとはなんの芸われじゃ。汝われは、木の股

から生れくさったか、わしが子ではなかつたかよ。——こ、これ
ツ、ここな呆とぼけ者め奴が」

と、幼い時に打ち擲ちやくしたように、又八の尻をぴしぴし打って、

「よもやもう、この世に生きておろうとも思わなんだに、のめの
めこの大坂に生きていくさるとは憎い憎い、ええもう憎い奴よの。
なんで故郷くへもどつて来て、ご先祖様のまつりをせぬか、この母
にちよつとでも、顔見せぬか。親類縁者どもが、あれよこれよと
案じているのも、われには弁わえがつかぬかよっ」

「——お、おふくろ。かんべんしてくれ、かんべんしてくれ」

又八は、嬰兒あかごみたいに、母の手の下からさげんだ。

「悪いことは知っている。知っていればこそ、帰れなかつたんだ。

今日も、余り不意だったのでびっくりして、逃げる気もなく、おらあ駈け出してしまった。……面目ない、面目ない！ おふくろにも叔父御にも、おらあただ面目ないんで」

と、両手で顔をおおった。

それを見ると、婆も目鼻に皺しわをあつめて、すすり泣いた。しかし気丈な老婆は、自分が脆もろくなるのをすぐ自分の心で叱咤しなしながら、

「ご先祖の恥さらし、面目ないというからには、どうせ碌ろくなことをしていくさつたのではあるまいが」

権叔父は、見るに見かねて、

「もうよかろう、婆、そう打擲しては、かえって又八ねじを拗ねじげ者に

するぞよ」

「また差し出口かよ、おぬしは男のくせに甘うていかぬ。又八には父てておや親がないゆえ、この婆は母であるとともに、厳しい父親でもなければならぬのじや。それゆえわしは折檻をします。……まだまだこんなことで足ろうかいの。又八ツそれへ直りやい」
 自分も大地へ畏かしこまって坐りこみ、子へも、大地を指さしていった。

「はい」

又八は、土にまみれた肩を起して、
 悄しやうぜん然と坐り直した。

この母親は怖かった。世間の母親なみ以上の甘さもあつたが、すぐご先祖様を持ち出すので、又八は頭があがらないのであつた。「つつみ隠しをするときかぬぞよ。関ヶ原の戦へ出て、おぬし、あれ以来、何していやつた。婆の得心がまいるまで、つぶさに話しやれ」

「……話します」

隠す気は起らない。

又八は、友達の武蔵たけぞうと戦場から落ちのびたこと——そして伊吹のあたりに潜ひそんだこと——お甲という年上の女にかかつて、数年のあいだ同棲して苦い経験をし、今では、悔いていることなど、

すつかり話してしまおうと、胃の中の腐っている物を吐き尽したように、気が軽くなつた。

「ふうむ……」

と、権叔父が呻くと、

「あきれた子よの」

と、隠居も舌を鳴らし、

「そして今では、何していやるか。身装みなりは、どうやら飾つてござるが、仕官して、禄の少々も、取つていやるか」

「はい」

うっかり、いい返事をしたが、又八は、露見ろけんをおそれて、

「いや、仕官はいたしませぬが」

「では、何で喰べている」

「劍——劍術などを、教えまして」

「ほう」

婆は、初めて、ほころ綻びたように機嫌よく、

「劍術を、おおそうかいの。そういう生活たつきを過ごしながらも、劍術に精出していやつたとは、さすがにわしが子。……のう叔父御よ。やはり婆おばが子じやの」

この辺で機嫌を直させてしまいたいものだと権叔父は、大きく何度もうなずいて、

「それやあ、ご先祖の血は、どこかにあろうわさ。一時の極道はしようとも、そのたましいだに失わずば」

「して又八」

「はい」

「この上方では、誰について、腕を磨きやった」

「鐘巻自齋先生に」

「ふうむ……あの鐘巻先生にの」

目も鼻も飴あめのようにしてあまり喜ぶので、又八はもつと喜ばせてみたくなり、懐ふところ中の印可の巻を出して巻末の一行——佐々木小次郎殿とあるところだけを隠して、

「御覧ごらんじませ、この通り」

と、常夜燈の明りへ、展ひろげて見せた。

「どれ、どれ」

手を出したが、渡さずに、

「安心してござれ、おふくろ」

「なるほど」

隠居は、首を振って、

「見たか、権叔父、大したものじゃわ。小さい頃から、あの武^{たけぞ}蔵^うなどより、ぐんと賢く、腕も出来ていただけのことはある」

と、涎^{よだれ}を垂らさないばかりに満足をあらわしたが、ふと、それを巻きかけた又八の手がすべって、終りの一行が眼にうつると、

「これ待て、ここに佐々木小次郎とあるのはなんじゃ」

「あ……これですか……これは^{かめい}仮名^いです」

「仮名？ 何で仮名などつかいなさる、本位田又八と、立派な名

のあるものを」

「でも省かえりみて、自分に恥のある生活くらしをしていたので、先祖の名を汚すまいと」

「才才そうか。その性根たのもしい。——おぬしは何も知るまいがこれから故郷くにもと元のことども聞かせて進ぜるほどに、よう聞きなされ」

隠居は、そう前置きして、この一人息子を、いよいよ鼓舞こぶし、激励するために、その後、宮本村に起つた事件やら、本位田家の立場から、また、自分と権叔父とが、ために出郷することになり、お通と武蔵たけぞうとを討つべく、多年ふたりの行方をさがし歩いてゐることなど——誇張する気もなく誇張に落ちたが——何度も鼻を

かみながら、じゅんじゅん 諄々 と眼を濡らして語った。

三

じつと首を垂れたまま、又八は老母の烈々と吐くことばに打たれていた。こうしている間は、彼も善良で神妙な息子だった。

けれど、隠居がいおうとする重点は、もっぱら家名の面目とか、侍の意気とかにあつたが、この息子の感情を強く打った点は、そこになくて、

(お通がこころ変りした)

と、いう初耳の話だった。

「おふくろ、それは真ま実じつか」

彼の顔いろを知ると、隠居は、自分の鞭べん撻たつが、彼を奮起させ
たものと思ひこみ、

「嘘と思うなら、叔父御にもただしてみやれ、お通阿女あまはおぬし
を見かぎつて、武蔵たけぞうの後を追つて去いんだわさ。——いやの、も
つと悪う考えれば、武蔵はおぬしが、当分は村へ帰らぬものと知
つてじゃほどに、お通をだまして、奪つて逃げたともいえる。の
う権叔父」

「そうじゃ、七宝寺の千年杉へ、沢庵坊主のため、縛くりつけられ
たのを、あのお通の手をかりて逃げ失せた男女ふたりのことゆえ、どう
せ碌ろくな仲じやあるまいての」

こう聞いては又八も、鬼とならずにいられなかつた。それでなくても、彼へは——あの武蔵という人間に対しては、どういふものか反感があつてならなかつたところである。

隠居の激励は、鞭むちに鞭むちを加えて——

「わかつたかよ又八。この婆や権叔父が、故郷くにを出て、こうして諸国をあるいている意気地が。——息子の嫁たけぞを奪つて逃げた武蔵、本位田家に後足で砂をかけて失うせたお通。——こう二つの首を打たいでは、婆は、ご先祖のお位牌いはいと、故郷くにの衆にむかつて、会わせる顔がないじやろが」

「わかりました。……よく」

「おぬしにも、それではのめのめと、故郷の土は踏めまいが」

「帰りません、もう、帰りません」

「討つてたも、おんてき怨敵を」

「ええ」

「気のない返辞をするものかな、おぬしには武蔵たけぞうを討つ力がな
いと思うてか」

「そんなことはありません」

権叔父も、そばから、

「案じるな又八、わしもついているのじやが」

「この婆とても」

「お通と武蔵、二つの首を、晴れて故郷への土産に引っさげて戻
ろうぞ。のう又八、そうしておぬしにはよい嫁女をさがし、あつ

ばれ本位田家の跡目をついで貰わにやならん。そうした上は、武士の面目も立つ、近郷きんごうへの評判もようなる、まず、吉野郷よしのごうで負け目ひめをとる家統いえすじは他ほかにはあるまいてな」

「さあ、その気になつてたも。なるかよ又八」

「はい」

「よい子じや、叔父御、賞ほめておくりやれ。きつと武蔵とお通を討つと誓うた。……」

と隠居はやつと気がすんだらしく、先刻から怵こらえていた氷のよ
うな大地から身を動かしかけたが、

「ア……痛たた々々」

「婆、どうしやつた」

「冷えてかいの、腰が急に吊ってこう下腹へさしこんで来ましたわい」

「これやいかぬ、また持病を起してか」

又八は、背を向けて、

「おふくろ、すがりなされ」

「何、わしを負うてくれる。……負うてくれるか」

と、子の肩に抱きついて、

「何年ぶりぞいの、叔父御よ、又八がわが身を負うてくれたわいな」

と、欣^{うれ}し泣きに泣くのであった。

母の温い涙が肌にとおって来ると、又八も何か無性に欣^{うれ}しくな

つて、

「叔父御、旅籠はたごはどこか」

「これから探すのじゃ、どこでもいい、歩いてくりやれ」

「合点だ——」

と、又八は老母の体を弾はずませて歩きながら、

「ほう、軽いなあ、おふくろ。——軽い、軽い、石よりも軽いぞ」

美少年

藍あゐや紙が積み荷の大部分であつた。ほかに禁制の煙草も船底にかくしているらしい。元より秘密だが、においで知れる。

月に何度か、阿波あわの国から大坂へ通う便船で、そうした貨物とともに便乗している客には、この年の暮を、大坂へ商用に出るか、戻るかする商人あきんどが八、九分で、

「どうです、儲もうかるでしょう」

「儲かりませんよ、堺さかいはひどく景気がいいというが」

「鉄砲鍛冶かじなど、職人が足らなくて弱っているそうですね」

べつの商人が、また、

「てまえは、その戦道具いくさどうぐの、旗差物はたさしものとか、具足ぐそくなど納めていますが、昔ほど儲かりませんで」

「そうかなあ」

「お侍方がそろばんに明るくなつて」

「ハハア」

「むかしは、野武士がかついで来る掠め物かすものを、すぐ染めかえ、塗りかえして、御陣場へ納める。するとまた、次の戦があつて、野武士がそいつを集めてくる。また新物あらものにするとといったふうには、
鹽たらいまわ廻まわしがきいたり、金銀のお支払いなどもおよそ目分量めりりょうみたいなものでしたがね」

そういう話ばかりが多い。

中には、

「もう内地では、うまい儲けはありっこない。呂宋るそん助左衛門とか、

茶屋助次郎といった人のように、乗るか反るかで海の外へ出かけなければ」

と、海洋をながめて、彼方の国の富を説いている者があるし、或る者はまた、

「それでも、何のかのといつても、わしら町人は、侍から見れば遙かに割がよく生きていますよ。いつたい侍衆なんて、食い物の味ひとつ分るじやなし、大名の贅沢といったところが、町人から見ればお甘いもので、いざといえ、鉄と革かわをよろ鎧よろつて、死に行かなければならないし、ふだんは面目とか武士道とかにしばらくは、好きな真似はできないし、気の毒みたいなものでございますよ」

「すると、景気がわるいの何のといつても、やはり町人にかぎり
ますかな」

「かぎりですとも、気ままでね」

「頭さえ下げていればすみますからな。——その鬱憤うっぶんはいくら
でもまた、金のほうで埋め合せがつくし」

「ぞんぶんこの世を楽しむにかぎりまさあね」

「何のために生れて来たんだ——といつてあげたいのがいますか
らね」

商人あきんどでもこの辺は、中以上のところとみえる。船載はくさいの毛もうせ

氈氈をひろく敷きこんで、一階級を示しているのだ。

のぞいてみると、なるほど、桃山の豪奢ごうしゃは今、太閤が亡き後

は、武家になくて、町人の中へ移っているかと思われる。酒器の
 ぜいたくさ、旅具旅装の絢爛けんらんなること、持物の凝こっていること、
 ケチな一商人でも、侍の千石取などは及びもない。

「ちと、飽きましたな」

「退屈しのぎに、始めましようか」

「やりましよう。その幕とばりをひとつ懸け廻して」

と、小袖幕のうちにかくれると、彼らは、妾めかけや手代に酒をつが
 せて、南蛮船が近ごろ日本へ齎もたらした「うんすん骨牌かるた」というもの
 を始める。

そこで儲けている一つかみの黄金があれば、一村の飢餓きがが救わ
 れるであろうほどの物を、まるで、冗じょうだん戲ぎみたいに、遣り取り

していた。

こういう階級の中に、ほんの一割ほどだが、乗り合わしている山伏とか、牢人者とか、儒者とか、坊主とか、武芸者などという者は、彼らからいわせるといわゆる、

(いったいなんのために生きているんだ)

と借問しゃくもんされる部類のほうで、みんな荷にこ梱こうりの蔭に、ぽつねんと味気ない顔して、冬の海をながめているのだった。

二

それらのあじきない顔つきの組の中に、一人の少年が交まじって

いた。

「これ、じつとしておれ」

荷梱に倚り懸よつて、冬日の海に向いながら、膝の上に何やら丸っこい毛だらけな物を抱いている。

「ホ。可愛い小猿を」

と、そばの者がさしのぞいて、

「よく馴れてござるの」

「は」

「永くお飼いになつていたのであろうな」

「いえ、ついこのごろ、土佐から阿波へ越えてくる山の中で」

「捕まえられたのか」

「その代り、親猿の群れに追いかけられて、ひどい目にあいました」

話を交わしながらも、少年は、顔を上げない。小猿を膝の間に挟んで、蚤のみを見つけているのだった。

前髪に紫の紐ひもをかけ、派手やかな小袖へ、緋ひらしやの胴羽織を纏まとっているので、少年とは見えるものの、年齢としのほどは、少年という称呼に当てはまるかどうか、保証のかぎりでない。

煙管きせるにまで、太閤張たいこうばりというのが出来て、一頃は流行はやったように、こういう派手派手しい風俗も、桃山全盛の遺風であつて、二十歳たちをこえても元服をせず、二十五、六を過ぎても、まだ童子髪を結ゆつて金糸をかけ、さながらまだ清童であるかのような見栄を

持つ習いが、いまに至つてもかなり遺つて^{のこ}いるからである。

だからこの少年も、一概に身なりをもつて、未成年者と見ることはできない。体つきからしても、堂々たる巨漢であるし、色は小白くて、いわゆる丹唇^{たんしん}明眸であるが、眉毛が濃くて、眉端^{びたん}は眼じりから開いて上へ^は匆ねている。なかなかきつい顔なのだ。

けれどまた――

「これ、なぜうごく」

と、小猿の頭を打つて、猿の蚤^{のみ}とりに他念のない様子などは、なかなかあどけなくもある。何もそう年齢^{とし}の詮^{せん}索^{さく}ばかり気にやむこともないが、あれこれ綜合してその中庸をとつて推定すれば、まず十九か、二十歳というところではなからうかと思われる。

さてまた、この美少年の身分はというと、元より旅いでたちで、革足袋かわたびにわらし穿きばだし、どこといつて抑えどころもないが、歴れ乎つきとした藩臣でなく、牢人の境界きょうがいであることは、こういう船旅において、ほかの山伏だの傀儡師くぐつしだの、乞食のようなボロ侍だの、垢あかくさい庶民の中に交じつて、気軽にごろごろしている態ていをみても、およそ想像はつく。

だが、牢人にしては、ちよつと立派なものを一つ身に着けている。それは、緋羽織の背なかへ、革紐かわひもで斜めに負っている陣刀づくりの大太刀である。反りそがなく、竿さおのように長い。

ものが大きいし、拵こしらえが見事なので、その少年のそばへ寄つた者は、すぐ少年の肩かたごしに柄つかの聳そびえているその刀に目がつくのだ

つた。

「——いい刀ものを持っている」

そこから少し離れたところから、祇園藤次ぎおんも、さつきから見み惚とれていた一人であつた。

「京洛みやこでもちよつと見ない」

と思う。

刀のすぐれた物を見ると、その持ち主から、遠くは、その以前の経歴までが考えられてゆく。

祇園藤次は、機おりがあつたら、その美少年へ、話しかけてみたいと思つていた。

——冬の昼ひるもや靄やにうすずいて、よく陽ひのあたっている島の淡路

は、とも艦のかなたに、だんだん遠くなつてゆく。

はたはたと、大きな百反帆たんぼは、生きもののように、船客たちの頭の上で潮鳴りを切つて鳴つていた。

三

藤次は旅に倦うんでいた。

なま欠あくび伸が出る——

飽きのきた旅ほど他人の世界を感じるものはない。祇園藤次は、その飽き飽きした旅を、もう十四日もつづけて来たあげくのこの船中であつた。

「——飛脚が間にあつたかしらて？ ……間にあえば、大坂の船着場まで、迎えに来てにちがいないが」

と、お甲の顔を思い浮かべて、せめてもの無聊ぶりようをなぐさめてみる。

さしも、室町將軍家の兵法所出仕として、名譽と財と、両方にめぐまれて来た吉岡家も、清十郎の代になつて、放ほうじゆう縦じゆうな生活をやりぬいたため、すっかり家産は傾いてきた。四条の道場まで、抵当に入っているのです、この年暮くれには、町人の手へ取られるかも知れないという内ふところ。

年暮に近づいて、あつちこつちから責め立ててくる負債をあわせると、いつのまにか、途方もない数字にのぼっていて、父拳法

の遺産をそっくり渡して、編笠一かいで立ち退いても、なお、足らないくらいな実情に墮ち入っていた。

(どうしたものか)

という清十郎の相談である。この若先生をおだてて、さんざん費わせた責任の一半は藤次にもあるので、

(おまかせなさい、うまく整理をつけてお目にかきましょう)

狡智をしぼって、彼の案出したのが、西洞院にしのだういんの西の空地へ、

吉岡流兵法の振武閣しんぶかくというものを建築するという案で——社会

の実態を鑑みるに、いよいよ武術は旺さかんになり、諸侯は武術家を要

望している。この際、多くの後進を養成するために、従来の道場をさらに拡大して、流祖の遺業をして、もっと天下にあまねから

しめなければならぬ——それはまた、われわれ遺弟の当然なさな
ければならない義務でもある。

そんな主旨の廻文を、清十郎に書かせ、これを携たずえて、中国、
九州、四国などに散在している吉岡拳法門下の出身者を、歴訪し
て来たのである。もちろん振武閣建築の寄附金を勸かん進しんするた
めに。

先代の拳法が育てた弟子は随分各地の藩に奉公していて、みな
相当な地位の侍になっている。

けれど、そういう勸かん説ぜいを持って行っても、藤次が予算してい
たように、おいそれと寄進帳へ筆をつけてくれるのはすくない。

(いづれ書面をもって)

とか、

(いづれ、上洛の折に)

とかいうのが多く、現に藤次が携えて帰る金は、予定していた額の何分の一にも当らない。

だが、自分の財政ではなし、まあ、どうかならうと多寡たかをくくつて、先刻さつきから、師の清十郎の顔より、久しく会わないお甲の顔のほうを、努めて、想像にのぼせていたが、それにも限度があるので、また、生欠なまあくび伸に襲われて、退屈なからだを、船のうえに持てあましていた。

うらやましいのは、先刻から小猿の蚤のみをとっている美少年だった。いい退屈しのぎを持っている。藤次は、そばへ寄つて、とう

とう話しかけ出した。

「若衆。——大坂表までお渡りか」

小猿の頭を抑えながら、美少年は大きな眼をじろりと彼の顔へあげた。

「はあ、大坂へ行きます」

「ご家族は大坂にお住まいかの」

「いえ、べつに」

「では阿波のご住人か」

「そうでもありません」

膠にべのない若衆である。そういつてまた他念なく、小猿の毛を指で搔き分けているのであった。

四

ちよつと話のつぎ穂がない。

藤次は、黙つたが、また、

「よいお刀だな」

と、こんどは彼の背にある大太刀を賞めた。すると美少年は、
「はあ、家に伝来のもので」

急に藤次のほうへ膝を向け、賞められたのを欣しうれそうに、

「これは陣太刀こしらに出来ていますから、大坂の良い刀師へあずけ、
差し料こしらに拵えを直そうと思つて居るのです」

「差し料には、ちと長すぎるようだが」

「されば、三尺です」

「長剣だな」

「これくらいなものが差せなければ——」

自信がある——というように美少年は笑靨えくぼをうごかす。

「それは差せないことはない——三尺が四尺でも。——けれども実際に用うる場合、これが自由にあつかえたら偉いが」

と、藤次は、美少年の銜氣げんきをたしなめるようにいう。

「大太刀を、かんぬきに横たえて、りゆうとして歩くのは、見た眼は伊達でよいが、そういう人物にかぎって、逃げる時には、刀を肩へかつぐやつだ。——失礼だが、貴公は、何流を学ばれたか」

劍術のことになると、自然、藤次はこの乳臭児を見下げずにいられなかった。

美少年は、ちらと、彼のそういう尊大な顔つきへ、瞳をひらめかせ、

「富田流を」

と、いった。

「富田流なら、小太刀のはずだが」

「小太刀です。——けれども何、富田流を学んだから小太刀をつかわなければならぬという法はありません。私は、人真似がきらいです。そこで、師の逆を行って、大太刀を工夫したところ、師に怒られて破門されました」

「若いうちは、えて、そういう叛骨はんこつを誇りたがるものだ。そして」

「それから、越前の浄教寺村をとび出し、やはり富田流から出て、中条流を創たてた鐘巻自斎という先生を訪ねてゆきますと、それは気の毒だと、入門をゆるされ、四年ほど修行するうち、もうよろうと師にもいわれるまでになりました」

「田舎師匠というものは、すぐ目録や免許を出すからの」

「ところが、自斎先生は容易にゆるしを出しません。先生が印可をゆるしたのは、私の兄弟子である伊藤弥五郎一刀斎ひとりだという話でした。——で私も、何とかして、印可をうけたいものと、臥薪嘗胆がしんしょうたんの苦行をしのんでいるうち、故郷くにもとの母が死去し

たので、功を半ばに帰国しました」

「お国は」

すおう

「周防岩国の産です。——で私は、帰国した後も、毎日、練磨を怠らずに、錦帯橋の畔ほとりへ出て、燕を斬り、柳を斬り、独りで工夫をやっていました。——母が亡くなります際に、伝来の家の刀ぞ、大事に持てといわれてくれましたこの長光ながみつの刀をもつて」

「ほ、長光か」

「銘はありませんが、そういう伝えています。国許くにもとでは、知られている刀で、物干竿ものほしざおという名があるくらいです」

無口だと思いのほか、自分のすきな話題になると、美少年は問わないことまで語りだした。そして口を開き出すとなると、相手

の気色などは見ていない。

そういう点や、またさつき自分で話した経歴などから見ても、すがたに似あわない我のつよい性格らしく思われた。

五

ちよつと、言葉をきつて、美少年はその眸に、雲のかげを映し、何か感慨に耽^{ふけ}っていたが、

「——けれどその鐘巻先生も、昨年、大寿を全うして、ご病死なされてしまった」

つぶや
眩くようにいい、

「私は、周防にあつて、同門の草薙くさなぎてんき天鬼から、その報しらせをうけた時、師恩に感泣しました——師の病床についていた草薙天鬼、それは私よりもずっと先輩だし、また、師の自齋おひとは叔父甥おひの血縁でもあるのですが、その者には、印可を与えずに、遠く離れている私を思つてくれて、生前に、印可目録を書き遺のこして、一目会つて、手ずから私に与えたいと申されたそうであります」

眸がうるんで来て、今にも涙のこぼれそうな眼になる。

祇園藤次は、この多感な美少年の述懐を聞いても、若い彼といつしよになつて、感傷を共にする気には元よりなれない。

だが、退屈に苦しんでいるよりは、ましだと考えて、

「ふム、なるほど」

熱心に聞いている顔つきを装うと、美少年は、鬱^{うつ}懷^{かい}をもらすように、

「その時、すぐ行けばよかったです。けれど私は周防、師は上州の山間、何百里の道です。折わるく、私の母も、その前後に歿したので、遂に、師の死に目に会えませんでした」

——船がすこし揺れでした。冬雲に陽がかくれると、海は急に灰色を呈し、時々、舷^{ふなべり}に飛沫^{しぶき}が寒く立つ。

美少年はなお話をやめない。多感な語気をもつて語る。——それから先のことを総合すると、彼の境遇は今、故郷の周防の家屋敷をたたみ、師の甥でもあり同門の友でもある草薙^{くさなぎ}天鬼という者と、どこかで落ち合おうというために、この旅行をつづけてい

るものと見られる。

「師の自齋には、何の身寄りもありません。で、甥の天鬼には、遺産といつてもわずかでしようが、金を与え、遠く離れている私には、中条流の印可目録を遺してゆかれました。天鬼は、私のそれを預かって、今諸国を修行にあるいていますが、来年の彼岸の中日には、上州と周防とのちょうど中ほどの道程にあたる三河の鳳来寺山へ、双方からのぼって、対面しようという約束を書面で交わしてあります。そこで私は天鬼から師のおかたみを受けることになっていたので、それまでは近畿のあたりを悠々と、修行がてら見物して歩こうと思つていのです」

ようやくいうだけのことをいい終つたように、美少年は改めて、

話し相手の藤次にむかい、

「あなたは、大坂ですか」

「いや京都」

それきり黙って、しばらく、波音に耳をとられていたが、

「すると其そこもと許はやはり、兵法をもつて身を立てて行かれる気か」

藤次はさつきから少し軽蔑した顔つきであつたが、今もうんざりしたようにいう。この頃のように、こう小生意気な兵法青年がうようよ歩いて、すぐ印可の目録のといつて誇つていることが、彼には、小賢こざかしく聞えてならない。

そんなに天下に上手や達人が蚊みたいに殖ふえてたままるものか。

第一自分などさえ、吉岡門に二十年近くもいて、やっとこれくら

いなところであるのに——と身にひきくらべ、

(こんなのが、将来に皆、どういふ飯を食つてゆくのか)

と、思ふのだつた。

膝をかかえて、灰色の海をじつと見ていたと思うと、美少年はまた、

「——京都？」

と、つぶやいて、藤次のほうへ眸を向け直した。

「京都には、吉岡拳法の遺子、吉岡清十郎という人がいるそうですが、今でもやっておりますか？」

六

よいほどに聞いてみれば、だんだん口の幅を広くしてくる。気に食わない前髪めがと藤次は小癩こしやくに思う。

けれど考え直してみると、こいつはまだ自分が吉岡門の高弟祇園藤次なる者であることを知らないのだ。知ったらさだめし前言に恥じて、びつくりする奴に違いない。

退屈しのぎが昂こうじて、ひとつ擲からか揄かつてやろうと、藤次はそこで、「——されば、四条の吉岡道場も、相かわらず盛大にやっておるらしいが、其許そこもとは、あの道場を訪れてみたことがあるか」

「京都へのぼったたら、ぜひ一度ほどの程度か、吉岡清十郎と立合つてみたいと存じていますが、まだ訪ねてみたことはありません」

「ふツ……」

笑いたくなくなった。藤次は顔を歪ゆがめた後から、軽蔑をみなぎらして、

「あそこへ行つて、片輪にならずに、門を戻つて来る自信があるかな？」

「なんの！」

美少年は突つ返すようにいった。——その言葉こそおかしけれ——とばかり笑い出すのだった。

「大きな門戸を構えているので、世間が買いかぶつているので、初代の拳法は達人だったでしょうが、当主の清十郎も、その弟の伝七郎とやらも、たいした者じゃないらしい」

「だが、当つてみなければ、分るまいが」

「もつぱら諸国の武芸者のうわさです。うわさですから、皆が皆、ほんともありませんまいが、まず京流吉岡も、あれでおしまいだろうとは、よく聞くことですね」

大概にしろといいたい。藤次は、ここらで名乗つてやろうかと思つたが、ここでけりを着けたのでは、からか擲揄つたのでなく、擲揄われたに等しいものになる。船が、大坂へ着くにはまだ大分間もあることだし、

「なるほど、このごろは、諸国にも天狗が多いそうだから、そういう評判もあろうな。ところで、おん身は先ほど、師を離れて、郷里にあるうちは、毎日のように、錦帯橋の畔ほとりへ出て、飛燕ひえんを斬

つて大太刀のつかいようを工夫されたと仰つしやつたな」

「いいました」

「じゃあ、この船で、時々、ああして飛び来つては掠^{かす}めてゆく海^う鳥^{みどり}を、その大太刀で、斬り落すことも容易であらうな」

「……………」

何か悪感情を包んでいる相手のことばを、美少年もようやくさ
とつたらしく、瞬間、まじまじと藤次のそういう浅黒い唇を見つ
めていたが、やがて、

「出来たつて、そんな莫^ば迦^かな芸を私はやる気になれぬ。——あな
たは、それを私にやらせようという肚^{はら}だろうが」

「でも、京流吉岡を、眼下に見るほどな自信のある腕なら」

「吉岡をくさしたことが、あなたの気に入らなかったとみえる。あなたは、古岡の門人か、縁者か」

「何でもないが、京都の人間だから、京都の吉岡を悪くいわれれば、やはりおもしろくはない」

「ははは、うわきですよ、私がいったわけじゃない」

「若衆」

「なんです」

なまびょうほう

「生兵法ことわざという諺を知っているか。将来のため忠言しておく

が、世間をそう甘く見すぎると、出世はせんぜ。やれ、中条流の印可目録を取っているの、飛燕を斬つて、大太刀の工夫をしたのと、人をみな盲とするような法螺ほらはよせ。よいか、法螺をふくの

も相手を見てふくのだけ」

七

「私を、法螺ふきと、仰っしやつたな」

美少年が、こう念を押すように突つ込むと、

「いったがどうした」

藤次は、反そらした胸を、わぎと相手へ寄せて、

「おまえの将来のためにいつてやったのだ。若い者の銜てらいも、少しは愛嬌だが、あまり過ぎると見ぐるしい」

「……………」

「最前から何事もふむふむと聞いていたので、人を舐めてつい駄ぼらが出たのだろうが、実は此方こそ、吉岡清十郎の高弟、祇園藤次という者だ。以後、京流吉岡の悪評をいいふらすと、ただはおかんぞ」

周りの船客がじろじろ見るので、藤次はそれだけの権威と立場とを明らかにして、

「このごろの若い奴は、生意気でいかん」
つづやきながら、独り、鱸とものほうへ歩み去った。

——と、黙って美少年もその後について行くのだった。

(何かなくては済まないらしいぞ)

と予感したので、船客たちは、遠方からではあるが、皆、二人

のほうへ首を振向けた。

藤次は決して事を好んだわけではない。大坂へ着けば、船着場にはお甲が待っているかもしれないのだ。女と会う前に、年下の者と、喧嘩などをやっては、人目につくし、あとがうるさい。

そしらぬ顔して、彼は、ふなべりうん舷の欄へひじ肱をかけ、ともかじ艫舵の下にうず巻いている青ぐろい瀬を見ていた。

「もし」

美少年は、その背中を軽くたたいた。相当に拗しっこい性質である。だが、感情に激しているような語気ではない、極めて静かなのだ。

「もし……藤次先生」

知らないふうも装よそおえないので、

「なんだ」

顔を向けると、

「あなたは、人ひとなか中なかにおいて、私を法螺ほらふきと申されたが、それ

では私も面目が立たないから、最前、やって見ろとおおせられた芸を、やむなくここで演じてみようと思ひます。立ち会ってください

「わしが、何を求めたか」

「お忘れのはずはない。あなたは、私が周防すおうの錦帯橋ほとりの畔ほとりで、飛燕を斬って大太刀の修練をしたといつたら、それを笑って、然らば、この船を頻りと掠かすめ飛んでいる海鳥うみどりを斬ってみせろといわれたではないか」

「それはいった」

「海鳥を斬ってお目にかけてたら、その一事だけでも、私がまるで嘘ばかりいつている人間でないことがおわかりになるろう」

「それは——なる！」

「ですから、斬ります」

「ふむ」

と半ば、冷笑して、

「やせ我慢して、もの笑いになってもつまらんぜ」

「いや、やります」

「止めはしないが」

「しからは、立ち会いますかな」

「よし、見届けよう」

藤次が、張りをこめていうと、美少年は、二十畳も敷けるともの
まん中に立って、船板を踏まえ、背に負っている「物干竿ものほしざお」と
いう大太刀のつかへ手をやりながら、

「藤次先生、藤次先生」

と、いった。

藤次は、その構えを白い眼で見すえながら、何用か、と彼方かなたか
ら答えた。

すると、美少年は、真面目くさって、

「おそれ入るが、海鳥を、私のまえへ呼び降ろしていただきたい。
何羽でも、斬って見せます」

八

一休和尚おしょうの頓智とんちばなしをそのまま用いて、美少年は、藤次へ
 酬むくいたものとみえる。

藤次はあきらかに愚弄ぐろうされたのだ。人を小馬鹿にするも程があ
 るとつけていい。当然、烈火のように怒った。

「だまれ。あのように空を翔かけている海鳥を思いのままに、眼の
 前へ呼びよせられるものなら、誰でも斬るわ」

すると美少年は、

「海は千万里、劍つるぎは三尺、側へ来ないものは、私にも斬れません」

それ見たかといわないばかりに藤次は二、三步出て、

「逃げ口上をいう奴だ。出来ませんなら出来ませんと、素直あやまに謝れ」

「いや、謝るほどなら、こんな身構つかまつえは仕りません。海鳥のかわりに、べつな物を斬ってお目にかける」

「何を？」

「藤次先生、もう五歩こちらへ出て来ませんか」

「なんだ」

「あなたのお首を拝借したい。私が法螺ほらふきか否かを試せといったそのお首だ。罪もない海鳥を斬るよりは、そのお首のほうが恰好好ですから」

「ばツ、ばかいえッ」

思わず藤次はその首をすくめた。——とたんに美少年の肱は弦ひじの刎はねたように、背の大剣を抜いたのであった。ばつと空気の斬れる音がした。三尺の長剣が、針ほどな光にしか見えなくらい迅はやかつたのである。

「——な、なにするかッ」

よろめきながら藤次は襟くびへ手をやった。

首はたしかに着いているし、そのほかなんの異状も感じなかつた。

「おわかりか」

美少年は、そういつて、荷にこ梱うりのあいだへ立ち去つた。

土気色になった自分の顔いろを、藤次はいかんともすることが出来なかつた。だが、その時はまだ自分の五体のうちの最も重要な部分が斬り落されていることなど気づかなかつた。

美少年が去つた後で、ふと、冬陽のうすくあたっている船板上を見ると、変な物が落ちてゐる。それは、刷毛はけのような小さな毛の束たばだ、アツと、初めて気づいて、自分の髪へ手をやってみると、鬚まげがない。

「や、や？ ……」

撫なでまわして驚き顔をしてゐる間に、根の元結もとゆいがほぐれて、鬢びんの毛はばらりと顔にちらかつた。

「やったな！ 青二才」

棒のように胸へ突つ張つてくる憤怒であつた。美少年が自ら語つていたことのすべてが、嘘でも法螺ほらでもないことが、とたんに分りすぎるほど彼には分つた。年に似合わない怖ろしい技だと思ふ。若い仲間にも、ああいう若いのもいるのかと今さら思う。

だが、頭脳あたまの驚嘆と、肚のそのこの憤怒とは、べつ物である。そこからのぞいて見ると、美少年は先刻さつきの席へもどつて、何か、失くし物でもしたように、自分の足もとを見廻している。藤次は、絶好な隙をその体に見つけた。——刀の柄糸に唾つばをくれて固く握つたのである。身をかがめて、美少年のうしろへ迫り、こんどは、彼の鬚まげを斬り払つてやろうとするのだった。

——だが藤次には、その鬚まげ先さきだけを鮮やかに斬る確信はなか

った。当然、顔にかかる、頭の鉢を横に割るだろう。勿論、それでさしつかえない。

うむっ！ 満身が赤く膨れあがって、彼の唇と鼻腔が出る息を結んだ時であつた。

—— 胴の間の彼方で、小袖幕を囲つて、最前から、「うんすん骨牌」という博戯に千金を賭けて、夢中になつていた阿波、堺

大坂あたりの商人たちが、

「札が足りない」

「どこへ飛んだのじゃ？」

「そつちを見ろ」

「いや、こつちにもない」

敷物を払って騒いでいたが、そのうちの一人が、ふと、大空を仰いで、

「やつ、小猿めが！ あんなところへ！」

高い帆柱の上を指さして、頓狂なさけびをあげた。

九

——なるほど、猿だ、猿がいる。

三十尺もあろうかと思われる帆ばしらの天つて辺ぺんに。

下では、ほかの船客までが、海上の旅に倦うみ飽あいていた折からなので、事こそあれと、みな顔を空へ上げ、

「やあ、何か啜くわえている」

「骨牌かるたのふだですよ」

「ハハア、あそこで、金持ち連がやっていた骨牌を攫さらって行つたんですか」

「ごらんなさい、小猿のやつも、帆ほばしらの上で骨牌をめぐる真似まねをしている」

ヒラヒラと、そういう顔の中へ一枚の札はが落ちて来た。

「畜生」

堺あきんどの商人のひとりが、あわててそれを拾いあげたが、

「まだ足りない。もう三、四枚持っているはずだ」

他の連中も口々に――

「誰か、猿のやつから、札を奪^とり返して来いやい。博^{あそび}戯が出来ぬ」

「どうして、登れるものか、あんな高いところへ」

「船頭なら」

「それや登るだろう」

「金をやって、船頭に取って来てもらおうじゃないか」

そこで船頭は、金をもらって、承諾はしたが、海上では司権者である船頭として、一応、この事件の責任を問わなければならぬ
いという顔つきで、

「お客衆」

と、荷物のうえに上がって、船客たちを見まわし、

「——あの小猿は、いったい誰の飼^かい猿じゃ、飼^かい主はここへ出

てもらおう」

といった。

どこからも、おれのだといって名乗り出る者が無い。しかし、その辺にいた客はみな知っている。例の美少年のすがたへ期せずして一同の眼が注がれた。

船頭も知っていた筈だ。そこで当然業腹ごうはらが煮えてきたに違いない。船頭声を一段と張りあげて、

「飼い主はねえのか。飼い主がねえならねえように、おらが処分するが、あとで苦情はあんめえな」

いないのではない、美少年は荷物に倚よりかかって、黙然と、何か考え事でもしている様子なのだ。

「……なんて凶々しい」

と、ささやく者がある。船頭もぎよろりと美少年の頭を見ていた。博戯あそびをさまた邪げられた金持ち階級は、遽にわかにざわめいて悪口を口走る。——鉄面皮てつめんぴだの、唾おしかの、つんぼかのと。

だが美少年は、ちよつと膝を横に坐り直したきりだった。どこへ吹く風かという姿である。

「海のうえにも、猿が住むとみえて、飼い主のねえ猿が舞いこんだ。飼い主のねえ畜生なら、どうして始末してもかまうめい。——皆の衆、これほど船頭は断っているのに飼い主が名乗って出ねえだ。後で、耳が遠いの、聞かなかつたのと、苦情のねえように、証人になってくらっせえ」

「いいとも、わしらが証人に立ってやる」

と例の旦那連中が、腹を立てて、呶鳴った。

船頭は、船底へゆく段梯子だんぼしごを下りて行つた。上がつて来た時には、火のついた火縄と、種子島銃たねがしまじゆうを持っていた。

(——怒つたな船頭)

同時に、あの飼い主の若衆がどう出るだろうかど、人々はまた、美少年の姿を振りかえつてみた。

十

のん気なのは、上の小猿だ。

潮風の空で、骨牌かるたを見ている。それがいかにも意思があつて人間をからかっているように見えるのである。

だが——突然、白い歯を剥むいて、キツ、キツ、キツと啼き出すと、帆車の横木を走つたり、帆ばしらの突端へ飛びついたり、急に狼狽しはじめた。

「……………」

下では、船頭が、火縄を鼻の先にいぶして種子島の銃つつさき先を空へ向け、じつと、小猿を狙いすましていた。

「ざまを見る、あわてやがって——」

と、だいぶ酒の入っているらしい旦那連のうちの一人がいう。

「しつ……………」

と、堺の商人が袂たもとをひいた。それまで唾おしのように他所よそを向いていた美少年がぐつと体を起し、

「船頭」

と、こちらへ声を投げたからである。

こんどは、船頭のほうでそら耳を装っていた。火縄が、チラとせきがね関金の煙えんしょう硝へ口火を点じかけた。——と、間髪を容いれなかつたのである。

「あつ」

ドカアンと弾音はたかく反そツぽへ走った。銃つつは美少年の手に引ひつ奪たくられているのだった。船客たちは、耳を抑おさえて俯うつつ伏した。

——その頭のうえを越して、ぶうんと、鉄砲は船の外なる渦潮の

中へ投げ捨てられていた。

「な！ なにしやがる！」

これは船頭の当然な怒号だった。おどり上がって美少年の胸ぐらにぶら下がったのである。

頑丈な船ふなのり乗の体も、美少年のまえに正當に立つと、ぶら下がったという言葉がおかしくないほど、背も骨ぐみも、段ちがい美少年のほうたくまが遅しくて立派だったのである。

「おまえこそ、何するのだ、飛び道具で、無心の小猿を撃ち落そうとしたらう」

「そうだ」

「不届きではないか」

「なぜッ。——断つてあるぞ、おらの方では」

「どう断つた？」

「おめえは、眼がねえのか、耳がねえのか」

「だまれ、こう見えても、わしは客だ、わしは武士だ。船頭風情の身をもつて、客よりも高い場所に突つ立ち、頭の上からあのように喚わめいたとて、侍が、答えられるか」

「いい抜けを吐ほぎくな。そのためにおらは何度も断つてある。その断りかたが氣にくわねえにせよ、なぜ、おらが立つ前に、あちらの客衆が迷惑したのを、黙りこくつて、知らぬふりしていさらしたのじや」

「あちらの客衆とは——おおあの幕とぼりの中で先刻さつきから博戯ぼくちをしてお

った町人どもか」

「大口をたたくな、あの客衆は、並の客衆よりは、三倍も高い船賃を出してござらっしゃる」

「いよいよ不埒な町人どもだ、衆人の中で、大びらに金を賭け、酒の座を気ままに占め、わが物顔して、この船中に振舞っている様子、面白くない人間どもかなと眺めていたのじゃ。小猿が骨牌かるたのふだを取って逃げたからとて、この身がいつけたわけではなし、あの連中のする悪戯いたずらを、猿が真似したまでのこと、わしから迷惑を詫び出るすじはない」

ことばの半ばから、美少年は、血の気の多いその顔を、彼方あなたの一つどころにかたまっている堺や大坂の旦那連のほうへ向けて、

極めて皮肉な笑い方をしていたのであった。

わすれ貝

一

潮騒しおさいの夕闇に、木津川湊みなとの灯は赤く戦そよいでいる。

どことなく魚臭いものが迫る。陸おかが近づいたのだ。船から呼ばわる声と、陸でわいわいという声が、徐々に、距離をちぢめていた。

どぼーんと、真っ白なしぶきが立つ。錨いかりが抛ほうりこまれたのであ

る。繫綱もやいが投げられる——渡り板が架かけられる。

「かしわ屋でございませうが」

「住すみよし吉よしの社家しやけの息子さまは、この船にござらっしやらぬか」

「飛脚屋さんはいるかね」

「旦那様あ」

渡海場の埠頭ふしとうにかたまっていた迎えの提燈ちようちんは、灯の波を作つて船の横へ迫つてゆく。

その中を、例の美少年が、揉もまれて降りて行つた。肩に小猿を乗せている姿を見て、旅籠はたごの客引きが二、三人、

「もしもし、猿えてのお泊り賃は、無料ただにいたしておきますが、私どもへお越しくださいませぬか」

「てまえどもは住吉の門前で、ご参詣にもよし、座敷の見晴らしも至極よいお部屋がございませうが」

それらの者には一顧いっこもせず、そうかといって迎えに来ている知人もないらしく、美少年は小猿をかついで、真みなとつ先にこの湊から姿を消してしまった。

それを見送って、

「何んていう生意気なやつだろう。すこしばかり兵法が出来ると思つて」

「まったく、あの若造のために、船の中は半日、みんな面白くな
く暮してしまった」

「こつちが町人でなければ、あのままただでこの船を降ろすのじ

やないが」

「まあまあ、侍には、たとと威張らせておいてやるがいいさ。肩で風を切つていれば、それで気が済むんだから他愛はない。わしら町人は、花は人にくれても、実を喰おうという流儀だから、今日ぐらいな忌々^{いまいま}しさは、仕方があるまいて」

こんなことをいいながら、荷物沢山な旅すがたを揃えて、ぞろぞろ降りて行ったのは例の堺や大坂の商人^{あきんどれん}連であり、そこへは無数の出迎えが、提燈^{ちようちん}や乗物をあつめ、一人一人に、幾人かの女の顔も取り巻いていた。

祇園^{ぎおん}藤次は、誰よりも後から、こつそりと陸^{おか}へ上がっていた。形容のできない顔つきである。不愉快といって、きょううほど不

愉快な日はなかったに違いない。鬚まげをちよん切られた頭には、頭巾をかぶせているが、眉にも唇くちにも、暗澹とただよっている。

と。——その影を見つけ、

「もし……ここですよ、藤次さま」

その女も、頭巾をかぶっていた。渡海場に立つて吹き曝さらされたいた顔が、寒さに硬こわばって、年をかくしている皺しわが、白粉おしろいの上に出ている。

「お、お甲か。……来ていたのか」

「来ていたのかつて、ここへ迎えに来ているようにと、私へ手紙をよこしたくせに」

「だが、間にあうかどうか、と実は思っていたものだから」

「どうしたんですえ、ぼんやりして——」

「イヤ、すこし、船に暈よつたとみえる……。とにかく、住吉へでも行つて、よい宿を見つけよう」

「え、あちらに、駕も連れて来ましたから」

「そいつは有難う、じゃあ宿も先に取っておいてくれたか」

「みな様も、待ちかねているでしょう」

「え？」

意外な顔して、藤次は、

「オイお甲、ちよつと待つてくれ。おまえとここで落ちあつたのは、二人ぎりどころか静かな家で二、三日悠ゆつくりしようという考えじゃないか。……それを、皆様とは一体、誰と誰のことをい

うのだ」

二

「乗らない。わしは乗らない」

祇園藤次は、迎への駕を拒んでふんぷん怒りながら、お甲の先へ歩いていった。

お甲が何かいうと、

「ばかつ」

と、ものをいわせない。

彼をして、こう立腹させた原因は、お甲が告げた新しい事情に

も因もとづくが、すでに船の中からもやもやしていた鬱憤が、あわせ
て今、爆発したことは否いなめない。

「おれは、一人で泊るつ。駕なんか追ッ返せ。なんだ。人の気も
知らないで、ばかつ、ばかつ！」

と、袂たもとを払う。

河の前の雑魚ざご市場は、みな戸が閉まつて、魚の鱗うろこが、貝をちら
したように、暗い長屋の戸に光っていた。

そこまで来ると、人影も少なくなつたので、お甲は、藤次に抱
きついた。

「およしなさい、見ツともない」

「離せっ」

「一人で泊ったら、あつちが変なものになりますよ」

「どうにでもなれっ」

「そんなこといわないで」

おしろい

白粉と髪の香の、冷たい頬が、藤次の頬へ貼りついた。藤次

はやや旅の孤独から甦よみがえつた。

「……ネ、頼みますから」

「がっかりした」

「そうでしょう、だけど、二人にはまたいい機おりがあるでしょう」

「おれは、せめて大坂で二、三日は二人ぎりと、楽しみにして着いたのだ」

「分つてますよ」

「わかつていいるなら、なぜ他ほかの者を引ツ張つて来たのだ。俺が思つていいるほど、おまえは俺を思つていらないからだろう」

藤次が責めると、

「また、あんな……」

と、お甲はうらめしげな眼をこらして、泣きたいような顔をして見せる。

彼女のいい訳は、こうだった。

藤次から飛脚を受け取ると、彼女は勿論、自分だけで大坂へ来るつもりだった。ところが折わるく、吉岡清十郎がその日もまた、六、七名の門人を連れて「よもぎの寮」へ飲みに来て、いつのまにか、朱実あけみの口から、そのことを聞いてしまい、

（藤次が大坂へ着くなら、わしらも迎えに行つてやろうじやないか）

といい出した。それに調子をあわせる取り巻き連も多く、
（朱実も行け）

と、いう騒ぎになつてしまい、いやともいえずお甲は一行十人ほどの中に交まじつて住吉の旅館に落着き、一同の遊んでいる間に、自分だけ一人で駕を持ってここへ迎えに来たのだという。

——聞いてみれば、事情はやむを得ないものだったが、藤次は腐りきつてしまった。今日という日に迷信がわき起るほど、何か、後にも先にも、不愉快ばかりが考えられた。

第一、陸おかを踏むとすぐ、清十郎だの同輩だのに、旅先の首尾を

聞かれることが辛い。

いやもつと嫌なことは、この頭巾を脱ぐことである。

(何といおう)

彼は、鬚まげのない頭を苦に病んだ、彼にも侍というものの面目はある。人に知られない恥なら搔いてもよいが、人にわかる恥を重大に思う。

「……じゃあ仕方がない、住吉へ行くから駕を連れて来い」

「乗ってくれますか」

お甲はまた、渡海場のほうへ、駈け戻った。

この夕方、船で着く藤次を迎えに行くといつて出たお甲は、まだ帰って来ない。その間に、同勢は風呂にはいり、旅舎やどのどてらきんぐくに着膨れて、

「やがて、藤次もお甲も見えるだろう、その間、こうしていてもつまらんじやないか」

飲んで待つていようということになったのは、この同勢として、当然な納まりであつた。

藤次の顔が見えるまでのつなぎとして飲んでいたうちはいいが、いつの間にか膝がくずれ、杯がみだれ出すと、もうそんな者はどうでもよくなつてしまい、

「この住吉には、唄うたい女めはいないのか」

「きれいなのを三、四人呼よぼうじやないか。どうだ諸しよ卿けい」
と、病気が始まる。

(よせ、つまらない) などという顔は、この中には一つもない。
ただ師の吉岡清十郎の顔いろを多少は憚ばるのであつたが、

「若先生には、朱実が側についているから、別間のほうへ、お移り願ねがおうじやないか」

横着な奴らかなと清十郎はにが笑わらいする。けれど、それは自分
に取つても好ましい。炬燵こたつのある部屋に入つて、朱実とふたりで
差し向うほうが、この同勢と飲んでいるより、どれほどいい人生
かわからない。

「さあ、これからだ」

とは門人どもが、門人だけになってからの発声だった。やがて程なく十三間川とさまがわの名物という怪しげな唄うたい女めが笛、三味線などのひねこびた楽器を持って庭にあらわれ、

「いったい、あんたはん達は、喧嘩するのかいな、酒あがるのかいな」

と訊ねる。

すでによほど大トラになっている一人が、

「ばかつ、金を費つかつて喧嘩する奴があるか。おまえたちを呼ぶからには、大いに飲んで遊ぶのだ」

「じゃあ、まちつと、静かにあがりやはつたらどうかいな」

手際てぎわよく扱あわれて、

「然ほらば、歌おう」

抛ほうり出していた毛脛けずねをひつ込めたり、横よこにしていた体を起して、絃歌げんかようやく盛もんならんとする頃ときおい、小女こむすめが来て、

「あの、お客様おきゃくさまが、船ふねからお着ききなさいまして、ただ今いま、お連れ様さまといっしよに、ここへきやはりまする」

と、告つげて行いった。

「なんだ、何が来きたと」

「藤次とうじといつた」

「冬至とうじ冬至とうじ、魚とつとの目めか」

お甲かたと祇園藤次ぎげんとうじは、あきれ顔かほして部屋へやの口くちに立たっていた。誰たれも

彼を待ったらしい者は一名もないのだった。藤次は、一体何のため、この年末この同勢が、住吉へなど来ているのかと疑った。

お甲にいわせれば自分を迎えに来たのだというが、どこに自分を迎えに来たらしい人間が一人でもいるか、むっとして、

「おい、おんな下婢」

「はい」

「若先生は、どこにいらつしやるか、若先生のいる部屋へ行こう」
廊下をもどりかけると、

「よう、先輩、ただ今お帰りか。——一同が待っておるのに、お甲などと、途中でよろしくやっているなんて、この先輩、怪けしからんぞ」

大トラが立ち上がって来て首の根にかじりついた。たまらない臭気を放つ。逃げようとしたので、トラは強引に座敷へ引きずり込んだ、そして、膳を踏みつけたから形のごとく杯盤はいばんろうぜき狼藉ろうぜきを作つて、共倒れに仆れた。

「……あつ、頭巾を」

藤次は、あわてて自分のそれへ手をやったが遅かった。辻すべつた拍子に、トラは彼の頭巾をつかんで後ろへ腰をついていた。

四

「あれ？」

と、奇異な感じに打たれたように、一座の眼は、藤次の鬻まげのな
い頭にあつまつて、

「頭をどうかなされたので？」

「ホホウ、奇妙なお髪ぐし」

「どうしたわけでござる」

無遠慮な凝視を浴び、藤次は狼狽に顔をどす赤くして、頭巾を
かぶり直しながら、

「いや、ちとな、その腫物しゅもつができたので」

と、誤魔化ごまかしたが、

「わははは」

と、皆笑いくずれ、

「旅土産たびみやげは、腫物できものでござったか」

「できものに閉じ蓋とふた」

「頭かくして尻かくさず」

「論より証拠」

「犬も歩けば——」

などと駄洒落だじゃれをいって、誰も藤次のいいわけを真まに受けないのである。

その晩は、酒の興で済んだが、次の日になるとこの同勢が、ゆうべとは打って変って、旅舎やどのすぐ裏の浜辺に出て、天下の大事でも議すように、

「怪しからん沙汰だ」

と、肩を昂^あげ、唾^{つば}をとばし、肱^{ひじ}を突つ張つて、小松の生えている砂地に円^{まる}く坐つていた。

「——だが慥^{たし}かか、その話は」

「この耳で、おれが聞いたのだ、おれが嘘をいうと思うのか」

「まあ、そう怒るな、怒つてみたところで仕方がない」

「仕方がないで黙過することはできん。いやしくも天下の兵法所をもつて任じる吉岡道場の名折れだ、断じて、これを捨ておくことはできないぞ」

「しからば、どうするのだ」

「これからでも遅くあるまい。その小猿を連れて歩いている前髪の武者修行を捜^{さが}し出す！ どんなことをしても捜し出す！ そし

て、彼奴きやつの鬻まげをちよん切つて、祇園藤次ずれの恥辱じやない、吉岡道場の存在おごそを厳かにする。——異議があるか」

ゆうベトラになつた酔うそぶっぱらいが、洒落しやれていえば、今日は龍となつて嘯うそぶくかのように、趣おもむきをかえて、激昂げつこうしているのだ。

その動機をたずねると、こうなのである。——今朝がた、彼らはが特に朝風呂を命じて、宿ふつかよい酔あぶらの脂あぶらをながしていると、そこへ入浴はいつて来た相客の者で、堺さかいの町人というものが、きのう阿波から大坂へくる便船のうちでは、実におもしろいことがあつたといつて、例の小猿たざさを携たざさえている美少年のうわさを語り、祇園藤次が鬻まげを切り落された由来に及んでは、手真似、顔つきまでして、

(なんでもその鬻を切られたほうの侍は、京都の吉岡道場の高弟

だつていつていたが、あんなのが高弟じや吉岡道場もざまはないことおかしげに、湯に入っているうち喋舌しゃべつて行つた。

彼らの憤激はそれから始まつたものである。怪けしからぬ先輩と、祇園藤次をつかまえて詰問に及ぼうとすると、藤次は今朝早く、吉岡清十郎と何か話していたが、朝飯をたべるとすぐ、お甲とふたりで、先へ京都へ発たつてしまつたという。

いよいよもつて、うわさは事實にちがいない。そういう腰抜けの先輩を追いかけるのは愚かである、追うならばどの何者かわからないが、自分たちの手で、小猿を携えた前髪を捕まえ、存分に、吉岡道場の汚名をそそいでやろうじやないか。

「——異議があるか」

「勿論、ない」

「しからば——」

と、手筈をしめし合せ、その同勢は、袴はかまの砂を払って立ち上がった。

五

住吉の浦は、眼のおよぶ限り、白薔薇しろばらをつないだような波である。冬とも思えない磯の香が陽に煙っている。

朱実あけみは、白い脛はぎを見せて、波に戯れながら何か拾って見ては捨てていた。

何事が起つたように、吉岡の門人たちが思い思いな方角へ向い、刀のこじりを^は刎ね上げて分れて行くのを眺めて、

「オヤ、何だろう」

朱実はまるい眼をしながら、波打ち際に立って見送っていた。いちばん最後になった門人の一人は、彼女のすぐ側を駈けて来たので、

「何処へ行くのです」

声をかけると、

「オ、朱実か」

足を止めて――

「おまえも一緒になつて^{さが}捜さんか。ほかの者もみな手分けして、

捜しに行つたんだ」

「何を捜しに行つたんです」

「小猿を携えている前髪の若い侍さ」

「その人がどうかしたのですか」

「^{ほう}抛つておいては、清十郎先生のお名まえにもかかわるのだ」

祇園藤次の飛んでもない置土産の一件を話して聞かすと、朱実
は興もない口^{くちぶり}吻で、

「皆さんは、始終喧嘩ばかり捜しているんですね」

と、たしなめ顔にいう。

「何も喧嘩を好むわけじゃないが、そんな青二才を、黙つて捨て
ておいては天下の兵法所たる京流吉岡の名折れになるじゃないか」

「なつたつていいじやありませんか」

「ばかいえ」

「男つて、ずいぶんつまらないことばかり捜して、日を暮しているんですね」

「じゃあ、おまえは、さつきからそんなところで何を捜しているんだ」

「わたし——」

朱実は、足もとのきれいな砂へ、眼を落して、

「わたしは、貝殻を見つけているの」

「貝殻？ ……それみろ、女の日の暮し方のほうが、なおくだらないじやないか。貝殻など何も捜さなくつても、天そらの星ほど、こ

んなに落ちている」

「わたしの捜しているのは、そんなくだらない貝殻じゃありません。わすれ貝です」

「わすれ貝、そんな貝があるものか」

「ほかの浜にはないが、この住吉の浦にだけはあるんですって」
「ないよ」

「あるんですよ」……いい争って、朱実は、

「嘘だと思うならば証拠を見せてあげますからこつちへ来てごらんなさい」

と、ほど遠からぬ所の松並木の下へ、無理やりにその門人を引っぱって来て一つの碑いしぶみを指した。

いとまあらば

ひろひに行かむ住吉の

きしに寄るてふ

恋わすれ貝

新勅撰集のうちにある古歌の一首がそれには刻んである。朱実は誇つて、

「どうです、これでもないといえますか」

「伝説だよ、取るにも足らん歌よみの嘘だ」

「住吉にはまだ、わすれ水、わすれ草などという物もあるんです」

「じゃ、あるとしておくさ。——だが、それが一体何のおまじない禁厭い」

になるのかい」

「わすれ貝を帯かたもとの中へ秘かくしておく、物事が何でも忘れ
つぽくなるんですとき」

「その上、もつと忘れつぽくなりたいのかい」

「ええ、何もかも忘れてしまいたい、忘れられないために、わた
しは今、夜も寝られないし、昼間もくるしいんです。……だから
捜しているの。あんたも一緒になつて捜してくださいよ」

「それどころじゃない」

思い出したように、その門人は足の向きを変えて、どこかへ駈
けて行ってしまった。

六

——忘れたい。

苦しくなると、そう思うほどだったが、また、

「忘れたくない」

朱実は、胸を抱いて、矛盾の境さかいに立った。

もしほんとにわすれ貝という物があるならば、それはあの清十郎の袂へこそ、そつと入れてやりたい。そしてこの自分という者を彼から忘れてもらいたいと、ため息ついて思う。

「執しつこい人……」

思うだけでも、朱実は心がふさいだ。自分の青春をのろうために、あの清十郎は生活しているような気もちにさえ襲われる。

清十郎のねばり濃い求愛に、心が暗くなる時は、必ずその心のすみで、彼女は武蔵むさしのことを考えた。——武蔵が心にあることは、救いであつたが、また苦しくもなつて来た。なぜならば、遮二無二に今の境遇を切り解ほどいて現在の身から夢の中へ、駈け出してしまいたくなるからだつた。

「……だけど？」

彼女は、しかし幾たびもためらつた。自分はそこまでつき詰めているが、武蔵の気もちはわからなかつた。

「……アアいつそのこと忘れてしまいたい」

青い海が、ふと誘惑でさえあつた。朱実は、海を見つめていると、自分が怖くなつた。何のためらいもなく、真つ直にそこへ向

つて駈けて行かれる気がするのである。

そのくせ自分がこんなつき詰めた考えを抱いているなどということ、およそ彼女の養母のお甲も知らない。清十郎も思わない。誰でも朱実と一つに暮した者は皆、この娘は至つて快活で、お転婆で、そしてまだ、男性の恋愛が受け取れないほど開花の晩い質だと思ひこんでいるらしいのである。

朱実はそんな男たちやまた養母を、心のうちであかの他人に思つていた。どんな冗戯でもいえるのである。そしていつも鈴のついた袂を振つて、駄々っ子みたいに振舞つているのだつたが、独りになると、春の草いきれのように熱いため息をついていた。

「——お嬢さま、お嬢さま。さつきから先生がお呼びでございま

すよ。どこへ行つたのかと、えらいご心配になつて」

旅舎やどの男だつた。彼女のすがたを碑いしぶみのそばに見つけて、こうい
いながら走つて来た。

朱実がもどつて行つて見ると、清十郎はただひとりで、松かぜ
の音を静かに閉たてこめた冬座敷で、緋ひの蒲団ふとんをかけた炬燵こたつに手を
入れてぼつねんとしていた。

彼女のすがたを見ると、

「どこへ行つていたのだ、この寒いのに」

「才才嫌だ、ちつとも寒くなんかありやしない。浜はいっぱいに
陽があたっていますもの」

「何していた」

「貝をひろっていたの」

「子どもみただいな」

「子どもですもの」

「正月が来たら幾歳いくつになると思う」

「幾歳になつても子どもでいたい……いいでしょう」

「よかあない。すこしは、おふくろの案じているのも考えてやれよ」

「おつ母さんなんか、何も私のことなんか考えているものですか。自分がまだ若い気ですもの」

「ま、炬燵こたつへお入り」

「炬燵のぼせなんか、逆上るから大つ嫌い。……私はまだ年寄りじゃあ

りませんからね」

「朱実」……手くびをつかんで、清十郎は膝へ引き寄せた。

「きようは誰もいないらしい。おまえの養母おふくろも、粹をきかして先へ京都へ帰ったし……」

七

ふと清十郎の燃えている眼を見て、朱実はからだこわが硬ばってしまつた。

「……………」

無意識に身を退ひきかけたが、彼の手は、彼女の手くびを離さな

い。痛いほど握りしめ、

「なぜ逃げる？」

とがめるように額ひたいに青すじを立てる。

「逃げやしません」

「きようは皆、留守なのだ、こういう折はまたとない。そうだろう朱実」

「なにがです」

「そう棘とげとげ々しくいうな。もうおまえと馴染なじんでから小一年、お

れの気持もわかつたはず、お甲はどうに承知なのだ。おまえがおれに従わないのは、おれに腕がないからだとの養母おふくろはいつている。……だから今日は」

「いけません！」……突然、朱実は俯^うツ伏して、

「——離してください、この手をこの手を」

「どうしても」

「嫌、嫌、嫌ですっ」

手くびは捻じ切れそうに赤くなってくる。それでも清十郎は離さないのである。こういう場合に京八流の兵法が応用されては、いかに彼女が争っても無駄であろう。それにまた、きよ^ようの清十郎はいつもとやや違っていた。いつも自暴^{やけ}に酒を仰飲^{あお}つて執こくからむのだが、きよ^ようは酒気はないし、青白い顔をしているのだつた。

「——朱実、おれをこうまで意地にさせて、おまえはまだ、おれ

に恥をかかすのか」

「知らないっ」

朱実は遂に、

「あたし、大きな声を出しますよ。離さないと、みんなを呼ぶくらいいい」

「呼んでみい！ ……。この棟は母屋おもやから離れているし、誰も来るなど断つてあるのだ」

「わたし帰ります」

「帰さん！」

「あなたの体じゃありません」

「ば、ばかつ。 ……おまえの養母おふくろに聞け、おまえの体には、おれ

の手から身代金ほどの金が、お甲へやってあるのだ」

「おつかさんが私を売り物にしても、私は売った覚えはない。死んだって、嫌な男なぞに」

「なにつ」

緋ひの炬燵こたつぶとんが、朱実の顔を押しかぶせた。朱実は心臓のつぶれるような声をあげた。

……呼べど、呼べど、誰も来なかつた。

ひんやりと薄陽のあたっている障子には、何事もなげに、松のかげが遠い潮鳴りのように揺れているに過ぎない。外は、あくまで静かな冬の日であつた。チチ、チチ、とどこかで、人間の無残な振舞いとはおよそ遠い小鳥の声がしていた。

……ほど経^たつて。

その障子のうちで、わつと号泣する朱実の声がもれた。

しいんとして、ややしばらくのあいだ、人の声も気はいもしないでいると思うと、清十郎が青じろい顔を持って、ついと、障子の外へすがたを現わした。

爪で引つ搔かれて血になった左の手の甲を抑えながら——
すると同時に、ぐわらつと突き破るように障子を開けて、朱実が外へ走つて行つた。

「あつ！ ……」

清十郎は身伸びびをして、手^{てぬぐい}拭で巻いた手を抑えながら、見送つてしまった。——捕まえる間もなかつたのである。まるで、発

狂したような迅はやさと取乱した彼女の姿であつた。

「……………」

ちよつと、不安そうな眼をしたが、清十郎は、追つて行かなかつた。——どこへゆくかと見ていた朱実の影がやはり旅舎やどのうちの一ひと間まへ、庭のほうから入つてかくれ込んだ様子なので、ほつとするとともに、或る満足感を皮膚の下へたたえて、薄い笑いをその顔ゆがに歪ゆがめていた。

無常

「これよ、権ごん叔父おじ」

「おい、なんじやあ」

「おぬし、くたびれぬかよ」

「いささか気け懶だるうなっておる」

「そうじやろが、この婆もちと、きようは歩ひ行ろい飽ひいた。したが、

さすがに住吉やしろの社やしろ、見事な結構ではある。……ホホ、これが若宮

八幡の秘木とかいう橘の樹かいの」

「そうとみえる」

「神功じんくう皇后さまが、三三さんさん韓かんへご渡海なされた折に、八十艘そうちの貢みつ

ぎ物もののうちの第一のみつき物がこれじゃといういい伝えじゃが」

「婆よ、あの神馬しんめ小屋にいる馬は、よい馬ぞよ。加茂の競くらべ馬うまに出したら、あれこそ第一でがなあろうに」

「ムム、月毛じやの」

「何やら立て札があるわ」

「この飼料かいばのおん豆を煎せんじて飲のますれば、夜泣き、齒はぎしりが止むとある。権叔父、おぬし飲のむがええ」

「ばかをいわしやれ」

笑いながら見廻して、

「おや、又八は」

「ほんに、又八はどこへ行つたぞいな」

「ヤア、ヤア、あれなる神楽かぐらの殿でんの下に足をやすめているわ」

「又よう。又ようっ——」

婆は手をあげて、

「そつちやへ行くと、元の大鳥居の方へ出るのであろうが。——
高燈籠のほうへ行くのじゃがな」

と呼ぶ。

又八は、のそりのそり歩いて来た。この婆ばばとこの爺じじを連れにし
て、毎日こう歩いてばかりいるのは、彼としてかなりの我慢らし
く見える。それが五日や十日の見物というならまだしも、宮本武
蔵という敵と巡り会って討ち果すまでの長い旅かと思うと、なん
としても、憂鬱にならざるを得ない。

三人つながって歩いていても無益であるから、各 わかれて、

自分は自分で武蔵の所在ありかをさがすから——と提議してみたが、
（もうやがてすぐ正月、久しゆう母子おやこ一緒に屠蘇とそを酌くまぬし、いつ何時、これがこの世の名残りとなるかも知れぬお互いの身、せめて、ことしの正月だけは、ともに過むげごそうではないか）

母がいうので、又八は無下むげにもできなかつた。元日か二日が過ぎたらすぐ別れようと思う。だが、婆も爺も、先の短いせいか、
仏ほとけ性しょうがあるというのか、神社仏閣というといちいちお賽さい銭せんを奉つたり、長々と祈願をこめたりばかりしていて、今日も、この住吉だけで、ほとんど一日暮れてしまふそうだ。

「はよう来ぬか」

鈍どん々どんたる足つきで、顔をふくらませて来る又八をながめて、

お杉隠居は、若い者のように焦れた。

「勝手なことをいつてら」

又八は、口返答して、少しも足を早めないのだ。

「人を待たせる時は、いくらでも待たせておいて」

「何をいうぞ、この息子は。神さまの靈域へ来たら、神さまをおがむのは人間のあたりまえなことじゃ。おぬし、神にも仏にも手を合せたのを見たことがないが、そういう量見では、行く末が思いやらるる」

又八は、横を向いて、

「うるせえな」

それを聞き咎めてまた婆が、

「何がうるさいのじや」

初めの二、三日こそ、母子おやこの愛情は蜜より濃やかであつたが、馴れるにつれ又八が、事ごとにててを突いたり老母を小馬鹿にしたりするので、旅籠はたごに帰るとお杉隠居は、この息子を前に坐らせ、毎夜のようにお談義ばかりであつた。

それが今、ここで始まりそんな気色なので権叔父は、こんなところで開き直られては閉口と、

「まアまア、まアまア」

と、母子ふたりをなだめて歩み出した。

困った母子おやこだと権叔父は思う。

何とか、隠居のきげんを直し、又八のふくれ面つらもなだめたいものだと、双方に気をつかつて歩いてゐる。

「ホ、よいにおいがすると思つたら、あれなる磯茶屋で、焼きはまぐり蛤をひさいでおる。婆よひとしやく一酌よしずやろうではないか」

高燈籠の近くにある海辺の葭簀茶屋よしずであつた。気のすすまない顔つきの二人を誘つて、

「酒あるか」

権叔父は先へ入つて行く。

そして、

「さ、又八もきげん直せ。婆もちとやかまし過ぎるぞよ」

杯を出すと、

「飲みとうない」

お杉隠居は、横を向く。

引つ込みを失つて、権叔父はその杯を、

「じゃあ又八」

と、彼へ酌さした。

むツつりむツつり又八はたちまち二、三本ほど飲みほしてしま
う。それが老母の気に喰わないことは勿論である。

「おい、もう一本」

権叔父をさし措おいて、又八が四本目を求めると、

「いい加減にしやれ！」

と、婆は叱つた。

「遊山ゆざんや酒のむためのこの旅かよ。権叔父も、ほどにしたがよい。幾歳いくつになつても、又八と同じように、年がいもない人じゃ」

きめつけられた権叔父は、独りで飲んだように真つ赤になつた顔の遣り場やばを失つて、てれ隠しに撫で廻し、

「そうじゃ、ほんに違くない」

のそのそ先に軒先へ出てしまう。

その後で始まつたらしい。又八をつかまえてお杉隠居じゆんじの諄

々ゆんたる訓戒である。この烈しくて脆もろい女親の憂いと愛は、わが

子にその本能を揺り起すと、とても宿屋へ帰るまで待つていられ

なかった。他人ひとがいようといまいと気にもかけない。——又八はそれに対して憤むつとした反抗を顔に示して睨ねめ返かえしている。

いうだけいわせて、

「おふくろ」

こんどは又八からいい出した。

「じゃあ、この俺という人間を、おふくろは結局、意気地なしの腰ぬけの、親不孝者と折紙つけているのだな」

「そうじゃろが、今日まで、汝われにして来た行状のどこに意気地のあるところがあるかよ」

「俺だつて、そう見くびった者じゃない。おふくろなどに分るものか」

「わからいでか、子を見ること親に如かずじや。汝れのような子を持ったが、本位田家の不作というもの」

「だまって見ている、まだおれは若いのだ。婆あめ、悪たれいうて、草葉の蔭から後悔するな」

「才才、その後悔ならしてみたい。だが恐らくは、百年待っても覚つかないことじやろう。思えば、嘆かわしい」

「嘆かわしい子なら持つていても仕方があるまい。おれから去つてやる」

憤然と、又八は立った。そして、ぷいと大股に彼方へ歩き出して行くのだった。

婆は、あわてて、

「こ、これっ」

と、ふるえ声で呼び止めたが又八は振り向かなかつた。——止めてくれてもよさそうな権叔父はまた権叔父で、何を暢のんき気な顔して見ているのか、海のほうに向つて、じつと、大きな眼をすえたきり動かない。

そこで、婆は、いちど上げた腰を床しやうぎ几にもどして、「権叔父っ、止めるでない。止めるでないぞよっ」

三

その声に、

「婆」

権叔父は答えて振り向いたが、いうことは、隠居の期待とちがつていた。

「あの女子おなご、なんとも、いぶかしいわ、ちよつと、待つてくれい」
 いうが早いつるか、権叔父は、蛤茶屋はまぐりの軒先へ笠ぼうを抛なつて、まるで弦つるから放たれたように、海へ向つて駈け出して行つた。

隠居は、おどろいて、

「阿呆あほうつ、どこへおじやるツ、それところじやないわ！ 又八がつ——」

と、彼につづいて十間ほど駈けて行つたが、磯いその藻草もぐさに足をか
 らまれて、勢いよく前へ転んだ。

「ば、ばかつ」

顔も肩も、砂だらけになって、婆は這い起きた。

そして腹立たしげに、権叔父の姿を捜していた眼が、突然、鏡

のように大きくなつたと思うと、

「馬鹿つ、馬鹿つ」

と連呼して、

「気が狂うたかつ、どこへ行くのじやつ、権叔父つ」

と彼女までが、発狂したのではあるまいかと疑われるような血相で、権叔父の駈けて行つた海へ向つて、彼女も駈け出して行つたのである。

——見ると。

権叔父はもう海へ入っていた。このあたりは至つて遠浅なので、まだ水は脛すねのあたりまでしか浸つかっていないが、夢中になつて沖へ沖へと駈けてゆくので、その飛沫しぶきは、駈けてゆく彼のすがたを包み、真つ白に煙っている。

ところが——その権叔父の前にも、もう一人の若い女が、凄まじい勢いで、海へ駈けこんで行くではないか。

初めに、権叔父がその女を発見した時は、女は松原の蔭にたたずんで、じつと海の碧あおさを見つめていたが、アツ——と思つた時は、黒髪をちらしているその姿は、もう飛沫を蹴つて、真一文字に海へ駈けていたのであつた。

だがこの浦は前にもいったとおりの五町六町の沖まで潮が浅いの

で、先に走ってゆく女の姿も、まだ脚の半分ほどしか隠れていない。

白い水けむりを浴びて、赤い袖裏や金糸の帯が光っている。あたかも たいらのあつもり 平 敦 盛 が駒を沈めて行くかのように見えるのだった。

「女あツ……！ 女つ……。おういッ！ ……」

やっと、間近まで追いついて、権叔父がこう呶鳴つたとたん——そこから急に底が深くなっているのであろう、ガボと、異様な一声を水面に残して、女のすがたは不意に大きな波紋の下にかくれてしまった。

「やれ不心得者つ、やはり死ぬ気か」

ずぶずぶと、権叔父も同時に、全身まで沈みこんで行った。

岸では、隠居が、波打ち際に沿って横へ駈け廻っていた。

一抹まっの水けむりと共に、女の影も、権叔父のすがたも見えなくなる、

「あれつ、あれつ、誰ぞ、早く行かねば、間にあいはせぬつ。二人とも死んでしまわッ」

と、まるで他人ひとのせいみたいわめに喚いて、

「はよう、助けに行けつ、浜の者つ、浜の者つ」

と、転んだり駈けたり、また、手を振り廻したり、自分が溺れるかのように騒いでいた。

四

「心中か」

「まさか……」

と、救つて来た漁師^{りようし}たちは、砂の上へ寝かした二つの体を見てわらつた。

権叔父のからだは、慥^{しっか}乎と若い女の帯をつかんでいた。そのふたりとも、息はなかつた。

若い女は、髪の毛こそ、根が切れて乱れていたが、まだ生きてるように、化粧の白粉^{おしろい}や口紅^{べに}が浮き立っていた。紫いろになつた唇をチラと嚙んで笑っているのである。

「オオ、この女は見たことがあるぜ」

「さつき浜べで、貝殻をひろっていた女じゃないか」

「そうだ、あの宿屋に泊っている女だ」

そこへ報^しらせに行くまでもなかつた。むこうから四、五人して駈けて来るのがその宿屋の者らしく、中に、吉岡清十郎の顔も見える。

ここの人だかりに、さてはと息を喘^せいて来た清十郎は、

「おつ、朱実^{あけみ}だ」

真つ蒼になつて——しかし人前^{はばか}を憚る^{はばか}ように、棒立ち^{すく}に恟^{すく}んでしまつた。

「お侍、おめえの連れか」

「そ、そうだ」

「はやく、水を吐かしてやんなせえ」

「た、たすかるか」

「そんなことをいつてる間に」

と、漁師たちは、権叔父と朱実と、両方のからだに分れて鳩みぞお尾ちを押したり、背をたたいたりした。

朱実は、すぐ息をふき甦かえした。清十郎は宿舎やどの者に負わせて、人目から逃げるように旅舎へ帰って行った。

「権叔父よ……権叔父よ……」

お杉隠居は、さつきから権叔父の耳へ顔をつけたきり泣いていた。

若い朱実は、蘇生したが、権叔父は老体でもあるし、すこし酒気もあつたので、まったく絶息したものとみえる。いくらお杉隠居が呼んでも、ふたたびその眼は開かなかつた。

手をつくした漁師たちも、

「この老としより人のほうは駄目だ」

と、さじを投げた。

そう聞くと、隠居はもう涙を見せなかつた。せつかく、親切にしてくれる人々へ、

「何がだめじゃ！ 一方の女子おなごが息をふき返したのに、この者ばかり生きぬという法があるうか」

食ツてかかるような権けんまくで、手を出している者たちを突き退の

け、

「この婆が活かして見せるわ」

と、必死になつて、あらゆる手当を施すのだった。

その一心不乱な様子は、見るも涙ぐましい程であつたが、そこに居合わす者を、まるで雇^{やといにん}人か何ぞのように、やれ押し方が悪いの、そうしては効がないの、火を焚^たけの薬を取つて来いのと、権突^{けんつ}くと顎の先で使うので、縁もゆかりもない浜の者たちは腹を立てて、

「なんだ、このくそ婆」

「死んだ者と、氣絶した者とはちがうのだ、活かせるものなら活かしてみろ」

眩きあつて、いつの間にか、皆ちりぢりにそこを去つてしまつた。

浜べはもう暮れかかる、うす靄もやの沖に、橙だいたいいろ色の雲がわずかに夕明りを流していた。婆はまだ思い諦めあきらようとしなない。そこに火を焚たいて、焚火のそばへ権叔父を抱き寄せ、

「おういつ、権叔父……権叔父……」

波は暗くなつた。

燃やしても燃やしても、権叔父の体は温かくならなかつた。だが、お杉隠居は、まだ不意に権叔父が口をきき出すもののように信じて疑わないらしく、印籠の薬を噛んで唇移くちしにふくませたり、体をかかえて揺すぶつたりしながら、

「まいちど、眼を開いて下され、ものをいうてたもい。……これ、
 どうしたもののじゃ、この婆を見捨てて先へ逝くという法があるう
 か。——まだ武蔵も討たずに、お通阿女の成敗も果さぬのに」

旧約

一

海鳴りと松かぜに暮れてゆく障子のうちに、朱実あけみはうつらうつ
 ら昏睡こんすいしていた。枕を当てがわれると急に発熱して、頻りとそ
 れからは嘔言うわごとをいう。

「……………」

枕の上の顔よりも青じろい顔して、清十郎はその側に寂然じやくねんと坐っていた。自分が蹂み躪ふにじった花の痛々しい苦悶くもんに対して、自責せきこうべの首を垂れたまま、さすがに彼の良心も苦悶しているらしい。

野獣にもひとしい暴力をふるって、この明朗な処女おとめを本能の餌えにして満足を感じたのも彼という人間だし、また枕まくらもと許もとにつき切って、精神的にも、肉体的にも、一時人生を失ったその処女の呼吸や脈搏を心配しながら、じつと、厳肅そのもののように硬こわばっている良心的な人間も、同じ吉岡清十郎なのである。

一日という短い生活のうちに、そういう矛盾の甚だしい二つの自己を息づかせながら、しかし当の清十郎は、それが必ずしもお

かしくはないように、沈痛な眉と、慚愧ざんきの唇を結んでいた。

「……落ちついてくれ、朱実。おればかりじゃない、男とはたいがいこうしたものだ。……今におまえだつて分つてくれる日がある。おれの愛があまりに烈し過ぎたのでおまえは驚いてしまったのだらうが」

こういう繰り言ことを、彼は、朱実へ対していうのか、自己をなぐさめるためにいうのか、纏てんめん綿めんとさつきから枕許まくらごに坐つて呶つぶやいてるのであつた。

墨をながしたように部屋の中は陰惨としていた。朱実の白い手がばたんと時々夜具の外へ出る。夜具をかけてやるとまた、うるさそうにそれを払う。

「……きようは何日？」

「え？」

「後……幾日で……お正月」

「もう七日ばかりじゃないか。なにか正月までには癒なおるよ、元日までに、

京都へ帰ろう」

清十郎が顔を寄せると、

「嫌あ——ッ」

突然、泣くように、顔の上の顔を平手で打って、

「あつちへ行けっ」

と、罵ののしった。

狂わしい声が続けさまになおその唇から走るのだった。

「ばかつ、けだもの獣つ」

「……………」

「獣だ、おまえなんか」

「……………」

「見るのも嫌」

「朱実、かんにんしてくれ」

「うるさいっ、うるさいっ、うるさいっ」

必死になって白い手が闇を打つのである。清十郎は苦しげに息を嚙のんでその狂態を眺めていた。やや落ちついたと思うとまた、

「……………きようは幾日？」

「……………」

「お正月はまだ？」

「……………」

「元日の朝から七種ななくさの日まで、毎朝、五条の橋へ行っていると

——武蔵様むさしからの言伝ことづてがあつたのよ。待ち遠しいお正月……………」

あ早く京都へ帰りた。五条の橋へゆけば、武蔵様が立っている」

「……………え、武蔵？」

「……………」

「武蔵とは、あの宮本武蔵のことか」

驚いて清十郎が顔を差し覗くと、朱実はもう答えもせぬ。青い
まぶた 瞼は昏々こんこんと眠っているのである。

ハラハラと枯れ松葉が波明りの障子を打つ。どこかで馬のいな

なきが聞えたと思うと、その障子に外から燈火ともしびが映さし、旅舎やどの女を先に立てて、一人の客が案内されて来た。

「若先生は、こちらですか」

二

「おう誰だ？ ——清十郎はこれにおるが」

あわてて境のふすまを閉め、何気ない態ていをつくっていると、

「植田良平でござる」

物々しい旅いでたちの男が、埃ほこりを浴びた姿のまま、障子を開けてその端へ腰かけた。

「あ、植田か」

何しにここへ来たのだらうかと清十郎はまず疑った。植田良平というのは、ぎおん祇園藤次、なんぼうよいちべえ南保余一兵衛、みいけ御池十郎左衛門、く小橋蔵人、らんどう太田黒兵助などという古参門下とともに、吉岡の十剣と自称している高弟のうちの一名だった。

こんどの小旅行には、勿論そういうこころ股肱の弟子は連れて来ない。植田良平も四条道場に残っていた方である。——それが、みれば旅装も騎馬支度で、かなり急用らしい血相でもある。留守中、気がかりはたくさんあるが、ここまで良平が鞭打って来るほどの急用は、まさか年暮くれに迫つての負債とか遣り繰り相談とも思われぬ。

「何だ。何かわしの留守中に起つたのか」

「すぐ若先生にも、お立ち帰り願わなければなりません、このままで申しあげます」

「ム……」

「はてな」

植田良平は、うちぶところ内懐中へ両手を入れて、何か自分の肌をあたふた探っていた。

——と、ふすま越しに、

「嫌アっ——畜生っ——あっちへゆけっ」

うつつにまで、昼の悪夢におびやかされているのであろう、朱実の、さげびが、うわごと囁言とも思えないほど、生々しい呪いのろをおび

て響いた。

良平はびっくりして、

「あつ……何です、あれは」

「いや……朱実が……ここへ来てからちと体をわるくし、熱のせいか、時折、うわ言をいうのだ」

「朱実ですか」

「それよりは急用のほう、心がかかりじや早く聞こう」

「これです」

腹帯の底からやっと取り出した一通の書面をそこへ差し出す。

女の置いて行つた燭台を、良平はずつと清十郎のそばへ送つた。

何気なく眼を落して、

「あつ……武蔵むさしからだの」

良平は声に力をこめて、

「そうです！」

「開封したか」

「急展とありますので、留守居の者が計りはかあつて、一読いたしました」

「な、なんと申して参ったのか」

清十郎はすぐそれを手にとれなかった。——他人ひとに問うまでもなく彼自身の胸になければならない宮本武蔵だったが、おそらくは、二度とはあの男が、自分へ対して書面をよこすことなどはあり得まいと多寡たかをくくっていたのである。その気持が今裏切られ

て、愕然と、彼の骨ほねの髓を氷のように突き抜けて行つたので、全身の肌が何とはなく粟を生じ、にわかには、清十郎はそれを披いてみる心地も出ず、しばらくただそこに措いて見ているのであつた。

憤つた唇を噛みしめて、良平はこういつた。

「——遂にやつてきました。この春、ああは豪語して去つたものの、よもや二度とは京都へ足ぶみ致すまいと思つていたのに——よくよくな慢心者——約束とあつて——御覧なさい、吉岡清十郎どの他御一門と、名宛ても不敵に、新免宮本武蔵と、ただ一人名前前で、打つけてよこしたその果し状を」

三

武蔵は今、どこにいるのか、居いどころ所したたは認めてないので、その書面からは知り得べくもない。

どこからにしても、彼が忘れずに、吉岡一門の師弟へ対してこの約束の履行を迫つて来たからには、もう彼と吉岡家との間は、討つか討たれるかの交戦状態に入ったものと思わなければならぬ。

試合は——果し合いだ——果し合いは生命いのちを遣やるか奪とるかの大事を、侍の剣と面目に賭としてなすことだ、口先や小手先の技見せではない。生命をそこへ出してすることなのだ。

それを、当面の吉岡清十郎が知らないでいるのは危険の限りである。また安閑とその日の迫るまで遊び暮していいものではない。

京都にある硬骨な弟子のうちには、清十郎の行状にあいそをつかして、

(この場合、沙汰の限りだ)

と怒っている者があるし、

(拳法先生が世におわせば)

と、悲涙をふるって、一介の武者修行から与えられた侮辱に対して歯がみをしている者もあつた。

で、取りあえず、

(ともかくお耳に入れて、すぐさま京都へ引つ張つて来い)

という人々の意見を帯びて、植田良平はここへ馬で飛んで来たわけであるが、そのかんじんな武蔵からの書面を、どうした理^{わけ}か、清十郎は膝のまえに置いて眺めているだけで、容易に披^{ひら}いて見ようとはしない。

「とにかく、御一覽を」

やや焦^じれて、良平がいうと、

「む……これか」

やっと手に取つて、清十郎は読み出した。

読んでゆくうちに彼の指先にかすかな顫^{ふる}えが隠されなかつた。

——それは武蔵の文字や文面がさまでに烈しいからではなかつた。

彼自身の心が今ほど脆もろく弱りきつてゐる時はなかつたのである。
 襖ふすまごしに聞える朱実の嚙うわごと言は、彼にも多少は平常ふだんにあつた侍の
 心がまえというものを、まったく泥舟が水へ浸ひたつたように覆くつがえして
 いた。

武蔵からのその内容はまた、至つて簡明なもので、こう書いて
 ある――

以来御健在ナリヤ

約ニ依ヨツテ而、茲ニ書ヲ呈ス

貴劍サダメシ御鍛養ト被存候、貧生マタ些力鍛腕

ヲ撫シテ罷リアリ候

御見ニ入ル場所ハ何処、日ハ何日、時ハ如何ニ。

当方構エテ望ミナシ、タダ尊示ニ従ツテ旧約ノ勝敗ヲ決セン
ト存ズルアルノミ。

ハバカ
憚リナガラ正月中七日マデノ間、五条橋キョウハン畔マデ、御返答

高札下サルベク候

月 日

新免宮本武蔵政名

「すぐ帰る」

清十郎は文ふみ殻がらをたもとへ突つ込むとそういつて立ち上がった。

——さまざまにもつ纏れる気持が、もう少しでも彼をそこへじつとして置かせなかつた。

あわただしく旅舎やどの者を呼ぶ。金を与えて、朱実の身体からだを預か

つておいてくれと頼むと、旅舎では迷惑顔であつたが、嫌ともいい切れないで遂にひきうける。

——この家を、このいやな晩を、遁れ出してしまいたいのが、清十郎の気持にはいっぱいだつた。

「そちの馬を借りるぞ」

あわただしい旅支度は、やがて逃げるように、馬の鞍へ取ツついた。植田良平も馬の尾を追つて、暗い住吉の並木を駈け出して
いた。

物干竿

——ハハア見かけました。猿えてを肩に乗せた派手やかな若衆ですね、そういう扮装よそおいの若衆ならばさつき通りましたよ、という者がある。

どこで、どこで。

なに高津こうづの真言坂しんごんざかを降りて農人橋のほうへ行つたと。そして橋は越えずに東堀の刀屋の店頭でも見たというか。

さてこそ、手がかりはついたぞ、それだそれだ、そいつに違いない。

「それ行け」

とばかり、雲をつかむような相手を追つて、夕方の往来の者の眼をそばだたしめて行くひとむれ一群の男どもがここにある。

もう東堀の片側町は戸の下りていた頃なのである。一人が中へ入つて、その刀師に何やらいか厳めしく詮議せんぎだてしてしたが、やがてのこと、戸外へ出て来て、

「天満てんまへ行け、天満へ行け」

と先に立つてまた急ぎ出す。

駈けながら他ほかの者が、

「わかつたのか」

吉きつ左右そを糺ただすと、

「突きとめた」

とその者は力みかえる。

いうまでもなくこの一群は、今朝から住吉を中心として、渡海場から小猿たずさを携えて市中へ入ったれいの美少年の後を捜し廻っている吉岡門下の者たちだった。

今その刀劍師の店で訊くと、真言坂から手繰たぐってきた手がかりはどうやら間違いないらしい。たしかに店の戸を下ろす黄昏たそがれごろ、肩の小猿を店頭ほうに抛ほうつて、腰をおろした前髪の侍があつたという。

あるじ
(主はいるか)

と訊かれたが、生憎あいに不在なのでその由を職人が答えると、
(頼とぎみたい研物ものを持って来たのだが、比類のない名刀だから主

がいなくてはちと不安心だ。いったいお前の家では、研とぎや装剣の
仕事にかけて、どれほどの腕があるのか確かめてからのことにし
たい。——なにかこの主の研といだ物があるなら見せろ)

ということなので、畏まって、然るべき刀を幾いくぶり口か出して見
せると、それぞれ無造作に一見して後、

(つまらぬ鈍なまくら刀ばかりをお前の家では手がけていると見えるな。

そういう研師とぎしの手にかけるのは心もとない。わしが頼もうという

刀は肩に負っているこの物干竿ものほしざおという名称のある伝来の逸品、

無銘だがかくの通り摺すりあげ上もない備前物の名作だ)

とてそれをギリりと抜いて示しながら、さんざん自分の刀の自
慢を述べたてるので、職人もやや片腹いたく思つて、なるほど物

干竿とはよく銘けましたな、曲もなくてただ長いだけが取柄とりえだつ
つぶやくと、すこし機嫌を悪くして、遽にわかに腰を上げ、天満から京
都へのぼる船はどこから出るのかと道を訊いた上、

(ひとつ、京都で研とがせよう。大坂はこの刀屋を覗いても、雑
兵の持つ数物かずものばかり荒砥あらとにかけておる、イヤ邪魔をいたした)
と、涼しい顔して、さつさと立ち去つてしまったといふのであ
る。

いかさま聞けば聞くほど生意気な青年らしい。祇園藤次まげの鬻まを
チヨン斬つていよいよ思い上がっているに相違ない。こうして後
からあの世への迎えが宙を飛んで自分の背に迫つて行きつつある
のも知らずに、得々とくとくと大手を振つて歩いているものと思われる。

「みろ、青二才」

「もう首根ツこを押えたのも同じこと。急ぐにも及ばん」

朝から歩きづめである。くたびれたのがこういった。すると先に駈けているのが、

「いやいや、急がねば駄目だぞ。淀の溯^{のほ}りは、今ごろ出るのがた

しか仕舞い船の筈」

と喘^{あえ}いでいった。

二

天満の川波を見ると、

「やつ、いかん」

真つ先のが叫んだので、

「どうした？」

次のがいうと、

「もう船ふなつき着茶屋が床しょうぎ几こを重ねておる。川にも船が見えぬ」

「出てしまったか」

弾はずみあう息を揃えて、どやどやそこに佇たたずんで、しばしは出し抜

かれたように川面かわもを見ていたが、店をしまいかけた茶屋の者に訊

ねると、たしかに小猿と前髪は乗ったとある。そしてまた、その

仕舞い船がここを離れたのはつい今し方で、まだこの先の船着場

である豊崎までは、遡さかのぼつていまいともいう。

それに下りは速いが、上り船は遅々たるものである。陸おかを走つても追いつきましようという言葉に、

「そうだ、何もがっかりすることはない。ここで間に合わなかつたとすれば、もう急がずともよい、一息入れて行こう」

茶をのんだり、餅や駄菓子などを頬張つた上、さてまた、川に沿つて暗い道を急ぎに急いで行つた。

ひろい暗の彼方あなたに、銀蛇に似た河のすがたがふたまた一股に裂けていた。一すじの淀川が中津川と天満川とに岐わかれるところである。その辺りにチラと灯が見えた。

「船だつ」

「追いついたぞ」

七名は色めき立つ。

枯れ蘆あしはみな刃はもののように光っていた。一草の青いものすらない田や畑であった。霜をふくむかと思われるような風だったが、寒いなどということは考え出されない。

「しめた」

距離は、いよいよ縮まる。

明らかにそれと分ると、つい思慮もなく、一人が呶鳴ってしまった。

「おおウいつ。——その船待てつ」

すると船から、

「なんじゃあ……」

と半間はんまな声がひびいてくる。

陸おかでは今、お先走つて呶鳴つた男を、ほかの仲間が叱つていた。——何も今、ここで呶鳴るにはあたらない。これから何十町か先まで行けば、嫌でも船ふなつき着があつて、乗る客も降りる客もあるにちがいない。それをここから呶鳴つては船中にある敵に心支度をさせるようなものではないか、というのだつた。

「まあ、どつちにせよ、先は多寡の知れた一人。呶鳴つたからには、明らさまに名乗りかけて、川の中へ逃げ込まない用心をしろ」
「そうだ、そのことだ」

と程よく捌さばく者があつて、仲間割れは救われた。

そこでこの七名は、気をそろえて、淀のぼを溯る夜船の船脚とおよ

そ足の早さを共にしながら、

「おうーいつ」

とまた呼び直した。

「なんじゃあ」

客ではない、船頭らしい。

「その船を岸へ寄せろ」

こういうと、

「阿呆吐ぬかせ」

これはどつと誰彼なく、船の中から揚った笑い声だった。

「着いけぬかつ」

威嚇いかくすると、こんどは客の声らしく、

「着けぬわい」

と、口吻くちぶりを真似していう。

七名の陸おかの顔は、湯氣を立てているかと思うように、白い息を吐いて、

「よしつ、着けぬとあれば、先の船着場で待つが、その船の中に、小猿を連れた前髪の青二才がいるであろう。恥を知るならば、ふなべり舷へ立てといえつ。もしまた、そやつ其奴を逃がした場合は、乗合いの者残らず、かか関り合いとして陸おかへ引きずり上げるから左様心得ろ」

三十石船の中の騒めきが、陸から眺めていても手にとるようには
わかつた。さあことだぞと色を失った様子なのである。

岸へ着けたら何か始まるにちがいない。陸を歩いている七名の
侍は、そういえば皆、袴をくくりあげ襷をかけ、刀に反りを打た
せている。

「船頭、返事をするな」

「なにをいっても黙っておれ」

「守口もりぐちまでは着けぬがよい、守口へ行けば川番所のお役人が
いるで」

客は口々にこう囁いて生唾をのんでいた。先に減らず口をた
いた男などは唾おしみたいに眼をすくめた。陸おかと川の中との隔てが

なによりの頼りであった。

陸おかの七名は、船脚と並行してどこまでもついて来た。しばらく黙って見ているのは、こつちでどう出て来るかを待っているらしい。しかしいつまでも答えがないので、

「——聞えたか。小猿を連れた洩はなた垂れ武士、舷ふなべりへ出る、舷へ」
すると、船のうちで、

「わしのことか」

何を先でいっても答えるなどいいあつていた客のうちから、突然、こう答えて舷に立った若者があつた。

「おうっ」

「いたな」

「小僧め」

その影を認めて、陸の七名は眼を剥むいたり、指さしたり、近ければ水を渡つてもやつて来そうな氣勢を示している。

ものほしざお

物干竿とよぶ大太刀を背中へ負つて、前髪の人影はじつと立っていた。すぐ足もとの舷を打つ水明りが、尖とがっている齒を白く見せた。

「小猿を連れている前髪の青二才とあれば、わしより他ほかにないが、各は何者だ。稼ぎのない野武士たちか、それとも、腹の減へつた旅芸人か」

声が川を渡つて来ると、

「なにっ」

七名は岸へ顔を揃えて各 齒ぎしりを噛みながら、

「吐ぬかしたな、猿えつかい奴め」

悪罵あくばは、順々に、その口々から飛び出して、川面かわもを打った。

「身のほど知らずが、今に吠え面搔づらいて、謝るなよ」

「われわれをなんだと思う。今の口は、吉岡清十郎門下のわれわれと知つてか、知らずにか」

「ちようどよい、手をのばして、その細首を洗っておけ」

船は毛馬堤けまづつみへかかっていた。

ここには繋もやい杭ぐいとホツ立つて小屋がある。毛馬村の船着と見て、

七名は、ばらばらとそこへ先廻りして降おり口ぐちを扼やくして待っていた。

——だが船は遠く河心に止まっていて、ぐるぐる廻っているの

だった。客も船頭も、事態の容易ならぬものを案じて、着けないほうが無事であると主張しているらしいのである。吉岡門下の七名はそれと見て、

「こらッ、なぜ着けぬ」

「明日も明後日も着けずにいられるか。後で後悔するな」

「その船を寄せぬと、乗りおうている奴ばら、一人あまさず打ぶ斬るぞ」

「小舟で行って、斬り込むがよいかつ」

あらゆる脅おどし文句をそこから放っていると、やがて、三十石船の舳へさぎが此方こなたの岸へ向き直ると共に、

「やかましいっ！」

沓寒ごかんの大河を裂くような一声が彼方あなたにあつて――

「望みにまかせて、今それへ参つてやるから、腰のつがえを定めて待つておれ」

見れば前髪の若者自身が、水馴みなれ棹ざおを取つて、頻りと止める船頭や客を尻目に、ぐいぐいと棹の水を切つてこなたの岸へ船を突き進めて来るのであつた。

四

「――来るぞ」

「命知らずめが」

柄つかに手をかけて、七名は、船のぶつかつて来る岸の辺りの岸辺を囲んでいた。

川を横に、真つ直に流紋を切つて来る船の剣けん舳さきであつた。不動の身を取つて、そこに突つ立つている前髪まへがみの美少年の姿が、息を撓ためて岸で待ちかまえている七名の者の眸まゆへ、ぐうつと迫るに従つて、いっばいな大きさに映つた——と、思う途端とつげにである。

ぎ、ぎ、ぎつ、船は枯かれ蘆あしの泥ぬへ舳へを突つッこんで、自分たちの胸へどんと来たように、七名の踵かかとが無意識むいしぎにズズツと後へ退さがつた。それと共に、船の舳へから丸つこい動物の影が、四、五間ほども幅のある船と岸との間の枯れ蘆あしの沼をぽーんと跳んで、七名のうちの誰か一人の首くびつ玉へ躍りかかったのである。

「ひやつツ」

一人が叫ぶと、七名の手から七本の白光が、鞞さやを脱して、空へ噴ふいた。

「猿だつ」

と気がついたのは、すでに空くうを一撃してからで、それを当の敵である前髪の飛躍と錯覚さつかくしてあわてたのは、彼ら自身も不覚を認めたらしく、

「あわてるな！」

と、お互いを戒め合いましった。

関かかり合いになるまいと、船の一隅ひとすみへかたまつて縮み上がつていた乗合客は、彼らの狼狽ぶりに、硬こわばつていた神経のどこかを

擦ぐくすられたが、誰もくすりとも声を出さなかつた。

ただ、あれつ——といった者がある。見ると、自分で水馴れ棹を突いていた前髪の美少年が、その棹を、蘆の中にとんと突いたと思うと、先に跳んだ小猿よりも軽く、弾はずみを与えた自分の体を、岸の彼方あなたへ難なく送つていたのであつた。

「やつ？」

すこし方角が違つたので、七名は一斉にそつちへ向き直つた。

さんざん待ちかまえていたことではあるが、咄嗟の場合と差のない焦心あせりがどの顔にも引ツつれていた。円を作つて相手へ迫るいとま違がなく、そのまま、岸に沿つてだつと向つて行つたので、当然、彼らの陣形は縦隊になり、それを受けるところの前髪の少年をして、

十分な気構えを持たせる余地を敢て与えてしまった。

真つ先になつてしまつた縦隊の者の頭は、もう怯ひるんでも退けな
い位置である。途端に眼は充血し耳は聞えなくなつていた。平常
の剣法の修練などはてんで意識にもものぼらないのである。カツと
齒を剥むきだして、食いつくように前髪かみの影へ刀を差し出して行つ
た。

「……………」

たださえ巨おおきい美少年の体からだ軀は、その時、つま先で伸び上がる
ように胸を張り、右手をぐつと肩の上にやつた。背に負っている
大刀の柄を握つたのである。

「吉岡の門人どもだといつたな。望むところだ。先には、鬚まげだけ

で許してくれたが、思うに、それでは物足らないのであろう、わしもすこし物足らぬ」

「ほ、ほざいたなっ」

「どうせ手入れにやるこの物干竿、手荒につかうぞっ」

こう宣言をうけながら、その前に硬こわばっていた人間は、逃げる
ことができなかつた。まるで据物すえもの同然に、物干竿の長剣は梨割
りにその者を死骸にしてしまった。

五

前の者の背が後ろの者の肩を押し返した。出鼻に先頭の一人が、

敵の大太刀の一颯さつに、無造作な死を目前に遂げたのを見ると、後あと六名の者は、途端に脳中枢のうちゆうすうの正確を欠いて、行動の統一を全然失うしなってしまった。

衆はこうなると一より脆もろい。それに反して凶に乗った前髪まへかみの美少年は、竿とよぶほど伸びの利く長剣で、次の者を横なぐに撲なぐった。

腰ぐるまは斬れなかった。しかし撲られただけでも十分にこたえたに違いない。何か一声吠えてその一人は、横ツ飛びに蘆あしの中へ飛びこんでしまう。

(——次つ)

と睨ねめ廻した時は、さしも戦い下手べたの同勢も、非さとを覚さとつて形を変え、五弁の花が芯しんをつつむように、この敵ひとりひとりを囲み込んで

いた。

「退ひくな」

「退くなよ」

味方同士が、こう励ましあうのだった。そこで多少勝ち目を見出した勢いを駆って、

「小童こわっぱめが！」

勇気というよりはもう無自覚の忘恐がなす仕業しわざである。この際、多言の必要はないのに、

「おもい知れっ」

叫びを重ねて一人は飛びかかって行った。振り下ろした刀はかなり深く入ったつもりであるのに、前髪の敵の胸へはまだ二尺ほ

ども手前の空間を斬り下げていたのである。

当然、自信を持ちすぎたその刀の先は、カチツと石を打った。

刀の持主はすでに自分から死の穴へ逆さに首を突っ込んで行ったかのような姿勢になり、こじり鎧と足の裏を高く上げて、敵の前に身をさら曝してしまった。

だが、やすやす易々と斬り得る足もとの敗者を斬らずに前髪の美少年は、身をかわしたはず機みにはず弾みを加えて、ぶうんと横側の敵へ当たって来た。

「ぐわッ」

明らかな末期のまつごさげびがまた一つそこで揚った。するともう二度と陣形を立て直す気力も失って、後の三名はわらわらとつなが

つて逃げ出した。

逃げる姿へ、人間は最も殺伐な猛気がおこる。物干竿を両手に持って、

「それが吉岡の兵法かつ」

前髪は追いかけた。

「きたないぞ、返せつ」

ののし
罵りを浴びせかけながら、彼は足を止めなかった。

「待てつ、待てつ、わざわざ人を船から呼び上げておいて、捨てて逃げる侍がどこにあるかつ。このまま逃げるにおいては、京八流の吉岡を天下に笑ってやるがよいか」

笑ってやるぞということばは、侍が侍に投げる場合の最大の侮

辱なのだ。唾つば以上の恥かしめなのだ。——だがもう逃げてゆく者の耳へはそれもこたえない。

その頃ちようど毛馬堤けまづつみを、寒々と、馬の鈴が鳴つて来た。霜明りと淀の水明りは、提灯ちようちんも必要としないほどだった。馬上の人影も、馬の尻について来る徒歩かちの人影も、白い息を吐いて、寒さを忘れていたかのように先に急いでいる様子である。

「あつ」

「御免っ」

追われて来た三名は、馬の鼻づらへ打ぶつかりそうになって、きりきり舞をしながら後ろを振向いた。

六

あわてて手綱を絞ったので、馬は足搔きしていなないた。馬上の者は、馬の前で戸惑いしている三名をのぞいて、

「やつ、門下ども」

意外な顔したが、すぐ腹をたてて、叱りつけた。

「たわけめ、どこに終ひねもす日ひねもすうろついていたのだつ」

「ア、若先生ですか」

するとまた、馬の陰から前へ出て来た植田良平が、

「何事だその態ざいまは。若先生のお供をして来ながら、若先生が帰るのも知らず、また、酒の上の喧嘩か。馬鹿もいい加減にして歩け」

いつものでんでまた酒の上の喧嘩かと見られたのでは堪らない。三名は不平に満ちた語気で、それどころか自分たちは、当流の權威と師匠の名誉のために戦つて、かくかくの始末と、舌も渴かわいてゐるし、狼狽もしているので、怖ろしい早口をもつて一息に告げ、「あれ、あれへ、や、やつて来ました」と、ここへ近づいて来る登音を振ふり顧かえつて、恟きよう々きようたる眼いろになる。

その弱腰をながめて、植田良平は、愛想をつかし、「なにを躁さわぐか、口ほどもない。それでは当流の汚名をそそぐつもりでしたことも、却つて泥の上塗りだわ。——よしつ、おれが会つてやろう」

と、馬上の清十郎もその三名も後に立たせて、独りだけ十歩ほど前にすすみ、

(御座んなれ、前髪)

身構え取って、近づく蹠音を待っていた。

——とは知ろうはずもなく前髪は、れいの長剣を舞わせながら、脚に風を起して、

「やアいつ、待てつ。逃げるのが吉岡流の極意か。わしは殺生したくないが、この物干竿が、まだまだと鏢つば鳴りして承知せぬ。返せ、返せ、逃げてもいいが、その首置いて行けつ」

毛馬堤の上をこう呼ばわりながら、今しもその影はここへ宙を飛んで来る。

植田良平は手に唾つばして刀の柄を握り直した。疾風の勢いにある前髪の美少年は、そこに身を屈していた良平が眼に入らないのか、頭の上を踏ふづけるような足幅であった。

「——わッしょっ」

撓ため切きっていた良平の腕は唸うって、こう大喝をくれながら地摺りに大刀で払い上げた。縊より合せた両手に伸びて行った切っ先は、星を斬ったように高く揚あったに過ぎない。美少年の体は片脚立ちに止まって、ぎりつと反対のほうへ廻まって振向むいたと思うと、

「オヤ、新手か」

た、た、た、とのめって行く良平へ物干竿をぶんと薙なぎ返した。烈れつしいの何のといつて、植田良平はまだかつてこんな剣気に吹

かれた例ためしを知らない。その殺風から身を交かわした代りに、彼は毛馬堤から田圃たんぼのほうへ転がっていた。幸いに、堤とては低いし、凍っている田圃であったが、戦機を外はずしてしまったことは勿論である。ふたたび堤の上へ出て見た時には、敵の影は獅子奮ふんじん迅に見えた。長剣物干竿の光が、門下の三名を刎ね飛ばし、さらに進んで、馬上の吉岡清十郎へ迫ろうとしている。

七

自分の身まで来る間に解決するものと、清十郎は安心していたのである。ところが、その危険は、すぐ迫って来た。

ひどい暴剣振りである。物干竿は突進して来た。いきなり清十郎の乗っている馬の脾腹ひばらを突こうとする。

「岸がんだりゆう柳、待てっ」

こう清十郎は高く叫んだ。そして鎧あぶみにかけていた片足をすばやく鞍の上へ移し、その鞍を蹴るがごとく突ツ立ったと思うと、馬は前髪の美少年を躍り越えて、弦つるを離れた矢のように彼方へ駆け出し、清十郎の体は反対に、三間も後ろへぼんと飛び降りていた。

「——鮮やかッ」

と、賞ほめたのは、味方ではなくて、敵の前髪の美少年だった。物干竿を持ち直して、清十郎のほうへ一躍しながら、

「今の所作、敵ながら見よい嗜たしなみ、察するところ吉岡清十郎その

人と見た。よい折だ——いぎッ」

向けて来る物干竿の切つ先は炎々たる鬪志かたまりの塊であつた。清十郎の体にはさすが拳法の嫡子ちやくし、それを受けるだけの余裕と鍛えたものが十分に見える。

「岩国の佐々木小次郎、さすがに目が高い。いかにも自分こそは清十郎であるが、理由もなく、其そこもと許はまと刃交ぜをする意思は持たぬ。——勝負はいつでも決しられる。なんの意趣でこの始末か、まず退ひき給えその刀を」

最初に清十郎が、岸柳と呼んだ時には、耳にも入らなかつたらしいが、二度目には明らかに岩国の佐々木と名をさしたので、前髪は、

「や！ ……わしを、岸柳佐々木小次郎とは、どうしてご存じあ
るのか」

と驚きに打たれた。

清十郎は、膝を打って、

「やはり、小次郎殿であつたか」

と、いいながら前へ進んで来た。

「——お目にかかるのは、もとより初めてだが、おうわさは常々
詳しく聞いていた」

「誰に？」

と、すこし茫然としたように小次郎はいう。

「そこもと其許の兄弟子、伊藤弥五郎どのから」

「お、一刀齋どのご懇意か」

「ついこの秋頃まで、一刀齋どのは、白河の神楽ヶ岡かぐらの辺に一庵をむすんでおいであつた。屢 《しばしば》、こちらよりも訪れ、先生も時折、四条の拙宅へ立ち寄つて下されたりなどして」

「ホウ！ ……」

小次郎は笑靨えくぼを作つて、

「では満ざら、貴公ともただの初対面ではない」

「一刀齋どのは何かというと、よく其許の噂をなされていた。――

――岩国に、岸柳佐々木と称する者がある。自分と同様に、富田五郎左衛門のながれを汲み、鐘巻自齋先生に師事した者で、同門の中では一番の年下ではあるが、行く末天下に自分と名を争う者は

彼より他^{ほか}にはあるまいと——」

「だがそれだけで、この咄嗟にわしを佐々木小次郎とは、どうしてお分りあつたか」

「まだ年ばえもお若いことや、人柄はこうこうなどと一刀斎どのから伺っていたし、また其許が、岸柳と号されている謂^{いわ}れも詳しく承知しているので、その長剣を自由になさるさまを見た時すぐ、もしやと胸に泛^うかんだので、当て推量にいつてみたのが測^{はか}らずもほんとをいいあててしまったわけ」

「奇だ！ これは奇遇」

小次郎は快^{かい}哉^{さい}をさげんだがふと、血ぬられた物干竿を自分の手にながめると、この始末は一体どうしたものかと思ひ惑った。

八

話しあえばお互いに解け合うものがあつたのであろう。それから時経て、毛馬堤の上を、佐々木小次郎と吉岡清十郎の二人が先に立つて、旧知のように肩を並べ、その後から植田良平と三名の門人が、寒そうに従ついて、京都の方角へ夜をかけて歩いて行く姿が見出される。

「いや、初めからこっちは、妙に売られた喧嘩なので、何もことを好んだわけではちつともない」

と、これは小次郎のいい分。

清十郎は小次郎の口から親しく祇園藤次が阿波通いの船中でし

た振舞や、後の彼の行動など思いあわせ、

「怪しからぬ男だ、帰ったら糾明せねばならぬ。——其許

を怨むどころか、此方こそ、門下どもの統御の不行届き何とも

面目ない」

そういわれると、小次郎も謙讓を示さねばならなくなつて、

「いやいや、わしもこのような性質の者でございますゆえ、ずい

ぶん大言を吐くし、喧嘩なら退かぬ構えで誰へでも応対するから、

あながち門人衆ばかりが悪いわけではありません。——むしろ吉

岡流の名と師の体面を思つてやった今夜の者たちは、生憎腕の

ほうはどれもこれも貧弱ですが、その心根に至つては、むしろ不

憫なものがある」

「拙者が悪い」

清十郎は、自責しながら、沈痛な顔をして歩いていった。

そちらに含むところがなければ一切を水に流そう——と小次郎がいうと、

「願つてもないことだ。却つて、これをご縁に、将来はご交誼をねがいたい」

と、清十郎も応じていう。

二人の打ちとけた様子を前に見ながら、弟子たちはほつとした気持で後から続いていた。——一見、体の巨おおきな坊ンちみたい

前髪的美少年が、伊藤弥五郎一刀斎が常に、

(岩国の麒麟きりんじ児)

と、口を極めて称たたえていた岸柳佐々木であろうと誰がちよつと思ひ当るうか。祇園藤次が軽く舐なめて舐め損なつたのも、あながち無理はない気がするのである。

それと分つて、今さら、胆きもを寒さうしているのは、その小次郎の愛劍物干竿の先から命びろいをした植田良平やほかの者どもで、

(これが、岸柳か)

と、眼まなこを改めて、その人間の幅広い背中を見直して、なるほどそう知つてから見れば、どこかに非凡なところがあると、今さら、自己の眼識の浅さをもあわせて認めている。

やがて、以前の毛馬村の船着場へ来ると、そこには物干竿の犠牲になつた幾つかの死骸がもう寒天に凍つていた。死骸の後始末

は三名にいいつけて置き、植田良平は先に逃げて行つた馬を見て、
けて曳いて来る。——また、佐々木小次郎は頻りと口笛をふいて、
懐ふところ中に飼ひ馴れたれいの小猿を呼んでいた。

口笛を聞くと、小猿はどこから現われて、彼の肩へとびついた。
——ぜひぜひ四条の道場へ来て 逗とうりゆう留りゆうしてもらいたいとい
うので、吉岡清十郎は自分の乗馬を小次郎へすすめたが、小次郎
はかぶりを振って、

「それはいけない。私はまだ青くさい一介の若輩だし、貴公はい
やしくも平安の名家吉岡拳法の嫡ちやくなん男、門人数百を持つ一流の
御宗家だ」

と、馬の口輪を取って、

「遠慮なくお召なされ、ただ歩くより口輪を取って歩いたほうが歩きよい。おことばに甘えて、しばらくのあいだお世話にあずかるとして、京都までこうして話しながらお供いたそう」

傲慢不遜かと思うと、礼儀もわきまえている小次郎だった。――やがて今年も暮れて初春を迎えるとすぐ、宮本武蔵なる人間と出会わなければならぬ宿題を持つ清十郎は、折からこの小次郎という人物をわが家へ迎える機縁をひろって、何かに心づよい気がして来るのだった。

「ではお先に失礼して、足の疲れたところには代るといたそう」
彼もまた、そう礼儀をして、鞍の上へ移った。

山川無限

一

東国での名人として、塚原ト伝ぼくでんや上泉伊勢守の名が代表されていた永祿の頃には、上方では京都の吉岡と大和やまとの柳生の二家が、まずそれに対立したものと見られている。

だがほかにもう一家、伊勢桑名の太守北畠具教とものりがある。この具教もその道においてかくれない達人であり、またよい国司でもあつたらしく、

「太ふとの御所」

といえ、彼の歿後までも伊勢の領民はなつかしいお方として、そのころの桑名の繁昌や善政を慕っている。

北畠具教は、ト伝から一の太刀というものを授けられて、ト伝の正流は東国にひろまらずに伊勢へ残った。

ト伝の子、塚原彦四郎は、父から家督はうけたが、一の太刀の秘伝を遂にゆるされなかつた。そこで父の死後、彦四郎は郷里の常陸ひたちから伊勢へ赴き、具教に会つてこういつた。

「私も父のト伝より、かねて一の太刀を授かっていますが、生前父がいうには、あなた様へもご伝授してある由、同じものか、違ひのあるものか、異同を較べて、お互いに極秘の道を究明してみたいと思ひますが、思召はいかがですか」

すると具教は、師の遺子である彦四郎が、技わざを撮とりに来たものとすぐ察してはいたが、

「よろしい、お目にかけてみましょう」

と快諾して、一の太刀の秘術を見せた。

彦四郎はそれによつて、一の太刀を写しとることができたが、要するにそれは型の真似事でしかなく、元々その器うつわでなかつたから、ト伝流はやはり伊勢のほうに広く行われ、従つてその余風からこの地方には兵法の達人上手が今でもたくさんに輩出している

といったような土地自慢は、その国へ足を入れると必ず聞かされる所であるが、変なためえ自慢から比べればよほど耳ざわ

りがよいし、また見物の参考にもなるので、今も、桑名の城下から垂坂山へかかつて来る道中馬の上にある旅人は、

「なるほど、なるほど」

と、馬子のそうしたお国ばなしをあえて遮らずに、頷いて聞いていた。

時は十二月の中旬で、伊勢は暖いにしても、那古の浦からこの峠へくる風は相当に肌寒いが、駄賃馬に乗っている客は、奈良晒のじゅばんに袷一重、その上に袖無羽織をかけてはいるが、怖ろしく薄着であるし、うす汚い。

笠をかぶる必要もないほど陽焦けのしている真ツ黒顔に、これもまた、往来へ捨てても拾い人がありそうもない古笠をかぶって

いるのだ。髪は幾日洗わないのか鳥の巣みたいにもじやもじやしていて、ただ束たばねてあるというだけに過ぎない。

（駄賃だ賃がもらえるかしらて？）

と馬子は内心で、心配しながら乗せた客だった。それに行く先がちと辺鄙へんびな、帰り客のきかない山間ではあるし……と。

「旦那」

「む？ ……」

「四日市で早めの午ひる、亀山で夕方、あれから雲林院村うんじんへ行くと、もうとつぷり夜になりますだが」

「ムム」

「ようがすかね」

「ウム」

何をいつても領うなずいてばかりいるのだ、無口な客は馬の背から那古の浦に気を奪とられている。

それは、武蔵だった。

春の末つ方からこの冬の暮まで、どこを足にまかせて歩いて来たのか、皮膚は渋紙のように風雨に染まり、ただ二つの眼だけが
いよいよ白く鋭く見える。

二

馬子はまた訊ねて、

「旦那、安濃郷あのごうの雲林院村というと、鈴鹿山の尾根の二里も奥だが、そんな辺鄙へんぴなところへ、何しに行かつしやるのじゃ」

「人を訪ねに」

「あの村には、木樵きせりか百姓しかいねえはずだに」

「くさり鎌の上手がいると桑名で聞いたが」

「ははあ、宍戸ししど様のことかね」

「うむ、宍戸何とかいったな」

「宍戸梅軒ぼいけん」

「そう、そう」

「あれは鎌鍛冶かまかじじゃ、そして鎖鎌くさりがまをつかうそうじゃ。すると

旦那は武者修行だの」

「うむ」

「それなら鎌鍛冶の梅軒を訪ねて行かっしやるより、松坂へ行けばこの伊勢で聞え渡っている上手がおりますがな」

「誰か」

「みこがみてんぜん神子上典膳 というお人で」

「ははあ、神子上か」

武蔵は頷いた。その名は夙とく知っていたように多くを問わない。黙々と馬の背に揺られながら脚下に近づいて来る四日市の宿場の屋根を眺め、やがて町に入ると屋台の端を借りて弁当をつかう。——ふとその時、彼の片方の足を見ると、足の甲をぬの布で縛っていた。歩むには少し跛行びっこをひいている形である。

足の裏の傷が膿うんでいるのだった。それゆえにきようは馬の背を借りて歩いているものとみえる。

彼は今、自分の体というものに対して、日々、細心ないたわりを施していた。そうした注意を抱いていたに関わらず、鳴海港の混雑の中で、釘の立っている荷箱の板を踏みつけてしまったのである。昨日から傷に熱を持って、足の甲は樽柿のように地腫じぼれがしていた。

(これは、不可抗力な敵だろうか?)

武蔵は、釘に対しても、勝敗を考えるのだった。——釘といえども兵法者として、こういう不覚をうけたことを恥辱に思うのだった。

（釘は明らかに、上を向いて落ちていたのだ。それを踏みつけたのは、自分の眼が、虚であつて、心が常に全身に行き届いていない証拠だ。——また、足の裏へ突きとおるまで踏んでしまったことは、五体に早速の自由を欠いていたからで、ほんとの無碍自在な体ならば、草鞋わらじの裏に釘の先が触れた瞬間に、体は自らおのずかそれを察知しているはずである）

自問自答にこの結論を下して、

（こんなことでは）

と、自己の未熟が反省され、剣と体とがまだまだ一致しない——腕ばかりが伸びてほかの体や精神は合致しない——一種の不具を感じて忌々いまいましくなるのだった。

だが、この年の晩春、あの大和柳生の庄をやまと慕まっしぐらに去つてから——今日までのおよそ半年の間を、決して、無駄には送つていなかったと、武蔵は光陰に対して恥なく思った。

あれから伊賀へ出、近江路へ下り、美濃、尾州と歩いてここへ来たのであるが、行く先々の城下や山さんたく沢に彼は劍の真理を血まなこで搜した。

(何が極意か?)

ようやく彼もそこへ突き当つて来たのである。しかし、

(これが劍の真理だ)

というようなものは、決して町にも山沢にも埋うもれていなかった。この半年、各地で出会つた兵法者は幾十人か知れなかつたし、そ

の中には、聞えた達人も幾名かあったが、要するにそれは皆、わざ技の上手であり、刀づかいに巧者な大家ばかりだった。

三

会い難いものは人である。この世は人間が殖ふえすぎているくらいなものだが、ほんとの人らしい人には実に会い難い。

武蔵は世間を歩いて痛感するのだった。そういう嘆きをもつた
びに、彼の胸には沢たくあん庵が思い出された。——あの人間らしい人
間を。

（会い難い人におれはかつて出会っているのだ、めぐまれた者と

いわなければならぬ、そして、その機縁を無にしてはならぬ）
彼のことを思うと、武蔵は今でも両手の腕くびから五体がずきずきと痛んで来る。ふしぎなこの痛みは、千年杉の梢に曝さらされたあの時の神経が、まだそのまま生理的な記憶の中に生きている証拠であった。

（今にみろ、おれが沢庵を千年杉に縛りあげて、地上から悟道を説いてくれるぞ）

彼はいつもそう思った。恨みではない、報復ではない、そんな感情の上からではなく、武蔵は、禅によって人生の最高へ住もうとする沢庵に対して、自分は剣によつて、どこまで沢庵の上に到ることができるかということを、実にすばらしい宿望の一つとし

て胸の底に抱いているのだった。

もしああいう形はとらなくても、自分の道境がめざましい進歩を遂げて、沢庵をかりに千年杉のこずえに縛くつて、地上から彼に向つて、彼の蒙をひらいてやるような叱咤を与える日があつたら、沢庵は梢の上から何というだろうか。

武蔵はそれを聞きたいと思う。

おそらく沢庵は、

(善よいか哉！ 満足満足)

と欣ぶにちがいない。

いや、あの男のことだから、そう素直にはいわないだろう。か
らからと打ち笑つて、

(豎子^{じゆし}！ やりおる)

というか。——何でもよい、武蔵は彼へ対する恩義として、どういう形でもよいから沢庵のあたまへ一度、ぐわんと自己の優越を示してみたい。

だがそれは他愛のない武蔵の空想だった。彼自身、今や一つの道へ入りかけているだけに、いかに人間があるところへ到達しようとする道の永遠で至難なものであるかを、事ごとに知り初めていたのである。——それだけに、

(沢庵ほどには)

と、空想の腰が折れる。

まして、遂に会わなかったけれど、柳生谷の劍宗石舟斎あたり

の高さを思いくらべると、口惜しくても、悲しくても、自分などのまだ青ツぽいことが余りにもわかつてくるのだった。兵法だの、道だのと、口にするのも気恥かしくなつて、くだらない人間ばかりに見えた世間が、急に広くなり恐ろしくなり、そして遽にわかに、

(今から小理窟は早い、劍は理窟じゃない、人生も論議じゃない、やることだ、実践だ)

慕まっしぐらに武蔵は山沢さんたくへ入りこむ。彼が山の中に籠こもつてどう
いう生活をやっているか、それは彼が山から里へ出て来るすがた
を見るとほぼ察しがつく。

そんな時彼の面おもては鹿みたいに頬そが削そげている。五体のあらゆる
ところに、摺すり傷だの打ち傷を作っていた。滝に打たれるので油

けのなくなつた髪は。パサパサに縮れ、土の上に眠るので齒だけが不思議な白さを持つていた。そして人間の住む里へ向つて、おそろしく傲岸な信念を燃やしながら、相手とするに足る者を捜しに降りて来るのだつた。

——今がちようど、桑名で聞き出したそういう一人の相手を、これから尋ねてゆく途中であつた。聞き及ぶ鎖鎌くさりがまの達人ししど戸梅軒ばいけんなる者が、この世で会い難いほうの人間か、それともぎらにある米喰い虫か、まだ初春はるまでには十日あまりの余日があるので、これから京都へ出向く旅のつれづれに、ひとつ試してみようという気持で。

四

武蔵が目的の地へ着いたのは、もう夜も深い時刻だった。

馬子の労を犒ねぎらつて、

「帰つてもよい」

駄賃を与えて去ろうとすると、馬子のいうには、今さらこんな山奥から帰りようもない。朝がたまで、旦那がこれから訪ねてゆく家の軒下でも借りてやすみ、朝になってから鈴鹿峠を下つて来る客を拾つて帰ったほうが歩ぶがいいし、それにまた、なんともこゝう寒くてはもう一里も歩くのは辛いという。

そういわれてみればこの辺りは伊賀、鈴鹿、安濃あのの山々のふと

ところで、どつちを向いても山ばかりだし、その山のいただきには、真つ白な雪がある。

「では拙者のさがす家をおまえも一緒に尋ねてくれるか」

「宍戸梅軒様のお家で」

「そうだ」

「さがしましょう」

その梅軒というのは、この辺の百姓鍛冶かじということであるから、昼間ならすぐ分ろうが、もうこの部落では起きている燈火ともしび一つ見あたららない。

ただどこかで先程から、こーん、こーん、と凍っている夜空にひびく砧きぬたの音がある。それを的あてに二人は歩いて、ようやく一つ

の明りを見た。

さらに欣うれしかつたことには、その砧の音のしている家が、百姓鍛冶の梅軒の家だった。軒に古ふる金がねがたくさん積んであるのでもわかつたし、真つ黒にいぶっている廂ひさしは、どうあつても鍛冶屋の家でなければならぬ。

「訪れてくれ」

「へい」

馬子が先に戸を開けて入つて行つた。中は広い土間であつた。仕事はしていないが鞆ふいごの囲いには赤い火が燃えさかっていた。そして、一人の女房が焰よなべに背を向けて夜業よなべに布を打っているのだつた。

「こん晩は、ごめんなすつて。——アア火だ、これはたまらぬ」

見知らない男が入つて来て、いきなりふいご鞆のそばの火にしがみついたので、女房はきぬた砧の手を止め、

「どこの衆だえ、おめえは」

「へい、今話しますよ。……実はお内儀、おめえ様のうちの旦那を遠方から尋ねて来たお客を乗せて今着いたのじゃ。わしは桑名の馬子だがね」

「へエ？ ……」

女房は武蔵のすがたを無愛想に見上げた。ちよつと、小うるさい眉をして見せたのは、ここへも屢 《しばしば》 やつてくる武者修行が多いのだろう。そういう旅行者と厄介者をこの女房は扱

い馴れていることが様子に見える。三十がらみでちよつと美麗な女であつたが、どこか横柄に、武蔵へ向つて、子供へものをいいつけるように、

「うしろをお閉め、寒い風がふきこむと、子どもが風邪をひくがな」

といった。

武蔵は頭を下げ、

「はい」

と素直にうしろの板戸を閉めた。そしてさて——ふい鞆いしのそばの切株に腰かけて、この真つ黒な細工場と、そこからすぐ筵むしろの敷いてある三間みまほどなこの家の中を見まわしてみると、なるほど、壁の

一端に、かねて噂に聞くとおころの鎖鎌という見つけない武器が、およそ十挺ほど、板に打ちつけてある角掛つのかけに懸けてある。

(あれだな?)

こういう武器と、こういう一種の武術に出あつて置くことも、修行の一つと武蔵は考へて来たのであるから、それを見るとすぐ彼の眼の光は違つていたに相違ない。

碓きぬたの木槌きづちを下へおくと女房はぷいと起つて筵むしろの上へあがつた。

茶でも沸わかしてくれるのかと思つと、そこに敷いてある乳のみ児の蒲団の中へ手枕で横になつて、児に乳ぶさをふくませながら、「その若いお侍、おめえつちはまた、うちの良人ひとにぶつかつて、物ずきに、血へどを吐きにやつて来なしたのかよ。だが生憎あいにくう

ちの良人は旅へ出ているので、生命びろいしたようなものだけな」と、笑つていたのであつた。

五

憤つとなる気持をどうしようもない。はるばるこの山里まで鍛冶屋の女房に笑われに来たようなものである。どこの女房も亭主の社会的位置というものはみな誤認しているらしいが、この女房の如きは、自分の持ち者ほど世に偉い人はないときめているらしいから怖い。

喧嘩もできず、武蔵は、

「お留守か、それは残念な。旅へと仰っしやつたが、旅はどこまで？」

「荒木田様へ」

「荒木田様とは」

「伊勢へ来て荒木田様を知らねえでか。ホ、ホ、ホ、ホ」
とまた笑う。

乳ぶさを頬ばっていたあかご嬰兒がむずかると、女房は、土間の客な
どは打ち忘れたさまで、

ねんねしようとして

ねる子はかわい

起きてなく子は

つらやな

つらやな、母かかなかせ

なま訛りのある子守歌を節さえつけて謡うたっている。

ふいご場に火のあるのがせめて見つけものである。誰に頼まれて来たわけでもなし、諦あきらめるほかはないのだが、

「ご内儀、そのの壁にかけてあるのが、ご使用の鎖くさり鎌がまですか」

それを一見しておくのも後学のためであると考えて、手に取って見てもさしつかえないかというと、女房はうつらうつら手枕の居眠りと子守歌のあいだに、ふム……といつてあいまいに頷うなずく。

「よろしいか」

武蔵は手をのばして、その一挺を壁の角掛つのかけから外はずし、手に取

つて仔細に見た。

「——なるほど、これが近頃だいぶ用いられている鎖鎌か」

ただ握ってみれば、腰にも差せる一尺四寸ほどの棒に過ぎない。棒の先の環かんから長い鎖くさりが垂れていて、その鎖の端には、ぶんと振れば、人間の頭蓋骨を砕くに足る鉄の球がついている。

「ははあ、ここから鎌が出るのか」

棒の横にミゾが彫つてあつて、中に潜ひそんでいる鎌の背が光つている。爪をかけて引き出すと、鎌の刃はは横に身を起して、これは優に人間の首を搔くことのできる刃渡りを備えているのだった。

「ム……こう使うのだな」

左に鎌を持ち、右の手にくさりのついた鉄球をつかんで、武蔵

は仮の敵をそこに想像しながら、構えを作つて、独り考えていた。するとふと、手枕を外してこつちへ眼をくれた女房が、

「なんじゃあ、まあ、そのかたちは」

と、乳ぶさをしまいながら土間へ下りて来て、

「そんな形していたら、すぐ太刀を持った相手に斬られてしまう。鎖鎌というのはこう構えるのじゃ」

武蔵の手から引つ奪^たくると、そのつまらない百姓鍛冶屋の女房がひたと鎖鎌を持って、体の仕型^{しかた}を見せた。

「あつ……」

武蔵は思わず眼をみはつた。

乳ぶさを出して寝そべっているところを見たのでは、牝牛^{めうし}のよ

うな女にしか見えなかつたが、鎖鎌を持つて構えると、立派で、端巖で、その姿は美でさえあつた。

また、鯖さばの背のように青ぐろい鎌の刃渡りには、穴戸ししど八重垣流と彫ほつてある文字もあざやかに読まれるのだった。

六

あつ見事など、武蔵が眼を吸いよせられた途端に、鍛冶の女房はもうすぐ仕型の構えを、体から消して、

「ま、こんなものじゃ」

鎖鎌をがらがらと一本の棒にまとめて、元の壁へかけてしまつ

た。

武蔵は彼女のした型を、記憶する間がなかったのを、ひそかに遺憾にして、

(もういちど見たいが)

と思つたが、女房はさしたる顔もなく、きぬた砧を片づけたり、朝の炊ぎかしの仕掛をしたり、台所のほうでガチャガチャ水仕事に忙せわしい。

(あの女房ですら、あれほどな心得があるとすれば、亭主の穴戸梅軒という男の腕はどれほどか?)

武蔵は病氣のように、急にその梅軒という男にあいたくなつて来た。——だがあの女房のいうには、良人の梅軒は、伊勢の荒木

田とかいう人の家へ行っていて留守だという。

伊勢へ来て、荒木田様を知らないのか、とさつきも笑われたことだが、恥をしのんで、馬子にそつと聞いてみると、

「大神宮さまのお守もりゆうど 人ひと じゃ」

と、馬子は、鞆ふいごのそばの壁へ倚よりかかつて、いいあんばいに温ぬくもりながら、もう半分眠っていないがらいう。

（伊勢神宮の神官か、そこへ行つたのならすぐ分る、よし……）

勿論その夜は、筵むしろのうえにごろ寝である、それも、鍛冶の小僧が起きて、土間の戸をあけるともう寝ていられない。

「馬子、ことのついでに、山田までのせてゆくか」

「山田へ」

馬子は眼をみはる。

だが、きのうの分の駄賃は無事にもらったので、その方の不安はない、行こうということになって今日もまた、武蔵を馬の背にのせて、松坂へ出、やがて伊勢大神宮への何里とつづく参道並木を暮れ方に見た。

冬であるにしても、街道の茶屋はひどくさびれていた。並木の
大木が、風雨に仆れたまま、幾つも横たわっていた。旅客の影も
馬の鈴も稀れである。

禰ねぎ宜の荒木田家へ、武蔵は山田の旅籠はたごから問いあわせてみた。

——ししどばいけん穴戸梅軒という者が逗留しているか否かを。

すると、荒木田家の執事からの返辞には、そういう者は泊って

いない、何かの間ちがいであろう——とある。

武蔵は、失望と同時に、足の傷の痛みを思い出した。釘を踏んだ傷口はおとといころよりひどく腫はれている。

豆腐粕とうふかすを搾しぼった温湯ぬるゆで洗うとよいと教えられて、武蔵は翌日、旅籠で一日それを繰り返していた。

(もう今年も師走の中旬なかば)

そう考えると、武蔵は、豆腐くさい湯に焦いら々いらしてきた。すでに吉岡家へ宛てての決戦状は、名古屋から飛脚に託して出しているのだ。まさか、その期ごになって、足を傷めているからなどは意地でもないえない。

その期日も、敵の都合まかせといつてやってある。なお他の約

東もあるし、正月の一日までには、どうでも五条の橋だもとまで行つていなければならぬ。

「伊勢路へまわらず一すじに行けばよかつた」

軽い悔いを抱きながら、湯だらいに浸してゐる足の甲を見てみると、足は豆腐のように膨れて来る氣持がする。

七

こういう家伝の薬がありますとか、この油薬をつけてごろうじませとか、旅籠の者はいろいろ療法を講じてくれるが、武蔵の足は、日の経つほど腫れを増して、片足はまるで材木のような重さ

を感じ、夜具の下に入れると熱と激痛に耐えなくなる。

つくづく考えてみると——

彼はまだ物心ついてから、病気というもので三日と寝たことの覚えがない。幼少の時、頭の脳天に——ちようど月代さかやきの辺ちように疔ぢようという腫物できものわずらを患つて、今でも痣あざのような黒い痕あとを残しているので、彼は常に月代を剃らないことにきめているが——そのほかに病氣らしい病氣はしたことがなかった。

(病やまいもまた人間にとっては強敵だ。こいつを調伏する剣は何か?)

彼の敵は、常に、彼の外にばかりはいなかった。四日ばかり仰向けに寝たままでいる瞑想の課題に、そんなことを考えたりしたが、

(あと幾日)

と、年暮くれに迫る曆を見、吉岡道場との約束に思い及ぼすと、

(こんなことはしてられない)

肋骨あばらは、旺さかんな心臓を抑えるため、鎧よろいのように張つて来て、思わず、材木のように腫れている足で、がばと蒲団はを刎はね退のけてしま
う。

(この敵にすら克かてないで、吉岡一門に勝てるか)

病魔を組み敷くつもりで、無理かに畏こまつて坐まつてみる。——痛い。
気が絶え入るほど痛いのだ。

窓へ向つて、武蔵は眼をつぶっている。かつかと赤くなつた顔
がやがて醒さめてくる。彼の頑固な信念に、病魔も負けて、幾分か

頭がすずやかに became たらしい。

眼をひらくと、窓から真つ直に、外宮内宮の神林が展ひらけている。その上に前山まえやま、すこし東に方あたつて朝熊山が見え、それを繋ぐ山と山との肩の間から、群山ぐんざんを睥睨へいげいするように、突兀とつこつとして、剣のような一峰が望まれた。

「鷲嶺わしだな」

武蔵は、その山と睨みあつた。仰向けに寝ながら毎日見ていた鷲わしヶ岳たけである。彼は何となくこの山を見ると闘志を感じるのだつた。征服慾を駆り立てられるのであつた。四斗樽のように腫れた脚をかかえて寝ていると、なんとなく気に喰わない気がしてならない山の傲岸さである。

衆山を抜いて、白雲のうえに、超然としている鷲嶺わしの頭の尖さきを見ていると、武蔵は、柳生石舟斎のすがたが思い出されてならない。石舟斎という人物は、おそらくあんな感じの老人ではないかと思う。——いやいつのまにか彼は、鷲ヶ岳という山が石舟斎そのもののような気がして来て、遙か雲うんぴよう表へから、自分の意気地なさを、嘲あざけり笑われているかのような気がするのだった。

「……………」

山と睨めツこしている間は忘れていたが、ふとわれに戻ると、彼はまた鍛冶の鞆ふいごの中に突ツこんでいるような足を持てあまし、「ウウム、痛い」

思わず膝の下から横へ投げ出して、自分の物でないような太く

て丸い足くびに眉をしかめた。

「——おいつ、おいつ」

武蔵はその激痛を吐くような語勢で、旅籠はたごの女中を、不意に呼び立てた。

なかなか来ないので、彼はまた拳固で二つ三つ畳をたたいた。

「おいつ、誰かいなか。……すぐ出立するから、勘定をして来てくれい。それと弁当、焼米、丈夫な草鞋わらじ三ぞくほど、支度をたのむぞ」

神泉

保元物語に見える伊勢武者の平忠清は、この古市の出生とあるが、今は、並木の茶汲み女が、慶長の古市を代表していた。竹の柱を結い、筵編みの揚部あげじとみに、色褪せた帳とぼりなど繞めぐらして、並木の松の数ほど白粉おしろいの女たちが出ていて、

「寄って行かっしやれ」

「茶など、あがりやんせ」

「そこな若衆」

「旅の衆」

往來の旅客をつかまえて、真昼も夜もけじめがなかった。

内宮へ行くには、いやでも口さがない女の群れの眼を浴びたり、
袂たもとの用心をしながら歩かなければ行かれない。山田を出た武蔵も
また恐こわい眉と唇を持って、痛む足をひきずりながら、鈍どん々と、
跛びっこ行をひいてここを通った。

「あれ、武者修行さん」

「足をどうなされた」

「癒してあげよ」

「さすってあげよ」

女たちは、通せんぼして、武蔵の袂をとらえ、笠をつかまえ、
腕くびをとり、

「そんな恐い顔したらよい男が、だいなしになるがな」

といった。

武蔵は顔をあからめて、物もいい得ずただうろたえた。彼は、
こういう敵には何の備えもないようだった。しきりと謝ってばかりいる。その生真面目きまじめないわけを、女たちはまた、豹ひょうの子みたいで可愛らしいといって笑う。そして白い手の暴力はやまないのである。武蔵はいよいよ狼狽ろうばいして、見栄みえもなく、奪とられた笠を捨てたまま逃げ出した。

女たちの笑い声が、並木の空をどこまでも尾ついて来るような気がした。武蔵はあの白い手の群れに掻き荒された血が容易しずに鎮しずまらないで困った。

彼も女性というものに決して無感覚ではいられない。彼は永い

旅のあいだに、何処でもそういう困る目に遭^あつた。ある夜は、そのために、寝ぐるしくなることさえあつた。白粉^{おしろい}のにおいを思つて暴れる血を縊^しめころすように抑えて眠る努力は、劍の前に見る敵とはちがつて彼も、どうすることもできないのである。この性の心焰^{しんえん}が体じゆうを焼いて、寝がえりばかり打つて明かす夜には、お通のおもかげさえ醜^{みにく}い欲情の対象に、想い出してみるほどだつた。

——^{さいわ}倖いにも、彼は今、片方の脚が痛かつた。少し無理に駈けたので、その脚は、まるで熔^{ようてつ}鉄の中へ踏みこんだように、かつかと熱を持って、一步ごとに、激痛が足の裏から眼へ突き抜けて来る。

こう痛むのは、覚悟の前で出て来たことである。風呂敷づつみのように大きく縛った片足は、持ち上げるたびに、全身の力を要した。——そのため紅い唇や、蜂蜜のように粘る手や、甘酢い髪あますの毛のにおいやらが、すぐ頭から去つて、彼は、常の彼の身に回かえつていた。

(くそ！ くそ！)

一步一步、火の粘土ねんどを踏むようだった。汗が額ひたいににじんで来る。全身の骨が、ばらばらになるかと思う。

だが、五十鈴川いすずがわの流れを越え、内宮へ、一步入ると、何か心地がまるで変つていた。草を見ても樹を見ても、ここには神のけはいを感じるのであった。——何ごとの在おわしますかは知らねども

——鳥の羽音までが人の世のものではなかった。

「ウムム……」

武蔵は遂に、苦痛に耐えかねたのであろう、かぜのみや風宮の前まで来ると、大杉の根へ、うめ呻きながら、仆れて、自分の脚をじつと抱えた。

二

死んで石と化なつてしまったかのようになり、武蔵はいつまでも動か
なかつた。体の内からはう膿んでふく膨れ上がった患部が火のような脈
を打ち、体の外からは十二月の夜の寒気がひしひしと肌を刺した。

「……………」

武蔵はやがて知覚を失っていた。一体、どういう考えのもとに、突然、旅籠はたごの寢床を蹴って飛び出してしまったのだろうか。こういう苦しみをするのは当然わかっていたことである。

蒲団の中で自然に足の癒るのを待っていては果てしがないから——という病人の癩かんしゃく癩かからとすれば、無茶も甚だしい沙汰だ、あまりといえは乱暴である、苦しむだけで、その後のよけいに悪くなるのは知れきっている。

だが、精神だけは恐ろしく張りつめているらしい。そのうちに彼は、はツと首を擡もたげた。鋭い眼で、虚空をにらんだ。

虚空には、神苑の杉の巨木が、ごうつと絶え間なく暗い風に鳴

つていた。——が今、武蔵の耳をいたく刺戟したのは、その風の間に流れて来た——しょう ひちりき笙と篳篥と笛とを合奏あわせた古樂の調べであった。

さらになお、耳をすますと、その奏かなでのうちに、やさしい童女わらべたちの唱歌が聞き取れる。

シダラ ウテト

テテガノタマエバ

ウチハンベリ

ナラビハンベリ

アコメノソデ

ヤレテハンベリ

オビニヤセン

タスキニヤセン

イザセンイザセン

——くそつ！ とまたしても武蔵は唇を噛んで、無理に立ちあがった。自分の体が、にかわ膠のようにままにならないらしい。風宮の土塀へ、両手をかけ、手かにで蟹のように横へ歩いてゆく。

あなた彼方の燈ひの洩れる藪しとみから、天界の音楽は聞えるのだった。そこは、こらのたち子等之館といつて、大神宮に仕える可憐な清女たちが住む家だった。おおかた、てんびよう天平しやうの昔のように笙ひちりきや箏ひちりきの楽器をならべて、その清女たちが、かぐら神楽の稽古をしているのであろう。

虫が歩むように、武蔵が近づいて行ったのは、こらのたちその子等之館の

裏口らしかった。中を覗いてみたが、誰もいないのである。——
で彼は、かえつてそれをきやす気易く思ったように、帯の大小を取り外して、背の武者修行風呂敷とともに一つにから絡げ、塀の内のみのか蓑掛けの釘へ、預けるようにかけておいた。

丸腰の空身になると、武蔵は両の手を、腰の骨に当てて、すぐびっこ跛行をひいてどこかへ立ち去つた。

ほど経てからである。

そこから五、六町ほど離れている五十鈴川いすずがわの岩のほとりに、一人の裸形らぎようの男が、氷を割つて、ぎぶぎぶと水を浴びていた。

倅いに神官が気づかないからよいようなものの、もし見咎みとがめられたら、

(氣狂きちがいつ)

と、叱り飛ばすに違いない。

それほどに、裸の男の水浴みずあびは、傍はたから見ると氣狂いじみて見えた。太平記という書ほんによれば、その昔、この伊勢地方には、仁に木義長つきよしながという弓矢の大馬鹿者がいて、神領三郡に打ち入って、ここを占領し、五十鈴川の魚を漁とって食らったりし、神路山へ鷹を放って小鳥の肉を炙あぶったりして、大いに武威を謳うたっているうちに氣が変になったという男の話があるが——今夜の裸男に、その悪あく靈りようが憑のり移ったのではあるまいか。

やがて彼は水禽みずどりのように、岩の上にあがって体を拭き着物を着こんだ。——それは武蔵であつた。

鬢びんの毛は、そそけ立って、一すじ一すじ、針のように凍っていた。

三

このくらいな肉体の苦痛に勝てないで、生涯の敵に勝てるか、と武蔵は自分を叱咤するのであった。生涯はおろかなこと、やがて近い日には、吉岡清十郎とその一門という大敵に当らなければならぬ。

吉岡方と自分との事情は、かなり険悪でまた複雑な事情にある。今度という今度こそは、先は一門の実力と体面を挙げて自分へか

かつて来るにちがない、必殺の陣を布しいて、来るべき日を、

(今やおそし)

と彼らは、手ぐすね引いて、待ちかまえているに相違ないのだ。よく強がった侍が、念仏のようにいう、必死とか、覚悟などという言葉も、武蔵の考えからすると、取るに足らないたわ言ごとのように思える。

およそ人なみの侍が、こういう場合に立ち至った時、必死になることなどは、当然な動物性である。覚悟のほうは、やや高等な心がまえであるが、それとても、死ぬ覚悟ならば、そう難しいことではない。どうしても死なねばならぬ事態に迎えられる死ぬ覚悟だとすれば、なおさら、誰もすることである。

彼がなやむのは、必死の覚悟が持てないことではなく、勝つことなのだ。絶対に勝つ信条をつかむことである。

道は遠くない——

ここから京都まで、四十里とはあるまい、すこし踵を飛ばせば、三日を費^つやさずに行き着くことが出来る——だが、心の備えは、幾日かかったら出来るというものではない。

すでに名古屋から吉岡方へ、決戦状は出してあるが、その後で、
武蔵は、

(肚はできているか。きつと勝ちきることができるか)

と、自分で自分に向つて糺^{ただ}してみると、遺憾ながら、心の隅に一脈の脆^{もろ}い層を認めないわけに行かなかつた。

それはなにかというと、やはり自身の未熟を自身知っていることだった。彼は、自分がまだ決して達人の域にも名人の境地にも到っていない、未完成の人間であることをよく知っている。

奥蔵院の日観にあい、柳生石舟斎を思い、また、沢庵坊主の出来ていることを考えても——いかに自分の価値を高く置こうとしても、

(未熟だ)

と、自分の粗質をばらばらに解^{ほぐ}して、その弱点や虚を多分に見出さずにいられない。

そういう未熟な——まだ出来あがっていない自分を押しすすめて行って、必殺の士^しを占めている多数の敵の中へ入ってゆくのだ。

しかも勝とうというのだ。——兵法者たるものの根本的な本義として、いかによく戦つても、戦つただけではよい兵法者とはいわれない、飽くまで勝つ！ 飽くまで天寿を全うするまで勝ち抜いて、この世に見事に生命の太い線を描いて見せなければ、兵法者として一人前に生きた者とはいわれないのである。

武蔵は、身ぶるいして、

「おれは勝つ！」

声を出して、神林をさけびながら歩き出した。

五十鈴川の上流へ向つて——

らいらい磊々と重なっている岩のあいだを、彼は、原始人のように、

這いすすんで行くのだった。斧おのを入れた例ためしのない太古の溪谷林

には、音のしない滝がかかっていた。滝水も皆、氷柱つららになつて凍っているのである。

四

いったい、どこへ、何を目的にして、武蔵はそんな努力を賭として行くのか。

裸で、神泉に浴した罰があたつて、ほんとに気でも狂つたのではなからうか。

「何を。何を」

鬼のような血相なのである。岩に攀よじ、藤つるづるにつかまつて、

巨岩大石を、足の下に征服してゆく一步一步の努力というものは、到底、生やさしい意志でやれる仕事でない。それに大なる目的がかかっていなければ、正気の沙汰ということはできない。

五十鈴川の一之瀬から、約十五、六町の溪谷は、鮎あゆすらも上のぼれないといわれている岩石と奔湍ほんたんである。それから先は、猿か天狗のほかは、行けそうもない断崖だった。

「ウム、あれだな驚嶺わしは」

彼の精神状態のまえには、不可能という壁は見えないらしい。

大小や持物を、子等こらのたち之館に置いて来たのはこの辺の用意であつ

たとみえる。武蔵は断崖の藤づるへ取ツついた。一尺一尺と宙へよじ登ってゆくのであつた。人間の力とは見えない。何か宇宙の

引力が一箇の地上の物体を徐々と引き上げているように見える。

「ようしっ」

征服した断崖の上で、武蔵は大声を張っていった。五十鈴川の白いながれの末から二見ヶ浦の渚^{なぎさ}まで、もうそこからは遙かに下に見えたのだ。

きつと、彼が眼をやった前方には、夜気に煙っている疎林の中へ、嶮峻^{けんしゅん}な鷲ヶ岳^{すそ}が裾をひいていた。——痛む足をかかえて寝ていた旅籠^{はたごし}の一室から、毎日のように仰いでいた、気に喰わない鷲嶺^{わし}のすがたへ、彼は今、こうして肉薄して来たのである。

（石舟斎だ、この山は）

武蔵は、そう思って、ここまで来た。——あの腫^はれ上がって

る脚を立てて、勃然と、旅籠を飛び出し、神泉を浴びて、ここへ攀よじて来た彼の目的は、初めてそのらんらんとした眼に明らかになっている。——要するに、彼のおそろしい負けん気の底には、いまだに、柳生石舟斎という巨人が、頭へ暈かさをかぶせられているように、気になつてならないらしいのである。

ために、この山のすがたが、なんとなく石舟斎のように見え、足の患わずらいに悩んでいる自分を、毎日、嘲あざけるかのように睥睨へいげいしている山の容かたちが、忌々いまいましくて、

(気に喰わない山だ)

と、数日、思い積っていたので、その鬱憤をかかえて、一気に、頂へよじ登り、

(これでもか、石舟斎め)

と、土足にかけて、踏みにじってやったら、さだめし、さばさばするだろう。またそれくらいな、自信がつかめなければ、京都の土を踏んで、吉岡方との試合に、どうして勝目があるか。

踏み敷く草も木も氷も、武蔵の足にかかるもの、敵でない物はない。——勝つか負けるか！ 一步一步が勝敗への呼吸であつた。神泉の中で氷化した五体の血が、今は熱泉のように毛穴から湯気を立てていた。

行者ものぼらないという鷲ヶ岳の赤肌へ、武蔵は、抱きついていた。足がかりを捜して、足が岩へかかると、崩れてゆく砂岩が、ふもとの疎林の中で轟いた。

百尺——二百尺——三百尺——武蔵の影はだんだん空へ小さく
なつて行く。白雲が来てつつみ、白雲が去るたびに、その影は空
のものとなつていた。

鷲嶺^{わし}は巨人のように、彼のすることを冷然と視^みていた。

五

蟹^{かに}が岩へ抱きついたように、武蔵は山の九合目にしがみついて
いた。

その手でも足でもが、少しでも弛^{ゆる}んだせつなには、彼の体は、
崩れてゆく岩とともに、墜^おちるところまで墜ちて行かなければ止

まるまい。

「ふーッ……」

満身の毛穴が呼吸いきをする。ここまで来ると、心臓が口の外へ出てしまうかと思うほど苦しかった。少し登っては、すぐ休む。――そして思わず攀よじのぼって来た脚あしもと下を見おろすのであった。

神苑の太古の森も、五十鈴川の白い帯水も、神路山、朝熊あさま、前山の諸峰も、鳥羽の漁村も伊勢の大海おおうなばらも、すべてが自分の下にあった。

「九合目だ！」

温い汗が、内ぶところからむつと顔へにおう。武蔵はふと、母の胸に首を突っ込んでいるような陶醉をおぼえた。この荒い山の

肌と自分の肌との差別がつかなくなつて、そのまま眠つてしまいたくなつた。

ざざざと、足の拇おやゆび指をにかけている岩がくずれた。彼の生命がピクと脈を打つて、無意識に、次の足がかりを捜す。——もう一息というところの苦しきは言語に絶したものだつた。それはちやうど、斬るか斬られるか、力の互角している剣と剣との対峙たいじに似ている。

「ここだ。寸前だ」

武蔵はまた、山を引つ搔くように、手足をすすめた。

ここでへたばるような弱い意力や体力であるとすれば、兵法者として、ゆくすえ何日か、他の兵法者のために、敗れを取るにき

まっている。

「畜生」

汗が岩を濡らすのであった。自分の汗で幾たびも滑りかける程になる。武蔵の体は、一朵だの雲みたいに、濛々もうもうと汗にけむっていた。

「石舟斎め」

呪じゆもん文もんのようじゆもんにいいつつける。

「——日観め、沢庵坊たくあんぼうめ」

一足一足、彼は日頃自分より高い人間であると思っている者の頭を踏み越すつもりで踏みのぼって行った。山と彼とはもう二つの物ではない。こういう人間にしがみつかれたことを山霊も驚い

ているにちがいない。——突然、大砂利や砂を飛ばして、ぴゅうと、山がうなつた。

手で口を塞ふさがれたように、武蔵は息が止まった。岩につかまっても体をズズズと持つて行かれそうな風圧をおぼえた。……しばらく目をつぶつたままじつと俯うツ伏ぶしていたのである。

しかし、彼の心には、凱歌がいがみちていた。俯うツ伏ぶしたせつなに、十方無限の天空を見たのである。しかも、うツすらと夜の白みかけた雲の海には、曙色あけぼのが映さしていた。

「かつ、克かつた！」

頂上を踏んだと思う途端に、彼は意志の弦つるもぷつんと切れたように倒れてしまったのだ。山顛さんてんの風はたえまもなく彼の背へ小

石を浴びせた。

——そうして刻々、無我無性のさかいに俯ツ伏しているうちに、武蔵は何ともいえない快感に全身がかかるくなつて来るのを覚えた。汗でビシヨ濡れになっている体は頂上の大地へ慥乎しっかと貼りついていて、山の性と、人間の性とが、この黎明れいめいの大自然の間に、莊嚴なる生殖をいとなんでいるかのように、彼はふしぎな恍惚に打たれていつまでも眠っていた。

はつと、頭を擡もたげてみると、頭は水晶のように透明な気がする。体を、小魚のようにピチピチと動かしてみたい。

「おおうつ、おれの上にはなにものもない。おれは驚嶺わしを踏んでいる！」

鮮麗な朝陽ちようようが、彼と山頂を染めていた。彼の原始人のような太い両腕は空へ突ツ張っていた。そしてたしかにこの山頂を踏みしめているところのわが二つの足をじつと見た。

ふと気がついたのである。見ればその足の甲から、青い膿汁うみが一升もあふれ出ているではないか。それは、またこの清澄な天界に、異いな人間のおいと、噴ふつ切れた万鬱ばんうつの香気とを放つていた。

冬かげろう

こらのたち
 子等之館に起き臥ふしている妙齡の巫女みこたちは、もちろんみな
 清女であつた。幼いのは十三、四歳から大きいのは二十歳はたちごろの
 処女むすめもいた。

白絹の小袖に緋ひの袴はかまは、神楽かぐらをする時の正装であつて、平常ふだん、
 ここの館たちで勉強したり掃除をしている時は、大口に似た木綿の袴
 を穿はき、袂たもとの短い着物を着て、朝のお奉仕つかえがすむと、めいめいが
 一冊ほんずつの書ほんをかかえて、禰宜ねぎの荒木田様の学問所へ、国語や和
 歌のお稽古にゆくことが日課であつた。

「あら、なんじやろ？」

ぞろぞろと裏門から今、それへ出かけてゆく清女たちの群れの

中で、一人が見つけ出したのである。

夜のうちに、武蔵がそのみのかけ蓑掛の釘へかけて行つた大小と武者修行風呂敷。

「誰のやろ？」

「知らんがな」

「お侍さまの物や」

「それは分つているが、どこのお侍様やら？」

「きつと、泥棒が忘れて行つたのじやろが」

「ま！ さわらぬがよい」

まるい眼をみは睜り合つて、牛の皮をかぶつた盗人の昼寝でも見つけたように、取り囲んでかたず固唾をのむ。

そのうちに、一人が、

「お通つう様にいうて来よか」

と、奥へ走つて行つて、

「お師匠さまお師匠さま、たいへんですよ、来てごらんなさい」

欄らんの下から呼ぶと、寮舎の端にある一室から、お通は机へ筆を

おいて、

「なんですか」

窓を開けて顔を出した。

小さい巫女みこは指さして、

「あそこへ、盗人が、刀と風呂敷を置いてゆきました」

「荒木田様へお届けしておいたらよいでしょう」

「だけど、みんな触るのを、怖がっているから、持つて行かれません」

「まあ、たいした騒ぎようですね。じゃあ後から私がお届けしに行きますから、皆さんは、そんなことに道草をしないで、はやく学問所へお出いでなさい」

程経て、お通が外へ出て来たころには、もう誰もいなかった。炊事をする老婆と、病人の巫女みこが一室にしんと留守しているだけだった。

「お婆さん、これは誰の物か、心あたりがないのですか」

お通は、そう糺ただしてみた上で、武者修行風呂敷でくくりつけてある大小を下ろしてみた。

うっかり持つと、手から落ちそうに重かった。どうしてこんな重量のあるものを男は平気で腰にさして歩かれるかと疑った。

「ちよつと、荒木田様まで、行って来ますから」

留守の婆やにいつて彼女は、その重い物を両手にかかえて出て行った。

お通と城太郎の二人が、この伊勢の大神宮の社家へ身を寄せたのは、もう二月ほど前のことで、伊賀路、近江路、美濃路と、あれから後、武蔵のあとを捜しに捜しぬいた揚句、冬にかかると、さすがに女の山越えや雪の中の旅には耐えかねて、鳥羽の辺りで、れの笛の指南をして逗留しているうち、禰^ね宜^ぎの荒木田家で伝え聞いて、子等之館の清女たちへ、笛の手ほどきをしてくれまいか

という話であつた。

そこで指南することより、彼女はここに伝わっている古樂を知りたかつたし、また、神林の中の清女たちと幾日でも暮してみることも好ましくて、乞わゆるままに身を寄せたのであつた。

その際、都合のわるいのは連れの城太郎であつて、少年だからといつてこの清女の寮と一緒に住むことは当然許されないので、やむなく彼は、昼間は神苑の庭掃にわはきを命じられ、夜になると、荒木田まき様の薪小屋へ帰つて眠つていた。

しようしよう

蕭々々と、落葉樹の冬木立は、この世とも思えない、神苑のそよ風に鳴っていた。

一すじの煙が——その煙さえ何となく神代のもののように——疎林の中からあがっている。その煙の下には、竹たけぼうき箒ほうきを持つている城太郎の姿がすぐ聯想された。

お通は足を止めて、

(あそこで、働いている)

と思った。そう思うだけでも、微笑ほほえみが頬へのぼって来るのである。

あの腕白が。

あの、きかん坊が。

この頃はよく素直に、自分のいうことをきき、また、遊びたい盛りを、ああやって働いてくれると思う。

パーン、パーンと木を折るような音が響いて来る。お通は、重い大小を両の手にかかえていたが、つい林の小道へ入って、

「城太さアーン」

すると、

やがて遥か彼方あなたで、

「おおウいつ」

相変らず元気にみちた城太郎の返辞が聞え、間もあらずそれは駈けて来る跣音となつて、

「お通さんか」

と、眼のまえに立った。

「まあ、お掃除をしているのかと思つたら、その恰好は何ですか。

はくちよう

——白丁はくちようを着ているくせに、木剣など持つて」

「稽古をしていたんだよ。立木を相手に、剣術の独ひとりげいこ稽古を」

「お稽古は結構ですけど、このお苑にわを、何と心得ているんです

か。清浄と平和をあらわすためのわたくしたち日本人々のここ

ろのお苑にわですよ。民くさの母とおまつり申しあげてある女神さま

の神域です。——ですから、また、ごらんなさい。神苑のうちの

樹木折るべからず、鳥獸殺生禁断のことという禁札が立ててある

ではありませんか。その中で、お掃除役を奉仕する者が、木剣で

木など折つてはいけないでしょう」

「知ってらい」

城太郎はそういつて、お通のお談義へ、ばかにするなというように顔つきをした。

「知っているなら、なぜそんな物で、樹を折るんですか。荒木田様に見つかると、叱られますよ」

「だって、枯れている樹を打つならいいだろう。枯れ樹でもいけないかい？」

「いけません」

「何いつてやがるんだい。——じゃあおれは、お通さんに聞きたいことがあるよ」

「なあに」

「そんなに、大切な苑にわならば、なぜもつと、今の人たちが、みなして大事にしないのだい」

「恥ですね、ちようど、それは自分たちのこころに、雑草を生やして置くのも同じですから」

「雑草ぐらいならよいが、雷で裂けた樹は裂かれたまま朽ちているし、暴風雨あらしでふき仆された大木は、根を出したまま方々で枯れている。彼方あっちこっち此方こっちのお社は、鳥が来て、屋根を突ツつくものだから、雨が漏もっているようだし、廂ひさしの壊れているところだの、曲っている燈籠だの——どうしてこれがそんなに大切な所と見えるかい？ え、お通さん、おれは聞きたいね——大坂城は摂津せつの海から見ても燦爛さんらんと光っているじゃないか。徳川家康は今、伏見城

を始め諸国に十幾つも巨おおきな城を築かせているというじゃないか。京都、大坂、どこの大名や金持の邸やしきをのぞいても、住居はぴかぴかしているし、庭は利休だの遠州だのつて、塵ちり一つさえ茶の味に触るなんていつているのに——ここがこんなでいいものかね。この広い神領ほうぎに箒ほうきを持っているのは、おれと、白丁を着たつんぼの爺さまと、三、四人しかいないんだぜ」

三

お通は、くすりと白い顎あごを掬すくつて、

「城太郎さん、それはお前、いつか荒木田様が仰つしやった講義

の時のおはなしと、そつくりじやないの」

「あ、お通さんもあの時、聞いてた？」

「聞いていましたとも」

「じゃ駄目だ」

「そんな請売りうけうりは、通用しませんよ。——だけれど、荒木田様が
そういつて嘆くのはほんとだと思えます。城太郎さんの請売りに
は感心しないけれど」

「まったくだ。……荒木田様にいわれてみると信長も、秀吉も、
家康も、みんな偉くない気がしちまう。偉いには違いないんだろ
うけれどさ、天下を取つても、その天下で、自分だけが偉い頂上
だと考えていることが、偉くないや」

「でも、まだまだ信長や秀吉は、ましな方なんです。世間と自分への言い訳だけにでも、京都の御所をしつらえたり、人民をよろこばしたりもしていますからね。——ところが足利氏の幕府だった永えいきよう享きやうから文明年間なんて、たいしたものでした」

「へ？ どういう風に」

「その間には応仁の乱なんていう年があつたでしょう」

「ウム」

「室町幕府が無能だったので、内乱ばかり起つて、力のある者と力のある者が、自分たちの権力ばかり通そうとし、人民たちは一日とて、安き日もなかつたほどですから、国のことなんか、まじめに考えてみる人もありません」

「山名、細川なんかの喧嘩だろう」

「そうそう、戦いくさを、自我のためにばかりしていました、手のつけられない私闘時代。——その頃、荒木田様の遠い先は、荒木田氏う経じつねといつて、やはり代々、この伊勢の神主さまを勤めていたんですが、世の中の我利我利武者が、わたくしの喧嘩ばかりしているために、応仁の乱の頃からは、たれもこんな所をかえりみる者がなく、古式も御神事もすっかり廃すたれてしまったのです。それを前後二十七度も、政府に嘆願して、ここの荒廃をおこそうとしたのですが、朝廷には費用がなく、幕府には誠意がなく、我利我利武者は、自分たちの地盤争いに血まなこで、捨てて省みる者もなかったということです。——氏経様は、その中を、時の権力や貧

苦とたたかい、諸人を説きあるいて、やっと明応の六年ころ、仮か宮の御遷宮をすることができたというのです。——ずいぶん呆りみやれるじやありませんか。——だけど、考えてみると、私たちも、大きくなると、この体の中に、母の乳がながれて赤くなっていることは忘れてしまっていますからね」

すっかりお通に熱心に喋舌しゃべらせてしまつてから、城太郎は手をたたいて飛び退き、

「アハハハ。あははの、あははだ。おれが黙つて聞いていれば知らないと思つて、お通さんのもみんな、請売りじやないか」

「あら、知つてたの、——人が悪い！」

と打つ真似をしたが、両の手にかかえている大小の重さに、た

だ一足追つて、笑いながら睨んだ。

「オヤ」と、城太郎は寄つて来て、

「お通さん、その刀誰のだい？ ……」

「いけませんよ、手を出しても、これは他人ひとの物ですから」

「奪とりやしないから、見せてごらんよ。——重おもそうだね。大きな

刀だね」

「それごらん、すぐほしそうな眼をするくせに」

四

ばたばたと小走りに草履の音が後ろへ来ていた。先刻さつき、子等こらの之

館たちから出て行つた稚おさない巫女みこの一人で、

「お師匠さま、お師匠さま。あちらで、禰ね宜ぎ様が呼んでいらつしやいますよ。何か、お頼みがあるんですつて」

と、お通へ呼びかけ、お通が振向くとすぐにまた、元のほうへ走つて行つた。

城太郎は、何か、びくつとしたように、四辺あたりの樹々を見まわした。

冬の樹洩れ陽は、さざ波のように、戦そよぐ梢こずえから大地へこぼれていた。城太郎はその光の斑ふの中に、じつと、何か幻想でも描くような眼をしていた。

「——城太さん、どうしたんです。何をきよろきよろ見まわして

いるの」

「……なんでもない」

さびしげに城太郎は指を噛んだ、そしてこういった。

「今、あっちへ行つた娘が、いきなりお師匠様と呼んだらう。……だから、おいらは、自分のお師匠さまかと思つてき——。どきつとしたんだよ」

「武蔵さまのこと？」

「あ、あ」

唾おしのように、城太郎が空虚うつろな返辞をすると、お通はさなきだに悲しくなつてしまつて、途端に、嗚咽おえつしたようなものが、眼とも鼻ともわからない感情の線をつき上げて来るのだった。

——そんなこと、いい出してくれなければよいのに、と城太郎の無心にいったことばが辛くて恨めしくなってしまう。

一日として、武蔵をわすれ得ないことが、お通には苦しい重荷だった。なぜそんな重荷は捨ててしまわないのか——そして平和な郷で、よい女房になりよい子を生もうとしないのか——とあの無情な沢庵はいうが、お通の耳には、恋を知らない禅坊主を憐れむ心こそ起るが、抱きしめている今のものを、心から捨てたいなどとは夢にも思われないのである。

恋は、虫歯のように、どうにもならない傷みを持つ。ふとまぎれている間こそ、お通も何気なくしているが、思い出すと、矢もたてもなくなつて、あて的がないまでも、諸国諸街道を足にまかせて

捜し歩き、武蔵の胸へ顔を当てて泣きたい。

「……ああ」

お通は、黙って歩きだした。——何処に、何処に、何処に？

——およそ生きとし生ける者の数多あまたな悩みのうちでも、焦じれたくて、やるせなくて、どうにもならない悶もだえは、会えない人に会わんとする人間の焦躁であろう。

ポロリと、涙をこぼしながら、お通は自分の胸を抱きしめて、黙々と足を運んでいた。——その手とその胸との間には、汗くさい武者修行風呂敷と、柄つかいと糸の腐っているような重い大小がかかえられている。

だがお通は、知らなかった。

うす汚いその汗のにおいが、武蔵の体の物であるなどどうして考えられようか。重いという感じのほか、お通は持っていることさえうっかりしていた。心のすべてを武蔵のことに占められて。

「……お通さん」

城太郎は、彼女の後から済まない顔して従ついて来た。禰ね宜ぎの荒木田様の門の内へ、彼女のさびしそうな背が隠れかけると、たもとへ飛びついて、

「怒ったの？ 怒ったの？」

「……いいえ、なにも」

「ごめん。——お通さん、ごめんね」

「城太郎さんのせいじゃありませんよ、またわたしの泣きたい虫

が起つたんでしよう。わたしは、荒木田様の御用を伺つて来ますから、おまえは、あちらへ戻つて、一生懸命にお掃除をなさいね」

五

荒木田氏うじとみ富は、自分の邸を学まなびの之舎と名づけて、学校に当てていた。そこに集まる生徒は、ここの可愛らしい巫女みこのみに限らない。神領三郡のさまざまな階級の子が四、五十人ほど通つて来る。

氏富は、今の社会ではあまりはやらない学問をここで幼い者たちに教えていた。それは文化のたかいという都会地ほど軽んじら

れている古学であつた。

ここの子女が、その学問を知ることは、この伊勢の森がある郷土としても、ゆかりがあるし、国総体の上からも、今のように、武家の盛大が、国体の盛大かのように見えて、地方のさびれかたが、国のさびれとは誰も思わないような世の中に、せめて、神領の民の中にだけでもこころの苗なえを植えておけば、いつかは生々として森のように、精神の文化が茂る日もあろうか——という、これは彼の悲壮な孤業なのであつた。

むつかしい古事記や、中華の経書なども、氏富は、子どもの耳になじむように、愛と根気をもつて毎日話した。

氏富が、そんなふうには、十数年、倦うむことなく、教育している

せいか、この伊勢では、豊臣秀吉が関白として天下を掌握しようが、徳川家康が征夷大將軍となつて、威をふるつて見せようが、世間一般のように、英雄星を太陽とまちがえるような錯誤さくごは三歳の童児も持つていない。

——今、氏富は、その学まなび之舎のやのひろい床ゆかから、すこし汗ばんだ顔をして出て来た。

生徒たちは、そこを出ると、蜂の子のように帰つて行つた。すると一人の巫女みこが、

「禰ね宜ぎさま。お通さまが、あちらで待つておりますよ」と告げた。

「そうそう」

氏富は思い出して、

「呼びにやっておきながら、すっかり、忘れていた。どこへ来ているか」

お通は、学問所の外に立つて、あの大小をまだ抱えたまま、先さ刻つきから氏富が子供たちへ熱心に行っている話を、そこで聞いていたのであった。

「——荒木田様、ここにおります。お通でございますが、何か、御用でございましょうか」

六

「お通さんか、待たせて済まなかったの。まあお上がり」

氏富は、自分の居間へ彼女を導いて行ったが、坐らぬ前に、

「なんじゃ？」

と、彼女の抱えている大小へ目をみはった。

今朝、子等こらのたち之館の内堀の蓑掛みのかけに、持主の知れないこの大小がか

けてあつて、ほかの品物しなとちがい、巫女みこたちが気味悪がるので、

自分が届けに持つて来たのですと話すと、荒木田氏富も、

「ホ？ ……」

白い眉をひそ顰め、いぶかしげに眺めていたが、

「参拝人のものでもないのう」

「ただの参拝人が、あんなところへ入つて来るわけはありません。

それに、ゆうべは見えなかったのに、今朝がた稚児ちごたちが見つけたのですから、堀の内へ入つて来たのも夜半よなかか夜明けらしいのです」

「ふうむ……」

嫌な顔して、氏富は、口のうちで呟いた。

「ことによるとわしへ思い当るように、神領郷士の者が、嫌がらせにした悪戯いたずらかも知れぬな」

「そんな悪戯をしそうな者のお心当りがあるのですか」

「ある！ ……実はお汝ことに来てもらうたのもその相談じゃが」

「では何か、私かかわに関りのあることで」

「気持を悪くなさるまいぞ——こういうわけじゃ。お汝ことの身を、

あの子等之館へ置いておくのがよろしくないというて、わしの身を思うてくれるあまり、わしに喰つてかかる神領郷士の者がある」

「ま、私のために」

「なんの、お汝ことがそう済まん顔をする理由わけはちつともない。しかし、世間眼せけんめというもので見ると——怒りなさるなよ……お汝ことはもう男を知らぬ清女せいじよではない——清女でもない女を子等之館へ置くのは神地を穢けがすものだ——まアこういうのじやな」

氏富は淡々と話しているが、お通の眼のうちには、口惜しげな涙がいつぱいに光った。誰に向つて怒りようもないそれは無念さだった。しかしまた、旅に馴れ、人に馴れ、そして垢あかのように年月古い恋を心につけて世間をさまよっている女を——世間がそう

見るのは当り前かも知れないとも思う。だが、それにせよ、処女が処女でないといわれることは、忍び難い恥辱をあびたように身が顫くおのののだった。

氏富は、それほどの問題とは考えていないらしい。けれど、人の口がとかくうるさいし、もう数日のうちには初春はるともなるのだから、この辺で、巫女みこたちの笛の指南は打切りにしてもらいたい——つまり子等之館を出てくれまいかという相談であった。

元より最初から長居をするつもりはないし——氏富にそういう迷惑がかかっているには猶さらのこととも考え、お通はすぐ承知して、ふた月余りの恩を謝して、今日にも先の旅へ立ちます——と答えると、

「いや、そう急がいでもよいのじゃが」

氏富は、いい出したものの、薄々聞いていた彼女の身の上に、ひどく気の毒な心地もして、どう慰めたものかと案じるように、貧しげな手文庫を寄せて、何かつつんでいた。

お通の影のように、いつのまにか後ろの縁へ来ていた城太郎は、その時、そつと首を伸べて囁ささやいた。

「お通さん、伊勢を立つの。おらも一緒に行こうね。——もうこの掃除は飽き飽きしていたところだ、ちようどいいや、ネ……ちようどいいよ、お通さん」

七

「わしの寸志じゃ……まことに薄謝だが、お通さん、路銀のたしに納めてくだされ」

手文庫の貧しい中から、氏富は、いくらかの金をつつんでそこへ出した。

お通は、滅相もないという顔つきで、手も触れない。子等之館の巫女たちへ笛を指南したといつても、自分もふた月ほどの間、多分なお世話になっている。謝礼をいただくくらいならばこちらからも宿料を置いてゆかねばなりませんと断ると、氏富は、

「いやその代りに、お通さんがこれから先、京都の方へ立ち廻られた時、ついでに頼み申したい用事もあるのじやから、それも承

知してもらったり、これも納めて置いてもらわねばならん」

「お頼みのことは、何でもいたしますが、これはお志だけでたくさんです」

強^たつて、さし戻すと、氏富は彼女のうしろにいる城太郎を見つけて、

「オオこれ。それでは、これはお前にあげるから、道中、何ぞ買物でもするがいい」

「ありがとうございます」

城太郎はすぐ手を出して、自分の手に納めてしまつて後、

「お通さん、もらつて置いてもいい？」

と事後承諾を求めたので、お通もせんかたなく、

「すみませぬ」

と礼をいう。

氏富は満足して、さて、

「頼みというのは、お汝ことたちが、京都へ行つた折に、これを堀川の鳥からすまる丸ききよう光広卿のお手許まで届けてほしいのじゃが」

と、壁のちがい棚から、ふた巻の絵巻物を取り下ろして、

「おととしの頃、光広卿から頼まれて、ようようこのほど描きあげたわたしの拙つたない絵巻ことばがきじゃが、詞書を光広卿が遊ばして、献上するお心と聞いておる。ただの使いや、飛脚の者の手に託しては、それゆえに、心もとないのじゃ。雨にもよごれぬよう、不浄なこともないように、お汝ことたちが、大事にとどけてくれまいか」

これはまた、思いがけない大役と、お通はちよつと当惑顔であった。しかし、いな否むわけにもゆかず承知すると、氏富は、べつに作つて置いたらしい箱と油紙などを取り寄せ、それを包んで封にする前に、いささか自慢でもあり、また自分の作品を人手に渡す名残も惜しまれるらしく、

「どれ、ちよつと、お汝ことたちにも、見せてやろうかの」と、二人の膝のまえに、その絵巻を繰り展ひろげた。

「ま！」

思わずこうお通は声を放ってしまった。城太郎も大きな眼をして、絵の上へのしかかるように首をつき出した。

まだ詞書ことばがきがついていないので、何の物語を絵にしたものか

わからないが、そこに描かれてある平安朝の頃の風俗や生活が土佐流のこまかい筆と、華麗な絵具だの砂子いろどに彩られて、次から次へと、眼も飽かさず展ひろげられて行くのであつた。

絵のわからない城太郎でさえ、

「ああ、この火はいいな。この火は、ほんとに燃え上がっているようだ……」

「手でさわらずに見ておいで」

息をひそめて、二人がそれへ心を奪われているところへ、庭口から廻つて来た社家の雑ざつしやう掌てが、何か、氏富へ向つて話していた。

氏富は、雑掌のいうことを聞いて、うなずきながら、

「ム……そうか、疑わしい者ではあるまい。だが念のためじゃ、当人から一札取って渡してやるがよいぞ」

そういつて、お通がさつきここへ抱えて来た大小と、汗くさい武者修行風呂敷とを、その雑掌の手へ持たせてやった。

八

笛の先生が急に旅立つと聞いて、こらのたち子等之館の清女たちは、ひとしく寂しい顔をして、

「ほんと？」

「ほんと？」

お通の旅姿を取り巻き、

「もうここへは帰らないんですか」

と、姉に別れるように悲しんでいう。そこへ城太郎が、

「お通さん、支度出来たよ」

と裏の土塀の外で呶鳴る。

見れば、白はくちよう丁ぢょうを脱いで、いつもの裾の短い着物に、腰には

木刀を横たえ、荒木田氏富から大事にといわれて、二重三重に包んだ例の絵巻物の入っている箱を風呂敷で背中へ斜めに背負いこんでいる。

「まあ、早いですね」

お通が窓から答えると、

「早いさ。——お通さんはまだかい、女と歩くとお支度が長いからなあ」

その門から内へは、男と名のつく者は一步も入れない規則なので、城太郎はしばしの間、陽ひなたぼっこをしながら、霞む神路山の方へ欠伸あくびをしていた。

ちよつとの間でも、彼の澆刺はつらつとした神経は、すぐ退屈をおぼえるらしく、じつとしていられないらしい。

「——お通さん、まだ？」

館たちの内では、

「今すぐに行きますよ」

そのお通も、すっかり支度はすんでいたのであるが、わずかふ

た月でも起おきこ臥ふしをともしにして、しかもよい姉ねえさま様のように親しんでいた人を、旅に奪われるとなると、生徒の巫女みこたちは、一抹の哀愁にとらわれて、なかなかお通を離さないのである。

「——また参りますからね、皆さんもご機嫌よう」

果たして、もういちど来る日があるだろうか、お通は、嘘をついている気がする。

巫女みこたちのうちには、すすり泣く者さえあつて、一人が、五十鈴川の神橋みはしのたもとまで送つて行こうというと、一も二もなく気が揃つて、お通を囲みながら外へ出て来た。

「あれ？」

見ると、あんなに急せいでいた城太郎がいないのである。小さい

唇へ手をかざして、巫女たちが、

「城太さあん」

「城太さあん」

お通は、彼の習性をよく知っているので、そう心配はせず、

「きつと焦じれたがって、神橋みはしのほうへ、独りで先に行ってしまった

つたんでしよう」

「意地悪ツ子ね」

そして一人が彼女の顔をのぞき上げながら、

「あの子、お師匠さまの子？」

と、訊いた。

お通は笑えなかった。思わず真面目になって、

「何ですって、あの城太さんが私の子かというんですか。私はまだ、初春はるを迎えて、やつと二十歳はたちを一つ越すんです。そんなに年を老とつて見えますか」

「でも、誰かがいいましたよ」

お通は、氏富が話した世間の噂を思い出して、ふとまた腹が立った。けれど、世間のすべてがどういおうと、自分を信じてくれる者は一人がいい、あの人さえ信じてくれたらそれでいいと思う。

「ひどいや！ ひどいや！ お通さんは」

先へ行つたと思つた城太郎が、その時、後ろのほうから駈けて来て、

「人を待たせておいて、黙って先へ行つてしまうなんて。ひどい

じやないか」

と、口を尖^{とが}らす。

「だっていないんだもの」

「いなかったら、捜してくれる親切ぐらいあつてもいいだろう。

おれは、鳥羽街道のほうへ、武蔵様に似た人が行ったので、オヤツと思つて、見に行つたんだ」

「えつ、武蔵様に似た人？」

「ところが、人違いさ、——並木まで出て、後ろ姿を見ると、遠方からでも分るほどの跛^{びっこ}行と来ていやがる。……がっかりしまつた」

九

こう二人が旅を歩いていけば、城太郎が今舐めたような苦い幻滅は、毎日経験することであつて、ふと摺れちがう袂にも、もしや？ と思ひ、後ろ姿が似ていると見ては前へ駈け抜けて振返り、町の二階家にチラと見た人影にも、先に出た渡舟のうちに見える似た人などにも——馬の上、駕の中の人間、およそすこしでも武蔵の姿をどこかで想わせる者を見れば、

(おやつ?)

と、動悸を打たせて、それを確かめるまでの努力と、はかない後の落胆に、さびしい顔を見あわせたことが、何十遍かわからな

い。

それゆえに、お通も今——城太郎がひどくがっかりしている程には、彼の話に執着を持たなかった。

殊に、^{びっこ}跛行の侍と聞いたので、こともなげに笑ってしまい、

「それは、ご苦勞様でしたね。旅の^{かどで}首途から機嫌わるくすると、しまいまで不機嫌がつづくというから、仲をよくして出かけましよう」

「この娘^こたちは？」

と、城太郎は、ぞろぞろ^つ従いて来る^{みこ}巫女たちをぶしつけに見まわして、

「——何だって、一緒に来るんだらう」

「そんなことをいうものじゃありません、名残を惜しんで、五十鈴川の宇治橋まで、見送つて下さるんです」

「それは、ご苦労でしたね」

お通の口真似をして、城太郎はみんなを笑わせる。

彼を加えてから、それまでは離愁につつまれて、しめツぽい顔して歩いていた巫女^{みこ}たちの群れも、急に華やいで、

「お通さま、お師匠さま、そつちへ曲がつては道がちがいますよ」
「いいえ」

お通は承知らしく、玉串御門^{たまぐしごもん}のほうへ廻つて、遙かな内宮正殿のほうへ向い、かしわ手を鳴らして、しばらく頭を下げていた。
それを見て、城太郎は、

「ア、なるほど、神さまへお暇乞いをしてゆくのか」

と、つぶやいたが、遠くから見ているだけなので、巫女たちは、彼の背中や肩を指で突いて、

「城太さんは、なぜ拝んで来ないの」

「いやだ、おれは」

「いやだなんて勿体ない、口が曲がりますよ」

「きまりが悪いや」

「神様を拝むのがなぜきまりが悪いんですか。町中にあるあだし神や流行り神はやとはちがつて、自分たちの遠いお母さんも同じ神さまとおもえば何でもないではありませんか」

「分ってるよ、そんなこと」

「じゃあ、拝んでらっしやい」

「いやだよ」

「強情ね」

「お茶ツぴい！ お杓しゃもじ子！ 黙つてろい」

「まあ！」

それにつれて、同じお下げ髪がみんな、眼をまろくして、

「まあ——」

「まあ——」

「ずいぶん怖い子ね」

そこへ、お通が、遥拝をすまして戻つて来て、

「どうしたの？ 皆さん」

問われるのを待ちかまえて、

「城太さんが、私たちをお杓しゃもじ子ですつて。——そして、神様なんで拜むのは嫌なこツたつていうんですよ」

「いけませんね、城太さん」

「なにさ」

「いつかお前の話には、大和やまとの般若はんにやの野で、武蔵様が宝蔵院衆と戦いになろうとした時は、思わず、神様と大声をあげて空へ掌てを合わせたというじゃありませんか。あそこへ行って拜んでいらつしやい」

「だつて……。みんなが見てるんだもの」

「じゃ皆さん、後ろを向いていてお上げなさい、私も、後ろを向

いているから——」

と一列に揃って、城太郎のほうへ背中を向けた。

「……いいでしょう、これなら」

お通がいったが、返辞をしないので、そつと背うしろの方をのぞいてみると、城太郎は駈け足で玉串御門の前まで行き、そこに立って、ぴよこんとお辞儀をしていた。

風車

冬の海へ向つて、つぼ焼やの縁台へ腰かけ、足拵えを直しているのは武蔵であつた。

「旦那、島巡りの相客があるがのう、まだ二人ほど足らんのじゃ、乗つてくださらぬか」

と、船頭がそこへ突つ立つてすすめていた。

貝を入れた籠を腕にかけて、ふたりの海女も先刻から、

「旦那はん、お土産に、貝を持って行かしやれ」

「貝を買うておくれなされ」

「……………」

武蔵は、血膿ちうみによごれた足のボロを解いていた。あれほど悩ませた患部は、すっかり熱も腫れもひいて、平べったくなっていた。

白くふやけた皮に、ちりめん皺じわが寄っているだけだった。

「いらぬ、いらぬ」

手を振つて、海女あまや船頭しりぞを退けながら、彼は、ふやけたその足で砂を踏みしめ、波打際なみうちぎわへ行つてザブザブと潮の中へ足を浸ひたした。

この日の朝から、彼は足の苦痛をほとんど忘れたばかりでなく、体についても、健康を考えないほど健康な気力きみに充ちていた。それに伴う心の据わり方が違つて来たことももちろんであるが、彼自身は、一本の脚の苦熱が癒つた事実よりも、今朝抱けさいだいている心境が、昨日よりたしかに一日育つていることのほうを、自分でも認め、また、自分へ対しての限りなき欣びとしていた。

つぼ焼やの娘に、革足袋かわを買わせにやり、新しい草鞋わらじをつけ、

彼は足で大地を踏みしめてみた。まだ跛行びっこをひく癖がどこか、抜

けないし、多少痛む気もするが、いうに足らない程度である。

「渡舟わたしの者が、呶鳴わめっておりますがの。旦那はおおみなと大湊へお越し

になるのではございませぬか」

さざえを焼いている老翁おやじに注意されて、

「そうだ。大湊へ渡れば、あれから津へ行く便船が出るはずだな」

「はあ、四日市へでも、桑名へでも」

「おやじ、今日はいつたい、年暮くれの幾日であつたかなあ」

「はははは、よいご身分でござらっしゃるの、年暮くれの日をお忘れ

か、きようはもう師走の二十四日でござりますわい」

「まだそんなものか」

「お若い方はうらやましいことを仰つしやる」

高城の浜の渡船場まで、武蔵は駈けるように歩いた、もつと駈けてみたい気がするのである。

すぐ対岸の おおみなと 大 湊 へ行く船はいつぱいだった。——その頃ち

ようど、巫女みこたちに見送られて、お通と城太郎とは五十鈴川の宇治橋を、手を振り笠を振り、たがいに別れを惜しみつつ越えていたかも知れない。

その五十鈴川の水は、おおみなと 大 湊 の口へながれ入っているが、武蔵を乗せてゆく渡舟の櫓ろおと音は、ただ無心な諧かいおん音の波を漕いで行く。

大湊からすぐ便船に乗り換えるのだった。尾張まで行くその船には、旅客が大部分で、左手ゆんでに古市や山田や松坂街道の並木を見ながら、やんわりと大きな帆が風をつつんで、伊勢の海のうちでも穏やかな海岸線を悠長にすすんでいた。

陸路をとって、同じ方角へ、街道を歩いているお通や城太郎の足どりと、どつちが早く、どつちが遅いともいえない。

二

松坂まで行けば、この伊勢の出身者で、近ごろの鬼才うたと称なわれるみこがみ神子上典膳のいることは分っているが、武蔵は思い止まって、

津で降りる。

この津の港で降りる時に、ふと前を歩いてゆく男の腰に、二尺ほどの棒が武蔵の眼についた。

くさり

鎖が巻きつけてあるのである。鎖の先には分銅がついている。

そのほかに一本の革かわまき巻の野太刀を差し、年頃四十二、三はたしかなところ。武蔵にも劣らぬ色の黒さの上にあばたがあり、髪の毛は赤くてしかも縮ちぢちれている。

「親方、親方」

後ろから彼をそう呼ぶ者がなければ、誰がどう見ても、野武士としか見えなかったが、船から一足おくれて追いついて来た者を見ると、十六、七歳の鍛冶屋かじやの小僧で、鼻の両わきに煤すすをつけ、

肩に、柄の長い鉄槌つちをかついでいた。

「待ツとくんない、親方」

「はやく来い」

「船へ、鉄槌つちを忘れちまったんで」

「商売道具を忘れたのか」

「かついで来ましたよ」

「あたり前だ、もし忘れなんぞしたら、頭の鉢を割ってやる」

「親方」

「うるせえな」

「今夜は、津へ泊るんじゃねえんですか」

「まだ、たつぷり陽があるから、泊らずに歩いちまおう」

「泊りてえな、旅仕事に出た時ぐらいは、樂をしたいな」

「ふぎけるなよ」

船から町へ入る旅客の通り道に、ここでも抜け目なく宿引きやどひや

土産物屋が関せきを作っている。

鉄槌つちを担かついでいる鍛冶屋の徒弟は、そこでまた、親方の姿を見

失つてしまい、人混ひとごみの中でキヨロキヨロしていたが、やがて親

方はそこらの店で眼についた弄具おもちゃの風車を買つて来て彼の前に

現われ、

「岩公」

「へい」

「これを待つて行け」

「風車ですね」

「手に持っている、人にぶつかって壊されるから、襟えりくびに挿さして歩け」

「おみやげですか」

「ム……」

子どもがあると見える。幾日かの旅仕事を終えてこれから帰る家に、何よりの楽しみが、その子どもの笑顔を見ることなのであろう。

岩公の襟くびで廻っている風車が心配と見え、親方は、時折それを振向いて先へ歩いて行つた。

偶然にも、武蔵の行こうとする方角へ方角へと、同じ道先へ

踏んで行く。

(ははあ……)

そこで武蔵はうなず頷くところがあつた。——この男にちがいないと。けれどまた、世間には、鍛冶屋も多いし、くさりがま鎖鎌を帯びている者も少なくはないので、なお念のため、後になり先になりして、それとなく注意していると、道は、津の城下を横切つて、鈴鹿の山街道へ次第にかかつて行くし、断片的に耳に入る二人の会話でも、武蔵はもう疑いなしと思ひ、

「梅畑までお帰りか」

と、話しかけてみた。にべ膠のない口吻で、

「あ。梅畑へ帰るが」

「ではもしや、穴戸梅軒殿ではないか」

「ふうむ……よく知っているのう。おれは梅軒だが、おめえは？」

三

鈴鹿を越えて水みなぐち口から江州草津へ——この道筋は、京都に上るには当然な順路であるので、武蔵はつい先頃、通つたばかりのところであるが、年暮くれいっぱいに目的地へ着き、初春はるはそこで屠と蘇そも酌くみたし——という気持もあつて、真つ直に來たのであつた。

この間、尋ねて行つて、留守を食つた穴戸梅軒には、他日の折があればとにかく、強しいて出會おうという執着も失せていたが——

—ここで計らずも会ってみると、これはどうしても梅軒の鎖鎌なるものを一見する宿縁の深いものといわなければならぬ。

「よほど、ご縁があるとみえる。実は、過日お留守に、雲林院村うじいの尊宅へうかがって御内儀とお会い申した——宮本武蔵という修行中の者ですが」

「ああそうか」

梅軒は、どういうわけか、心得顔で——

「山田の旅籠はたごに泊って、おれと試合をしたいといっていた者か」

「お聞きですか」

「荒木田様の処へ、おれが行っているかと問い合せを出したろう」
「出しました」

「おれは、荒木田様の仕事で行ったには違いないが、荒木田様の家になどいるわけではない。神社町の仲間の仕事場を借りて、おれでなければ出来ない仕事を片づけていたのだ」

「あ……それで」

「山田の旅籠はたごに泊っている武者修行が、おれをさがしているとは聞いたが、面倒くさいので抛ほうつておいた——それはおめえだったのか」

「そうです。鎖鎌の達人とか、噂を聞いて」

「はははは、女房と会ったかい」

「御内儀が、ちよつと、八重垣流の仕型をお見せくだされたが」

「じゃあ、それでいいじゃないか。なにも、おれの後を追っかけ

て、試合してみるにも及ぶまい。おれがしてみせても、あの通りだ。——それ以上を見せてもいいが、見た途端に、おめえは冥途めいどに行っていないなければならねえしな」

留守をしていた女房もさる者であつたが、この亭主も傲慢ごうまんな天狗である。兵法と傲慢とは、どこへ行つてもつき物のように鼻につくが、それ程な自尊心もなくは、刃物はものと天狗の上に住んでいられない理由もある。

武蔵にしても、もうそういう梅軒を、心のすみでは呑んでいる気概が十分にある。けれど、彼には見境いのない鶺鴒うの呑みは出来なかつた。それは、人生への出発の第一歩に、世間には幾らも上手うわてがいるぞという实例を、グワンと喰らわせてくれた沢庵たくあんの訓えおし

があるし、また、宝蔵院や小柳生城を踏んであるいた賜たまものである。

気概と自尊心をもつて、先ず相手を呑んでかかる前に武蔵は、細心な眼と、あらゆる角度から、相手の価値を計ってみる。時には臆病なほど、卑屈なほど、応対の態度には下段の構えをとつておいて、

(この人間はこのくらい)

と、見極めのついた後でなければ、滅多に、先の言葉や物腰の不遜に対して、自分の感情をみだすようなことはなかつた。

「はい」

と、青年らしい下段の返辞をして、

「仰つしやる通り、御内儀から拝見しただけで、十分、勉強には

なりましたなれど、なお、ここでお目にかかったご縁をもつて、鎖鎌についてのご意見でも伺えれば、有難いとぞんじまするが」

「話か。——話だけならしてやってもいい。今夜は、関の宿へ泊るのか」

「そう思いましたが、おさしつかえなければ、ついでのことに、尊宅へ、もう一宿、お許しくださるまいか」

「旅籠じゃねえから、夜具はないぜ。そこの岩公と寝る気なら、泊ってゆくさ」

四

そこへ着いたのは夕刻。

紅い夕雲の下に、鈴鹿山の山ふところの部落は、湖のように明るく沈んでいた。

岩公が先へ駈け出して告げたので、鍛冶が家の軒端には、見覚えのあるいつぞやの女房が子を抱いて出て、父のみやげの風車を子とともに差し上げ、

「ほら、ほら、ほら。父が彼地から帰って見えた。父が見えたら、父が——」

傲慢の化け物みたいな宍戸梅軒も遠くから子を見て、
に相好そうごうをくずし、
餡あめのよう

「ホイ、ホイ。——坊やか」

手をあげて、五本の指を踊らせて見せる。旅帰りだから仕方がないが、この夫婦は、やがて家の中に坐ると、その嬰あかン坊と、べつな話で持ち切つて、共に着いて今夜の一泊をたのんだ武蔵などは眼中にない。

やつと、飯時になつて、

「そうそうあの武者修行にも、飯をやれ」

と梅軒は思ひ出したように、仕事場の土間にまだ草鞋も解かず、鞆ふいごの火にあたつている武蔵を見て、女房にいつつけた。

女房もまた、愛想がなく、

「あの衆は、この間も留守に来て、泊つて行つたのだに」

「岩公と一緒に寝かせてやれ」

「いつぞやは、鞆のそばに、筵むしろを敷いて寝てもろたのじや、今夜もそうしてもらたがいい」

「おい、若いの」

梅軒の向っている炉には、酒が暖めてあつた。杯を、土間へ向けて、

「酒をのむか」

「嫌いではありません」

「一杯のめ」

「はい」

武蔵は、土間と部屋のさかいに腰かけ、

「頂戴いたします」

と、杯に礼をして唇くちへ入れた、酔すみたいな地酒だった。

「ご返杯を」

「まあ、それは持つていねえ、おれはこつちの杯やつで飲むから——
時に武者修行」

「はっ」

「幾歳だい、若いようだが」

「明けて、二十二歳を迎えます」

「故郷は」

「美みまさか作です」

——というと穴戸梅軒の外それていた眼が、武蔵の全姿をきびしく見直した。

「……さつき、なんとかいったな……名だ……名だ……名だ……おめえの名だ」

「宮本武蔵」

「武蔵とは」

「たけぞうと書きまする」

そこへ女房が、汁の椀わん、漬物、箸と飯茶碗を持って来て、

「おあがり」

と、筵むしろの上へ直じかに置く。

「そうか……」

穴戸梅軒は、ふた息も間を措おいてから、独り語ごとのように頷いて、

「さ、熱くなつた」

と、武蔵の杯へ酌^つぎ、唐突にこうたずねた。

「じゃあおめえは、たけぞうが幼名だったのか」

「そうです」

「十七歳頃にも、そう呼んでいたか」

「はい」

「十七の時に、おめえ、又八という男と、関ヶ原の戦^{いくさ}へ出やしな
かったか？」

武蔵は、ちよつと驚いて、

「御主人には、ようご存じでございますな」

五

「——知っているさ、おれも関ヶ原では働いた人間だ」

そう聞いてから、武蔵も親しみを覚え、梅軒も急に態度を変え、
「どこかで見たとように思っていたが、じゃあ、戦場で会っている
んだ」

と、いった。

「すると、御主人には、やはり浮田家の陣所に」

「おれはその頃、江州野洲川やすがわにいて、野洲川郷士の一まきと、御
陣借をして合戦の先手になっていたのさ」

「そうですか、じゃあ、顔ぐらひは合せていたでしょう」

「おめえの連れのを又八はどうしたい？」

「その後、会いません」

「その後とは、どこからのその後？ ……」

「合戦の後、しばらく伊吹のある家にかく匿まわれて、傷の療治をしていました、その家で別れて以来のことです」

「……おい」

子を抱いて、もう寢床へ入っている女房へ、

「酒がなくなつた」

「もう、おしまいでしょう」

「ほしい、もう今ほど」

「今夜にかぎつて、どうしてそんなに」

「話が、だいぶおもしろくなって来たのだ」

「もうありません」

「岩公」

土間の隅へ向つて呼ぶと、その板壁の向う側で、犬でも起きるようにガサカサ藁わらの音をさせ、

「親方、なんだえ」

と、潜くぐつて出られるほどな戸を押し開けて顔を出した。

「斧おのさく作んとこへ行つて、酒一升借りて来う」

武蔵は、飯茶碗を持って、

「お先にいただきます」

すると、

「待ちねえ」

あわてて、梅軒は、箸を持っている彼の腕くびをつかんだ。

「せつかく、酒を取りにやったものを——」

「拙者のためなら、どうぞお止してください。これ以上は、飲めません」

「まあいいわさ」

と強しいて、

「そうそう、鎖くさり鎌がまについて、おれに聞きたいといったが、おれの知る限りは、何たと話そう。それにしても、酒でも飲みながらでなくっちゃあ」

岩公はすぐ戻つて来た。

壺から、銚ちようし子へ移して、炉の火にあたためながら、梅軒はも

う自分の知識を傾けて、鎖鎌の戦に利のあることを力説していた。

——この鎖鎌を持って敵に当る場合、何より強味の多い点は、剣とちがって、敵に防禦の^{いとま}違を与えないことである。また直接に敵へ当るまえに、敵の所持している武器を鎖で絡^{から}んで奪い飛ばしてしまふ利もある。

「こう、左に鎌、右に分銅を持つとする——」

梅軒は、坐ったまま、型をして見せ、

「——来れば、鎌をもって受け、受けたせつなに、敵の面へ、分銅を返す。それも一手」

とまた、構えを違えて、

「こうなる場合——こう敵と自分と間^まをおいて立つ時は——相手

の得物えものを巻き取るのがこつちの目的、太刀、槍、棒、何へ向つてもそれは出来る」

そんな話をしたりまた分銅の投げ方について、十幾通りの口伝くでんのあることや、それによつて、鎖が蛇のからだのように自由な線を描き、鎌と鎖と、こもごもに使つて、敵を完全なる錯覚さつかくの光線に縛りつけ、敵の防ぎをもつて、かえつて敵の致命とさせてしまふところに、この武器の玄げん妙みょうなどところがあるなどともいつた。

——武蔵は熱心に聞き入っていた。

こういふ話を聞く時の彼は、全身を耳にし、全身を知識慾の袋にし、話す者のことばの中に自分を置き切っていた。

鎖と——鎌と——

双つの手。

先の話聞きながら、彼は彼ひとり考えをひろげて、

(劍はせきしゆ隻手、人間は両手)

胸の裡でうちつぶやいていた。

六

二度めの壺の酒も、いつの間にか底を干していた。梅軒も飲むには飲んだが、武蔵へ強しいたほうが多かつた。武蔵は自分の酒量を思わず越えて、例ためしのないほど酔つた。

「女房、おれたちは、奥へ寝よう。ここの夜具を客人にあげて、奥へ寝床とこを敷いてくれ」

彼の女房は、いつもここで眠る掟おきてとみえ、梅軒と武蔵が飲んでゐる間に、客かまに関わらずすぐそばへ夜具をのべて、嬰兒あかごと共にもぐり込んでいた。

「客人も、つかれが出たらしい、早く寝やすむようにして上げねえか」
先刻さつきから梅軒は客に対して急に親切に變つていたが、なぜ、こへ武蔵を寝せて、自分たちの寝床は奥へしけというのか、女房は良人のいいつけが解きかねたし、また、折角足の暖まったところを起するのが嫌さに、

「お客は、岩公と一緒に、道具小屋へ寝てもらふことになつてい

るがな」

「ばか」

寢床からいう女房を睨んで、

「それは、客にもよりけりだ。黙つて、奥へ支度して来い」

「……………」

寝衣ねまきすがたで、女房は奥へぷいといと入つて行つた。梅軒は眠つて

いる嬰兒あかごを抱き取つて、

「お客、穢むじい夜具だが、ここなら炉ろもあるし、夜半よなかに喉のどが渴かわけば、

湯茶も沸ふいている。ゆつくりと、この蒲団ふとんへ手足をのばしたが

い」

彼が隠れるとしばらくして後、女房が来て枕を取り換えて行つ

た。女房もその時はふくれ顔を改めて、

「良人うちのひとも、えろう酔うたし、旅づかれもあろうほどに、あしたの朝は寝坊するというておりますでの、あなたも悠々ゆるゆると眠つて、朝立ちには、暖かい御飯など食べて行きなされ」

といつてくれる。

「は。……どうも」

武蔵はそれしかいえなかつた。草鞋わらじを解いて上衣うわぎを脱とる間さえもどかしいほど酔いが廻っていた。

「では、ご厄介になります」

いうや否、今までここの内儀あかと嬰あかン坊の添寝あかしていた夜具の中へもぐりこんだ。夜具の中には、母子おやこの温ぬくみがまだあつた。武蔵

の体はしかしそれよりも熱かった。奥との境に立って、その様子をじつと眺めていた女房は、

「……おやすみ」

静かにいって、燈火あかりを吹き消して行つた。

しいんと頭のはちを鉄かねの輪でしめつけられるような悪酔わるよいのぼつて来る。こめかみの脈がずきずきと聞えるほど高く搏うつ。

はてな、どうしておれは今夜に限って、ここの量を超えて飲んでしまったのか？——武蔵は苦しいので軽い悔いを胸先へ呼びおこした。——梅軒がしきりとすすめたからではないかと思う。だが、あの人を人とも思わない梅軒が急に酒を買い足したり、あの無愛想な女房がやさしくなったり、ここの暖かい寝場所を譲って

くれたり——何で急に態度が打って変ったのか？

武蔵はふと、おかしいと思つたが、思索のまとまらないうちに、昏睡のもやが頭にかかつていた。——そして^{まぶた}瞼を重くあわせると、大きな息を二つほどして、夜具の襟を^{えり}眼元までかぶつた、こんどは少し、寒気がするらしく。

燃え残っている^ろ炉の薪が、^{まき}時折小さい焰を立てて、武蔵の額に^{ひたい}明滅した、深い寢息がその次に聞える。

「……………」

白い顔が、その頃まで、そこと奥との境に^{たたず}佇んでいた。梅軒の女房であつた。びた、びた、と^{むしろ}筵へ^{ねぼ}粘りつく蹚音が、忍びやかに良人のいる部屋へ帰って行つた。

七

武蔵は夢をみていた。夢の切れ端みたいな同じ夢を何遍もみた。夢というほど纏まとまっている夢ではないから、幼少の頃の記憶が、何かの作用で、眠っている脳細胞の上へ虫みたいにムズムズ這い出し、神経の足の足痕あしあとが、燐色りんいろに光る文字を脳膜のうまくへ描いているかのような幻覚げんかくだった。

……とにかく、こういう子守唄を、彼は夢の中で聞いている。

ねんねしようとして

ねる子はかわいい

起きてなく子は

つらやな

つらやな

母かかなかせ

この子守唄は、この前ここへ立ち寄った時、良人の留守をまもつて添乳そえちしていた梅軒の妻が唄っていたものであるのに、その伊勢訛なまりのある節がそのまま、美作みまさかの国吉野郷よしのごうの、武蔵の生れた故郷ふるさとで聞える。

——そして。

武蔵はまだ嬰兒あかごで色の白い三十ぐらいな女の人に抱かれているのだった。——その女の人あかごが自分の母であると嬰兒あかごの武蔵には分

つていて、乳ぶさにすがりながらその人の白い顔をふところから
幼い眼が見上げている――

つらやな

つらやな

母^{かか}なかせ……

自分を揺りながら母は唄っているのである。面^{おも}やつれしている
品のよい母の顔は、梨の花みたいに^{ほのあお}灰青^{ほのあお}かつた。長い石垣には、
苔^{こけ}の花がポチポチ見え、土塀のうえの梢^{こずえ}は黄昏^{たそが}れかけていて、邸
のうちから燈火^{あかり}がもれている。

母の二つの眸から、ぽろぽろと涙がこぼれ、その涙を、^{あかこ}嬰兒^{あかこ}の
武蔵は不思議そうに見ているのである。

——出てゆけつ。

——郷家さとへ帰れつ。

父の無二斎のきびしい声が家のうちからひびいて来るのだつたが、その姿は見あたらぬ。ただ母はおろおろと、邸の長い石垣を逃げまわり、果ては英田川あいだがわの河原へ出て、泣き泣き河の中へざぶざぶ歩いてゆく。

嬰兒あかごの武蔵が、

(あぶない、あぶない)

と、母にその危険を教えようとして、ふとこゝろで頻りにもがくのであつたが、母はだんだん深い淵へ入つて行き、暴れる児を、痛いほどひしと抱きしめて、濡れている頬をぺたりと児の頬へつ

けて、

(——たけぞう、たけぞう、お前はお父さんの子？ お母さんの子？)

すると、岸のほうで、父の無二斎の怒る声があった。母はそれを知ると、英田川の波紋の下に影をかくしてしまった。——あかご 嬰兒の武蔵は石ころの多い河原に抛ほうり出されていて、月見草の中でワンワン泣いている、ありつたけな声を出して泣いている。

「……あつ？」

夢と知って、武蔵は眼をさしましたが、とろりとするとまた、母か他人か、その女の人の顔が、彼の夢をのぞいて、彼をさしました。

武蔵は自分を産んだ人の顔を知らなかった。母は憶おもうが、母の

面影は描けない、ただ他人の母を見て、自分の母もあんな人ではなかつたらうかなどと思つてみるに過ぎない。

「……なぜ今夜は？」

酒もさめ、気も醒^さめて、武蔵はふと天井へ眼をひらいた。煤^{すす}けた天井に、赤い光が明滅していた。——燃え残りの炉の焰がそこへ映つて。

見ると、ちようど彼の寝顔の上の辺りに、天井から吊るした風車が、宙にふわりと下がっていた。

子の土産^{みやげ}にと、梅軒が買つて来たあの風車だった。そればかりでなく、ふと気づくと、武蔵が顔までかぶっていた夜具の襟^{えり}にも、母乳^{ちち}のにおいが深くしみこんでいたのである。——武蔵は気がつ

いて、こういう周囲の物の気配に、思いもしなかった亡母ははの夢を見たのであろうと思った。そして、懐かしいものと会ったように、その風車へ見入っていた。

八

醒さめてもいない、眠つてもいない、そうしたうつつの間に、うす眼を開いて、仰向いていると、武蔵はふと、そこに吊り下げてある風車に、不審を抱いた。

「……？」

風車が廻りだしたのである。

元々、廻るようになって来ている風車が、廻り出したのだ、なんの不思議もないはずであるが、武蔵はギクとしたように、夜具の中から身を起しかけ、

「……はてな？」

耳を澄ました。

どこかで、ソーと戸のすべなる音がする、戸が閉まると、廻っていた風車は、翼をしずめて、またぴたと止まる。

この家の裏口を、先刻さつきから頻りと人が出入りしていた。足の運びにも注意して、ミシリともせぬほど、それは密ひそかなものだったが、戸の開あけ閉たてに入いって来るかすかな風は、暖簾のれんをかけてある板の間を通とって、ここの風車の糸いとへすぐひびき、かんなくず 鉋かんな 屑くずで出来

ている五色の造花が、途端に蝶の感覚のように、揺れたり、顫おのいたり、廻ったり、止まったりするのであつた。

——起しかけた頭をそつと枕へもどして、武蔵は、この家のうちの空気をじつと体で知ろうとした。一枚の木の葉をかぶつて、天地の氣象を、ことごと悉く知っている昆虫のように、澄み徹とおつた神経が、武蔵の体に行きわたつていた。

自分が今——どういう危険の中にあるか、武蔵はほぼ分つてきた。——しかし、分らないのは、なんのために、自分の生命を他人が——あるじここの主の穴戸梅軒ししどばいけんが、奪おうとしているのか、その理由が見つからない。

「盗賊の家か？」

最初は、そう考えた。

けれど、盗賊ならば、およそ人態にんていと所持品の多寡たかを一見して知る明めいは持っているはずである。自分を害して、なんの所得があるか。

「恨みか？」

それも中あたらない。

武蔵は、結局、思い当たるものを得なかった。しかし自分の生命には刻々と或るものが迫つて来つつあることが益々皮膚に感じられた。——こうしてその或るものの到来を待っているのがよいか、逆に、機先を取つて起つたほうがよいか、早速、ふたつに一つの策を選ぶ必要にまで、それはすぐ側まで来ているものと見倣みな

された。

武蔵は、土間へ手を下ろした——手の先が草鞋わらじを探っている——その草鞋は片方ずつするすると夜具のすそへ入ってしまう。

——急に、風車が烈しく旋回し出した。明滅する炉の光をうけて、クルクルと魔法の花みたいに廻った。

明らかな登音が、家の外にも家の奥にも聞えた。武蔵の寢床をつつんで、忍びやかにそれは一つの囲みを作っていた。——やがて、暖簾のすそから、ぬつと、二つの眼が光った。膝について這って来る男は抜刀ぬきみを持ち、一人は素槍を持って、そつと壁を撫でながら蒲団のすそのほうへ廻った。

「……………」

寢息を聞き澄ますように、ふたりの男は、ふくれている夜具を見ていた。するとまた、暖簾の蔭から、煙のように一人の者が出て来て突つ立っていた。穴戸ししど梅軒である。左の手に鎖くさり鎌がまを持ち、右の手に分銅をつかんでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

眼と、眼と、眼と。

三人が機微な息をあわせると、まず頭のほうにいた者が、ぽんと枕を蹴とばした、すそのほうにいた男はすぐ土間へとび降りて、槍を蒲団へ向けた。

「起きろっ、武蔵」

梅軒は、分銅の鎖と拳こぶしを、後ろへ引いていった。

九

——だが、蒲団は答えなかった。

鎖鎌でつめ寄つても、槍をしごいても、呶鳴つても、蒲団はあくまで蒲団であつた。——その中に寝ているはずの武蔵はもういなかったのである。

槍で、それを剥めくつた男が、

「あつ……失うせたつ」

狼狽の眼を、急に、あたりへ配くばると、梅軒は、顔のまえで強くカラカラ廻っている風車に、初めて気づいて、

「どこかの戸が開いているぞ」

と、土間へ飛び降りた。

しまった——という声が、すぐもう一人の男の口から走っていた。その仕事場から土間づたいに裏の台所へ通じている露地出入りの戸が一枚——三尺ほど開け放しになっている。

月夜のように、戸外そとは霜が冴さえていた。風車の急な旋舞は、そこから吹き込んで来る針のように身を刺す風だった。

「野郎、ここからだ」

「戸外そとの者は、何していたのか——戸外の者は」

梅軒は、あわてて、

「やいつ、やいつ」

呶鳴って、家の外を見まわすと、軒下や、そこらの物蔭に、黒い影が、のろりと膝でうごいて、

「……親方……親方うまく行きやしたか」

と、声を密ひそませる。

腹立たしげに、

「何をいってやがるんだ、てめえ達は、なんのために、そこで眼を光らせていたんだ。野郎はもう、風を食らって、ここから外へ突っ走ってしまった」

「えっ、逃げたって？ ……いつの間に」

「人に訊く奴があるか」

「はてな」

「どじめツ」

梅軒は、その戸口を、踏み出したり、中へ戻ったり、じりじりしていたが、

「鈴鹿越えか、津の街道へ戻るか、道は二筋しかねえ、まだそう遠くへも行くめえ、追ッてみる」

「どっちへ」

「鈴鹿のほうへは、おれが行つてみる、てめえたちは、下道しもへ急いそげ」

屋内の者と、戸外そとの者がとが固かたまると、十人ほどの人数にんすうだった。

中には、鉄砲を抱えている男もある。

風態は、一様でなかつた。鉄砲を持っている男は獵師らしいし、野差刀を横たえているのは木樵と見てさしつかえない。その他の者もまず、大体そんな階級であるが、すべてが、宍戸梅軒の顎でうごいているところや、どこか兇猛な眼ざしを備えている点から見て、誰よりも、梅軒その者が第一、決して、凡の百姓鍛冶だけの男とは受け取れなかつた。

ふた手になつて、

「見つけたら、鉄砲をぶつ放すのだ、それを聞いたら、
ひとところへ駈けて来い」

いきまいて追つて行つた。

しかし、その迅い足で、半刻も追うと、皆気が抜けてしまったらしい。やがて、がっかりした言葉を投げ合つて、ぞろぞろと戻つて来た。

親方の梅軒に罵られはしないかと恐れていたことも取り越し苦労に過ぎない。その梅軒がすでに皆より先に歸つて、鍛冶小屋の土間に腰かけたまま、ぼんやり俯向うつむいていたからである。

「だめだ、親方」

「惜しいことをした」

なぐさめ顔にいうと、梅軒は、

「しかたがねえ」

忌々いまいましさの遣り場を見つけるように、そこの櫓ほたをつかんで、

膝がしらでポキポキ折り、

「女房、酒はねえか、酒でも出せ」

炉の残り火を掻き立てて、自暴やけに薪まきを投げこんだ。

十

この夜半よなかの騒々しさに、乳呑児も眼をさまして泣きぬいている。梅軒の女房がそこから寝たままで、酒はもうないと答えると、一人の男が、それなら自宅にあるのを取って来ようといつて戸外へ出て行った。

皆、近所に住んでいるらしいのである。酒の来るのも早かった。

暖めるいとま違もなくそれを茶碗で酌くみ交わして、

「どうも、業腹ごうはらでならねえ」

とか、

「忌々しい若造だぞ」

とか、

「命いのち冥みょう加がな野郎だ」

などと、後のまつりに過ぎない繰くり言ごとを肴さかなにして、

「親方、腹をすえておくんなさい、戸外そとを見張っていた奴がどじ
だつたんで」

と、彼を酔わせて、先へ寝かすことにみな努めた。

「おれも悪かった」

梅軒は、そう他を咎めようとはしない。ただ酒は舌に苦い顔つきで――

「何も、あんな青二才一匹、皆の手を借りて大げさな構え立てをしなくても、おれ一人でやればよかつたかも知れねえのだ。……だが、今から四年前、あいつが十七歳の時に、おれの兄貴の辻風典馬てんまでさえ、打ち殺された相手だと考えると――下手へたに手出しは出来ねえと考えたものだから」

「だが親方、ほんとに今夜泊つたあの武者修行が、四年前に、伊吹のもぐさ屋のお甲の家にかく匿まわれていた小僧でしようか」

「死んだ兄貴の典馬のひき合わせだろうよ――おれも初手しよてはそんな気はみじんも抱いていなかったのだ。一、二杯酒をのんでいる

うちになにかの話から、野郎はまさか、おれが辻風典馬の弟で、野洲川野武士の辻風黄平だとは知らねえもんだから、関ヶ原の役へ出たことから、そのころはたけぞうと呼んでいたが今では宮本武蔵と名乗っているなどと、問わず語りにしゃべってしまった。……年頃も、面^{つら}だましいも、兄貴を木剣で打ち殺した、あの時のたけぞうに相違ねえ」

「返す返す、惜しいことをしたなあ」

「この頃は、世間が穏やかになり過ぎたんで、たとえ兄貴の典馬が生きていても、おれ同様、住居^{すまい}や飯にも困って、百姓鍛冶に化けるか山賊にでもなるよりほか途^{みち}はなかつたろうが——名もねえ関ヶ原くずれの足軽小僧に、木剣でたたき殺された兄貴の死にぎ

まは、思い出すたびに、こう胸の元でむらむらとするのだ」

「あの時、たけぞうといった今夜の青二才のほかに、もう一人、
若えわげのがいましたね」

「又八」

「そうそう、その又八つてえ方の野郎は、もぐさ屋のお甲と朱実あけみ
を連れて、すぐあの晩、夜逃げしてしまった。……今頃、どうし
ていやがるか」

「兄貴の典馬は、お甲に迷わされていたので、一つは、あんな不
覚もとの因もとになったのだ。これから先も、またいつどこで今夜のよう
にお甲を見かける折がないともいえねえから、てめえ達も、気を
つけていてくれ」

酒がまわつて来たらしく、梅軒は居坐つたまま、ほたび檜火へ向つて、
眠そうに首を垂れた。

「親方、横におんなせえ」

「親方、寝たほうがいい」

武蔵が脱け出した蒲団の後へ、一同して親切にかかえ入れ、土間に落ちていた枕をひろつて当てがつてやると、途端に、ししど穴戸梅軒は眼をあいている間の怨念を離れて大きないびき鼾をかいている。

「帰ろうぜ」

「寝ようぜ」

元は皆戦場かせぎの野武士をなりわい生業にして伊吹の辻風典馬や野洲川の辻風黄平の手下と、おおび公らに名乗つて働いていた人間たちの

成れの果てなのである。時代に追われて百姓や獵師になつても、まだ人を咬む牙は決して抜かれていない。どこか鋭い眼を備えたのが、やがて、そろそろと鍛冶小屋から霜の夜更けへ散つて行つた。

十一

その後は何事もなかつた夜のように、この家の中は、人の寢息と、野鼠の齒の音がどこかでするだけであつた。

時折、まだ寝つかないらしい乳呑み子が、奥でクスクスむずかつていたが、それもいつか、寝ぐさい闇が暖まるに従つて、やん

でしまう。

すると。

台所と仕事場との土間つづきの隅に、薪たきぎが積んであつて、そのわきには土泥竈どべつついがあり、荒壁には、蓑みのや笠などがかけてあつたが——その壁に寄つた泥竈へつついの蔭から、ごそりと蓑がうごいた。

蓑みのはひとりでに持ち上がつてゆくように、元の釘へもどつて壁にかけられ、その壁の中から煙のように出て来たかとも思える人影が、ぬつと立つた。

武蔵なのである。

彼は、この家から外へ、一足ひとあしも出ていなかつた。

先刻さつき、寢床を抜け出すとすぐ、そこの雨戸を開けておいてから、

蓑みのをかぶつて、薪たきぎと一緒に身を伏せていたのである。

「……………」

彼は土間を歩み出した。穴戸梅軒ししどの寢息は天国を遊んでいた。梅軒はまた、鼻やまいに病があるとみえて、その鼾いびき声も凡ただならぬものだった。——武蔵はすこしおかしくなつたとみえ、闇の中で思わず苦笑をゆがめる。

「……………」

さて——と武蔵はその鼾いびき声を聞きながら一考してみるのだった。穴戸梅軒との試合はすでにおれが勝つた。完全に勝つたと思う。だが、先刻からの話を聞いていれば、この男の穴戸梅軒とというのは後の名で、以前には野洲川の野武士で辻風黄平とと称となえていた

者だとある。そして、自分がかつて打ち殺した辻風典馬とは、兄弟である関係からして、自分をこよい殺して兄の怨おんりよう 霊しよう をなぐさめようという、野武士ずれの男としては、殊しゆしゆう 勝しょう な心がけを
持っている。

生かしておけば、この後もまた、折あるごとに、自分を死はか へ謀るにちがいない。一身の安全からいえば、殺してしまふに限るが、殺すほどの値打があるかどうか。

「……?」

それを武蔵は考えてみるのであったが、やがて決するところが着いたのであろう、彼は梅軒が寝ている裾のほうへ廻つて、その壁の角掛つのかけ から、一挺の鎖鎌を外はず して、手に取つた。

——梅軒は醒めない。

顔をのぞいて、武蔵は、鎌の刃を、爪でひき出した。青じろい刃と柄が、鉤形かぎがたになつた。

武蔵はその刃へ、濡れ紙を巻いて、そして梅軒のちようど首の輪のところへ鎌をそつと載せた。

(……よし！)

天井から下がっている風車も眠っていた。もし、鎌の刃に濡れ紙を巻かずにおいて、あしたの朝、この父親てておやの首が枕から落ちていたりなどしたら、この風車は気が狂つて廻るだろうと思う。

辻風典馬を殺したのは、殺す理由もあつたし、こちらいも戦いくさあげくの血氣一途でやったのである。しかし、穴戸梅軒の生命いのちを奪つ

ても何らの益はない。ないのみならず、この風車の因果がやがてまた、父のかたきと自分を呼んで、世に廻つて来ることは怖ろしい。

さなきだに武蔵は今夜、なんだか死んだ母や父が憶い出されてならなかつた。この家族たちの寝ぐさい闇に、甘い乳の香のただよつているのも羨ましくて、なんだか去るに忍びない氣持すらするのであつた。心のうちで、武蔵は、

（お世話になりました。……では、あしたの朝まで、ごゆつくりお寝やすみなさい）

そう祈りながら、静かに、雨戸を開けて、そつと閉めて、この家から先の旅へと、まだ明けぬ夜を出て行つた。

奔馬ほんば

一

旅も初めのうちの数日は清新だった。脚のつかれなど苦にもならない。

ゆうべおそく、関せきの追分で泊った二人なのに、その二人は今朝もまた、まだ朝あさ靄もやのふかいうちに、筆ふで捨山すてやまから四軒茶屋の前へかかり、やつとその頃、自分たちの背中から昇りかけた日の出を振向いて、

「ああ、きれい——」

しばし日輪の莊嚴に衝たれて足を止めていた。

お通の顔も、紅く燃えて、その一瞬は晴れ晴れしていた。いや植物も生物も、一切のものが、自己の生命に充実と誇りをもつて地上を飾っていた。

「まだ誰も登つて来ないぜ、お通さん。今朝は、この街道では、おれたち二人が、一番先に通るんだ」

「おかしな自慢をするんですね。道なんか、先に通つたつて、後から通つたつて、同じことじゃありませんか」

「ちがうさ」

「じゃあ、早く通れば、十里の道が七里になる」

「そんな違いじゃないよ、歩く道でも、一番は気持がいいだろ。

——馬のお尻や、雲助の後から行くよりも」

「それはそうだけれど、城太さんみたいに、威張って、自慢するのは変ですよ」

「でも、誰も通っていない街道を歩いていると、自分の領分を歩いているような気がするんだよ」

「じゃあ私が、お馬の先を、露ばらいしてあげるから、今のうちに、たくさん威張って歩くといい」

お通は、道に落ちていた竹をひろって、歌をうたうような気持で戯たわむれた。

「下にいませエー。下にいませエー」

戸が閉まっているとばかり思っていた四軒茶屋から、人が顔を出したので、

「ま！ いやだ」

お通は顔を赧あかくして駈け出した。

「お通さんお通さん」

追いかけて、

「殿様を置いて逃げちやいけないよ、お手討だぞ」

「もうふざけては、嫌」

「自分がひとりでふざけているくせに」

「おまえにつり込まれてしまふんじゃありませんか。あら、四軒茶屋の人が、まだこつちを見ている。きつと気狂きちがいだと思つたか

もしれませんよ」

「あそこへ戻ろう」

「何しに」

「お腹が減なツちへやった」

「まあ、もう？」

「お昼のお握飯にぎりを、ここで半分喰べておこう」

「いいかげんにおしなさい。まだ二里とは歩いていないんですよ。城太さんと来たら黙っていると、日に五度ぐらい喰べるんですもの」

「そのかわりおらは、お通さんみたいに、山駕籠かごに乗ったり、駄ちん馬に乗ったりしなからね」

「きのうは、関へ泊ろうと思って、無理に暮れ方をいそいだからですよ。そんなこというなら、きようはもう乗らない」

「きようはおらが乗る番だ」

「子どものくせに、なアに」

「馬に乗ってみたいんだよ、ねえお通さんいいだろ」

「きよう限りきですよ」

「四軒茶屋に、駄ちん馬がつないであつたから、あれを借りて来よう」

「いけません、いけませんよ、まだ」

「嘘いつたのかい」

「だって、くたびれもしないうちに馬に乗るなんて、

贅ぜいたく沢たくすぎ

ます」

「そんなこといったら、おらなんか、百日千里歩いて、くたびれることなんてないんだから、乗る時はありやしないぜ。……人がたくさん歩き出すとあぶないから、今のうちに乗せておくれよ」
これでは早立ちしても道程みちのりは捗はかどるまい。お通がうなずきもせぬうちに、城太郎はもう通り越した四軒茶屋のほうへ、大元気で駈け戻っていた。

二

四軒茶屋というのは字義どおり四軒の茶屋をさす名であるが、

その四軒が古着屋のように軒をならべているわけではない。筆ふです捨て、沓掛くつかけなどの山坂へかけて四つの休み茶屋があるところから、この辺を総称して、地名的にそう呼ぶのである。

「おじさんっ——」

そこへ立つて城太郎、

「馬、出しとくれ」

と、呶鳴った。

戸を開けたばかりのことである。茶屋のおやじは、この元氣者にしづい眼を醒さまして、

「なんじゃあ、でかい声を出しくさって」

「馬だよ。はやく馬を出しておくれよ。水口みなくちまでいくらだい。安

ければ、草津まで乗ってやってもいいぞ」

「汝^われ、どこの子だ」

「人間の子だ」

「かみなりの子かと思うた」

「かみなりは、おじさんのことだろう」

「よく口をたたく子だの」

「馬出しとくれよ」

「あの馬を、駄ちん馬と見たのけ。あれは駄ちん馬ではねえだに
よつて、おん貸し申すことはできねえ」

「おん借り申すことはできないのけ？」

「こんつら小僧め」

餛飩まんじゅう頭かぶを蒸かしていた泥竈へつついの下から、おやじが、火のついて
いる薪まきを一本抛ほうりつけると、それは城太郎にはあたらないで、
軒下につないであつた老馬の脚にぶつかつた。

馬の子と生れてからこの年になるまで、毎日、人間の生活たつきの手
つだいに、関の峠を俵だの味噌だのを背負つて通いながら、不平
もなく、睫毛まつげに白髪を生はやしにかけているその年より馬は、久しぶ
りで驚いたようにいなないて、背で軒を打つほど暴れ出した。

「この野郎」

馬を叱るのか、城太郎を叱つたのか分らない。おやじは飛び出
して来て、

「どうツ、どうツ」

手綱を解いて、家の横にある樹へ持つて行こうとすると、

「おじさん、貸しとくれよ」

「いかねえつてに」

「いいじゃないか」

「馬子がいねえだよ」

その時、お通も側へ来ていて、馬子がいなければ、駄ちゃんは先に払い、馬は水口みなくちからこつちへ帰る旅人か馬子に託してもよいからと頼むと、おやはお通の物腰に信用を改めて、それなら水口の宿場までも、草津までもかまわないから、馬は、ついでのある土地の者に頼んでくれといつて、手綱を彼女の手に渡した。

城太郎は舌うちして、

「ばかにしてやがら、お通さんが、きれいなもんだから」

「城太さん、おじいさんの悪口いうと、この馬が聞いているから、怒って、途中で振り落すかもしれないよ」

「こんなもうろくうま耄碌馬に振り落されてたまるもんか」

「乗れますか」

「乗れるさ。……ただ、背がとどかねえや」

「そんなふうには、馬のお尻をかかえてもだめですよ」

「抱いて、乗せとくれよ」

「やっかい坊ね」

脇の下へ両手をさし入れて、彼女が馬の背へ乗せてやると、城太郎は、にわかに地上を睥睨へいげいしてみたくなって、

「お通さん、歩いておくれよ」

「あぶない腰つき」

「だいじょうぶだよ」

「じゃあ、出かけますよ」

お通は手綱をとって、

「おじいさん、それでは」

と茶屋の軒へ、後ろ向きにいいながら歩み出した。

すると、百歩も行かないうちに、姿は見えないが朝あさ靄もやの中か

ら、オーイツと高く呼ばわって、忽ち追はやい着いて来はやそうな迅はやい登あ

音が聞えた。

三

「誰だろ」

「私たちのことかしら」

駒を止めてふり顧かえると、煙のような白い霽もやのうちから、一個の人間がだんだんその影を濃くあらわし、やがて輪廓だの色だの、年頃や人態にんていまで見えるほどに、距離を縮めて来た。

夜だつたら近づかぬ間に、二人は逃げ足をおどらせたかも知れない。長い野太刀をこじり高たかに差し込み、鎖くさり鎌がまを前差まえざしに帯びている眼の怖い男だった。

風がふいて来たようにその男の体から烈しい空気がうごいてい

た。いきなりお通のそばへ来て足を止めたのである。そしてお通の持っている手綱を咄嗟とつさに引ツ奪たくり、

「降りろっ」

顔は、城太郎へ向けて、命令するのだった。

かつ、かつ、かつ、と年より馬がまた脅おびえて後退あとずさりするので、城太郎は鬣たてがみにしがみつきながら、

「な、なにさ！ 無茶なことすんないっ、……この馬、おらが借りてる馬だぞ」

「やかましい」

鎖鎌は、耳も貸さない。

「これ女」

「はい」

「おれは、関しゆくの宿しゆくからちよつと引つ込んだところの雲林院うんじん村むらにいる穴戸ししど梅軒ばいけんという者だが、すこしわけがあつて、この街道を、今朝暗あさぐらいうちに逃げていった宮本武蔵という者を追いかけて来たのだ。もう相手はとうに水口の宿場も越えているだろう、どうしても、江州ごうしゅう口ぐちの野洲川やすがわあたりで彼奴きやつを捕まえなければならねえ。……その馬を、おれに譲れ」

ことばの早いのみで、肋骨あばらに波を打つていうのだつた。靄もやが樹々のこずえに絡からんで氷の花になるといふ寒さなのに、見れば梅軒の喉のどくびは、爬虫類はちゅうるいの肌のように汗光あせびりがして太い血管がさらにふくれている。

——立ち竦すくんだまま体の血液をみな大地へ吸いこまれてしまつたように、お通の顔は見ているまに異様に白くなつてしまつた。もいちど、耳をよく欻そぼだてて聞き直したいように紫ばんだ唇がわななきかけたが、にわかにな、ものもいえない面持ちなのである。

「……む、武蔵だつて」

馬の背から城太郎はこう口走つた。たてがみ鬣にしがみついたまま、ぶるぶる手も脚もふるわしていた。

先を急ぐことに焦あせ心りきつていゝ梅軒の眼には、凡ただではあり得なそんな二人の刹那の驚きも眼にはとまらないらしく、

「さ、小僧つ。——降りろ、降りろ。ぐずぐずしていると、ひつぱたくぞ」

手綱の端を鞭むちにして脅おどすと、城太郎は、つよく首を横に振って、

「嫌だつ！」

「イヤだと」

「おれの馬だ、この馬で、先へ行つた人へ追いつこうたつてそうはゆかない」

「女子供と思つて理由ことをわけていうのに、童わっぱめ、つけ上がつて何をいうか」

「なあ、お通さん」

と、梅軒の頭越しに、

「この馬は、渡せないね、この馬を渡しちやいけないね」

お通は、城太郎のそのことばを、健けなげ気と賞ほめてやりたかつた。

もとより、この馬はおろか、この人間をも、先へやっってはならぬ
いと思つて、

「そうです、そちらもお急ぎか知りませんが、私たちも先を急ぐ
体です。もう少し経てば、峠がよいの馬も駕籠かごもいくらもありま
しょう。人の乗っているものを奪つてお出でになろうとしても、
今もその子がいうとおり、理不尽です、そうはなりません」

「おれも、降りない。死んだつて、この馬を離すものか」

二人は、しかと、氣持を結び合つて、梅軒の求めを突つぽ刎なねた。

四

お通と城太郎のふたりが心を協あわせて、敢然とそうした態度に出たのは、梅軒にもやや意外ではあつたろうが、もとよりこの男の眼から見れば、そんな反抗は、おかしくなるくらいなものだった。「じゃあどうしても、この馬はおれに譲らねえというのか」

「知れたことだ！」

城太郎の語気はまるで大人おとなのいい草だった。

「野郎っ」と、梅軒が大人げなく喚わめいたのも、あながち無理ではない。

馬の背へとび上がって、鬣はげへしがみついている蚤のみみたいな城太郎を抓つまんで捨てようとしたのである。いきなり馬の腹にある彼の片足を引つ張った。

こんな時こそ抜くべき物である腰の木剣を城太郎はすっかり忘れていたらしい。自分以上の強敵と分っている敵に、脚くびをつかまされると、ただ逆上してしまつて、

「かッ！ 畜生ッ」

梅軒の顔へ向つて、続けさまに唾つばを吐きつけた。

生涯の大変はいつ降つて湧いてくるかわからない。たつた今日の出に向つて、生きている歓びを思つた生命が、真つ黒な戦慄に包まれているのである。お通はこんな所で、こんな男のために、怪我けがをするのは嫌だし、死ぬのはなお嫌だと思つた。恐ろしさに口の中が酔すくなつて渴かわいてしまった。

——だが謝りを入れて、この男に、馬を渡す気にはどうしても

なれない。この男の凶暴な害意は、この道を先へ通つて行つたという武蔵の背後へ迫るものである。何か大きな危険が、武蔵を追つていゝことにちがいないのである。この男を、一時ここで遅らせれば、武蔵は一時だけ先へ危険を遁れて行くことができる。

たといその距離は、折角、一すじの道にかかつていゝ自分と武蔵との間をまた忽ち遠くしてしまふものであるにせよ——この男に奔馬の脚を与えることは断じて出来ない、朱唇を嚙んで意思するのであつた。

「なにするんです！」

自分の勇氣と無謀に驚きながらお通は、梅軒の胸を強く突いた。顔の唾をこすつていゝところへまた、弱いと思つた女のその強い

手だったので梅軒もちよつとたじろいだ恰好であつた。それのみでなく、女の度胸というものは、いつも男の意表外に出るもので、梅軒の胸むないたを突いたお通の手は、すぐ次の瞬間に、梅軒の帯びている野太刀のつかを握っていた。

「阿女あまツ」

吠えて、その手くびを、梅軒が抑えようとして握ると、そこはもう鯉口を走りかけていた白刃しらばの部分だったので、手を触れたとたんに、梅軒の右手の小指と薬指の二本が弾はじけるように斬れて血と共に地上へこぼれた。

「——ア痛つ！」

思わず後の指を抑えて飛とび退のいたので、自ら鞆さやを引いたことに

もなつて、お通の手には水もたまらぬような光が地を曳いてさつと後ろへかくされた。

いやしくも一道に達している穴戸梅軒ししどとして、これはゆうべの不覚以上な不覚であつた。のツけから女子供と見て呑んでかかつたことが重大な原因だつたことはいうまでもない。

——しまったと自己の不覚を叱りながら、立直ろうとしたところへ、もうなにも怖くなくなつてお通の手から、野太刀が横へ撲つて来たのであつた。けれどそれは三尺に近いもので、いわゆる胴田貫どうたぬきという分厚い刃金はがねである。一人前の男でも、そうたやすくは振れない物なので、梅軒に身を交わされると、当然、お通の手は波を描いて、自分の振つた刀で自分の体を躑よろめかせてしま

った。

——そして、ごつんと木を斬ったようなひびきを腕に感じると、赤黒い血しおが、顔へかぶつて来るようにパツと見えて、彼女は眼が眩くらむような心地がした。城太郎のしがみついている馬の尻やいばへ刃を入れてしまったのである。

五

驚き癖がついている馬である。そう深く入った刃ではないが、馬の悲鳴に似たいなきは非常なものであった。臀しりの傷口から血を撒いて暴れるのだった。

梅軒は、なにか意味の分らない大声をあげ、お通から自分の刀を撈もぎ取ろうとして、彼女の手頸てくびをつかまえかけたが、狂った馬の後脚は、その二人を刎ね飛ばして、竿立さおちの姿勢になると、鼻をふるわしてまた高いなき、そのまま弦つるをきつて放ったように、風を起して驀まっしぐらに駈け出してしまふ。

「わつ、や、やいつ」

馬の揚げてゆく砂塵へ向つて、梅軒は突ふんのめつた。憤怒ふんぬの勢いは駆りたてられたが、追いつけるはずは勿論ない。

そこで血眼ちまなことなつたすごい眸を、お通のほうへ振り向けたのであるが、お通のすがたも、途端にどこにも見あたらぬ。

「あつ？」

こうなると、梅軒の青すじはいよいよ、こめかみに膨れあがつた。——見ると、自分の刀は道ばたの赤松の根かたに抛り出してある。飛びつくように拾いあげて、そこを覗くと、低い崖の下に農家の茅かやの屋根が見える。

馬に、刎はねとばされた機はずみに、お通はそこへ転げ落ちたものと見える。もうその時は梅軒にも、彼女が武蔵と何らかの交渉のある人間に違いないということは考えられていた。武蔵を追う方にも気が急せかれるが、お通を見のがして行くことも忌いま々しい。

崖を駈け下りて、

「どこへ？」

うめきながら、梅軒は、そのの百姓家のまわりを大股に廻って

歩いた。

「どこへ失せやがったか」

縁の下をのぞいたり、納屋の戸を開けたりしている彼の狂人みたいな態を、せむしさまのような農家の老人が糸車の蔭から恐怖にくんで見ているだけだった。

「ア！ ……あんな方に」

やがて彼は見つけた。

ふかいひのき檜の沢には、まだ谷の雪が残っている。その溪谷へ向ってお通は、檜林の急な傾斜を、雉きじみたいに逃げ下りていた。

「いたなツ」

梅軒が上からこういかぶせると、お通は思わず振りかえった。

土の崩れて行くよりも早く彼の姿は、お通のうしろへ接近していた。彼の右手には拾いあげた白刃がそのまま持たれていたが、相手をそれで斬り倒す意思はなかった。武蔵の道づれでもあれば、武蔵をつかまえるおとり囿にもなろうし、武蔵の行く先を訊けるかとも考えたのであろう。

「阿女あまつ」

左の手をのばして、その指先は、お通の黒髪に触れた。

お通は身をすくめて、木の根にしがみついた。足をふみすべ込らすと体は振りふりこ子のよう崖へ伸び、烈しく左右へ振り廻された。顔のうえ胸の中へ、土や小石がざらざらと崩れてくる。梅軒の巨おおきな眼と、白刃が絶えずその上にあつた。

「ばか、ばか、逃げる気か。——もうそこから下は、たにがわ 溪川の絶き
つたて壁だぞ」

ひよいと、前をのぞくと何丈か真下に、残雪の間を裂いて走っている水が青く見えるのだった。——お通はそれに救いを感じても恐い気はしなかつた。ひらりとすぐ身をその宙へまかせはずみる機を持っていた。

死を感じると、死の恐さよりもおそろしい速さで、彼女は、武蔵がどこにいるかを考えた。いや自分の記憶と想像力のおよぶかぎりの武蔵の幻像が、総毛立あたまツた頭腦のうちで、暴風雨あらしの空の月みたいな描かれた。

「——親方ア、親方あ」

どこで呼ぶのか、谷間のこだまが、その時、梅軒を、横へそ反らせた。

六

崖の上に人間の顔が見えた。二、三人の男どもである。

「親方あ」

と、その顔が、てんでに呼ばわるのだった。

「なにをしてるんで。——はやく先へ急いでおくんない、今、四軒茶屋のおやじに訊くと、夜明け前の暗いうちに、そこで弁当をこさえさせて、甲賀谷のほうへ走って行った侍があつたてえことですぜ」

「甲賀谷の方へ？」

「そうです、だが、甲賀谷へ抜けようが、土山を越えて水口へ出ようが、石部の宿場まで行きやあ道はみな一つになるから、早く野洲川で手配しておけば、野郎はきつと捕まるはずだ」

遠方からのそういう声を、耳の裏で聞きながら、梅軒の眼は、眼の光で縛りつけているように、自分の前に立ち竦すくんでいるお通を睨みつづけていた。

「おういつ、てめえ達も、ちよつとここへ降りて来い」

「降りて行くんですか」

「はやく来い」

「でも、愚図愚図しているうちに、武蔵のやつが、野洲川を通つ

てしまふと」

「いいから、降りて来い」

「へい」

梅軒と共にゆうべ無駄骨を折った彼の^か手輩^{てあい}なのである。山歩きには馴れきっているとみえ、猪^{しし}のように真つ直に傾斜を駈け下りて来て、お通の姿に、そこで初めて気づいたらしく眼を見あわせた。

梅軒は早口にわけを話して、三人の手したにお通をあずけ、後から野洲川へ曳ツぱつて来るように命じた。手下どもは合点して、お通のからだへ縄をまわしたが、縛るには痛々しい気もするらしく、頻りと、彼女のうつ向いている蒼白な横顔を、さもしい眼で

偷ぬすみ見ている。

「いいか、てめえ達も、おくれちやならねえぞ」

いいすてて、梅軒は猿ましらのように山の腹を横に駈け、やがてどこから降りて行ったものか、甲賀谷の溪流へ降りて、遙かからこちらの崖を振り向いていた。

その小さい影が彼方かなたに立ちどまって、口元へ手をかざし、

「野洲川で落ち合うのだぞ、おれは間道を追ってゆくから、てめえ達は、街道のほうを、なお入念に、見てゆけよう」

こつちの手輩てあいが、

「わかつたあ」

と、筥こだまを返すと、梅軒は、雪の斑まだらな谷間を、雷鳥が歩くように

びよいびよいと岩間づたいに遠く去つてしまった。

よぼよぼな老馬といえども、死にもの狂いに狂い出すと、下手へたな手綱ではもう止まらない。

いわんや乗手は城太郎。

臀しりに松たいまつ火をつけられているように、真つ赤な傷口を持つてい

る例の奔馬ほんばは、あれから盲滅法に駈けだして、八百八谷はっぴやくやだにとい

う鈴鹿の山坂を、またたく間に駈け通し、蟹かにさか坂を突破し、土山

の立場たてばを突つ切り、松尾村から布引山ぬのびきやまのすそを横にして、まる

で一陣のつむじ風が通つて行くかのような勢いで止まるところを知らなかった。

よく落ちないでいるのはその背の上の城太郎で、

「あぶないっ、あぶないっ、あぶないっ」

を、呪^{じゆもん}文のように叫びつづけながら、もうたてがみへつかまつているのでは間に合わなくなつて、馬の平^{ひらくび}頸へ、眼をつぶつて、抱きついていた。

当然、馬の尻がおどる時は、彼のお尻も馬の背を離れて高くおどるので、その危険極まることは、乗っている彼よりも、それを見送った村や立場の人たちの方が遥かに胆^{きも}を寒くした。

乗^{すべ}る術を知らない彼であるから降りる術^{すべ}ももとより知らないし、駒足を止めることなどは、なおさら思いもよらない。

「——あぶないよッ、あぶないよッ、あぶないよッ」

かねてからお通にせがんで、いちど馬に乗ってみたい、馬に乗って思うさま飛んでみたいと、駄々をこねて宿望にしていた城太郎も、今日はすっかりたんのうしたことであろう。声はだんだん半泣きになって来て、呪^{じゆもん}文のききめも頼みなく見えて来た。

七

もう街道には往来の者がぼつぼつ通りはじめていたのである。誰か身を挺^{てい}して、この盲滅法に走ってゆく馬と乗手を食い止めてやればよいのに、誰もいらざることに手を出して怪^け我^がでもしてはというように、

「なんだい、あれは？」

と、見送つたり、

「阿呆ツ」

と道ばたへかわして、城太郎のうしろへ、叱言こごことを浴びせたりするものしかなかつた。

またたく間に三雲村みくも、夏身なつみの立場たてば。

舳斗雲きんとうんに乗つた孫悟空ならば、小手をかぎして、そのあたり

から見渡せる伊賀甲賀の峰々谷々の朝げしきを俯瞰ふかんし、布引ぬのびきの

山や、横田川の絶景を賞しながら、はるか行く手にはまた、一面

の鏡か、一朶いちだの紫雲かとまごう琵琶びわの湖みずうみを見出していたろうに――

――迅はやさは舳斗雲に劣らないまでも、そんな他見よそみなどは、城太郎に――

はちつとも出来ない。

「——止めてくれッ、止めてくれッ、止めてくれえッ」

あぶないあぶないが、いつのまにか止めてくれに変わっていた。そのうちに柑子坂こうじざかの急勾配きゆうこうばいへ上からかかると、俄然、

「助けてくれえッ」

とまた変つて、逆落しに駈けてゆく馬の背中で、彼の体は鞠まりみたいに弾はじみ出し、いよいよここで、大地へたたき捨てられてゆくの才さいチであらうと思われた。

ところが、坂の七合目あたりに、崖の横から出ている棕むくか柏かしわの木か、何しろ喬木の一枝が、わざと道の邪魔しているように横へ出ていた。その枝がバサツと顔へ触ると、城太郎は、この樹こそ

自分の声が天に通じて手を伸ばしてくれた救いの神と思つたのか、途端に馬の背から蛙のように梢こずえへかじりついてしまった。

馬は、空身からみになると、なおさら勢いを加えて坂の下へ素ツ飛んで行ってしまふし、城太郎は当然、梢に両手をかけて、宙にぶらんこをしているほかはない。

宙といつても、地面からものの一丈とはない空間であるから、すぐ手を離してしまえば、なんのこともなく地上へ帰れるのに、そこは人間が猿でない証拠である。愛すべきご愛嬌というもので、さすがの城太郎も頭脳あたまがすこしどうかなくなっているにちがいない。落ちては生命いのちがないように、必死になつて、足をからんだり、しびれる手を持ちかえたり、自分の体をもてあましてゐる。

そのうちに、ぽきツと生木が裂ける響きがしたので——彼は、しまったと思つたらしいが、難なく体は大地に坐っているので、城太郎はかえつて、ぽかんとしてしまった。

「アふツ……」

馬はもう見えない。見えたつて二度と乗る気もあるまい。

ややしばらく、そこで腰を抜かしていたが、抛り上げられたように、立ち上がつて、

「——お通さアん？」

と、坂の上へ向つて叫ぶ。

「お通さアん——」

道をもどつて、急に駈け出した彼は、容易ならない大事へ駈け

つけて行くかのような血相で、こんどは木剣をにぎりしめた。

「どうしたろう？ お通さんは。——お通さあんつ、お通さあん
！」

出会いがしらに柑こうじざ子坂の上から降りてきた編笠の人があつた。
五倍ふしぞめ子染の着物を着ており、羽織はまとわず、革かわ袴ばかまに草履と
いう身ごしらえ——もちろん大小は横たえている。

八

「これ、子供子供」

擦すれちが違がいに、その五倍子染の小袖を着た男が手をあげ、小粒な

城太郎を丁寧に見上げて、

「どうかしたのか？」

と、たずねた。

城太郎は戻つて来て、

「おじさん、彼方あっちから来たんだろ？」

「いかにも」

「二十歳はたちぐらいなきれいな女の人を見なかったかい」

「ウム見かけた」

「え、どこで」

「この先の夏身の立場で若い女を縄つきにして歩いていた野武士がある。おれも不審に思ったが、糺ただす理由わけはないから黙つて見過

ごして来たが、おおかた鈴鹿谷へ部落を移した辻風黄平の仲間だ
ろうと思うが」

「そ、それだ」

「待て」

駆け出そうとする城太郎をまたよび止めて、

「あれは、おまえの連れの者か」

「お通さんという人だ」

「下手なまねをすると、おまえの命がないぞ。それよりも、やが
てあの連中がここを通るのは分りきっているのだから、おれに仔
細を話してみないか。いい智恵をかしてやらないでもないぞ」

城太郎は、すぐその人間に信頼をおいた。今朝からの始末をつ

ぶさに話して聞かせた。五倍ふしぞめ子染の男は、編笠のうちで幾たびもうなず頷いて、

「なるほど、よく分つた。だが、あの穴戸ししど梅軒と変名している辻風黄平の仲間をあいてにして、女子供のおまえ達が、いくら齒がみをしたところでとても無益だ。よし、おれがお通さんとやらをあの仲間からもらつてやろう」

「くれる？」

「ただではくれないかも知れぬ。その時にはまた、考えがあるから、おまえは声を出さずに、そこらの藪やぶの中へ沈んでおれ」

城太郎がかくれると、その男は坂の下へすたすたと行つてしまふのだ。あんなことをいって、人を欣よろこばせておきながら、逃げて

しまうのではなからうか。城太郎は、不安になって、藪の中から首を出した。

坂のうえから人声が聞えてきたので、彼はあわてて首をひつ込めた。——お通の声が耳へひびいて来る。両手をうしろに縛しばられて、三人の野武士にかこまれながら歩いて来る彼女のすがたも、やがて眼のまえに見えたのだった。

「何をキヨロキヨロしているのだ、はやく歩け」

「歩かねえかっ」

一人の男が、お通の肩を突いて罵ののつた。お通は坂道を斜めによろめいて、

「わたしの連れをさがしているんです。あの子は、どうしたろ。」

城太きアン」

「やかましい」

お通の白い素足から血が出ていた。城太郎は、ここにいると呶鳴つて飛び出そうと思つたが、その時、先刻さつきの五倍子染の侍が、こんどは編笠をどこかへ捨てて、二十六、七歳かと見える色の浅黒い面おもざしに、わき眼もふらない血相をたたえて、

「たいへんだつ——」

独り語ごとをもらしながら坂の下から駈け上がつて来た。耳にとめて、三名のほうは坂の途中で足をとめた。——御免といつてすれちがつて行く五倍子染をふりかえつて、

「おいつ、渡辺の甥おいじやないか。——なにが大変なのだ？ なに

が？ ……」

九

渡辺の甥と呼ばれたところから想像すると、その五倍子染の小袖を着ている男は、この附近の伊賀谷や甲賀村で尊敬されている忍者の旧家渡辺半蔵の甥なのであろう。

「知らないのか」

と、彼がいう。

「知らぬが？ ……」

と三名は寄って来る。

渡辺の甥は、指さして、

「この柑子坂こうじざかの下で宮本武蔵という男が今物々しい身支度をして、太刀のさやを払い、往來に突つ立つて、通行の者をいちいちすごい眼で調べている」

「えつ、武蔵が」

「おれが通るとおれの前へずかずか来て、名を訊くから、おれは伊賀者の渡辺半蔵の甥で、つげさんのじょう柘植三之丞」という者だと答えると、急に詫びて、イヤ失礼いたしました、鈴鹿谷の辻風黄平の手下でなければお通りくださいと落ちついていうのだ」

「ほ……」

「何かあるのです？——と、おれから今度は質問すると、されば、

野洲川やすがわ野武士の果てで、宍戸ししど梅軒と化名けみようしている辻風黄平とその手下の者が、この道すじで、自分を殺害しようと企たくらんでいることを往來の風聞によつて知つたゆえ、その分なれば、むぎむぎ彼らの陷かんせい穽に落ちるよりも、この附近に足場をとり最期まで闘つて、斬り死にする覚悟だといひ放つていた

「ほんとか、三之丞」

「誰が嘘をいおう、さもなくて、宮本武蔵などという旅の者おれが知ろうはずはない」

明らかに三名の顔いろが動揺しはじめた。

どうしよう？

と謀はかり合うように臆ひとみした眸ひとみがお互いを見ている。

「——気をつけて行ったがいいぞ」

いいすてて、三之丞がすぐ去ろうとすると、

「渡辺の甥おい」

あわてて呼んだ。

「なんだ」

「弱つたなあ、あれは途方もなく強い奴だと、親方すらいつていた」

「かなり出来ている男にはちがない。坂の下で、こう抜刀ぬきみを提さげて、ぐっと前へ寄つて来られた時は、おれですら嫌な気持がしたからな」

「なんとしたものだろう？ ……実は親方のいいつけで、野洲川

までこの女をしょつ曳いてゆく途中だが」

「おれの知ったことか」

「そういわないで、手を貸してくれ」

「真つ平だ、お前たちの仕事に、腕を貸してやったなどと知れたら、伯父の半蔵から大叱言おおこごとが出るにちがいない。——だが、智恵だけなら貸してやらないものでもない」

「聞かせてくれ、それだけでも有難い」

「縄付にして連れてくるその女を、どこかこの近くの藪やぶの中に——そうだ木の根へでも一時縛りつけておいて——身軽になつておくことが先だ」

「ウム、そして」

「この坂は通れない。すこし廻りになるが、谷道をわたって、はやく野洲川へこのことを告げ、なるべく遠巻きにしておいてから手を下すのだな」

「なるほど」

「よほど、大事をとらないと、相手は死にも狂いだ、ずいぶん死出の道づれが出来るだろう。そうしたくないものだな」

三名は、にわかに、

「そうだ、そうしよう」

お通の体を、藪へ引きずりこんで、木の根へくくりつけた上、一度去りかけたが、またもどって来て、彼女の顔へ猿ぐつわを噛ませ、

「これでよかろう」

「よしっ」

そのまま道のないところを歩いて、姿をかくしてしまった。

枯れ木や枯れ葉の保護色の中にじつと屈みこんでいた城太郎は、もうよい時分——と藪の中からそつと首を出して見まわした。

十

誰もいない——往来の者も——渡辺の甥おいの三之丞さんのじょうももう見え
ない。

「お通さん」

城太郎は、藪の中を、おどつて来た。彼女の縄目を解いてやると、その手を引っぱって、坂の途中へ、ころげ出した。

「逃げよう」

「城太郎さん……どうしておまえは、そんなところに」

「どうだっていいじゃないか。今のうちだ、はやく行こう」

「ま、待って」

みだれた黒髪や、襟えりもとや、腰紐こしひもなどを直して、容姿すがたをつくらせていると、城太郎は舌うちして、

「お洒落しゃれなんかしている時じゃないぜ、髪なんか後におしよ」

「……でも、この坂の下へ行けば武蔵様がいると、今ここを通つた人がいったでしょう」

「だから、お洒落をするの」

「いいえ、いいえ」

お通は、おかしいほど真面目になって、それに対して弁明する。
「武蔵様にお会いできさえすれば、もう怖いものはないからです
よ。私達の難儀もすでに去ったものと、安心して来たものだから
……私は落着いているんです」

「だけど、この坂の下で、武蔵様に会ったというのは、ほんとの
ことかしら？」

「そういつて、あの三人と、ここで話していたお方は、どこへ行
つてしまったのでしょうか」

「いないや」

見まわして——

「変な人だなあ」

と、城太郎はつぶやいた。

しかし、とにかく二人がこうして虎の口から助かったのは、あの渡辺の甥とかいう柘植^{つげ}三之丞のおかげであつたことに間違ひはない。

——この上でまた、武蔵に会えたならば、なんとその人へ礼をいってよいかなどと、お通の心はもうそんなことまで考える。

「さ、行きましょう」

「お洒落はもういいの」

「そんなことをいうものではありませんよ、城太さん」

「だって、うれしそうだもの」

「自分だって」

「それは、欣うれしいさ、欣うれしいからおれは、お通さんみたいに隠したりなんかしないさ。——大きな声でいってみようか、おらア欣しいっ！」

そして、手足を踊らせて、

「でも、もしかして、お師匠様がいなかったらつまらねえな。先へ行って見つけてみるよ、ネ、お通さん」

と駈け出した。

柑こうじぎ子坂を、お通は後から降りて行った。先へ駈けて行った城

太郎以上に、心は坂の下へ飛んでいたが、かえって足が急がない

のである。

(——こんな姿で)

お通は血の出ている自分の足へ眼を落し、土や木の葉によごれている袂たもとをながめた。

その袂にたかっていた枯れ葉を取って、指先に弄もてあそびながら歩いてゆくと、葉に巻かれていた白い綿の中から、不気味な虫が出て来て手の甲を這った。

山の中で育ったくせに、お通は虫が嫌いだった。ぎよつとして手を振り払った。

「おいでようつ、はやく。——なにをのそのそ歩いているのさあ」
坂の下から城太郎の勢いのいい声だった。あの元気のいい声の

様子では、さては、武蔵が見つかったものとみえる。——お通は彼のこえうらない声占からすぐ察して、

「アア、とうとう」

きょうまで自分というものを、ふと心のうちでなぐさめ、遂に届いた一心に対して、我へともなく、神へともなく、誇りたかった。歡びに胸おどらさずにいられなかつた。

——だが、それは、女性の自分だけが前奏している歡びにすぎないことをお通はよく知っている。会ったにせよ、武蔵が、自分の一心を、どの程度までうけ容ゆるれてくれるだろうか。彼女は、武蔵に会うよろこびとともに、武蔵に会つてのかなしみにも、胸がいた傷んで来るのであつた。

十一

坂の日蔭は土まで氷っていたが、柑子坂こうじざかを降くだると、冬でも蠅はえがいるほど陽あたりのよい立場茶屋が、山ふところの田圃たんぼへ向つて、牛のわらじや、駄菓子などをひさいでいる。城太郎は、その前に立ってお通を待っていた。

お通が、

「武蔵様は」

と、訊ねながら、立場茶屋の前にかやがや群れている人々のほうを、じつと見ると、

「いないんだよ」

と、城太郎は、氣抜けしたようにいい放つて、

「どうしたんだろ？」

「え……」

お通は、信じないように、

「そんなこと、ないでしょう」

「だって、どこにも、いないもの。——立場茶屋の人に聞いても、

そんなお侍は見かけないというし……きつとなにかの間違いだよ」

と城太郎は、そう落胆もしない顔つきなのである。

独りぎめに、思い過ぎた^{よろこ}歡びにはちがいないが、そう無造作

に片づけられると、

お通は、

(何ていう子だろう)

と、城太郎の平気でいるのが、憎らしくなってくる。

「もつと彼方あっちへ行ってみましたか」

「見たよ」

「その庚申塚こうしんづかの裏は」

「いない」

「立場茶屋の裏は」

「いないツてば」

城太郎が、うるさくなつたようにさういうと、お通は、ふいと顔を横に向けてしまった。

「お通さん、泣いているね」

「……知らない」

「ずいぶん理わけのわからない人だなあ、お通さんはもっと賢い人かと思つたら、まるで嬰あかンぼみたいなところもあるぜ。最初から、嘘だかほんとだか、的あてにはならないことだつたんだろ。それを、独りで決めこんで、武蔵様がないからつて、ベソを搔いているなんて、どうかしてらあ」

一片の同情も持たないように、城太郎はかえつてゲラゲラ笑うのだった。

お通は、そこへ坐つてしまいたくなつた。急に世の中のすべてものに光がなくなつて、元のような——いや今までにない滅めつし

失に心が囚とらわれた。笑っている城太郎の味噌ツ菌が、憎く見えて、腹が立つて、こんな子をなんで自分が連れてあるいているのか、捨てられるものなら捨てて、たった独りぼっちで、泣いて歩いていたほうが遥かにましだと思ったりする。

考えてみると、同じ武蔵という人を捜している身の上であつても、城太郎のは、ただ師匠として慕っているのだし、彼女の求めているのは、生涯の生命として、武蔵をさがしているのである。そしてまた、こんな場合に際しても、城太郎はいつでもケロリとして、すぐ快活にかえつてしまふし、お通はその反対に幾日も次の力を失つてしまふ、それは、城太郎少年の心のどこかに、なアに、そのうちにきつとどこかで行き会えるにきまつていることだ

からという定義が据わっているからであつて、お通には、そう樂天的に末を見とおしていられないのである。

(もう生涯、このまま、あの人とは、会うことも話すことも、出来ない運命なのではないかしら?)

と、悪いほうへも、やはり思い過ぎをしてしまう。

恋は相思を求めていながら、恋をする者はまた、ひどく孤独を愛したがる。それでなくても、お通には、生れながらの孤兒性がある。他へ対して、他人を感じることに、どうしても人よりは鋭敏だった。

すこし拗ねて、怒ったふりを見せて、黙つて先へぐんぐん歩き出して行くと、

「お通さん」

と、後ろで呼ぶ者があつた。

城太郎が呼んだのではない。庚申塚こうしんづかの碑の裏から、枯れ草を踏みわけて来る人の大小の鞞さやが濡れて見えた。

十二

それは柘植つげさんのじょう三之丞であつた。

さつき、あのまま坂の上へ登つて行つたものとのみ思つていたのにふいに——また、往来でもないところから出て来たのである。お通にも城太郎にも、不思議な行動に見えた。

それに馴々しく、お通さんなどと呼びかけるのも、変な男だ。

城太郎は、すぐ突つかかつて、

「おじさん、嘘いったね」

「なぜ」

「武蔵様がこの坂下で、刀をさげて待っているなんていって、どこに武蔵様がいるかい、嘘じゃないか」

「ばか」

三之丞は、叱って、

「その嘘のために、おまえの連れのお通さんは、あの三名から遁^{のが}れたのではないか。理窟をこねる奴がどこにある、またおれに対しても、一言^{ごん}、礼ぐらいは申すのがほんとうではないか」

「じゃあ、あれは、おじさんがあの三人を計略に乗せるためにいつたでたらめかい」

「知れたこと」

「なアんだ、だからおらもいわないことじゃないのに——」
と、お通へ向つて、

「やっぱり、でたらめだとさ」

聞いてみれば城太郎へわがままに怒つたのはいいとしても、あかの他人の柘植三之丞^{つげ}へ怨み顔する理由は毛頭ないので、お通は幾重にも膝を折つて、助けてもらった好意を感謝した。

三之丞は、満足のていで、

「野洲川の野武士といえ、あれでもこの頃は、ずいぶんおとな

しくなった方だ。あれに狙われては、この山街道から無難に出ることは恐らくできまい。——だが、最前この小僧から話をきけば、おまえたちの案じている宮本武蔵という者、心得のある者らしいから、むぎむぎその網にかかるようなドジも踏むまい」

「この街道のほかに、まだ江州路ごうしゅうへ出る道が、幾すじもありましようか」

「あるとも」

三之丞は、真昼の空に澄んでいる冬山の嶺を仰ぎまわして、

「伊賀谷へ出れば、伊賀の上野から来る道へ。——また安濃谷あのだにへ

行けば、桑名や四日市から来る道へ。——そまみち杣道や間道が、三つ

ぐらいあるだろう。わしの考えでいえば、その宮本武蔵とかいう

男は、逸いちはやく、道をかえて危難を脱していると思うが」

「それならば、安心でございませうが」

「むしろ、あぶないのは、おまえ達二人のほうだ。折角、山犬の群れから救つてやったのに、この街道を、ぶらぶら歩いていれば、いやでも野洲川ですぐまた捕まってしまう。——すこし道は嶮けわしいがおれについて来るがいい、誰も知らぬ抜け道を案内してやろう」

三之丞は、それから甲賀村の上かみを通して、大津の瀬戸へ出る馬まかどとうげ
門峠の途中まで一緒に来て、つぶさに道を教え、

「ここまで来れば、もう安心なものだ。夜は早目に泊つて、気をつけて行くがいい」

と、いった。

かさねて、礼をのべて、別れようとすると、

「お通さん、別れるのだぜ」

三之丞は、意味ありげに、改めて彼女をじつと見た。そして、
やや怨み顔に、

「ここまで来る間に、今に訊いてくれるか、今に訊いてくれるか
と思っていたが、とうとう、訊いてくれないな」

「なにをですか」

「おれの姓名を」

「でも、柑子坂こうじで聞いておりましたもの」

「おぼえているか」

「渡辺半蔵様の甥、柘植三之丞さま」

「ありがたい。恩着せがましくいうのじゃないが、いつまでも、覚えていてくれるだろうな」

「ええ、ご恩は」

「そんなことじゃない、おれがまだ独り者だということをさ。…
…伯父の半蔵がやかまし屋でなければ、邸へ連れて行きたいところだが…：まあいい、小さな旅籠はたごがある、その主人も、おれのこととはよく知っているから、おれの名を告げて泊るといい。…
…じゃあ、おさらば」

先の好意はわかるし、親切な人とも思いながら、その親切に少しも欣よろこべないばかりか、親切を示されれば示されるほど、かえって厭いとわしくなる人間というものはよくある。

柘植三之丞に対するお通の気もちがそれだった。

(底のわからない人)

という最初の印象が妨さまたげるせいか、わかれに臨んでも、狼から離れたように、ほつとはしたが、心から礼をいう気にもなれない。かなり人みしりをしない城太郎さえが、その三之丞とわかれて峠を隔てると、

「いやな奴だね」

と、いった。

きよようの難儀を救われたてまえにも、そういう蔭口はいえない義理であつたけれど、お通もつい、

「ほんとにね」

とうなず頷いてしまい、

「いったいなんの意味なんでしょう、おれはまだ独り者だということ覚えていてくれなんて……」

「きつと、お通さんを今に、お嫁にもらいに行くよという謎なんだろ」

「オオいやだ」

それからの二人の旅は至つて無事だった。ただ恨みは、近江おうみの

湖畔へ出て、瀬田の唐橋を渡つても、また逢坂おうさかの関を越えても、とうとう武蔵の消息はわからないでしまつたことである。

年暮くれの京都にはもう門松が立つていた。

待つ春の町まちかぎ飾りを見ると、お通は先に逸いつした機会をかなしむよりも、次の機会に希望のぞみをもつた。

五条橋のたもと。

一月一日の朝。

もし、その朝でなければ、二日——三日——四日と七種ななくさまでの朝ごとに。

あの人は必ずそこへ来ているというのである。城太郎からお通はそれを聞いている。ただ、それは武蔵が自分を待つてくれるた

めでないだけがさびしいといえさびしい。しかし、なんであるうと、武蔵に会えることだけで、自分の希望は八分も九分も遂げられるようにお通は思うのだった。

(だけど、もしやそこへ?)

ふと彼女は、また、その希望を暗くするものに襲われた。本位田又八の影である。武蔵が、元日の朝から七日のあいだ、朝な朝なそこへ来ていようというのは、本位田又八を待たためなのだ。

城太郎に訊けば、その約束は、朱実ことづに言伝ことづけしてあるだけで、当人の、又八の耳には、入っているかないかわからないという。(どうか、又八が来ないで、武蔵様だけがいてくれればよいが――)

お通は、祈らずにいられなかった。そんなことばかり考えながら、蹴上けあげから三条口の目まぐるしい年の瀬の雑ざつ鬧とうへ入つてゆくと、ふとそこらに、又八が歩いていそうな気がする。武蔵も歩いていそうな気がする。彼女にとっては誰よりも怖いこわ気のする又八の母のお杉隠居も、うしろから来はしまいかなどと思う。

なんの屈託もないのは城太郎で、久しぶりに戻つて見る都会の色や騒音が、無性に彼をはしやがせてしまい、

「もう泊るの？」

「いえ、まだ」

「こんなに明るいうちから旅やど宿屋やへついてもつまらないから、もつと歩こうよ。あつちへ行くと、市が立っているらしいよ」

「市よりも、大事な御用が先じゃありませんか」

「御用って、何の御用」

「城太さんは、伊勢から自分の背中につけて来たものを忘れたんですか」

「あ、これか」

「とにかく、烏丸光広様のお館やかたへうかがって荒木田様からおあずかりの品をお届けしてしまわないうちは、身軽にはなれません」

「じゃあ今夜は、その家で泊つてもいいね」

「とんでもない——」

お通は、加茂川を見やりながら、笑った。

「やんごとない大納言様のお館、どうして虱しらみたかりの城太さんな

んど、泊めてくれるもんですか」

冬の蝶

一

預かり中の病人が、寢床を藻^も抜^ぬけの空^{から}にして、紛失したとあつては、これは責任上、かなり驚いていい事件である。

けれど、住吉の浜の旅籠^{はたご}では、病人が病氣を作つた原因をうすうす知っていたし、無断で出て行つた病人も二度と、海へ駈^{おそ}け込む惧^{おそ}れはないものとして、ただ一片の知らせを、京都の吉岡清十

郎へ飛脚で出しておいたまま、追手のなんのと、いらざる苦勞はしなかつた。

——さて、そこで。

朱実あけみは、籠かごから蒼空あおぞらへ出た小禽ことりのような自由を持ったが、なんといつても、いちど海で仮死の状態になった体である。そうぴちぴち飛んでも行けないし、殊ことごとには、憎い男性のために、処女おとめのほこりに消えようもない烙やきいん印いんを与えられた傷手いたでと——それに伴ともうて起るさまざまな精神的また生理上の動揺というものは、そう三日や四日で、易々やすやすと癒いえるものではない。

「くやしい……」

朱実あけみは、三十石船こくぶねのうちでも、淀川よどがわの水をみな自分の涙と

しても足りないほど嘆いた。

その口惜しいはまた、単なる口惜しいではない。——この身体のうち、べつな男性を恋しているがために——その人との永久の希望を、あの清十郎の暴力のために破壊されたと思うがために、——さらに複雑だった。

淀のながれには、門松の輪飾りや、初春はるのものを乗せた小舟が忙せわしげに棹さおさしていた。それを見ると、朱実は、

「……武蔵様に会つても？」

と、惑いの下から、ポロポロとなみだがこぼれてくる。

五条大橋のたもとに、武蔵が来て、本位田又八を待つという正月の朝を、朱実は、どんなに心待ちだったか知れないのである。

——あの人は何だか好きだ。

こう思い初めてから、朱実は、都会のどんな男性を見ても、心をうごかしたことはない。殊にいつも、養母のお甲と戯れていた又八と思ひ較べていただけに、思慕の糸が、この年月まで、切れもせず胸につながつて来た。

思慕というものを、糸にたとえれば、恋はだんだんそれを胸のうちで巻いてゆく鞠まりのようなものだ。何年も会わないでいても、独りで思慕の糸をつくり、遠い思い出も、近い人づての消息も、みな糸にして、鞠を巻いて大きくしてゆく。

朱実も、きのうまでは、そういう処女おとめらしい情操では、伊吹山の下にいた頃から、可憐な野百合のにおいを持っていた。——だ

が今はもうそれも心のうちで、微塵みじんに砕けている気がするのだつた。

誰も知るはずのないことであるのに、世間の眼がみな自分に対して変つた気がしてならない。

「おい、娘ねえや、娘ねえや」

こう誰かに呼ばれて、朱実は、たそがれかかる五条に近い寺町を冬の蝶のように、寒々と歩いている自分の影と、辺りの枯れ柳や塔を見出した。

「帯ひもかい、紐ひもかい、なんだか解けて引き摺ずつて歩いているじゃあねえか。結んでやろうか」

ひどく下等なことばをつかうが、身なりは痩せても枯れても、

二本差している牢人で、朱実は初めて見る男にちがいないが、盛り場や冬日の裏町を、何の用もなくよくぶらついている赤壁八十馬と名乗る人間。

すり切れたわら草履をばたつかせて、朱実のうしろへ寄つて来た、そして地に曳き摺つていた彼女の帯紐の端をひろつて、「まさか娘やは、謡曲狂言によく出てくる狂女じゃあるめえ。……人が笑うわな。……美しい顔をしているのに、髪だって、もすこしどうかして歩いたらどうだい」

うるさいと思うのであろう。朱実は耳がないような顔をして歩いてゆく。それを赤壁八十馬は、単に、若い女のはにかみと呑みこんで、

「娘ねえやは、都ものらしいが、家出でもしたのか？ それとも、主人の家でも飛び出して来たのか」

「……………」

「気をつけなよ。おめえみたいな容きりよう貌よしだが、そんな……誰が見たって、事情わけのありそうな、ぼんやり顔でうろろ歩いていてみな、今の都には、羅生門らしようもんや大江山おおえやまはないが、そのかわり、女とみたらすぐ喉のどを鳴らす野武士がいる、浮浪人ひとかいがいるぜ……」

「……………」

ふんとも、すんとも、朱実は答ええないのに八十馬は独りで喋しゃべつて尾ついて行きながら、

「まったく」

と、返辞まで自分でして、

「この頃、江戸の方へ盛んに京女がいい値で売られてゆくそうだ。むかし奥みちのく州の平泉に藤原三代の都が開かれた頃には、やはり京女がたくさんに奥州へ売られて行ったものだが、今ではそのはけ口が江戸表になっている。徳川の二代將軍秀忠が、江戸の開府に、今一生懸命のところだからな。——だから京女がぞくぞく江戸へ売られて、角すみちよう町だの、伏見町だの、境町だの、住吉町だのと、

こつちの色街の出店が二百里も先にできてしまった」

「……………」

「娘さんねえなどは、誰にでもすぐ目につくから、そんなほうへ売り飛ばされないように、また変な野武士などに引ツかからねえようにずいぶん気をつけないと物騒だぜ」

「…………叱しっ！」

朱実はふいに、犬でも追うように、袂たもとを肩へ振り上げて、後ろを睨ねめつけた。

「——叱しっ、叱しっ」

げらげらと八十馬は笑って、

「おや、こいつあ、ほんとのキ印じるしだな」

「うるさい」

「……そうでもねえのか」

「お馬鹿」

「なんだと」

「おまえこそ気狂いだ」

「ハハハハ、これやあいよいよ間違いなしのキ印だ。かあいそうに」

「大きなお世話だよ」

つんとして――

「石をぶつつけるよ」

「おいおい」

八十馬は離れない。

「娘や、待ちな」

「知らない、犬つ、犬つ」

実は朱実あけみは恐かつたのである。そう罵ののしると、彼の手を払つて、
 驀まつしぐらに走つてしまつた。そのむかし燈籠とうろうの大臣おとどといわれ
 た小松殿やかたの館があつた跡だといふ萱原かやはらを、彼女は、泳ぐように
 逃げてゆく。

「おういつ、娘や」

八十馬は、獵犬のように、萱の波を躍つて追う。

裂けたる鬼女の口に似ている夕月が、ちようど鳥部ノ山の辺り
 に見える。折から生憎あいにく、陽も落ちかけて、この辺りは人も通ら

ない。もつとも、そこから二町ほど彼方を、一群れの人間が、とぼとぼ山の方から降りて来るのはあつたが、朱実の悲鳴を聞いても、こつちへ救いに駆けつけて来ようとはしなかつた。——なぜならばその人々は皆、白い袴を着、白い緒の編笠をかぶり、手に数珠じゆずを持って、まだ野辺の送りをすまして来た涙が干かわかないでいる人たちであつたから。

三

背なかを、どんと、突きとばされたのだ。朱実は勢いよく、萱の中へ仆たおれてしまう。

「あつ、御免御免」

ふざけた男もある。自分で突きとばしておいて、八十馬やそまはこう謝りながら、朱実の体へのしかかり、

「痛かつたらろ」

と、抱きすくめた。

その髻ひげづらを、朱実は、くやしませに平手で打った。ピシヤピシヤと二つも三つも打った。けれど八十馬は平気なものなのだ。かえって、この男はそれを歡ぶかのように、眼をほそめて打たれているのだから始末にこまる。

従つて、彼女を抱きしめている手は離しツこない。執拗しつように、頬をこすりつけてくる。それが無数の針のように痛くて、朱実は

顔を苦しめられた。

——息ができない。

朱実は、ただ爪を立てる。

その指の爪が、争ううちに、赤壁八十馬の鼻の穴を搔きむしつた。鼻は獅子頭ししがしらのそれみたいに朱に染まる。けれど八十馬は手を離さない。

鳥部ノ山の阿弥陀堂あみだどうから、夕闇の鐘は諸行無常と告げわたつて
いる。けれど、こうすさまじく生き過ぎている人間の耳には、色し
即是空きそくぜくうの梵音ぼんおんも、馬の耳に念仏というものである。男女ふたりを埋
めている枯れ萱かがやの穂は、大きな波をゆり立てるばかりだった。

「おとなしくしな」

「……………」

「なにも、こわ恐いことはないさ」

「……………」

「おれの女房にしてやろう。——いやじゃあるまい」

「…………死にたいッ！」

さけんだ朱実の声の余りにも悲痛で強かったので、

「えっ？」

八十馬は、思わずいった。

「…………どうして、どうして」

手と膝と胸とで、朱実は体を山茶花さざんかの蕾つぼみみたいに固くむすんで

いた。八十馬はどうかしてこの筋肉の抵抗をことばで解ほぐさせよう

とするのだった。この男はまた、こういうことに幾たびか経験を
もっているらしい上に、こういう時間のあいだをも楽しむことに
しているらしい。凄^{つら}い面がまえにも似もやらず、捕まえた餌物^{えもの}を
むしろ翳^{なぶ}るかのように気が長いのである。

「——泣くことはないじゃないか。何も、泣くことは」

そんなことを、耳へ唇^{くち}をつけていつてみたり、

「娘^{ねえ}やは、男を知らないのか、嘘だろう、もうおめえぐらいな年
頃で……」

朱実は、いつぞやの吉岡清十郎を思いだした。その時の苦しか
った呼吸が考え出された。でも、あの時とは比較にならないほど、
心のどこかに落着いたものがある。……あの時のせつなこそは、

部屋のまわりの障子の棧さんも見えない心地がしたほどだったが――。

「待つてくさいッてば！」

かたつむり
蝸牛

のようになったまま、朱実はいった。なんの意もなく
いったのである。病後の体が火みたいだった。その熱すら、八十
馬は病気の熱とは思っていない。

「待つてくれって？ ……よしよし、待つてやるとも。 ……だが、
逃げるどころどは手荒になるぜ」

「――ちいッ」

肩をつよく振って、八十馬の執拗な手をふり退けたの。やっと少
し離れた彼の顔を、睨ねめつけながら起ち上がって、

「――何するんですっ」

「わかつてるじゃねえか」

「女と思つて、ばかにすると、わたしにだつて、女のたましいというものがあるんだから……」

草の葉で切れた唇に血がにじんでいた。その唇を噛みしめると、ほろほろと涙がながれ、血といっしょに白い頤あごをこぼれた。

「ほ……おつなことをいうな。こいつはまんざらキ印でもねえとみえる」

「あたりまえさ！」

ふいに相手の胸いたを突くと、朱実は、そこをまろ転び出して、見えるかぎり夕月にそよぐ萱かやの波へ、

「人殺しっ、人殺しイっ……」

四

その時の精神状態からいえば、朱実より八十馬のほうだが、一時
的ではあるが、完全な狂人きちがいであつた。

昂たかぶりきつた彼は、もう、技巧をこらしてなどいられない。人
間の皮をかなぐりすてて、情痴けものの獣になりきつてしまう。

——たすけてえつ！

青い宵月の光を、十間とは走らないまに、朱実は獣に噛みつか
れた。

白い脛はぎが、無残にも鬩い仆れ、自分の黒髪を自分の顔へ巻きつ

けて、朱実は頬を大地へこすった。

春が近いといつても、まだ花頂山かちようざんから落ちてくる風は、蕭しやう

しやう

々と、この野を霜にするかと思われた。悲鳴に喘あえぎたてる真白

な胸が、乳ぶさが、露あわに冬風に曝さらされ、八十馬の眼を、さなが

ら炎の窓にしてしまう。

するとその耳の辺りを、何者か突然、ごつんとおそろしく堅い物で撲なぐった。

八十馬の血液は、そのため、一時五体の循じゆん環かんを休止して、

打撃をうけた箇所へ集まり、神経の火がそこから噴いたように、

「——ア痛つ！」

とさけんだ。

さけびながらまた、後ろを向いたのもこの男の戸惑いである。

その真つ向へまた、

「この馬鹿者つ」

ぴゅっ——と空気に鳴りながら、節のある尺八が、脳天を打ち下ろした。

これは痛くなかつたろう、痛いと感じる間がなかつたからである。八十馬は、へなへたと肩も眼じりも下げてしまい、張子の虎はりこのように首を左右へぶると振って後ろへ引つくりかえってしまった。

「他愛ないものだ」

尺八を手にはぶら下げながら、撲なぐった方の虚無僧は、八十馬の顔

をのぞきこんでいる。——ぽかんと口を大きく開いて気絶しているのだ。打ったのが二度とも脳であったから、気がついててもこの男は痴呆性ちほうしょうになるのではないかと考え、ひと思いに殺したよりも罪な業わざをしたものだ、つらつら眺め入っている。

「……？」

朱実はまた、その虚無僧の顔を、茫然と見ていた。唐蜀黍とうもろこしの毛をすこし植えたように、鼻の下にうす髭ひげが生えている、尺八を持っているから虚無僧と人も見ようが、うす汚い着物に、一腰ひとつこしの太刀を帯び、乞食か侍か、よく見ないと判断のつかないような五十男である。

「もういい」

青木丹左衛門は、そういつて、唇の下へブラ下がっている大きな前歯でわらった。

「——もう安心おし」

朱実は初めて、

「ありがとうございます」

髪のみだれや、着物のみだれを直して、まだ脅おびえている眼が、夜を見まわした。

「どこじやの、おぬし」

「家ですか。……家はあの……家はあの……」

朱実は、にわかになすすり泣きして、両手で顔を蔽おおつてしまう。わけを訊かれても、彼女は正直にみな話せなかった。半分は嘘

をいい、半分はほんとのことをいい、そしてまたすすり泣いた。

母親がちがうことだの、その母親が自分の体を金に換えようとしたことだの——住吉からここまで逃げて来た途中であるということだの——その程度は打ち明けて、

「わたしもう、死んだって家へ帰らないつもりです。……ずいぶん我慢して来たんですもの。恥をいえば、小さい時には、戦の後いくさの死骸から、剥はぎと盗りまでさせられたことがあるんです」

憎い清十郎よりも、さっきの赤壁八十馬より、朱実は、養母ははのお甲が憎くなつた。急にその憎さが骨をふるわして来て、また、よよと両手の裡うちで泣くのだつた。

心猿

一

ちようど阿あ弥み陀だヶ峰の真下にあたるところで、清水寺の鐘も近く聞え、歌ノ中山と鳥部ノ山にかこまれて、ここの小さい谷間は静かでもあり、またから風の当たる寒さもよほどちがう。

その小松谷まで来ると、

「——ここじゃよ、わしの仮かり住ず居まいは、なんと暢のん気きなものだろうが」

青木丹左は、連れて来た朱あ実けをふり顧かえつて、うす髭ひげの生えてい

る上唇を剥いて、にやりと笑う。

「ここですか」

失礼とは思いながら、朱実はい問い返した。

ひどく荒れている一字の阿弥陀堂なのである。これが住居すまいというならば、この附近には、堂塔伽藍がらんの空家がずいぶん少なくない。

この辺から黒谷や吉水よしみずのあたりは、念仏門発祥の地であるので、祖師親鸞しんらんの遺跡が多いし、念仏行者の法然房が讃岐さぬきへ流される

その前夜は、たしかこの小松谷の御堂とやらにあつて、随身の諸弟子や帰依きえの公卿くげや善男女ぜんなんによたちと、わかれの涙をしぼられたものである。

それは承元の昔の春だったが、今夜は、散る花もない冬の末、

「……おはいり」

丹左は先へ御堂の縁へ上がって、格子扉こうしどを押しあけ、そこから手招きをしたが朱実はためらって、彼の好意に従ったものか、ほかへ行つて独りで寝場所をさがしたものか、迷っている様子に見える。

「この中は、思いのほか暖かいのだ。藁わらござだが、敷物もあるしな……。それとも、このわしまで、さっきの悪者のように、恐い人間と、疑っているのか」

「……………」

朱実は顔を横に振った。

青木丹左が人のよい人間らしいことには、彼女も安心している

のである。それに年配も五十を越えているし——。だが、彼女がためらっているのは、彼の住居と称するお堂の汚なさと、彼の衣服や皮膚の垢あかからおう不潔さであった。

——だが、ほかに泊るところのあてはないし、また、赤壁八十馬にでも見つかればこんどはどんな目にあうか知れないし——それになお朱実は、身体が熱ツぽくて、気け懶だるくつて、はやく横にでもなりたい気がしきりとするので、

「……いいんですか」

階段から上がりかけると、

「いいとも、幾十日住んでいようが、ここなら、誰も怒つて来はせんのだらう」

中は真つ暗である。蝙蝠こうもりでも飛びだして来はしまいかしらと思われるほど暗い。

「お待ち」

丹左は隅で、火打ち石をカチカチ磨すっているのだ。どこで拾つて来たか、短たんけい檠あかに灯りがつく。

見れば、鍋、瀬戸物、木枕、筵むしろなど、ひと通りのものは拾い集められてある。湯を沸かして、これから蕎麦そば掻がきを馳走してやろうといい、七輪の欠けたようなものへ木炭すみをつぎ、付火木つけぎをくべ、火だねを作つてフウフウと火を吹きはじめる。

(親切な人)

すこし落着いてくると、朱実は、不潔も気にならなくなり、彼

の生活に、彼と同じ気安さが持てて来るのだった。

「そうそう熱があつて、身体がだるいといつていたの、おおかた風邪かぜだろう。蕎麦搔そばがきのできる間、そこに寝ていさっしやれ」

むしろだの、米俵だの、隅へ寝どこができてゐる。朱実はそこにある木枕へ、自分の持つてゐる紙を当てて、すぐ横になつた。

上からかぶる衾ふすまのかわりに、それへ備えてあるのは、これもどこかで拾つて来たものらしい、破れた紙衣蚊帳かみこがや。

「じゃあ、お先に」

「さあ、さあ、なにも心配しないがいいぞよ」

「……すみません」

と、手をつかえる。そして、渋紙の蒲団ふとんを引き被かつごうとすると、

その下から、なにか電光のような眼をした生き物が飛びだし、自分の頭を越えたので、彼女は、きやつといつて俯伏した。

二

だが、驚いたのは、朱実あけみよりは、むしろ青木丹左のほうで、鍋へ空あけかけていた蕎麦粉そばこの袋を取り落して、

「アツ、なんじやつ？」

膝をまっ白にしてしまった。

朱実は打ち伏したまま、

「なにか——なんだか知れませんが、鼠より、もっと大きな獣けものが、

隅から飛び出して……」

いうと、丹左は、

「栗鼠^{りす}じゃろ」

と見廻して、

「栗鼠のやつめが、よう食い物を嗅^かいで来おるでな。……だが、

どこにも、何もいはせぬが？」

朱実は、そうつと顔をあげ、

「あれっ、そこに」

「どこに」

浮き腰を巡^{めぐ}らして丹左がふとうしろを見ると、なるほど一匹の動物が、仏具も本尊仏もない内陣^{うちん}の欄^{らん}のうちに、ちよこなんと乗

つて、丹左の眼が向くと、びくとしたように尻をすくめる。

栗鼠りすではない、小猿なのだ。

「……？」

丹左が不審顔すると、小猿は、この人間くみしやすしと見てとつたか、内陣の朱の欄らんをするすると二、三度往復をしてからまた、元のところへ坐つて、毛の生えた桃に似ている面つらがまえをケロリと上げ、パチパチ眼まばたきをしながら何か物でもいいいたげな風情ふぜい。「こいつ……どこから入つて来たのじやろう、……ははあ、だいぶ飯つぶがこぼれていると思うたら、さては」

さては、ということばが、わかるように、小猿は彼が近づくと先に逃げ出して、内陣の裡うちへぴよんと隠れてしまう。

「……はははは、とんだ愛嬌者じやわ、たべ物でもくれてやれば、
わるさ悪戯はすまい。放ほつとこう」

膝の白い粉をはたいて、鍋のまえに坐り直しながら、

「朱あけみ実、なにも怖いことはない。——おやすみ」

「だいじょうぶでしょうか」

「山猿ではない、どこかの飼猿が逃げて来たのじやろ、なに心配
 があるものか。——夜具はそれで寒くはないか」

「……いいえ」

「寝たがよい、寝たがよい、風かぜ邪は静かに寝ていさえすれば、な
 おる」

鍋へ、粉を入れ、水を入れ、そしてぐるぐる箸の先で掻きまわ

す。

欠け七輪に、炭火はかつかつとおこつている。鍋をかけておいて、その間に、丹左は葱ねぎを刻きざみはじめた。

まな板は、この御堂にあつた古机、庖ほうちよう丁ていは小柄こづかの錆さびたものらしい。刻んだ葱は、手も洗わずに木皿へうつし、その後を拭けばそのまま、次には膳たぎにかわるのである。

クツクツと鍋の湯の沸たぎる音が、だんだんこの中を暖めて来た。枯れ木のような膝をかかえ込み、丹左の飢えた眼が、湯の泡を見ていた。人間の至樂はこの鍋の中に尽きるといわないばかりに、その煮えるのが楽しみらしく見える。

いつもの晩のように、清水寺のほうで鐘が聞える。もう寒行は

すんで初春もちかいが、師走が押しつまると、人の心の患わづらいが多
いとみえ、夜もすがら鰐わにぐち口をふる音だの、お籠こもりをする者の詠
歌のあわれな声が絶えない。

(……わしは、わし自身の科とがをうけ、こうして、罪障ざいしょうの償つぐない
をしているようなものだが、城太郎はどうしているかなあ？ ……
…。子にはなんの科とがもないはず、親の罪は親にこそ酬むくえ、南無なむか
んぜおん菩薩ぼさつ、城太郎のうえに大慈の御みひとみ眸ありたまえ)

——蕎麦搔かきを焦げつかないように、そつと箸で浮かしながら、
親と名のつく者の弱い心の底から祈りをこめていると、

「——嫌あッ！」

突然、寝ている朱実が縊しめ殺されでもするようにさけんで、

「ち、ち、ちくしょう……」

見れば、寢息のうちに眼をふさいでいながら、木枕に顔押しつけて、さめざめと泣いているのであった。

三

自分のうわ言ごとに、朱実は、眼をさまして、

「おじさん、わたしいま、寝ているうちに何かいいましたか」
「びっくりしたわさ」

丹左は、枕元へ寄って来て、彼女の額ひたいを拭いてやりながら、
「熱のあるせいじやろう、ひどい汗だ……」

「何を……いったでしょう」

「いろいろ」

「いろいろって？」

朱実は熱ッぽい顔をよけいに赧あからめて恥じるように、紙蚊帳がやの衾ふすまを、その顔へかぶった。

「……朱実、おまえは、心で呪のろっている男があるのじゃな」

「そんなこと、いいまして」

「ウム。……どうしたのだ、男に捨てられたのか」

「いいえ」

「だまされたのか」

「いいえ」

「わかった」

丹左が独り合点すると、朱実は急に身を起して、

「おじさん、わ、わたし……どうしたらいいんでしょう」

人には話すまいと思つて独り悩んでいた住吉での恥かしいことを、朱実のからだ中の怒りと悲しみは、どうしても、彼女の口からそれをいわずにおかないのである。突然、丹左の膝にすがりつくつと、まだうわ言の続きのように、おえつ嗚咽しながらあのことを喋しゃべつてしまった。

「……ふ、ム……」

丹左は熱い息を鼻の穴から洩らした。絶えてひさしい女性のおいというものが、彼の鼻にも眼にも沁みる。このごろは、人間

の灰汁あくというものが抜けきつて、寒巖枯木にひとしい余生の肉体とばかり自分でも思っていた官能に、急に、熱い血でも注ぎこまれたような膨ふくらみを覚え、自分の肋骨あばらの下にも、肺と心臓がまだ生きていることをめずらしく思いだした。

「……ふーむ、吉岡清十郎というのは、そのような怪けしからぬことをする奴かの」

問い返しながら、丹左も心のうちで、清十郎という人間を憎んでもあきたらぬ人間のように憎んだ。けれど、丹左の老いたる血を、それほど興奮させているものは義憤ばかりではなかった。ふしぎな嫉妬心のはたらきが、あたかも自分の娘おかが冒おかされてもしたかのように、彼の肩を怒らせるのだった。

朱実にはそれが、たのもしき人にみえ、この人ならもう何をいつても安心と思ひこんで、

「おじさん、……わたし、死んでしまいたい、死んでしまいたい」
彼の膝へ、泣き顔を当ててもがくと、丹左は、あらぬ心地に、
すこし当惑顔にさえなつて、

「泣くな、泣くな、おまえが心からゆるしたわけではないから、
おまえの心までは決して、けがされておりはせぬ。女性のいのちは、
肉体よりは、心のものじやろう。さすれば、貞操とは、心のことだ。
体をまかせないまでも、心でほかの男を想うとすれば、
その瞬間だけでも、女のみさおは穢けがらわしく汚けがれたものになつて
いる」

朱実には、そんな観念的な気やすめに安心はしてられないらしく、丹左の衣を透すほど熱い涙をながしぬいて、なお、

（死にたい、死にたい）

をいいつづける。

「これ、泣くな、泣くな……」

丹左は、その背なかを撫でてやっていた。だが、白い頸のおのきを、同情しては見られなかった。このきめのいい肌の香も、もう他の男性に盗まれた後のものかといふ思うのだった。

さっきの小猿が、鍋の近くへいつのまにか来て、なにか食べ物にくわえて逃げた。その物音に、丹左は、朱実の顔を膝から落して、

「こいつめ！」

と、拳こぶしを振りあげた。

丹左にはやはり、食べ物の方が、女の涙よりは、重大に心を打つらしい。

四

夜が明けた。

朝になると、丹左は、

「町へ托鉢たくはつに行つて来るでの、留守をたのむぞよ。——歸りに
は、そちの薬、暖かい食べもの、それから、油や米なども求めて

来ねばならぬでな」

雑巾ぞうきんのような袈裟けさをかけ、尺八と笠をかかえて、阿弥陀堂あみだか

ら出て行つた。

笠は、天蓋てんがいではない、当りまえの竹の子笠である、尻切れ草

履をびたびた摺すつて、雨さえ降らなければ、町へ行ぎようこつ乞こに出か

けるのだつた。案山子かがしが歩いているように、鼻下の髭ひげまでがみす

ぼらしい。

殊に、今朝の丹左は、しよぼしよぼしていた。ゆうべは一晩じ

ゆう、よく眠れなかつたのである、あんなに悶もだえたり泣き悲しん

でいた朱実のほうは、暖かい蕎麦湯そばゆをすすると、一汗かいて、深

々と眠りに落ちてしまったが、丹左のほうは、明け方まで、まん

じりともしなかつた。

その眠れない原因が、今朝もまだ——うらうらと澄んでいる陽の下へ出て来ても——まだ頭のしんに残っていて、とつこうつ、それが心にこだわって離れない。

(ちようど、お通ぐらいな年ごろだ……)

と、思う。

(お通とは、氣だてがまるでちがうが、お通よりは、愛くるしい。お通には、氣品があるが、冷たい美だ。朱実のは、泣いても、笑つても、怒つても、みんなそれが^{こわく}蠱惑になる……)

その蠱惑が強力な光線のように丹左のすがれた細胞をゆうべから活潑に若やがせているのだった。しかし、なんといつても争え

ないのは年齢としである。寝返りを打つたびに、朱実の寝すがたを気にしながら、すぐべつな心が、

（あさましや、おれという人間はいつたいどうしたものだ。池田家の譜代として、歴乎れっきとした家禄のついでいた家がらをつぶし、姫路の藩地からこのように流浪三界おちぶれの身となり終つたのも、元はといえば、女のためではないか。お通という女に、ふと、今のような煩惱ぼんごを起したのが因もとではないか）

そういまし誠めて、みずから、

（まだ性懲りしよごこもつかないのか）

と叱つてみたり、また、

（ああ、尺八を持ち、袈裟けさはかけているが、まだまだ、おれは普ふ

化^けの澄明な悟道には遠いものだ。露身風体のさとりにはいつなれるのやら?)

慚愧^{ざんき}の眼をつぶつて、むりに眠ろうとして明け方にいたつたのである。そのつかれが、彼の今朝の影に、よろよるとこびりついていた。

(——そんな邪心は捨てよう。

しかし、愛くるしい娘だ。また不愆^{ふびん}な傷手^{いたで}を負っている。なぐさめてやろう。世間の男性は、そう色情の鬼ばかりでないことも知らせてやろう。

帰りには、薬と、何を求めて来てやろうか。きよう一日の行^{ぎよう}乞^{こつ}が、朱実のよろこびになると思えば、これは張合いのあるこ

とじゃ。——それ以上の慾望はつつしもう)

やっと、心がそこへ落着いて、いくらか顔いろがよくなつた時である。彼の歩いていた崖の上で、ばたツと、大きく翼を搏つて、一羽の鷹の影が、陽をかすめた。

「……？」

丹左が、顔を上げると、葉の落ちている櫟くぬぎばやしの梢こずえから、その顔の上へ、灰色の小禽こどりの毛が、綿を舞わしたように飛んで来た。鷹は、捕えた小禽を爪にかけて、その時空へ真つすぐに揚がつていた——翼の裏を下へ見せて。

「あつ、捕とつたつ」

と、どこかで、人声がひびき、つづいて、鷹の持主の口笛がな

がれた。

五

間もなく、延念寺の裏坂のほうから、ここへ降りて来る狩支度の二人づれが見える。

ひとりには、左の拳こぶしに放鷹たかを据え、獲物を入れる網ぶくろを、大
小と反対のほうへ提さげ、うしろに、敏はしこそうな茶いろの猟犬をつ
れていた。

四条道場の吉岡清十郎なのである。

もう一名は、清十郎よりずっと若くて、体つきはかえって剛健

にできているが、派手やかな若衆小袖に、背なかへは、三尺余の大太刀を斜めに負い、髪は前髪だち——といえbaumう、後は説明するまでもなくあの岸^{がなりゆう}柳佐々木小次郎のほかの何人^{なんびと}でもない。

「そうだ、この辺だった」

小次郎は、立ちどまって、あたりを眺めまわしながらいう。

「きのうの夕方、わしの小猿めが、その獺^{かりいぬ}犬と争つて、尻尾を咬^かみつかれ、それに懲^こりたか、この辺で隠れこんだまま、とうとう姿を見せなかったが……どこかそこらの木の上にでもいはせま
いか」

「いるものか、猿にも脚がある」

と清十郎は、興のない顔つきで、

「いったい、放鷹たかをつかうのに、猿など連れて歩くという法はない」

と、その辺の石へ腰かける。

小次郎も、木の根にかけて、

「なにも連れて歩くわけではないが、あの小猿めが尾ついて来るので仕方がない。けれど、なんとなく可愛い奴で、そばにいないと肌さびしいのです」

「猫だの狎ちんだのという動物を愛撫するのは、女子か閑人ひまじんだけだ
と思うていたら、おん身のような武者修行が、小猿を愛している
ところを見ると、一概にいえないものだな」

けまづつみ
毛馬堤で、

実際に見ている小次郎の剣に対しては、十分、尊敬を払つてはいるが、ほかの趣味とか処世のほうとかにおいては、やはり乳くさい点が多分に見える小次郎だった。やはり年齢としは年齢だけのものだという半面が、あれから後、たとえば三、四日の間でも一つ邸やしきに住んでみるとよくわかった。

——で、清十郎は、彼に対して、人間的な尊敬は大して払わな
いかわりに、交際つきあいは、かえって仕よい気持がして、この数日で
すっかり親しみを加えていた。

「はははは」

小次郎は笑つて、

「それは拙者がまだ、幼稚だからですよ、今に女のほうでも覚え

れば、猿などは捨てて顧みなくなるでしょう」

といった。

それから小次郎が、暢のんき気な雑談をはじめると、清十郎は反対になにか落着かない顔いろが濃くなつてゆく。自分の拳こぶしにすえている放鷹たかの眼のように、たえず焦いら々するふうが眸の底に光るのである。

「なんだ、あの虚無僧めは。……さつきから、吾々のほうをじつと見て、立ちどまつておる」

ふいに、咎とがめるように清十郎がつぶやくので、小次郎も振り顧かえつて見たのである。清十郎が、うさん臭い眼をやつて睨ねめつけたのは、もちろん、その時まで、ぼんやりと彼方あなたに佇たんでいた青木

丹左で、丹左はそれと共に、背を向けて、とぼとぼと向うへ歩き出していた。

「岸柳どの」

そういうと、清十郎は何を思いだしたのか、突然、腰をあげていった。

「帰ろう。——どう考えても鷹狩などしている場合でない。きょうはもう年暮くれの二十九日、帰ろう、道場へ」

しかし小次郎のほうは、その焦しょうそう躁そうを、また始まったといわないばかり冷笑して、

「折角、鷹をすえて来たのに、まだ山鳩一羽に、つぐみ二、三羽しか獲とっていない。もすこし、山へ登ってみようじゃないか」

「よそう、気のすすまぬ時には、鷹も思うように飛ばぬものだ。

……それよりは、道場へもどつて、稽古だ、稽古だ」

独り語ごとのようにいい捨てた語尾には、ふだんの清十郎とは違つた熱があつた。小次郎がいやなら、自分ひとりでも先へ帰りそうな様子であつた。

六

「帰るなら一緒に帰る」

小次郎も、共に歩みだしたが、愉快ではない顔いろだつた。

「清十郎どの、むりにおすすめて、悪かつたな」

「なにを」

「きのうも、きょうも、鷹狩をすすめてあなたを連れ出したのは、この小次郎ですから」

「いや……ご好意は、よく分っている。……だが年暮くではあるし、貴公にも話した如く、宮本武蔵というものとの大事な試合も、目もくしょう

睫くしょうのまに近づいている場合ゆえ」

「わたくしは、それゆえに、あなたへ、鷹でも放つて、悠々と、気を養うことをおすすすめ申したわけだが、あなたのご気質では、それができないとみえる」

「だんだん噂をきくと、武蔵というものは、そう見くびれない敵らしいのじゃ」

「しからば、なおさらこちらは、迫らず、慌あわてず、心を練つてお
かねばなりませんまい」

「なにも慌あわてているわけではないが、敵あなどを侮るといふことは、兵
法のもつとも誠いましめるところだ。試合までに十分、練磨をしておく
のは当然じやと拙者は思う。その上で、万一にも、敗れを取るよ
うなことがあつたとすれば、これは、最善を尽しての負けだ、実
力の差だ、どうも致し方はないが……」

小次郎は、清十郎の正直さには好意を持てるが、氣きう宇うの小さな
ところが同時に見え透すいて、これではとても、吉岡拳けんぼう法の名声
と、あの大きな道場とを、永くうけ継いで行ける器量ではない—
—と秘ひそかに氣の毒に感じるのだった。

(まだ、弟の伝七郎のほうが、ずっと線が太い)

と、思う。

だが、その弟と来ては、これは手のつけられない放ほうじゆう縦で、腕は兄の清十郎よりも強いそうであるが、家名もへちまもない、いわゆる責任なしの次男坊にでき上っている。

小次郎は、その弟にも紹介はされたが、てんで肌合がぴったりしないし、かえってお互いに最初から妙な反感さえ抱いてしまった。

(この人は、正直だ、だが小心だ、助けてやろう)

こう考えたから小次郎は、わざと、鷹を持ち出して、武蔵との試合などは、念頭から忘れるように、わざと側から仕向けている

のに、当の清十郎の身になると、そう悠然とは、構えていられないらしいのである。

——これから帰つて大いに練磨するのだという。その真面目さはいいが、いつたい、武蔵と会うまでに、これから幾日その練磨ができるのかと、小次郎は、訊きたい気がする。

(しかし、性分だ……)

こういうことは、助太刀にならないことを小次郎は痛感した。

——で、黙々と帰り途みちにつきかけると、今し方まで足もとにいた茶色の狩かりいぬ犬がいつのまにか見えない。

——わん、わんつ、わんつ。

遠くのほうでただけ猛々しい啼き声がしているのだった。

「ア、なにか獲物を知らせているらしい」

小次郎は、そういつて、ひとみを輝かしたが、清十郎は、いらざる犬の働きといわないばかりに、

「捨ててゆこう、捨ててゆけば、後から追いかけて来るだろうか
ら」

「でも……」

惜しむように、小次郎は、

「ちよつと見て参るから、あなたはそこで待っていて下さい」

犬の声を目あてに、小次郎は駈けて行つた。——見ると、七間
四面の古びた阿弥陀堂あみだどうの縁がわへ、狩かり犬いぬは駈け上がっているの
だった。そして、破れ果てた窓口の藪しとみへ向つて、吠えては飛びか

かり、躍つては転げ落ちたりして、そのあたりの丹塗にぬりの柱や壁ぶちを、めちやめちやに爪で搔きたてているではないか。

七

なにを嗅ぎつけてこう吠えついているのだろうか。小次郎は、

狽りようけん 犬みどう

の飛びかかっている窓とはべつな入口へ立つた。

御堂みどうの格子扉こうしどへ、

彼は顔をよせてみた。中は漆うるしつぽ壺つぼをのぞく

ようでなにも見えない。ガラリツと、彼の手から扉を引く音がひびくと、犬は、尾を振って、小次郎の足もとへ跳おとつて来た。

「——叱しつ」

蹴とばしたが、犬は、気が立っていて、怯ひるみもしない。

彼が御堂の中へ入ると、さツと、袂たもとをくぐつて、先へ駈けこんで行った。

と——すぐに。

小次郎の耳へつんざいて来たのは、思いもうけてもいなかつた女の叫びである。それも凡なみなみ々ならぬ驚きかたであつて、精いっぱいぱいの金切り声こゑが、いきり立つ犬の声と、途端とたんに、すさまじい闘たたかいを捲まき起し、御堂の梁はりもために裂けるかのように、人獣ひとけふたいろの音響おんきやうが、ぐわんぐわんと籠こもつて鳴る。

「やつ?」

小次郎は、駈け寄つた。その一瞬ひとしげに、犬の猛たけつている目標たけあてのな

んであつたかも分つたし、また、必死に声をもつて拒闘きよとうしている女性のすがたも眼に映つた。

紙衣蚊帳かみこがやをかぶつて、朱実は今も寝ていたのである。そこへ、猫犬の眼に見つけられた小猿が、窓から飛びこんで来て彼女のうしろへ隠れた。

犬は、小猿を追いつめて来て、朱実へ咬かみつきそうにした。

——きやツ。

と朱実が仰向けに転んだのと、もつと強い獣の悲鳴が、小次郎の足の先から発したのと、殆ど一緒に、間髪の差もなかった。

「——痛いッ、痛いッ」

泣くように、朱実はもがいた。犬の口は、大きく開いて、彼女

の左の二の腕を啞くわえていた。

「くツ、これかツ」

小次郎が、二度目の足で、また犬の脾腹ひばらを蹴とばした。けれども、犬は彼の初めの一蹴りでもう死んでいたものであつて、さらにまた蹴つても、朱実の腕をくわえている大きな口は離れなかつた。「——離してつ、離してえつ」

もがいている彼女の体の下から、小猿がぴよいと飛び出した。

小次郎は、犬の上顎うわあごと下顎へ両の手をかけて、

「こいつめ」

ぱりつと、膠にかわを剥はぐような音がした。犬の顔は、もう少しで二つになるところでぶらついていた。それを、ぶーんと扉口とぐちから外

へ投げやって、

「もういい」

と、朱実のそばへ坐つたが、彼女の二の腕は、決して、もういいどころの状態ではなかつた。

真つ白な腕が、緋牡丹ひぼたんみたいに血しおを噴いている。——その白さと紅あかさに、小次郎はぶると自分にまで、痛みと慄ふるえを感じた。

「酒はないか、傷を洗う酒は。……いや、あるまいな、こんなところにも、あるはずはない。ハテ、どうしたもの」

ぎゅつと、彼女の腕を抑えていると、熱い液体が、自分の手頸てくびへも、さらさらとあふれて来るのだった。

「もしかして、犬の齒の毒でも受けたら、きちが気狂いになってしまう。この間うちから、気狂いじみていた犬だ」

咄嗟の処置に迷いながら、小次郎がそうつぶや呟くと、朱実は、痛そうに眉をしかめ、白うなじい頸を、うつつに反そらしながら、

「えっ、気狂いに。……いっそのこともう、気狂いになりたい、気狂いに」

「ば、ばかな」

小次郎はいきなり顔をよせて、彼女の二の腕の血を口ですすつた。口の中へ血がいつぱいになると吐きすてて、また、白い肌を頬張った。

八

たそがれになると、青木丹左は一日の托鉢たくはつからとぼとぼ帰つて来た。

もう薄暗くなっている阿弥陀堂の扉を開けて、

「朱実、さびしかつたらう。今もどつて来たぞよ」

途中で求めて来た彼女の薬だの食べ物だの、油の壺などを隅へおいて、

「お待ち、今、明りを灯つけてやるからの……」

しかし……明りが燈ともると、彼の心は暗くなった。

「おや？ ……どこへ行ったのじゃ、朱実、朱実」

彼女の姿は見えないのであった。

冷たいものに拒まれた自分だけの情愛が、むつと、やりばのないきどおい憤りに變つて、彼は、眼のまえも世の中も暗くなつた。その怒りがさめると、なんともいえない淋しさにとらわれて、丹左は、この先とも若くなりようはないし、榮譽も野心も持てないと決まつている、わが老いの身一つを見出して、泣きたいように顔をしかめた。

「ひとに助けられた上、あんなに世話になつておきながら、黙つて出てゆくとは……アアやつぱり、それが世間なのかなあ……今の若い女はそうなのかなあ。……それとも、わしをまだ疑つて？」

丹左は、愚痴ッぽくつぶやいて、彼女の寝ていた後を、猜疑さいぎな

眼で見まわした。——見るとそこに、帯の端でも裂いたような小布ぎれが捨ててあつた。その布ぬのにはすこし血がついている。丹左はよけいに邪推が働いて、ふしぎな嫉妬に駆られるのであつた。

忌いまいま々しげに、彼は、藁わらの寢床を蹴とばした。買って来た薬も外へ打ち捨ててしまう。そして一日の行ぎようこつ乞こに胃は飢えぬいていたのであつたが、晩の食べ物を作りにかかる氣力も失せたように、尺八を持って、

「あ、あ」

阿弥陀堂の縁へ出てゆく。

それからおよそ半刻とせきぐらいの間というものの、取り止めもなく、彼のふく尺八は、彼の煩惱ぼんのうを虚空へ遊ばせていた。人間の情慾

は、墓場に入ってしまったまでは、形を変えても人体のどこかに、
燐りんのように元素げんそてき的な潜在をもっていることを、丹左のふく尺八
は、虚空へ自白していた。

(どうせ、他ほかの男性に、勝手にされてしまうあの娘の宿命なら、
なにも自分だけが、姑息こそくな道德の通念にしばらくられて、一晚じゆう、
寝ぐるしい思いなどしている必要はなかったのだ)

後悔に似たものなの、それを自分でいやしむ気持だの、雑多な
感情が、帰着するところなく、血管のなかを、いたずらに駈けま
わっているのが、いわゆる煩惱なのである。——丹左のふく尺八
は、ひたすら、その感情の濁りから澄もうとする必死な反省であ
るらしいが、よくよく業ごうのふかいこの男の生れ性とみえて、彼が

むきになつてかかる程には、その吹禪すいぜんの竹は澄んで来なかつた。

「虚無僧さん、なにが面白くて、今夜は独りで尺八をふいているのだえ？ 町で、もらいが多くあつて、酒でも買つて来たなら、わしにもすこし、酔わせておくれぬか」

御堂の床下から、首を出してこういつたお菰こもがある、そのいぎりのお菰こもは、常に床下に住んでいて、自分の上で暮している丹左の生活を、王侯のように下から見て、羨うらやましがっている人間だつた。

「お……おまえは知っているじやろう。わしがゆうべ、ここへ連れて来ておいた女子おなごは、どこへ行つた？」

「あんな玉を、逃すなんて法があるものか。今朝、おめえが出て

ゆくと、大きな刀を背に負った前髪の若衆が小猿といっしよに、女子まで肩にかけて、連れて行つたわ」

「え、あの前髪が？」

「悪くない男ぶりだもの。……おめえや、おれよりは」

床下のいざりは、なにがおかしいのか、ひとりで笑っていた。

公開状

一

四条道場へ帰るとすぐ、

「おい、これを鷹部屋たかべやの止り木へ架かけておけ」

門人の手へ、鷹をわたして、清十郎は草鞋わらじを解いた。

はつきりと不機嫌な顔つきである。剃刀かみそりのように、体から刃は

が立っている。

門人たちは、お笠を、洗足水すすぎをと、その神経へ気をつかいながら、

「ご一緒にいった小次郎殿は？」

「後から帰るだろう」

「野駈けのうちに、迷はぐれておしまいになったので」

「ひとを待たせておいて、いつまでも戻って来ぬゆえ、わし一人で、先へ帰って来たまでのことだ」

衣服をかえて、清十郎は居間へ坐つた。

その居間の中庭を隔てて宏大な道場はあつた。年暮くれの二十五日を稽古仕舞じまいとして、春の道場開きまで、そこは閉つていた。

千人ぢかい門人が、年中、出入りしている道場なので、そこに木剣のひびきがきこえないと、急に空家になつたような感じだつた。

「まだ帰らんか」

清十郎は幾度も、居間の中から門人へたずねた。

「まだお帰りになりませぬが」

小次郎が戻つて見えたら、きようは彼を稽古台として、またやがて出会う武蔵とも見做みなして、みっちり鍛錬しておこう。——そ

う考えて、清十郎は待っていたが、夕方になつても、夜になつても、遂に小次郎は姿を見せなかつた。

翌る日も帰らない。

年暮くれの日は、最後まで押しつまつて来た。今年も、きょう一日しかないという大晦日おひそかの昼。

「どうしてくれるんだ」

吉岡家の表部屋へは、掛取かけとりが市いちをなして、押しかけていた。頭のひくい町人が、堪忍をやぶつて、呶鳴つているのである。

「用人が留守だ、主人が留守だといえ、それで済むと思うてござるのか」

「何十遍、足を通わせるつもりなのだ」

「この半期の勘定だけなら、先代のごひいきもあつたお屋敷ゆえ、黙つても退きさがらうが、この盆の勘定も、前の年の分も、この通りじゃわ」

と、帳面をたたいて突きつける男もある。

出入りの大工、左官、日用品の米屋、酒屋、呉服屋、それからあちこちと、清十郎が、遊興して歩きちらした茶屋小屋の勘定かんじよ取うとり。

そんなのは、まだまだ小口のほうで、弟の伝七郎が兄に計らず、勝手に現金で借りた利のたかい借財もあつた。

「清十郎殿に会わせてもらいましょう。門人衆では、埒らちがあかん」
坐りこんで、動かないものだけでも、四、五名はある。

へいぜい
平常、道場の会計や、また奥向きの経済のやりくりは、祇園藤
次が用人役として、切り盛りしていたのであるが、そのかんじん
な藤次は数日前に、旅先で寄せた金を持ったまま、「よもぎの寮」
のお甲と逐電ちくてんしてしまった。

門人達にはどうしていいかわからない。

清十郎はただ、

「留守と申せ」

の一点張りで、奥にかくれたままでいるし、弟の伝七郎は、勿
論、大晦日おおみそかなどという物騒な日に、家へ寄りつくはずもなかつ
た。

どやどやと、そこへ六、七名の肩で風を切って歩く連中が入っ

て来た。吉岡門の十傑と自称している植田良平やその門人達である。

掛取^{かけとり}たちを睨^ねめまわして、

「なんだ？ おい」

良平が、そこへ突つ立つて、頭からいうのである。

断りに当たっていた門人が、説明するまでもない顔つきで、簡単にわけを告げると、

「なアんだ、借金取か。借金ならば、払えばよいのだろう。ご当家の都合のよろしくなる時まで待て。待てないやつは、おれが別に話の仕方があるから、道場のほうへ来い」

二

植田良平の乱暴ないぐさに、掛取の町人も、むつと色をなした。

ご当家の都合よくなるまで待てとはなんだ。なおその上、待てない奴はべつに話をつけてやるから道場のほうへ来いとはなんだ。かりそめにも、室町將軍家の兵法所出仕という先代の信用があればこそ、頭を下げ、ご機嫌を取り、品物も貸し、何も貸し、あした参れといわれればへい、あさつて来いといわれればへい、なんでもへいへいして、先はお屋敷と奉つていれば、つけ上がるにも程がある。そんな文句に恐れて、掛取が引き退さがっていた日には、

町人は生きてはゆかれない、町人がなくて、侍だけでこの世の中が持つてゆけるものなら持つてみる、という反感が、当然、掛取たちの頭を燃やした。

良平は、がやがや首をあつめていゝ町人たちを、木偶坊でくのぼうのように見て、

「さあ、帰れ帰れ、いつまでいても、無駄だぞ」

町人たちは、黙つたが、動こうとはしなかつた。

すると、良平が、

「おい、つまみ出せ」

門人の一人へいつたので、こら忪えていた掛取も、もう我慢ができないといったふうになつた。

「旦那、それじゃ余りひどいじゃありませんか」

「なにがひどい」

「なにがつて、そんな無茶な」

「だれが無茶をいった」

「つまみ出せとはなんぼなんでも」

「しからは、なぜ神妙に帰らんか、きようは大晦日おおみそかだぞ」

「ですから、手前どもだって、年の瀬が越えられるかどうか
いうところで、一生懸命にお願い申しているんで」

「ご当家もいそがしい」

「そんな断り方があるものか」

「貴様、不服か」

「勘定をお下げくださりさえすれば、なにも文句はありません」

「ちよつと来い」

「ど、どこで」

「不埒ふらちなやつだ」

「そ、そんな馬鹿な」

「馬鹿といったな」

「旦那へいったわけじゃありません、無法だといったんで」

「だまれっ」

襟がみをつかんで良平は、その男を側わき玄関の外へ抛ほうり出した。

そこに立っていた掛取たちは、あわてて飛び退のいたが、逃げおくれで、二人ほど折り重なって仆れた。

「誰だ、ほかに苦情のいいたい奴は。些細な勘定をたてにとり、吉岡家の表へ坐りこむなどとは沙汰の限り。おれがゆるさん、若先生が払うといつても、おれは払わさん。さ一人一人、頭を出せ」

町人たちは、彼の拳こぶしを見て、われがちに腰を上げた。しかし門の外へ逃げ出ると、腕に力を持たないだけに、口を極めて、罵ののしつた。

「今に——この門へ、売家うりやの札が貼られたら、手をたたいて、嘲わらつてくれようぞ」

「遠くないうちだろうて」

「わしらの思いだけでも」

そんな怨嗟えんさを、門の外に聞きながら、良平は屋敷の中で、腹を

かかえて笑っていた。そして、他の連中と共に、奥の清十郎の居間へ入って行った。

清十郎は、沈ちんめん湏として、独りで火桶をかかえていた。

「若先生、ひどくお静かですな。どうかいたしたので」

良平が訊ねると、

「いや、どうもせぬ」

股肱ここうとたのむ門人中の門人が、六、七名もそろって来たので、

清十郎はやや顔いろを直して、

「いよいよ、日が迫ったの」

「迫りました。その儀につき、一同して参りましたが、武蔵へい渡す試合の場所、日時、あれは、どういうことに決めますかな」

「さよう？ ……」

清十郎は考え込む。

三

かねて、武蔵から来ている書面には、試合の場所や日どりは、そちらに一任するから、その旨を、一月の初めまでに、五条大橋のほとりへ高札しておいてもらいたいとある。

「場所だな、まず」

清十郎はつぶやくようにいつて——

「洛北の蓮台寺野れんだいじのはどうだろう」

と、一同へ計った。

「いいでしょう。して、日どりと時刻は」

「松の内か、松の内を過ぎてとするか……だが」

「はやいがよいと思います。武蔵めが、卑怯な策をめぐらさぬ間に」

「では、八日は」

「八日ですか。八日はよいでしょう。先師の御命日ですから」

「あ、父の命日になるか、それは止そう。……九日の朝——卯うの下刻げこく、そうきめる、そういたそう」

「では、その通りに、高札したたに認め、こよい除夜のうちに、五条大橋のたもとへ打ち立てますか」

「うむ……」

「お覚悟は、よろしゅうございましょうな」

「もとよりのこと」

そういわざるを得ない清十郎の立場となつた。

だが、武蔵に負けようなどとは、思いもよらない。父拳法に手を取つて教えこまれた幼少からの技倆は、ここにいる高弟の誰といつ試合つても、劣つた例ためしはない。ましてや、まだ駆け出しの田舎兵法者である武蔵如きに——と、彼は自負しているのであつた。

——にも関かかわらず、なんとなく、先頃からふと怯ひるみを感じたり、心の整ととのいがつかないのは、自分が、兵法の研磨を怠つているためではなく、身辺の雑事わざらに煩わづらわさされているためと、彼自身も解釈し

ている。

朱実のことが、その一つの原因というよりは最も多く、あの後では、彼の気もちを不愉快にしていたし、武蔵からの挑戦状で、あわてて京都へ帰ってみれば、祇園藤次が逐電ちくてんしてしまうやら、また家政の癌がんはこの年暮くれへ来ていよいよ重体なもようとなり、日々、掛取に押しかけられるようで——清十郎の心は、心構えを持ついとまつ違いとまがない。

ひそかに、頼みにしていた佐々木小次郎も、ここへ来て、顔を見せなくなってしまう。弟の伝七郎も寄りつかないのである。彼は、もとより武蔵との試合に、自分以外の助太刀を必要とするほど敵を大きく見てはいないが、それにしても、今年の年暮くれはさ

びしい気がしないでいられた。なかつた。

「ご覧ください。これでよかろうと思ひますが」

植田良平たちが、別室から、新しく削つた白木の板へ、高札に立てる文言を書いて来て、彼の前へ示した。——見ると、まだ水々と墨は濡れていて、

答示

一つ、望みに依り試合申す事

場所、洛北蓮台寺野

日時、正月九日卯うの下刻

右神文にかけて誓約候事

万一、相手方の者、たが違えあるに於ては、世間へ向つてわらい

申す可^{べく}、当方に違えある時は、即ち、神罰をうくるものなり

慶長九年除夜

平安 吉岡拳法二代清十郎

作州牢人宮本武蔵殿

「ム、よかろう」

初めて吐がすわったのであろう、清十郎は大ききうなずいた。

その高札を小脇に持って、植田良平は、二、三の者を後に連れ
宵の大晦日^{おみそか}を、五条大橋のほうへ、大股に歩いて行つた。

孤行八寒

一

吉田山の下である。ここらの横には小扶持こぶちを取つて、生涯変哲もなく暮している公卿侍くげざむらいの住居が多かつた。

ちまちました屋造りや、素朴な小門などが、外から見てもすぐそれと分るほど極めて保守的な階級色を持つて、ただ無事に並んでいた。

武蔵は、

(ここでもない。ここでも……)

と次から次の家の門札の名を見てゆきながら、

(もう住んでいないのかもしれぬ?)

と、捜す力を失ったように佇たたずんでしまった。

父の無二齋むにさいが死んだ時に会ったきりの叔母であるから、彼の記憶は少年の頃の遠いうろ覚えにすぎなかった。——でも、姉のお吟ぎんのほかに血縁といえ、その叔母ぐらいな者しかないので、きのうこの京都へ足を入れると、ふと思ひ出して訪ねてみたのである。

叔母おつとの良人は、近衛家このえけに勤めていて、禄ろくのひくい小侍だと覚えられている。吉田山の下ですぐ知れるかと思つて来たところが、来てみると、同じような家構えがたくさんあつて、家の小さい割にみな木立の奥に、蝸かたつむり牛うしのように門を閉め、門札も出ている家も

あり、ない家もあるという有様なので、知れ難い^{にく}し、訊くにも訊き難い。

(もう、変っているに違いない。よそう)

武蔵は、あきらめて、町のほうへ戻りかけた。町の空には、夕^ゆ靄^{うも}がこめて、その靄^{うも}が、年の市の灯りでうす赤く見えるのだ^たった。

大晦^{おおみそ}日の夕ぐれである。どことなく騒音のある洛内^{ろくわい}だった、すこし人通りの多い往来へ出ると、人間の眼も、登^{あし}どりも、違っている。

「あ……?」

武蔵は、すれ違った一人の婦人へ振り顧^{かえ}っていた。もう七年も

八年も見ない叔母であるが、たしかに、母方の播州佐用郷ばんしゅうさようこうから都へ嫁かたづいたというその女ひとにちがいない。

「似ている」

とはすぐ思ったが、でも念のため、しばらく後へ尾ついて行きながら注意していると、四十ぢかい小こがらなその婦人は、年の市の買物を胸にかかえ、先刻さつき、武蔵がさんざん家をさがして歩いた淋しい横道へ曲つてゆく。

「叔母御」

武蔵が呼ぶと、その婦人は、怪訝けげんな顔して、しばらく彼の顔やすがたをまじまじ眺めていたが、やがて非常な驚きを、常々の無事と小さな家計に狎なれて年のわりに萎しなびているその眼もとへ現わ

し、

「あつ、そなたは、無二斎の子の武蔵むさしじゃないか」

少年の頃から初めて会うこの叔母に、たけぞうと呼ばれないで武蔵むさしといわれたのは、案外でもあつたが、それよりはなにかしらさびしい気がして、

「はい、新免家のたけぞうでございます」

武蔵のほうからいうと、叔母は彼のそういう姿を、ながめ廻すだけで、まあ大きくなったことだとも、見ちがえるほど変つたとも、いわなかつた。

ただ冷やかに、

「そして、そなたは、なにしにここへ来やつたのか」

と、むしろ難詰なじるようなことばでいう。武蔵は、はやく別れた生みの母になんの記憶もなかった。だがこの叔母と、こうして話している、自分の母も、生きていた頃は、このくらいな背丈せたけの人であつたらうか、こういう声の人であつたらうか——と目もとや髪かみの先にまで、亡なき母の面影をこころの裡うちで求めていた。

「べつに、なんの用事があつてという次第ではごぎいませぬが、京都へ参りましたことゆえ、ふとおなつかしゆう存じまして」
「うちを訪ねて来やったのか」

「はい、突然ながら」
すると叔母は、

「やめたがよい、もうここで会えば、用がすんだである。帰りや、

「帰りや」

と、手を振るのだった。

二

これが、何年ぶりかで会った叔母の、血につながる者へのこと
ばか。

武蔵は、他人以上の冷たさを、心へ浴びた。亡母ははの次の人みた
いに甘えて来た世間知らずが、はつと、悔いられるとともに、思
わずいった。

「叔母御、それはまた、なぜですか。帰れとなら、帰りもしまし

ようが。道ばたで会った途端に、帰れとは、解げせぬ仰せ。私に何かお叱りがあるならば、打ちつけにいつて下さい」

そう突つ込まれると叔母は困ったように、

「では、ちよつと上がつて、叔父様に会つて行きやれ。ただ……叔父様は、あのようなおひとゆえ、久しぶりに訪ねて来たそなたがまた、落胆がっかりしても折角と申うての老婆心じや。気を悪うしやんな」

そういわれると、武蔵はいくらか慰められ、叔母について、家へ入った。

ふすま越しに、やがて叔父の松尾要人かなめの声ができる。喘息病ぜんそくやみらしい咳しわぶき声と、感激のない呟きを聞くと、武蔵はまた、この

家庭の持つ冷たい壁を感じて、隣の部屋でもじもじしていた。

「なに、無二斎の息子の武蔵が来たと？ ……やれ、到頭来おったか。…して、どうした、なんじや、上がっておると。なぜわしに黙って上へ通しなすったか、ふつつか者め」

武蔵は耐えかねて、叔母をよび、早々、暇を告げようとすると、

「そこにいるのか」

要人は、そこを開けて、しきい闕ごしに眉をひそめた。畳の上へ牛の草鞋わらじでも上げたように、穢むさい田舎者と、見ている眼だった。

「おまえ、なにしに来た」

「ついでありましたゆえ、ご機嫌をうかがいに出ました」

「うそをいいなさい」

「え？」

「うそをいっても、こちらには、分っている。おまえは、郷里を荒らし抜いて、多くの人に恨みをうけ、家名にも、泥をぬって、ちくてん逐電している身じやろうが」

「……………」

「どの面つら下げて、親類などへ、のめのめと」

「恐れ入りました、今に、祖先へも郷土へも、詫びをするつもりではおりますなれど」

「……………なれど、今さら、くにもと国許へも帰れぬのであろうが、悪因悪

果というもの、無二斎どのも、地下で泣いておろうわい」

「……………長座いたしました。叔母御、いとまお暇いたします」

「待たぬか、これ」

要人かなめは、叱つて、

「この辺をうろろしていると、おまえは飛んでもない目に遭うぞ。なぜなれば、あの本位田家の隠居——お杉とやらいう肯きかぬ気の婆はよめどのが——半年ほど前に一度見え、また、先頃からも度々やって来て、わしら夫婦へ、武蔵の居どころを教えろの、武蔵が訪ねて来たろうのと、恐ろしい権まくで坐りこむのじゃ」

「あつ、あの婆が、ここへも参りましたか」

「わしは、あの隠居から、すべてを聞いておる。血縁の者でなければ、ひツ縛くつて、婆の手へわたしてくれるのじゃが、それもなまるまい。……わしら夫婦にまで、迷惑をかけぬよう、すこし足で

も休めたら、こよいのうちに、立つたがよい」

心外である。この叔父叔母は、お杉の認識をそのままうけて自分を見ているのだ。武蔵は、いい知れない淋しさと、生来の口重いい氣質に暗くなって、ただうつ向いていた。

さすがに気の毒になったとみえ、叔母は、あちらの部屋へ行つてすこし休めという。それが最大な好意らしくあつた。武蔵は黙つてそこを立ち、一間へ入ると、数日来のつかれもあるし、また、夜が明けてあしたの元日には——五条大橋の誓いもあるので、すぐごろりと横になつて、刀を抱いた。——いや飽くまでこの世は自分の身ひとつと思ふ孤独を抱きしめている姿だつた。

三

世辞もなく、わざと辛く、ずけずけとものをいうのも、血縁の叔母なればこそ叔父なればこそ——そう考えられぬこともない。

一時は、憤むつとして、門に唾つばきして去ろうとまで思ったが、武蔵は、そう解釈して、寝ころんでいた。かぞえても幾人もない親類である。努めて、その人達をば、善意に解して、他人よりも濃く血のつながっている縁者として、生涯、なんぞの時には、助けたり助けられたりして行きたいものと、彼のみは、思うのだった。

だが武蔵のそんな考え方は、実世間を知らない彼の感傷に過ぎない。若いというよりも、幼稚なほど彼はまだ、人間を観みる目も、

世の中を観る目も、そういう方にかけては、知ることの浅い青年に過ぎなかつた。

彼のような考えは、彼が大いに名を成すか、富を得るかした後
に考えるならば、少しも不当にはならないが、この寒空を、垢あかじ
みた旅着一枚で、しかも大晦日おおみそか——辿たどりついた親戚の家で考え
たりすることではない。

その考えの間違つていた反証はやがてすぐ現われた。

(すこし休んでゆけ)

と、叔母がいつてくれたことばを力にして、彼は、空腹をかか
えて待つていたが、宵から勝手元で煮物のおいうや器物つわものの音がし
ていたにもかかわらず、彼の部屋にはなんの訪れもないのである。

火桶の中には、ほたる 螢ほどな火の気しかなかった。だが、ふたとぎ 飢えも寒さも第二のものだった。彼は手枕のまま一刻あまり、こんこん 昏昏々と眠っていた。

「……あ、除夜の鐘だ」

無意識に、がばと身を起した時、数日來の疲れは洗われていて、彼の頭脳あたまは冴え切っていた。

洛内洛外の寺院の鐘が、いんいんと、むみよう 無明からうみよう 有明のさかいへ鳴っていた。

しよぎようほんのう 諸行煩惱の百八つの鐘は、人をして一年のあらゆる諸行へ反省を呼び起させる。

——おれは正しかった。

——おれは為す^なことを為した。

——おれは悔いない。

そういう人間が何人あるだろうかと武蔵は思った。

一鐘^{しょう}の鳴るごとに、武蔵は、悔いのみを揺すぶられた。ひしひしと後悔されることばかりへ追憶がゆくのである。

今年ばかりではない。——去年、おとし、先おとし、いつの年自分自身で恥じない月日を一年送った例^{ためし}があるだろうか。悔いない一日があつたらうか。

なにか、やるそばから、人間はすぐ悔いる者らしい。生涯の妻を持つことにおいてさえ、男の大多数は悔いて及ばない悔いを皆ひきずつている。女が悔いるのはまだ恕^{ゆる}せる、ところが、女の愚

痴はあまり聞えないが、男の愚痴がしばしば聞える。勇壮活潑なことばをもつて、うちの女房を穿はき捨て下駄はのようにいうのである。泣いていうよりも悲壯で醜い。

まだ妻はないが、武蔵にも通有性の悔いがある、煩惱がある、彼はすでに、この家を訪ねて来たことを後悔するのだった。

(おれにはまだ、縁を恃たのむ気持が失うせない。自力だ、一人だと、常に誠いましめながら、ふと人に依りかかる。……馬鹿だ、浅あさはか慮かだ、

おれはまだ成っていない)

慚ざん愧きすると、その慚愧ざんきしている自分のすがたがまた、いとど醜みにくしく思われて、武蔵はよけいに自分への恥に打たれた。

「そうだ、書いておこう」

なにを思いついたか、彼は常住坐臥、肌身を離さずに持ち歩いている武者修行風呂敷を解きはじめた。

——その頃、この家の門の外に立つて、ほとほと、そこを叩いている旅扮装たびよそおいの老婆としよりがあつた。

四

半紙を四つ折にかさねて綴とじた彼の雑記帖なのである。武蔵はそれを、旅包みの中から出して、早速、硯すずりばこ箱ばこをひきよせた。

それには、彼が漂泊のあいだに拾った感想だの、禅語だの、地理の覚えだの、自誠じかいのことばだの、また、ところどころには幼稚

な写生画なども書いてあつた。

「……………」

筆を持つて、彼は余白を見つめていた。百八つの鐘はまだ遠く近く鳴りつづけている。

われ何事にも悔いませ

武蔵は、そう書いた。

自己の弱点を見出すごとに、彼は自誠のことばを一つ書いた。

だが、書いただけではなんの意味もなさない。朝暮にきようもん経文の

ように唱えて胸へ刻みこむのでなければならぬ。従つて、辞句も詩のように口で唱え易いことが必要であつた。

そのためか、彼は、苦吟して、

われ何事にも……

という修辭を、

われ事において

と書き改めた。

「われ事において悔いまじ——」

口のうちに呟いてみたが、武蔵は、まだ自分の心にぴったりしないものか、終りの文字もまた消してしまい、こう改めて、筆を投じた。

われ事において後悔せず

最初のは「悔いまじ」であつたが、それではまだ弱いと考えられたのである。「——せず」でなければならぬ——われ事にお

いて後悔せず！

「よし」

武蔵は、満足した、そして胸に誓った。何事にも自分の為なしたことに後悔はしないというような高い境地へまで到達するには、まだまだこの身を、この心を、不断に鍛え抜かなければ及びもない望みとは思うのであったが、

(必ずそこまで行き着いてみせる)

と、彼は自分の胸の遠いところへ、理想の杭くいを打って、堅く信念するのだった。

——折ふし、うしろの障子が開いて、寒げな叔母の顔がそこをのぞ覗きき、

「武蔵……」

と、齒の根で呟くようにふるえを帯びた声でいう。

「虫の知らせじゃ、なんとのう、そなたを止めておくのは気がかりと思うていたら、案のじよう、時も時、今、本位田家のお杉隠居が門をたたき、玄関に脱いであるそなたの草鞋わらじを見つけて、武蔵が訪うて来たであらう、武蔵をこれへ出しやれといい猛たけつて……才オここへも聞えてくるわ、あの通りな巖談じゃ。——武蔵、なんとしやるぞ」

「……え、お杉婆が」

耳を澄ますと、なるほど、いつも変らない切口きりこうじよう上と、きかない気の隠居の皺しわがれ声が、木枯らしの洩るように響いてくる。

叔母は、もう除夜の鐘もすんで、これから若水でも汲もうという元日早々、もしいま忌わしい血でも見るようなことになってはと、いかにも迷惑そうな顔を、露骨に武蔵へ見せつけながら、

「逃げておくれ、武蔵、逃げるのがなにより無事。今——叔父様が応対して、左様な者は立ち寄った覚えはないと、ああして婆をはば阻んでおいでなさる程に、その間に、裏口からでも——」

追い立てて、彼の荷物や笠を自分で持ち、叔父の革足袋と、一そくの草鞋を裏口へ置いてくれた。

武蔵は、急せかれるままに、それを穿はいたが、いい難にくそうに、

「叔母御、まことにご無心ですが、茶漬を一膳食べさせてくれませんか。——実は、宵から空腹なので」

すると叔母は、

「何をいいやる、それどころの場合かいの、さ、さ、これでも持つて早よう行きやれ」

白紙にのせて持つて来たのは、五つほどの切餅だった。武蔵は押しいただいたて、

「ご機嫌よう……」

凍いてついている氷の道を踏んで、もう元日ではあるが、まだ真つ暗な天地の中へ、毛を撈むしられた寒かんどり鳥のように、悄しおしお々と出て行った。

髪の毛も、指の爪も、みな凍つてしまふかと思われた。ただ自分の吐く息のみが白く見え、その息もまた、口のまわりの生ぶ毛にたかるとすぐ霜に化^なるかと疑われるほど冷たいのである。

「寒い」

彼は思わず口に出していった。八寒の地獄といえどもかほどではあるまいに、どうしてこう寒く感じるのか——今朝に限つて。

(身よりも、心がさむいせいだろう)

武蔵は、自分の間に自分で答えてみる。

そしてなお思うには、

(そもそもおれは未練者だ。ともすると、人肌を恋^{あかご}う嬰兒のよう

な、乳くさい感傷に恋々と心を揺すられ、孤独をさびしがり、暖かそうな人の家庭の灯が羨ましくなる。なんたるさもししい心だろ
う。なぜ、自分に与えられたこの孤独と漂泊に、感謝を持ち、理想を持ち、誇りを持たないか)

痛いほど凍えていた彼の足は、指先まで熱くなっていた。闇に吐く白い息も、湯気のような迫力で寒さを押し退けている。

(——理想のない漂泊者、感謝のない孤独、それは乞食の生涯だ。
西さいぎよう行法師と乞食とのちがいは、心にそれがあ
るかないかの違いでしかない)

みしつと、足の裏から白い光が走った。見ると、薄氷うすこおりを踏
んでいるのだった。いつの間にか、彼は河原に降り、加茂川かもの東

岸を歩いていたのである。

水も空も、まだ暗澹として、夜明けの気ぶりも見えない。流れのふちだと気がつくのと、急に足が出なくなつた。今までは鼻を掴まれても分らないような厚ぼつたい闇を、吉田山の下からここまですでなんの苦もなく歩いて来たのであつたが――

「そうだ、火でも焚たいて」

堤どての蔭へ寄つて、武蔵は、そこらの枯れ枝や木片きぎれや、燃えそ
うな物をあつめた。燧ひうちいし打石を磨すつて、小さな炎とするまでには、
実に克明な丹精と辛抱いが要いるのだつた。

やつと、枯れ草に炎がついた。その上へ、積木細工のように、
大事に燃える物を組んでゆく。或る火力にまで達すると、急に育

ち上がった炎は、こんどは風を呼び、火を作った人間へ向って、ぐわうつと顔でも焼きそうに背伸びしてかかってくる。

ふところから餅を出して、武蔵は、それを焚火たきびであぶった。焦げて、ぷーと膨ふくらむ餅を見ていると、またしても、彼は少年の頃の正月を思い出し、家なき子の感傷が、泡つぶみたいに、心のうえで明滅する。

「……………」

塩気もない、甘味もない、ただ餅だけの味だった。しかしこの餅の中に、彼は世間というものの味を噛みしめるのだった。

「…………おれの正月だ」

焚火の炎におもて面を焼きながら、餅を頬張っている彼の顔には、何

か急に独りでおかしくなったような笑靨えくぼが二つ浮いていた。

「いい正月だな、おれのような者にも、五つ切れの餅さざを授かつたところを見ると、天は誰へも、正月だけはさせてくれるものともいえる。——屠蘇とそは満々と流れている加茂の水、門松かどまつは東山三十六峰。どれ、身を浄きよめて、初日の出を待とうか」

流れの瀬へ寄つて、彼は帯を解いた。衣服も肌着も、すべて脱ぎすてて、どぼつと水の中へ体を沈め込んだのである。

みずとり水禽みづとりが暴れているように飛沫しぶきを立てて全身を洗い、やがて皮膚をぎゅつぎゅつと拭ぬぐいているうちに、彼の背なかへ、雲を破つた暁の光がかすかに映さして来た。

——と、その時、河原に燃え残っている焚火の明りを見て、堤どて

のうえに立つた人影がある。これも、すがたこそ、年齢としこそ、まるでちがうが、やはり輪廻りんねにうごかさされる旅の人、本位田家のお杉隠居であつた。

針

一

いたわ、小僧めが。

お杉婆は、胸のうちで、こう高く喚わめいた。

欣うれしさやら、恐おそしさやら、張りつめていた心がみだれて、

「おのれつ」

と、焦心あせりたがる気持と、がくがくわななく体力とが、とたん
に一致を欠いてしまつて、思はず堤どての小松の蔭へ、ぺたつと坐つ
てしまつたのである。

「欣めぐしや、やつと巡り会おうたぞやい。これも、つい先のころ、住
吉の浦で不慮の死を遂げなされた権叔父ごんの霊のひきあわせでがな
あろう」

婆は、その権叔父の骨の一片と髪かみの毛とを、今も、腰こしに結ゆわいつ
けてある旅包みの中へ納め、常に肌身につけて歩きながら、

（権叔父よ、たといおぬしは死のうとも、わし一人とは思わぬぞ
よ、武蔵とお通を成敗せぬうちは、故郷くにの土は誓つて踏まぬと、

ともども、旅へ出た二人じやほどの。——おぬしは死んでも、おぬしの魂こんぱく魄はこの婆の肩から離れはなさるまい。婆もまた、いつもおぬしと二人連れで歩いているものと思つて、きつと、武蔵を討たいでは措おかぬから、見ていなされや、草葉の蔭から——

婆は、朝念暮念、そのことばをいい暮して——といつてもまだ——権叔父が骨になつてから七日ほどにしかならないが、その一心を自分も骨になるまでは、失うことではないと胆きもに抉えぐつて、さて、この数日というものを、まるで鬼子母神きしもじんのような血相になり、遂に、武蔵のすがたを突き止めて来たのであつた。

——ちらつと、最初に耳にした手がかりは、吉岡清十郎と武蔵との間に、近日、試合があるらしいという巷ちまたのうわさ。

次にはきのうの夕方——五条大橋の大晦日おおみそかの人だかりのなかで、その吉岡門の者が、三、四名して打ち建てて去った高札の表である。

あの文字を、お杉は、どんなに興奮した眼をもつて何度も読んだことか。

(大だいそれた武蔵めがよ、身のほど知らずも、ここまで来ればよい愛嬌。吉岡に討たれることは知れているが、それでは、国くに許へ公言して出て来たこの婆が面目がないわいの。どうあろうと、吉岡に討たるる前に、武蔵は、婆が手にかけて、あの洩はなたれ首もとどりの髻もつかんで、故郷の衆に見せにやならぬ)

躍起となった。

心には祖先神仏の加護をいのり、身には権叔父の白骨を結ゆわいつけて、

(やわか草木を分けても捜し出さずにおこうか)

と、またぞろ、松尾要人かなめの門を叩き、そこでさんざん毒づいたり詮議せんぎ立てした結果が、却つて、がっかりしたものを負わされて、今——この二条河原の堤つつみまで戻りかけて来たところであつた。

ボウと河原の下が明るいので、お菰こもが火でも焚たいているのかと思ひながら、なんの気もなく堤どてに立つて見たのである。すると、燃え残っている焚火から十間ほど先の水際に、素裸の男が、この寒さも知らないように、水浴びから上がった。逞しい筋肉を拭いている。

(武蔵！)

と見極めると、婆は、腰をついたきりしばらく立てなかつた。相手は今、素裸でいるのだ。駈け寄つて行つて斬りつけるにはまたとない機会であるのに、この老婆のしなびている心臓は、それをなし得ないで、年齢としとともに複雑になつてゐる感情の昂たかぶりが先に立ち、もう武蔵の首でも取つたように、

「うれしや、神の御加護か、御みほとけ仏のひきあわせか、ここで武蔵めに会うとは、よも凡ただごと事であろうはずはない。日頃の信心が通じて、婆の手で、神仏が仇を討たせてたものじゃ」

と、掌てをあわせて、幾度も、空を拝しているというような、いとも悠々たる老婆らしいところも、この老婆にはあるのだつた。

河原の石の一つ一つが、暁の光に濡れて浮きあがってくる。

沐浴もくよくした五体に、衣服を着、かたく締めた帯に、大小をたば

さむと、武蔵は、膝まずいて、天地へ黙然かしろと頭を下げていた。

お杉婆は、

「今つ」

と、気は逸はやつたが、武蔵がその時、河原の水溜みずたまりを跳びこえ、

急にかなたへあゆみ出したため、遠方から声をかけては逃がすお
それがあると、あわてて同じ方角に向つて堤の上を歩み出した。

白々と、元日の町の屋根や橋は、初霞なつしの底から和やかな線をば

かしはじめたが、まだ空には星がよく見えるし、東山一帯のふところは、墨のようなぎようあん 暁 闇 だった。

三条仮橋の下をくぐると、武蔵は河原から堤どての上へ姿を現わし、大股に歩き出している。

婆は、

(武蔵待とう)

何度か、呼ぼうとしては、相手の隙とか、距離とか、さまざまな条件を老としより 婆らしくちみつ 緻密に考え、数町の間、引ひき摺ずられるように歩いてしまった。

武蔵は知っていた。

先ほどから疾とくそれと知っていたので、彼はわざと振向かなか

った。振向いて、眼と眼が、かち合つたら、その途端、お杉が選ぶ行動は分つているし、老婆としよりとはいえ、切れ物と死に物狂いで来る以上、こちらが怪我けがをしない程度のアシライはむく酬いなければならぬ。

(恐い相手だ)

と、武蔵は心から思うのだつた。

村にいたころのたけぞうなら、すぐ撲はり倒して撃退するか、血へどを吐かせて伸ばしてしまうであろう。だが今では、そういう気にはなれない。

恨みはこちらの方にこそあるので、婆が自分を七しち生しょうまでの仇かたきかのように狙つているのは、まったく、感情と誤解のこぐらか

りに困もとづくので、それを解けばわかるのだ。しかし、自分の口からいったのでは、百万遍べん説いたにせよ、

(そうか、そうじゃったか)

と、あの婆が、あれほど瘤こぶにして持っている宿怨をわすれて、水にながすはずはない。

——だが、いかなお杉婆でも、息子の又八自身の口から、関ヶ原へ出かけた前後の二人の事情と、すべてのいきさつを懇ねんごろに論さとされたら、それでもなお、自分を本位田家の仇とはよもいいきれまい、また息子の嫁を横奪よこどりして逃げた曲しれもの者ともまさか怨うらむまい。

(よい折りだ、その又八に、会わせてやろう。——五条まで行け

ば、今朝は、彼が先へ来て待つているかも知れない)

武蔵は、自分の言伝ことづてした約束が、彼に通じているものと信じ
ていた。従つて、五条大橋まで行けば、この老婆とあの息子とが
会つて、その間に誤解されている自分の立場も、そこで初めて、
諄じゆんじゆん々じゆんじゆんと説いて氷解させることが出来ようと考へている。

その五条大橋のたもととは、もうすぐそこに近づいていた。小松
殿の薔薇園しょうびえんだの平相国へいしようこく入道にゆうどうの館やかただのが藁いらかをならべていた
平家繁昌の頃から、このあたりは民家も人通りも多い中心で、戦
国以後もその旧態を残しているが、まだどこの家も戸は開いてい
なかつた。

おおみそか
大晦日の宵のうちに、きれいに掃いた箒ほうきめ目が、まだ眠つて

いる家々の門口に、そのまま浮いて、ほのかに白んでくる元日の光を徐々に迎えている。

武蔵の大きな足痕あしあとを、お杉婆は後から見た。

足痕さえ憎かった。

もう橋の袂たもとまでは、一町か、半町。

「——武蔵っ！」

お杉はさげんだ。喉の痰たんを切ったような声である。両手に拳をこしらえて、首を前へ突き出しながら駈け寄って行った。

「そこへ行く人ひと非人でなしよツ、耳は持たぬのかッ」

当然、武蔵にそれが聞えていないわけはない。

老いさらばうた老としより婆いよめとはいえ、死を覚悟した蹙音しりぞもすさまじい。

背を向けたまま、武蔵は歩いていたが、

(はて、困ったもの)

どうしたものかの思案が咄嗟とつぜんに出なかつたのである。

その間に、

「やれ、お待ちやれ」

婆は、武蔵の前へ廻った。

前へ廻つてからお杉婆は、尖とがった肩や薄い肋骨あばらを波のように喘あえ

がせて、喘息ぜんそくでも起つた時のように、しばらく、口に唾つばを溜ためて息を休ませているのだつた。

やむを得ない顔して、武蔵も遂にことばをかけた。

「おお、本位田のおばば殿か、めずらしいところで」

「ても、厚顔あつかましい。めずらしやとは、わしの方でいうことば。

清水きよみずの三年坂さんねんざかでは、まんまと、討ち洩はらしたが、きようこそ、

その素首すこうべは、この婆ばがもろうたぞ」

軍鶏しやものように細こい皺首しわくびが、背の高い武蔵へ向つて伸び上

がつていうのだつた。逞たくましい豪傑ごうていが憤怒ふんどするよりも、この婆ばが根

の剥むけている前歯まへばを吹き飛ばしそうにして叫こゑぶ声こゑのほうが、武蔵

は、怖い気持きもちがした。

その恐い気持のうちには、少年時分の先入主が多分にあつた。

又八も青^{あお}湊^{おぼな}を垂らし、武蔵もまだ八ツか九ツ頃の悪^{いた}戯^{たず}ざかり

の当時、村の桑畑や本位田家の台所などで、この老^{とし}婆^{より}に、

(童^{わっ}ツ^ぱ)と一声呶鳴られると臍^{へそ}がもんどり打つたように、縮み上

がつて逃げたものである。

その雷^{かみなり}声^{こえ}が、武蔵の頭のしんに今もどこかに沁^しみこんでい

るらしいのである。もとより子供の頃から、好かない婆、つむじ

曲りな婆、また、関ヶ原から村へ帰つた後にうけた仕^し打^{うち}の憎さは、

いちいち骨^{こつ}髓^{ずい}に徹しているが、由来この婆には、勝てないもの

という幼い時から癖がついているので、時^{とき}経^たてば、あの時の無

念さも、さほどではなくなつていた。

それに反して、お杉は、幼少の時から見ている悪戯いたずら小僧のたけぞうがどうしても頭から離れない。しらくも頭で潰垂れはなたの畸形きけ児いじみたいいじに手脚ばかりヒヨロ長かつた嬰兒あかごの時から知つてゐる武蔵である。——自分が老いて、彼が成長した事實は認めても、昔から餓鬼あつかいに見ていた観念ごんは毫も取れない。

その餓鬼に、こうされると思うと、お杉は、郷土の者に対する大義名分ばかりでなく、感情だけでも、このまま土なに化なることはできなかつた。武蔵を墓場へ抱きこんで行こうということは、生きてゐる今の最大な望みとなつた。

「もう、改めて、何もいうことはないぞえ。尋常に、首渡すか、婆が一念やいばの刃やいばを、受けてみるか、武蔵ツ、支度しやいつ」

婆は、そういつて、手に唾つばするの、左手の指を唇へちよつと当て、短い脇差の柄つかへその手をかけてつめ寄つた。

四

龍りゆうしや車しやにむかう蝟とうろう螂ろうの斧おのということばがある。お杉隠居のように痩せこけているかまきりという秋の虫が、鎌さに似た細い脛すねをカチャカチャ鳴らして、人間へ斬さつてかかる態さまを嘲わらつていうことばなのである。

お杉の眼つきは、そのかまきりの血相ちけに似ていた。いや、皮膚の色、姿までが、そっくりだった。

ぬつと突き立って、婆のつめ寄る足もとを、兎戯のように見て
いる武蔵の肩や胸は、さながらそれを嘲わらう鉄がねの籠車がねといつていい。
おかしさを感じてくるところであるが、しかし武蔵は、笑えな
かった。

ふと、慙あわれになったのである。かえって、この敵に、労いたわりたい
ようないい知れぬ同情を持たせられて、

「おばば、おばば、まあ待ちなさい」
かろく隠居ひじの肱ひじを抑えた。

「な、なんじゃと」

お杉は、持った刀の柄つかを、唇の外へ出ている前歯とともに、わ
なわなさせて、

「ひ、卑怯者めが、この隠居は、おぬしなどより、四十もよけいに門松を迎えているのじやぞ。青くさい口先で騙たばかろうとて、なんで騙られよう。むだ口は聞く要もない。討たれてしまやれ」

もう、婆の皮膚は、土氣いろをして、語氣に必死なものがこもっている。

武蔵は、うなずいて、

「わかる、わかる、おばばの気持はよくわかる。さすがは、新しんめ免宗貫んむねつらの家かちゆう中で重きをなした本位田家の後家ごけ殿だけのものはある」

「ひかえなされ、小倅こせがれ。孫のようなおぬしなどからおだてられて、欣よろこぶ婆ではないわいの」

「そうひがむのが老婆としよりの瑕きず、武蔵のことばもすこし聞いてほしい」

「遺言か」

「いや、いい訳じゃ」

「未練なっ」

燃えあがつて、お杉は低い体をつま先で伸び出すように、

「聞かぬ聞かぬ、この期ごになつて、いい訳など聞く耳は持たぬ」

「では、しばしの間、その刃を、武蔵にあずけておきなさい。さ

すれば、やがて五条大橋の袂たもとへ、又八が来合あわそうほどに、すべ

てのことも自おのずからわかつてまいろう」

「又八が？ ……」

「されば、去年の春ごろから、又八へ言伝ことづてがしてあるのです」

「何と？——」

「今朝、ここで会おうと」

「嘘をいやいつ」

お杉は一喝かつして首を振った。又八とそんな約束があるくらいなら、当然、この間うち大坂表で彼と会った時に、自分へ話しておくはずである。又八は武蔵の言伝てなどを受けてはいない。お杉は、その一言だけで、武蔵のことばを皆嘘と決めてかかった。

「みぐるしいぞ、武蔵、おぬしも無二斎の子であるが、死ぬ時は、いさぎよ潔う死ぬものと、おぬしの父親てておやは子に教えてはおかなんだか。

ことば遊びは、無用。婆が一念、神仏も御加護やいばの刃、受けらるる

ものなら受けてみやい」

脇ひじをちぢめて、武蔵の手を外はずすと、お杉隠居は、ふいに、

「南無ッ」

と、小太刀を抜いて両手に持ち、武蔵の胸もとへ向つてまっすぐに突いてきた。

武蔵が、空くうを与えて、

「おばば、落着け」

平手でかろく背を打つと、

「大慈、大悲」

お杉は、躍起となつて、振向きざま、ふた声三声、

「南無、かんぜおん菩薩ぼさつ、南無、かんぜおん菩薩ッ」

烈しい太刀を打ち振った。

その手頸てくびをつかんで、武蔵は、外身そとみにひき寄せ、

「お婆ば、後でくたびれるぞ。……サ、すぐそこじゃ、五条大橋まで、ともかく、拙者に従ついて歩いて来るがよい」

捻ねじ取られた自分の腕の肩ごしに、お杉は、きつと白い眼を武蔵に向けた。——そして唾つばでも吐くように口をすぼめたと思うと、

「ふっつ！」

と、頬に溜めていた息を鳴らした。

「あつ……」

武蔵は、婆の体を突き放し、片手を左の眼に当てて飛びのいた。

五

ひとみが何かで焼かれたように熱かった。火の塵ちりでも入ったように痛むのである。

武蔵は、まぶた瞼の上を押えていた手を放してみた。手には血しおもっていない。——しかし、左の眼は、開くことも出来なかった。お杉は、相手の身体からだにそうした乱れを見つけると、ひどく勝ち誇って、

「南無、かんぜおん菩薩」

と、隙すかさず、ふた太刀、三太刀斬りつけて行つた。

いささか慌あわて気味に、武蔵は身を避けて斜そめに反つた。その時、

お杉の太刀が彼の袖裏を透して、二の腕の肱の辺をさつと掠めた。
 綻びた袂の白い裏地へ血しおが朱く滲んで見えた。

「討ったッ」

狂喜しながら、婆は小太刀をやたらに打ち揮った。根の生えて
 いる大木の幹でも伐っているようなつもりで、相手が活動しない
 でいることは考慮に入れないのである。一念にただ清水寺の観
 世音菩薩おんぼさつの名を地へ呼び下して、

「南無、南無」

と、うるさく唱えながら、武蔵の前後を駈け廻るのであった。

武蔵は、それに応じて、ただ体を移しているだけだった。しか
 し、片方の眼は、眼つぶしを食ったように烈しく痛むし、左の肱

は、かすり傷ではあるが、そこから滴り落ちる血しおに袂が染まるほどだった。

（不覚！）

と氣のついた時が、もうその不覚を身に受けていた時だったのである。彼として、こういう先手を先に取られて、手傷まで負った例は今までになかったことだろう。——けれど、これは勝負というものではない、なぜならば、武蔵には全然この老婆に対して闘志がないからである。最初から、勝つことも敗けることも考えていなかったに違いない。至って体も敏捷でないこの老婆の刃向いなどは、彼の意識にも入らないのが当然でもあった。

しかし、それがそもそも不覚というものではあるまいか。兵法

の大乗的な見地から観れば、これは明らかに武蔵の敗れやぶであり、武蔵の未熟さを、見事にお杉婆の信仰心と切っ先が、暴露して見せたものといつて差しつかえなからう。

自身、その不用意を、武蔵も、はつと気づいて、

あやま
(過つた！)

同時に彼は全力を出して、なおも凶に乗つて来るお杉の肩を、とんと一つ、平手ではたいた。

「あつ」

四ツ這いになったお杉の手を離れて、刀は遠く飛んでいた。

武蔵は、それを拾つて左の手に持ち、右の手で、起きかけている婆の体を横ざまに抱きあげた。

「ええ、口惜しい」

亀のように、お杉は、武蔵の脇の下で泳ぎながらさげんだ。

「神もないか、仏もないか。みすみす敵へかたき一太刀つけながら……。

ええ、どうしよう、武蔵、この上は、恥を搔かせずに、首を討て、さあ、婆の首を討て」

武蔵は、口を結んだきり、ただ黙々と大股に歩き出した。

絞り出すようなしやがれ声で、その間、お杉婆はいいつづけている。

「こうなることも、武運じゃ、天命じゃ、神のお旨むねを思えば、なんの未練があろうぞ。——権叔父も旅で死に、婆も返り討ちになつたと聞けば、あの又八も、奮ふるい起つて、きつと、仇を討とうと

いう気になるだろう。婆の死は、決して犬死にはならぬ。かえつて、あの子のためにはよい薬じや。武蔵つ、はよう婆の命を奪とれ。……どこへ行くのじや？ ……死に恥搔かす気か、はよう首を討てつ」

六

武蔵は耳もかさなかつた。

婆のからだを横に抱えて、五条大橋のそばまで来ると、

(どこへ置いたものか)

と、お杉の身の処置を考えるように、辺りを眺め廻していたが、

「そうだ……」

河原へ下りて、その橋杭はしぐいに繋つないであつた河舟の底へ、お杉のからだをそつと卸おろし、

「お婆ば、ここで辛抱しておるがよい。——やがてそのうちに、又八がやつて来るだろうから」

「な、なにするのじゃ」

隠居は、武蔵の手や、辺りの苦とまを刎はね退けて、

「又八など、ここへ来るはずはない。オオ、察するところ、われはこの婆を、ただ返り討ちにしただけでは腹がいえず、五条のを通りへ曝さらし物にし、わしへ生き恥搔かせてから殺す気じやの」

「まあ、なんとでも、思っているがよい。そのうちにわかる」

「討てつ」

「ははははは」

「何がおかしいぞよ。この婆の細首一つ、ばさりと落すことが出来ぬのか」

「出来ない」

「なんじやと」

婆は、武蔵の手へ咬かみついた。やむを得ぬ手段として、武蔵が、婆の体を船ふなげた桁へ縛りつけようとするからだった。

武蔵は自分の腕を、存分に婆の口へ咬ませたおきながら、ゆるゆると婆の体を縛ってしまった。

抜刀ぬきみのまま提さげて来た脇差は、鞆さやへおさめて、婆の腰へ元もとのよ

うにもどして与え、そして立ち去ろうとすると、

「——武蔵ツ、武蔵ツ、汝われは武士の道を知らぬのかツ、知らずば、教えてやろう。まいちど、ここへ寄つて来うツ」

「——後で」

一顧したまま武蔵は、堤どてへ足をかけたが、まだうしろで、お杉が呶号して止まないのので、戻つて行つて、婆の上へ何枚も苦とまをかぶせた。

ちようどその時、東山の肩に、のっと大きな太陽が真つ赤な焰の環わの端を見せていた。ことしの第一日の日輪だった。

「……………」

五条大橋の前に立つて、武蔵は恍惚と見とれていた。あかあか

と、腹の底まで陽の光が映しこむように思えた。

一年のうちの小我な狭い考えの中に湧く愚痴の虫は、この雄大な光の前に、影をひそめてただ清々すがすがしい。生きているという欣よろこびだけでも武蔵は胸がいつぱいになった。

「しかも、おれは若い！」

五ツ切れの餅の力は、踵かかとにまで充溢じゅういつしていた。彼は、踵をめぐらして、

「まだ来ていないようだな……又八は」

と、橋の上を見まわした。そしてふと、

「あ？ ……」

と、眩つぶやいたが、そこに自分より先へ来て待っていたものは、又

八でも他の人間でもなかった。

植田良平以下の吉岡門下が、きのうここに建てて去った例の高札である。

——場所は蓮台寺野。

——日は九日の卯の下刻

「……………」

武蔵は顔を寄せて、生々しいその新板あらいたと墨のにじみを凝視した。文字を読んでいるだけで、彼のからだは針鼠のように闘志と血に膨ふくらんで丸くなった。

「……………あ痛、ああ痛い」

武蔵は、またしても、左の眼の激痛に堪えかねて、思わずまぶた瞼へ

手を当てたが、ふと俯うつむ向けた顎あごの下に、一本の針を見出してぎよつとした。よく見ると、針は、着物の襟えりや袂たもとに、霜えりばしらのように刺さっていて、きらきらと光るのが、四本も五本もすぐ眼にとまった。

七

「あ……これだ」

その一本の針を抜いて、武蔵はつぶさに検あめた。針の寸法は、ふつうの縫ぬい針はりと変らないし、太さも同様な物であるが、この針には、糸をとおす針穴がない。そしてまた、針の身にも丸み

がなくて、三角であつた。

「おばば奴^め」

武蔵は、河原をのぞいて、こう慄然^{りっぜん}とつぶやいた。

「これは、話に聞いたことのある吹針というものではないか。あのおばばに、こんな隠^{かく}し業^{わざ}があるうとは夢にも思わなかつたが。

……ああ、危^{あや}ういことだつた」

彼は、好奇心とつよい知識慾に燃えて、その針を一つ一つ手に納め、改めて、自分の襟の中へ、抜けないように刺し込んだ。

他日の研究の資料とするつもりなのであろう。彼のまだ狭い体験の範囲で聞いているところによると、一般の兵法者のあいだでも、吹針という技術があるという説と、ないと主張する説とがわ

かれていた。

あるという説をとる者の弁によると、それは非常に古い伝統を持つている一種の護身術で、漢土から帰化した織部おりべの機女はためや縫工ぬい女めたちが、戯れたわむにしていた技法が進んで、武術にまで利用されるようになり、独立した武器とはならないが、攻撃法の前の奇手として、足利時代あしかがにまで、吹針というものは、たしかに用いられたものだど、勿体をつけていう。

ない——と反対する者は、

（ばかなことをいっては困る。武芸者が、そんな見戯に類したもののあるなしを論じるだけでも恥かしい）

と、兵法の正道論に拠よって、

(漢土から来た織女おりめや縫工女ぬいめが、そんなことを遊戯にやったかどうかは知らんが、遊戯はどこまでも遊戯で、武術ではない。第一、人間の口中には、唾液だえきというものがあつて、熱い、冷たい、酔すい、辛い、というような刺激は程よく飽和するが、針の先を、痛くないように含んでいることはできまい)

すると、一方は、

(ところが、それができるのだ。もちろん、修練の功だが、何本も唾液につつんで口にふくみ、それを、微妙な息と舌の先で、敵のひとみへ吹くことができる)

と主張する。

それに対して、反対者は、よしんば出来たところで、針の力で

ある、人間の五体のうち、ただ、眼だけが攻撃の焦点ではないか、その眼へ針を吹いても、白眼しろめの部分ではなんの効もない。眸ひとみの真
 中を刺したら、初めて、敵を盲目にすることが出来るだろうが、
 それにしても、致命的なものではない。そんな婦女子こわざのする小技
 が、どうして発達するいわれがあらうと反駁はんぱくする。

それに答えて、また一方は、

（だから、一般の武技のように、発達しているとは誰もいいはし
 ない。けれど、そういう秘かくし技わざが、今も残っているのは事実だ）
 という。

武蔵はかつてどこやらで、そんな論議をしているのを、そら耳
 に聞いたことはあったが、勿論、彼も、そんな小技は、武道と認

めない一人であつたし、実際にそういうことをする人間があらうとも思われなかつた。

世間のどんなつまらない雑談のうちにも、聞く者の聞き方によつては、何か他日に役立つものが必ずあるものだということ武蔵は今、痛切に知つた。

眼はしきりと痛むが、幸いに、ひとみを刺されたのではないらしい。眼がしらへ寄つた白眼の一部がずきずき熱を持って涙をにじみ出すのだった。

武蔵は、身体をなで廻した。

涙を拭く布を裂こうとするのであつたが、帯も裂けず、袂も裂けず……何を裂いたらと手が迷っていた。

すると。

うしろで誰か、ぴゅつと絹を裂く音をさせた者がある。振向くと、一人の女性が、彼の様子を見ていたらしく、自分の紅い下着^{あか}の袂を一尺ほど齒で裂いて、それを持って彼のそばへ小走りに駆け来てたのであった。

微笑

一

朱実^{あけみ}であった。

彼女の髪には、元日の化粧よそおいもなかった。着物もみだれ、足も素はだしなのである。

「……あつ？」

眼をみはつて、武蔵は、意味なくそう叫んだが、さて、誰なのか、覚えはあるが、急には思い出せなかった。

朱実は、そうでなかった。自分ほどではなくても、その何分の一でも、武蔵も自分を考えていてくれたことと信じている。いつの間にか、多年の間にそう自分だけで信じて来ている。

「わたしです……たけぞうさん……いいえ武蔵様」

下着の袖を裂いた紅い小布こぎれを手にしながら——怖こわごわ々と寄つて、

「……眼を、どうかなすつたんですか。手でこすると、なお悪く

するでしょう。これでお拭きなさいませ」

武蔵は黙って好意をうけた。紅あかい布きれで片眼を抑えると、また、朱実の顔をしげしげ見直した。

「お忘れですか？」

「……………」

「わたしを」

「……………」

「わたしを」

手て応こたえのない相手の無表情な空うつろへ向って、彼女の押詰めて来た切実な気持は不意なよろめきを感じた。傷だらけになった魂にも、これだけは確しかとつかんでいたつもりだったものも、自分だけ

で作っていた幻像に過ぎなかつたことを、ふと覺ると、胸先へ、血のかたまりのようなものがこみ上げて来て、

しゆくつ……

と唇や鼻から突き出る嗚咽おえつを、両手でおおつて、肩をふるわせ
た。

「オオ……」

思ひ出したのである。

武蔵は、彼女の今の一瞬の姿に記憶をよび起した。その姿には
まだ、伊吹いぶきの麓ふもとで袂の鈴を鳴らしていた頃の、世間に傷つかない
処女おとめらしさが残っていたからであろう。

いきなり、逞ましい腕が、彼女の病後のような薄い肩を抱きし

めた。

「朱実さんじゃないか。——そうだ、朱実さんだ。……どうしてこんなところへ来たのか。……どうして? どうして?」

たたみかけていう武蔵の問は、よけいに彼女のかなしみを揺すぶった。

「もう、伊吹の家にはいないのか、お養母かさんはどうしている?」
お甲のことを訊ねると、武蔵は当然、お甲と又八の關係に思い及び、

「今も又八と一緒に住んでいるのか。——実は今朝ここへ又八が来るはずになっているのだが、おまえが代りに来たわけではあるまいな」

すべてが朱実の心を外れてゆく言葉のみであった。

武蔵の腕の中で、朱実はただ顔を横に振って泣いていた。

「又八は来ないのか。……一体どういうわけだ。わけをいえ、ただ泣いているだけでは分らないではないか」

「……来ません。……又八さんは、あの言伝ことづてを聞いていないから、ここへは来ません」

やっと、それだけをいって、朱実あけみは濡れた顔を、武蔵の胸へ押し当てたまま痙攣けいれんしていた。

こういおう、ああいおう、と考えていたことは皆、泡のように、熱い血のなかで明滅しているに過ぎない。——まして、養母ははの手でむごい運命へ突きのめされた——あの住吉の浦から今日に至る

までのことなどは、どうしても口に出なかつた。

もう橋の上には、うららかな初日影を浴びて、清水へ初詣はつまいりにゆく初春着はるぎの女たちや、廻礼にあるく素袍すおうや直垂衣ひたたれの人影が、ちらほら通つていた。

その中から、ひよっこり、年の暮も正月もない、河かつ童ばあたまの城太郎が姿を見せた。橋の中ほどまで来て、武蔵と朱実のすがたを彼方かなたに見つけ、

「あれ? ……お通さんかと思つたら、お通さんじゃないらしいぞ」

怪しい男女の行為でも見たように、城太郎は変な顔して足を止めた。

二

折ふし誰も見ているものがないからいいようなものの、往來の端で、胸と胸を寄せてじつと抱き合っているなんて——大人のくせに——男と女のくせに——と、城太郎はびつくりせずにはいられない。

しかも、尊敬しているお師匠さまが。

女も女だと思う。

彼の童心は、わけもなく高い動悸を打ち、嫉ねたましい気もするし、悲しい気もする。——なにかこう焦いらいら々と腹が立って、石でも拾

つて打^ぶつけてやろうかとさえ思った。

「なんだ、あの奴は、いつか又八つていう人へ、お師匠様の言伝てをたのんだ朱^{あけみ}実じやないか。お茶屋の娘だからませているんだな。いつのまにかお師匠様とあんなに仲よくなつたんだろ。お師匠様もお師匠様だ。……お通さんにいつつけてやろ」

そこから往来の彼^{かなた}方^{こなた}此^{こなた}方^{かなた}を見まわす。欄^{らん}干^{かん}から橋の下を覗^{のぞ}いて見る。——だが、お通の姿は、まだここに見当らない。

「どうしたんだろ？」

先頃から泊っている烏丸家の邸内を出たのは、お通のほうが先に出かけているのである。

お通は今朝、武蔵とここであえるのを確信しているので、年暮^{くれ}

のうちに、烏丸家の奥から戴いたという初春はるの小袖を着、ゆうべは髪を洗ったり結ゆったりして、今朝を楽しみに寝もやらない様子であつたのだ。

そして、まだ未明のうちから、夜の白むのを待ち遠しがって、
(こうしている間に、祇園ぎわん神社から清水堂へ初詣りをして、それから五条大橋へ行くとしよう)

といい出し、城太郎が、

(じゃあ、おいらも)

と、従ついて行こうとすると、ふだんはいいが、恋には邪魔物に扱あわれて、

(いいえ、私は武蔵様に、少し二人きりで話したいことがあるの

だから、城太さんは、夜が明けてから、なるべく悠ゆつくり五条大橋に後からお出で。——だいじょうぶ、きつと、城太さんが来るまでは、武蔵様とあそこで待っていますから)

といつて、一人で先へ出かけてしまったのである。

べつに僻ひがんだり怒ったりはしないが、城太郎も決していい気持ではない。彼にも、明け暮れ共にいるお通の気持ぐらいは、もう解釈できない年頃ではない。男と女の持ち合う感動とはおよそどんなものかということとは、彼自身も、柳生の庄の旅籠屋はたごやの小茶ちやんと、馬糞小屋まぐさごやの藁わらの中でなんという理わけもわからずに悶搔もがき合つた体験がある。

その体験から割り出しても、大人のお通が泣いたり沈んだりし

ている平常ふだんの様子は、彼にはただ不可解で、おかしくつて、擦くすぐつたくて、理解も同情も持てなかつたが、今、武蔵の胸へすがつて泣いている者が、そのお通でなくて、朱実という案外な女性であつたことを眼で見ると、城太郎の分別は、俄然、憤りに似たものを持つて、

(なんだ、あんな女)

と、お通の肩をもち、

(お師匠様もお師匠様だ)

わがことのように腹を立てて、その結果が、

(お通さんは何してるんだろ。お通さんにいいつけてやるぞ)

という焦躁を帯びて来ると、急に橋の上下をキョロキョロし始

めたものだった。

ところが、そのお通が見当らないので、城太郎が独りでやきもきしている、彼方あなたの男女ふたりは、往来の眼を憚はばかるように、橋のたもとに近い欄干へ身の位置を移して、武蔵もその上に腕拱うでぐみを乗せ、朱実も並んで、河原の下へ面おもてを俯向うつむけている。

反対側の欄干に沿って、城太郎が通り抜けて行ったのも、男女ふたりの背中は気づかなかつた。

「愚図だな、いつまで、観音様なんか拝んでるんだろ」

城太郎は呟きながら、五条坂の方へ背伸びをして、待ち焦じれていた。

すると、彼の佇立たたずんでいるところから十歩ほどの距離である、

幹の太い四、五本の枯柳があつた。よくこの柳には川魚を啄みに来る白鷺の群れを見かけるのであるが、きようはその白鷺が一羽も影を見せていないかわりに、前髪に結つた一人の若衆が、臥龍のように低く這つてゐる老柳の幹へ寄りかかつて、じつと、何ものかを見つめていた。

三

朱実と並びあつて橋の欄へ肱を倚せていた武蔵は、朱実が懸命になつて向ける囁きへ、いちいち微かに頷いてはいるけれど、彼女が女の羞恥もすてて、真実の二人になり切ろうと全能で脈搏し

ているほど、そのつよい低声こゝろえが、武蔵の耳以上へ滲しみ徹とおっているか否かはわからなかった。

なぜならば、よく頷いてはいるくせに、彼の眸は、あらぬ方へ行つてゐるからである。愛しあつてゐる者同士が、ことばを奏かなであいながら眼を反そらしているといったような——ああいう情景とはまるで違つたもので、ひと口にいえば、彼の今持つてゐる眸は、無色無熱の火であつた。そこから一角の焦点へ向つて、かちつと烙やきついたまま、眼まじろぎもしないのである。

朱実には今、そういう相手の眼を怪しむ認識すら持てない。自分だけの感情の中で、独り問い答えながら突きつめては唇へ咽むせび出すのだった。

「……ああ、私はもう、これであなたにみんないうことをいってしまった。秘かくしていることはなにもない」

と欄干へのせている胸を少しずつつ寄せて来て、

「——関ヶ原の戦いくさから、もう五年目になるでしょう。その五年のあいだに、私という者は、今すっかり話したように、境遇も、体も変つてしまつたんです」

……よよと、啜すすり泣いて、

「けれど——いいえ——私はちつとも變つていない。あなたを思つているこの気持は、みじんも變つて来てはおりません。そういきれます。わかつてくれる？ ……武蔵様、その気持を……武

蔵様」

「ムム」

「わかつて下さいね。……恥もしのんで私はいいました。朱実は、あなたと初めて伊吹の下で会った時のように、もう穢けがれのない野の花ではありません。人間に流おかされて凡ただの女になってしまったつまらない女です。……けれど貞操みさおというものは体のものではないでしょうか。心のものでしょうか。体の上だけは清女でも、心がみだらな女だったら、それはもうきれいな処女おとめとはいえないのではありませんか。……私は、私はもう名は……名はいえませんが或る者のために処女おとめではなくなりました。けれど、心は流おかされてないつもりです。ちつとも穢けがされない心を今も持っているのです……」

「ウム、ウム」

「かあいそうだと思ってくれますか？ ……。真実をささげている人へ、秘^{かく}し事を抱いているのは辛いことです。 ……あなたに会つたらなんといいおう。いうまいか、いおうか、同じことを幾晩も幾晩も考えぬきました。その上で、私が決心したことは、やはり貴方には、偽^{いつわ}りを持たないということでしたの。 ……わかつて下さる。むりもないと思つて下さいますか、それとも厭^{いと}わしいやつだと思えますか」

「ムム、ああ」

「ね ……どつちです。考えると、わ、わたしは、く、くやしい」
欄の上へ顔を伏せて、

「ですから、もう私は、あなたに向つて、愛してくださいなどと

いうことは、厚顔あつかましゆうていえませんし……また、いえた義理でもない体ですの。——だけど武蔵様、今いったような心——処女おとめごころ——白珠のような初恋の心——それだけは失なくしません。この後、どんな生活くらしをしようとも、どんな男の巷ちまたを歩こうとも「髪の毛の一すじ一すじがみな泣きふるえた。欄を濡らしている涙の下は、元日の明るい陽を耀ようよう々と乗せて、無限の希望へかがやいて行く若わかみず水のせせらぎであつたが。

「む……うむ……」

もののあわれは頻りと武蔵の頷うなずきを誘っている。——だが、あいかわらず異様な光をおびて、あらぬ方へ吸いつけられている彼の眸なのである。

——で、その視線の先を辿つてみると、橋の欄と川岸とのカギ形さつきの二線へ対して、三角形を作り得る一線が真つ直に引けてゆく。先刻さつきから枯柳の幹に倚りよかかつて、じつと岸に立っている岸柳佐々木小次郎のすがたを、そこに見出すことが出来る。

四

父の無二齋から子供の時に、彼はこういわれたことがある。おまえはわしに似ていない、わしの眸はかくの如く黒いが、おまえの眸は茶色勝ちである。従祖父おおおじの平田将監ひらたしやうげん様の眼は、焦茶色こげをしていて凄かつたといういい伝えだから、おまえはおそらくお

祖父さん似に生れたのであろう……と。

うらうらと、朝の陽を、斜面にうけているせいもあるう。それにしても武蔵の眸は、ヒビのない琥珀こはくのように澄んでいて鋭かった。

(ははあ、この男だな)

かねて聞き及ぶところの宮本武蔵という人間を、佐々木小次郎は、いま見ていた。

武蔵もまた、

(はてな、あの男は)

と、注意を怠らない。

彼より射て来るものと、こっちから迫ってゆくものが、橋の

欄と、河べりの枯柳との間で、最前から無言の裡うちに、お互いの人間の深さを測り合っていたのである。

兵法の場合でいえば——相手の器量を、劍と劍の先でじつと観み澄すましているような——阿あうん伝の息をこらしている時にも似ている。またさらに、武蔵のほうにも、小次郎のほうにも、べつな疑惑があつた。

小次郎にすれば、

（小松谷の阿あみだ陀堂から連れて来て、自分が今、世話をしてやっている朱実と、あの武蔵と、どういう縁故があつて、あんなに親しそくに私ささめごと語ごとを交かわしているのか）

と思ひ、それに当然、

(いやな奴だ、女たらしかもしれぬ。朱実も朱実、おれに黙って、どこへ行くのかと思つて後を尾行つげて来てみれば……あんな男に、泣いたりなどして)

こう不快な気もむらむらと生なまつ睡ばになつて湧いて来る。

そのありありと眼に出ている反感や、武者修行同士が行きずりに持つ、自負心と自負心との反澆しあう妙な敵愾てきがいしん心など、武蔵のひとみに顕けんぜん然と読まれるので、武蔵もおのずから、

(何者か?)

と、彼の存在を疑い、

(できるな、相当に)

と、押し測り、

(はて、あの眼の害意は?)

と、警戒して、

(油断のならない人間)

として、眼で見るとはなく、心で観^みつめていたので、ふたりの眸は、今、火花を出しているといつても過言でない。

年齢^{とし}は、武蔵が一つ二つ下か、小次郎のほうが下か、どつちにしても大差のない、お互いが、生意気ざかりで、兵法でも、社会のことでも、政治でも、すべてが分つたつもりでいる自負心の満々としている青年なのだ。

猛獣が猛獣を見ると、すぐ唸るように、小次郎も武蔵も、なんとなく、髪の毛のそそけ立つような印象を、この初対面にうけた

のである。

——そのうちに、ふと、小次郎が先に眸を横へ反らした。

(ふふん……)

そういったような白い蔑さげすみを、武蔵は彼の横顔に見たが、心のうちでは、自分の眼——意力が——彼を遂に圧伏したと思つて、かるく愉快だった。

「朱実さん」

欄おもてへ面を当てて泣いている彼女の背へ、武蔵は手を加えて、訊ねた。

「誰だ？ おまえの知しりごと人だろう。あれにいる若衆すがたの武者修行は。……え、誰だ、いつたい？」

「……………」

小次郎の姿を、その時初めて気づいた彼女は、泣き腫はらした顔に、明らかな狼狽うろたえを走らせて、

「ア……あの人が」

「あれは誰だ」

「あの……あの……」

と朱実は口籠くちごった。

五

「見事な大太刀を背に負って、これ見よがしの伊達だてな装よそおい、よほ

ど兵法自慢の者らしいが……一体朱実さんとあの男とは、どうい
う仲の知りあいなのか」

「べつに……なにも深い知りあいやないんですけれど」

「知っていることはいる人なのだな」

「ええ」

武蔵に誤解されることをおそ懼れるように、朱実は、はつきりいつ
た。

「いつぞや、小松谷の阿弥陀堂あみだどうで、どこかの狛犬かりいぬに腕を咬かまれ
た時、あまり血が出て止まらないので、あの方の泊っている宿へ
行って医者を呼び、それからつい三、四日、お世話になっている
んですの」

「では、ひとつ家に住んでいる者だったか」

「住んでいるといつても……べつに、なんでもないんですけど」
朱実は言葉を強めていう。

武蔵はべつに、なんでもあるような意味に訊いているわけではない。それを朱実は、ひとりでべつな意味にはきちがえているのだった。

「——なるほど、では詳しいことは知るまいが、あの者の姓名ぐらいは聞いておろうが」

「ええ……岸柳とも呼び、本名は佐々木小次郎とかいいました」

「岸柳」

これは初耳ではない、有名というほどではなくても、諸国の兵

法者のあいだには相当知られている名である。もちろん実際の人間を見るのは今が初めてであるが、武蔵が聞き及んでいたり、また想像していた佐々木岸柳は、もつと年配の男のように考えていたのに、その案外にも若いのには彼は思いのほかな心地がした。

(……あれが、噂の)

改めて、その小次郎へ武蔵が眼を向けた時である。朱実と武蔵とがそうして囁いている様子を白い眼で見ながら、小次郎の頬へにたと笑靨えくぼが泛ういた。

——武蔵もまた微笑を送った。

だが、この無言の雄弁は、釈しゃく尊そんと阿難あなんが指ゆびに華はなを拈ねんじながら微笑ほほえんだような平和な光も謎もない。

小次郎の笑靨には、複雑な皮肉と挑戦的な^{からか}揶揄があつた。

武蔵の笑みにも、それを感じて^え勿ね返している^{たけだけ}毅然^{たけだけ}とした争気があつた。

そうした男性と男性のあいだに挟まって、朱実はなお、自分だけの気持を、訴えようとするのであつたが、それをいわないうちに、武蔵がいつた。

「では朱実さん、おまえはあの人と、ひとまず宿へ帰つたがよろう。そのうちに会おう、……な、そのうちにまた」

「きつと来て下さいます？」

「あ、行くよ」

「宿を覚えていてください。六条御坊前の^{ずず}数珠屋^やの座敷にいます

から」

「ウむ。……ウむ」

単純にうなずかれたのが、物足らなかつたのだろう。朱実は欄のうえに置いてある武蔵の手を奪つて、いきなり自分の袂たもとの蔭でぎゅつと握りしめながら眼に情熱をこめた。

「……きつと！ え？ ……きつと！」

突然、彼方で、腹を抱えるように哄笑した者がある。こつちへ、背を見せて歩き去つて行く佐々木小次郎だった。

「あツはははは、わツはははは。アハハハ。アハハハ」

とんでもない馬鹿笑いをして行く者があるので、城太郎は、むつとしながら、橋の前の往来から小次郎を睨みつけていた。

——それにつけても彼は、お師匠様の武蔵がいま美しい。いつまで経つても来ないお通が癩しやくにさわる。

「どしたんだろ？」

地だんだふむように、町のほうへ少し歩き出してゆくと、すぐそのこの四ツ辻に横たわっている牛車の車の輪のあいだに、チラと、お通の白い顔が見えた。

魚紋

「ア、いたッ」

鬼でも見つけたように城太郎はさけんで駈けだした。

牛車の蔭に、お通はしやがみ込んでいた。

めずらしく今朝の彼女の髪や口紅には、ほのかではあるが——
^{へた}下手なお化粧ではあるが——匂わしいものがただよっていたし、
小袖は烏丸家から戴いたという紅梅地に、白と緑の桃山刺繡ぬいが散
っている初春はるらしい衣ものであった。

その白い襟や、紅梅色が、車の輪に透すいて見えたので、城太郎
は牛の鼻づらを摺すってそばへ飛びついて行った。

「なんだっ、こんな所に。お通さん、お通さん、なにしてんのさ」
胸を抱いてかがみ込んでいる彼女のうしろから、城太郎は、そ

の髪やおしろいが台なしになるのもかまわず襟くびへ抱きついて、
「——何してんのさ、何してんのさ、おいら、ずいぶん待ってしまつたぜ。はやくおいでよ」

「……………」

「はやくさ、お通さん」その肩を揺すぶって、

「——武蔵様も、あそこに来てるじゃないか。見えるだろ、ほら、ここからでも。——だけど、おいら、とても癩しやくにさわってるんだ。

——おいでよ！ お通さんてば！ はやく来なくちや駄目じゃないか」

こんどは、彼女の手くびを取って、抜けるほど引つ張り出したが、ふと、その手くびの濡れていることや、お通が顔を上げて見

せないので不審を起し、

「……オヤ、……オヤ、お通さん。なにしていたのかと思つたら泣いていたのかい」

「城太さん」

「なにさ」

「武蔵様のほうから見えないうちに、お前も、蔭にかくれていてくださいよ。……ネ、ネ」

「なぜさ」

「なぜでも……」

「ちえッ！」

城太郎はまた、ここでも腹が立つて、その鬱憤うっぶんのやり場がな

いように、

「だから女つて奴は嫌ンなつちやうぜ。こんなわけの分らねえことつてあるだろか。——武蔵様に会いたい会いたいってあんなに泣いたり捜したりしていたくせに、今朝になつたら急に、こんな所へ隠れて、おいらにまで隠れていろつて……。けツ、けツ、おかしくつて、笑えもしねえや」

彼のことを鞭むちのように浴びているお通であつた。紅く腫はれている眼をそつと上げて、

「城太さん、城太さん……そういわないでください。……たのむから、そんなにお前までわたしを虐いじめないで」

「どこへ、おいらが、お通さんを虐いじめてるかい」

「黙っていてね……じつと私と一緒に屈かがんでいてください」

「いやだ、牛の糞くそがそこにあるじゃないか。元日から泣いてな
どいると、鴉からすが笑わあ」

「……なんでもいいの。もう……もうわたしは」

「笑ってやろう。先刻さつき、彼方むこうへ行つた若衆のように、おいらも、
初笑いに手をたたいて笑ってやるぜ。……いいかいお通さん」

「おわらい、たくさん」

「笑えねえや……」

鼻汗はなをこすりながら、むしろ彼は泣きたそうな顔をした。

「アア、わかった。お通さんは、あそこで武蔵様がよその女と、
先刻からあんなこととして話しているんで、嫉妬やきもちをやっているん

だね」

「……そ、そうじゃない、そんなことじゃないけれど」

「そうだよ、そうだよ。……だからおいらも癩しやくにさわってるんじゃないか、だからよけいに、お通さんが出て行かなければ駄目じゃないか。わからずやだなあ」

二

いくらお通が強情に屈みこんでいようとしても、城太郎の力で無理やりに手くびを引っ張るのにはかなわなかつた。

「痛い。……城太さん、後生だからそんな酷ひどいことをしないでよ。

……私をわからずやだとおいいだけれど、城太さんこそ、私の氣持なんかわからないのです」

「わかつてるよ、嫉妬やきもちをやいてるんじゃないか」

「そんな……そんなことだけではありません……私の今の氣持と
いうものは」

「いいからお出いでッてば」

牛車の蔭から、お通のからだはズルズル地を摺すつてうごき出した。綱曳きでもするように踏んぱりながら、城太郎はまた彼方かなたへ伸び上がって、

「アツ、もういないよ、朱実はもう去いってしまった」

「朱実。——朱実って、誰のこと？」

「今、あそこで、武蔵様とならんでいた女さ。……あつ、武蔵様も歩き出した、早く来ないと、行つてしまう」

もう女などに関^{かま}つていられないとばかりに、城太郎が走りかけると、

「待つてよ、城太さん」

お通も、自分で立つた。

そこで彼女はもういちど、五条大橋の袂^{たもと}を見直した。朱実がまだその辺にいるかいないかを確かめるもののように細心な眼^{まなこ}で見まわしているのだった。

怖ろしい敵の影が去つたように、お通は眉をひらいて、ほつとした様子をしてまた、慌^{あわ}てて牛車の蔭へ寄ると、泣き腫^はらした瞼^{まぶた}

を袖口で拭いたり、髪を撫でつけたりして、身じまいを整えていた。

城太郎は、急^せいて、

「早くしなよ、お通さん。——武蔵様は河原へ降りて行ったよう
だけ、お洒落^{しゃれ}なんかしなくてもいいじゃないか」

「河原へ」

「あ、河原へ。——なにしに降りて行ったのだろう」

ふたりは、姿をそろえて、橋の袂へすぐ駈けて行った。

吉岡方で建てたその高札には、もう往来の者の首がたかつていた。声を出して読みあげている者がある。また、聞きつけない宮本武蔵という者を、何者であろうと、辺りの人々に訊^{たず}ねている

者がある。

「ア、ごめん」

城太郎は、その人々の体をかすめて、橋の欄から河原の下をのぞいた。

お通も武蔵のすがたを、すぐその下に見られるものとばかり思っていた。

実に、わずかな間であつたが、武蔵はもうその辺にいなかったのである。

では何処に？

———というと、武蔵はたつた今、朱実の手を振りきつて、無理に彼女を追い返すと、もう本位田又八をこの橋上に待っていたと

ころで来るはずもないし——吉岡方から揭示した高札の表も読ん
 だし——ほかに待つべき用事もないので、ヒラリと堤を降りて、
 橋杭はしぐいのそばの苦舟とまぶねへ駈け寄っていた。

苦とまの下には、お杉隠居が、舟桁ふなげたに身をしばられて先刻さつきからも
 がいていたのである。

「おばば、残念だが、又八は来ないぞ。——わしもぜひそのうち
 にゆき会って、あの気の弱い男を励ましてくれるつもりだが、ば
 ばも探し出して、親子、達者でお暮らしやれ、——そのほうが、
 この武蔵の首を狙ったりすることより、どんなに、御先祖孝行か
 しれぬぞ」

小柄こづかを持って、その手を苦とまの下へさし入れた。お杉の身を縛つ

た縄目を切つたのである。

「ええ、耳うるさい、ませた口をきく小倅こせがれわいの。要いらざるおセツかいをいうよりは、婆を討つか、討たれるか、武蔵つ、はようちう罎うちをあけい」

顔じゆうに青すじを走らせて、お杉隠居が、苦の中から首を突き出した——その時ですらすすでに、武蔵のすがたは、加茂の流れを横に突つ切つて、鵲せきれい鳩せきれいでもとぶように洲すや石のうえを拾つて、対岸の堤へ駈け上がったのであった。

お通は見なかったが、ちらと、河向うの遠い人影を、城太郎は見たのであろう。

「アツ、お師匠様だ、お師匠さまあ——」

河原へ向つて、跳び下りた。

もちろんお通も。

なぜこの際、すこし廻り道になつても、五条大橋の上を駈けて行かなかつたか。お通は、城太郎の勢いにつり込まれたので仕方がないにしても、城太郎が一步を誤つた禍わざわいは、決して、この時、彼女がまたしても武蔵と行き会えなかつたという遺憾ばかりには止とどまらない。

城太郎の元気な足の前には、河も山もあつたものではないが、

春の晴着を装よそおっているお通には、すぐ眼のまえに現われた幾いくすじ条もの加茂の水に、はたと困った。

もう武蔵の影は、どこにも見えないのであつたが、彼女は、跳べない流れを見ると思わず、死に別れた者が間際にさけぶように、「武蔵さまあつ」

——すると、それへ向つて、

「おうつ」

と答えた者がある。

小舟の苦とまをばらばらと払い退のけて、そこに突つ立つたお杉隠居であつた。

お通は、なんの気なく、それへ振向くと共に、

「——きやつ！」

顔をおおつて逃げ走つた。

隠居の白い髪が風に立つた。

「お通阿女あまつ」

次のことばは、老婆の極度に揚げた息のために、声が挫ひしげて、

「用があるツ、待たつしやれつ」

つんざくように水へ響いた。

お杉隠居の邪推からこの場合の結果を判断すれば、こういう風にはなはだしく悪くとつたかも知れない。

武蔵が自分へ苦とまをかぶせたのは、お通とここで逢曳ちわきする約束があつたからにちがいない。その上の痴話ちわが何かにこじれて、武

蔵が女を振切つて去つたので、お通阿女あまは泣き声をしぼつて男を呼び返しているのだろう。

(そうだ)

と咄嗟に、自分の思うことをこの老婆は、すぐ自分だけで事実としてしまう。

(憎い阿女あま)

武蔵以上の憎しみを、お杉はお通へ抱くのであつた。

まだ約束だけで家にも入れないうちから、息子の嫁は自分の嫁のように思い、息子が嫌われたことは、自分が嫌われたことのようにいきどお憤つたり、怨みに思う老婆としよりだつた。

「待たぬかつ」

ふた声目のさけびが聞えた時は、この隠居が、さながら口を耳まで裂いたかと思われる形相で、風の中を走っている時だった。

おどろいた城太郎が、

「な、なんだ、この婆」

つかみかかると、

「邪魔なつ」

と、弾力はないが、怖ろしく固い力で^は匆ね退ける。

いったいこのお婆さんが何者なのか——なんのためにお通があるんなに驚いて逃げたのか——城太郎にはまるでわからない。

わからないが、しかし事態の^{ただごと}凡事でないことだけは感じる。

それに、宮本武蔵の一の弟子、青木城太郎ともあるものが、老婆

の細^{ほそ}肱^{ひじ}に刎ねとばされて引つ込んでいられたものではあるまい。

「ばばッ、やったな」

——もう二、三間も先へ行くお杉隠居のうしろから、いきなり跳びついてかかると、婆は孫の首根ッこをつかんで仕置する時のように、左の腕の中に城太郎の顎^{あご}を引っかけ、三つ四つ、ぴしやぴしや撲^は叩^たいて、

「餓鬼のくせに、邪魔だてするとこうだぞよ、こうだぞよ」

「カ、カ、カ……」

喉^{のど}の骨を伸ばしたまま、城太郎は、木剣の柄^{つか}を握ることだけは握っていた。

四

かなしいにせよ、辛いにせよ、人はどう見るか知れないが、お通自身にとれば、今の心の置き方は、またその生活は、決して不幸なものでなかった。

希望もあれば、その日その日の楽しさもある若い日の花園だった。もちろん辛いとか悲しいとかの多い中にはあるけれど、辛いこと、悲しいことを離れて、ただ楽しいだけの楽しさな
どあろうとは、彼女には信じられない。

けれど今日ばかりは、彼女のそうして持ち堪えてきた心も亡ほろんでしまひびいそうだった。今までの純真な心へ、ま二つの亀裂が走ひびつ

たかと自分ですら悲しまれた。

——朱実と武蔵と。

あのふたりが五条の欄おぼしまで人目もなく並んでいたのを遠くから見たせつな、お通は、足がふるえてしまった。あやうく、眩めまいがして倒れかけたので、牛車の蔭にかがみ込んでしまったのである。

——なぜ今朝、ここへ来たろうか。

悔いても泣いても及ばない程に思つて、短い間に、すぐ死を考えてみたり、男性が嘘のかたまりに思われたり、憎しみと愛と、怒りと悲しみと、自分という人間にすら嫌けんえん厭えんがわいて、泣いたぐらいでは、心の慟どうこく哭くがおさまらなかつた。

でも。

武蔵のそばに、朱実のすがたがあるうちは、自分を主張できないお通であつた。もの狂わしいほど、体じゅうの血しおが嫉妬の火と変じながら、なお理性の幾分かが、

——はしたない。

と、必死にたしなめて、

——冷たく、冷たく、冷たく。

と、自己の行為しようとする意思を、みなふだんの女の修養というものの下へじつと抑えつけてしまうのだった。

しかし、朱実が去ると、彼女はもうそういう^{こら}忪えはかなぐり捨てた。武蔵へ向つて、いうつもりであつた。どういうことをいおうなどと考えている^{いとま}違はもとよりなかつたが、胸のうちのものを

みんないうつもりであった。

人生の道はいつも、一步が機微である。また、なにかの場合に、ふだんの常識さえあれば、分りきっていることを、ふと、心へ間違いを映しとつてしまうためにその一步が、十年のまちがいになつたりする。

武蔵の影を見失つたために、お通は、お杉隠居に出会つてしまつた。元日なのに、きようはなんと凶い日か、わる彼女の花園には蛇ばかりが出た。

——夢中で彼女は三、四町ほど逃げた。ふだんでも、怖い夢を見たと思うと、その中にはきつと、お杉の顔があつた。その顔が、夢でもなく、追つて来るのである。

息がつづかなくなつた。

お通は振向いてみた。

ほつとその途端に初めて呼吸いきが休んだのである。お杉隠居は、半町ほど後ろで、城太郎の首をしめて、立ちどまっている。城太郎はまた、必死になつて、打たれても、振廻されても、しがみついて離さない。

今に城太郎が、腰の木剣を抜くかもしれない——必然やるだろう。そうすれば、隠居も刃やいばを抜いて応じるにちがいない。

お通は、あの老婆としよりの、物に仮借かしゃくしない氣質を、身に沁みて知っている。悪くすれば斬り捨てられる城太郎かも知れないと思う。

「アア、どうしよう」

ここはもう七条の河かわしも下である。堤どてのうえを仰いでも人は見えなかった。

城太郎は救いたいし、お杉隠居のそばへ寄るのは怖ろしいし、彼女はうろろするよりほかなかった。

五

「くそ、くそそば」

城太郎は、木剣を抜いた。

木剣は抜いたがさて、自分の首根ツこは、隠居の腋わきの下へつよ

く抱え込まれ、これはいくらもがいても離れないのだ。いたずらに、地を蹴つてみたり、空くうを打つてみたり、暴れるほど、敵を誇らせるに過ぎないのである。

「この童わつぱが、なんの芸じゃ、蛙の真似まねごと事かよ」

隠居は、三つ唇くちのように見える長い前歯に、勝ち誇った強味をみせて、なお、ぐいぐいと河原を引き摺ずつて前へ歩いて来たが、

(待てよ)

彼方かなたに立ちどまっているお通の姿を見てから、急に、老婆としよりらしい狡智こうちを思いついて、胸のうちでそう呟いた。

隠居が思うには、これはどうもまずい。老婆の脚で追いかけたり、力づくで争っているから埒らちがあかないというものである。武

蔵のような相手では、騙だましも利きかないが、この相手は甘やかせば甘やかせる女子供、舌の先でくるめておいて、後でいいように料理してしまふに如しくはない。

で——隠居にわかは遽にわかに、

「お通よ、お通よ」

手をあげて、彼方かなたの姿を、さしまねいた。

「——のう、お通阿女あまよ、なんで汝われは、ばばの姿を見るとそのように逃げるのじゃ。以前、三日月茶屋でもそうじゃったが、今も、わしを鬼かのように、すぐ逃げなさる。——その心得が、そもそも解げせぬというもの。この婆の心底がわからぬかいの。そなたの思い違いじゃ、疑心暗鬼じゃ、ばばは決して、そなたなどに

害意は持たぬ」

そう聞くと、彼方に立っているお通はまだ疑わしげな顔しているが、隠居の腋わきの下から城太郎が、

「ほんとかい、ほんとかい、おばば」

「才才、あの娘こは、この婆の心を、思い違えているらしい。……ただ怖こわい人間のように」

「じゃあ、おいらが、お通さんと呼んで来るから、この手を、離してくれ」

「おつと、そんなこというて手を離したら、この婆へ木剣をくれて、逃げる気であろうが」

「そんな卑怯なまね、するもんか。お互いに、思い違いで喧嘩し

ちや、つまらないからさ」

「では、お通阿女あまのそばへ行つてこういうて来う——本位田の隠居はの、旅先で、河原の権叔父ごんとも死に分れ、白骨を腰に負うて、老い先ない身をこうして旅にまかせているが、今では、むかしと違うて、気も萎なえた。一時は、お通の心も恨みと思うたが、今ではさらさらそんな気もない。……武蔵には知らぬこと、お通阿女あまは今も嫁のように思っているのじゃ。元の縁へ返つてくれとはいわぬが、せめては、このばばの過ぎ越し方の愚痴や、この先の相談事でも聞いておくれる気はないか。このばばを、あわれな者とは思つておくれぬかと……」

「おばば、そんなに文句が長いと、覚えきれないよ」

「それだけでよい」

「じゃ、離しておくれ」

「よう、いうのじゃぞ」

「わかった」

城太郎は、お通のそばへ、駈けて行つた。そして、隠居のことはをそのまま、彼女に伝えているらしかった。

「……………」

お杉隠居は、わざと見ない振りをして、河原の岩に腰を下ろした。みぎわ汀の浅瀬に、小さな魚の群れが、のどかな魚紋を描いている。

（来るか？ 来ないか？）

と、お通の様子を、隠居は、その魚の影よりはや迅い光で、横目に

注意していた。

六

お通は、疑いぶかく、容易に近づいて来なかつたが、城太郎が、頻りといったのであろう、やがて怖々こわこわお杉隠居のほうへ歩いて来た。

心のうちで、隠居は、

(もうこつちのもの)

と、思ったことであらう。長い前歯を唇にほころばせて、にたりと笑った。

「お通」

「……おば様」

お通は、河原へかがみ込んで、老婆の足もとへ指をついた。

「ゆるして下さい……ゆるして下さい……もう今となっては、なにも、いい訳はいたしませぬ」

「なんのいのう」

お杉隠居のことは、むかしのように優しく聞えた。

「元々、又八めが悪いのじゃ。いつまでもそなたの心變りを恨んでいようぞ。このばばも、一時は、憎い嫁とも思うたが、もう、心では水にながしている」

「では、かんにんして下さいますか。わたしのわがままを」

「……じゃが」

隠居は、ことばを濁して、彼女とともに、河原へしやがみ込んだ。お通は、川砂を指でほじくっていた。冷たい砂の表面を掻き掘ると、その穴から、浸しん々と、温ぬるい春の水が湧いて出た。

「そのことは、母のわしから答えてもよいがの。ともあれ、又八という者と、いったんは許いいな嫁なづけであつたそなた、いちど、倅せがれに会あうておくれぬか。元より、倅の好きで、おぬしをほかの女子おなごに見替みかえたことじゃ。今さら、よりをもどせともいうまいし、いうたとして、このばばが、そのような得手勝手えてかつて、承知することじやないほどに」

「……え、え」

「どうじゃ、お通、会っておくれるか。そなたと、又八と並べておいて、このばばかり、きつぱりと俵にいい渡そうではないか。

——さすれば、意見の一つもいうて、このばばの、母としての役目もすむ。立場も立つ」

「はい……」

きれいな川砂の中から、蟹かにの子が這い出して、春の日を眩まぶしげに石の蔭へかくれこんだ。

城太郎は、蟹をつまんで、お杉隠居のうしろへ廻り、隠居の小さいまげ鬚のうえに落した。

「……でも、ばば様、今となつてはかえつて、又八さんに会わないほうが」

「わしが側について会うのじゃ。会うて、きつぱりしておいた方が、そなたの後のちのち々々のためにもよかろうが」

「……ですけれど」

「そうしやい。わしは、そなたの後のちのためも思うてすすめまする」

「それにしても、又八さんは、今どこにいるのか、分らないではございませぬか。おばば様は、居いどころ所をござんじなのでございませぬか」

「すぐ……わかる……わかるつもりじゃ。なぜならば、つい先頃、大坂表で会っているのじゃ。また、いつもの気きままが出て、わしを振捨てて住吉から去いんでしもうたが、あの子も、後では悔いて、きつとこの京都あたりに、ばばの後を追うていると思ひまする」

お通は、そう聞くと、急に、不気味な気もちに襲われた。それだけに、お杉隠居のすすめることばが、道理のように思われるし、また急に、この息子にめぐまれない老婆としよりに、いとしさがこみあげて来て、

「おば様、ではわたしもご一緒に、又八さんを捜しておあげいたしましょう」

お杉は、砂をいじっている彼女の冷たい手を握りしめ、

「ほんにかいの？」

「ええ。……ええ」

「では、ともあれ、わしの旅舎やどまで来ておくりやれ。……ア、ア」
お杉隠居は、そういつて起ちかけながら、襟くびへ手をやって、

蟹^{かに}をつかんだ。

七

「ええ、なんじやと思えば、いやらしい」

隠居が身ぶるいしながら、指先へブラ下がった小蟹を振り飛ばした様子のおかしさに、城太郎は、お通のうしろで、クスリと口を抑えた。

隠居は、気づいて、

「汝^{われ}か、悪^{いたずら}戯したのほ」

と、白い眼で、城太郎をねめつける。

「おいらじゃない。おいらのせいじゃないよ」

城太郎は、堤の上へ逃げた。

そして上から、

「お通さん——」

「なあに」

「お通さんは、おぼばの旅舎へ一緒に行くの？」

お通が返辞をしないうちに、隠居がいった。

「そうじゃ、わしの旅舎はすぐその三年坂の下、いつも京都に
来ればそこに定めてある。汝には、用もないから、何処へなど、
帰るなら帰るがええ」

「アア、おいらは、烏丸のおやしきへ先へ帰っているぜ。お通さ

んも、用がすんだらはやく帰っておいで」

先へ走りかけると、お通は、急に心細くなつたものか、

「お待ち、城太さん」

河原から上がつて、彼を追うと、お杉隠居も、もしお通が逃げ^{つもり}る心ではないかと狼狽^{あわて}だしたように、すぐ後ろから駈け上がつてゆく。

そのわずかな間に、二人は、話し合つた。

「ネ、城太さん、こんなわけになつて、私はあのおば様と、旅^や舎^どへ行きますけれど、暇を見て、ちよいちよい烏丸様の方へも帰りますから、お館^{やかた}の人たちにそういつて、お前は当分、あそこのご厄介になつて、私の用事の片づくのを待つていて下さい」

「アア、いつまでも、待っているよ」

「そして……その間に、私も心がけるけれど、武蔵様のいらつしやる所をさがしてくれませんか？ ……お願いだから」

「いやだぜ、さがし当てるとまた、牛車の蔭へかくれて出て来ないんじゃないか。……だから先刻、^{さつき}いわないこつちやないんだ」

「わたしはお馬鹿ね」

お杉隠居は、すぐ後から来て、二人の間へ入ってしまった。隠居のことばを信じぬいてにしても、お通は、この老^{としより}婆の側では、武蔵のうわさは、おくびに出しても悪いような気がして、自然に口をつぐんでしまう。

^{なご}和やかに肩をならべて歩いて、お杉隠居の針のように細い眼

は、絶えずお通へ油断のない光を配っていた。今では、姑しゅうとめとよぶ人でないまでも、お通は、窮屈な感じに身を締められた。——しかし、それ以上の複雑な老婆としよりの狡智と、自分の前に横たわりかけている危ない運命をみ観ぬくことは出来ないらしい。

以前の五条大橋の畔ほとりまで戻つてくると、ここはもう元日の織るが如き人通りとなつていて、陽もうらうらと柳や梅の上に高い。

「武蔵、はてな」

「——武蔵などという兵法者がいるかしらて」

「聞いたこともないが」

「だが、吉岡を相手に、この通り、晴がましい試合をする程だから、相当な兵法者には違いない」

高札の前は、明け方にまさる人ばかりだった。

お通は、ぎくとして、立ち竦すくんだ。

お杉隠居も、城太郎もそれをながめていた。魚の渦のように、
群衆は武蔵武蔵という囁ささやきをのこしながら、去っては来、来ては
流れ去ってゆく。

青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年11月11日第1刷発行

2003（平成15）年1月30日第40刷発行

「宮本武蔵（三）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年11月11日第1刷発行

2003（平成15）年1月5日第44刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宮本武蔵

火の巻

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>